
らき すた～あおいの日々～

青陰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた〜あおいの日々〜

【コード】

N0630I

【作者名】

青陰

【あらすじ】

なんとなく過ごしていた日常は、少女達と知り合ったその時から変わっていった…

紹介

ここでキャラクター紹介をしておきます

名前：神藤あおい（しんどうあおい）

一人称：自分

誕生日：4月17日

身長：176cm

体重：71kg

外見：髪の色は金に近く、女性でいうショートまで伸びている。顔立ちは上の中程度で、女性と間違えられるほど中性的な外見をしている。

いつもニコニコしているが、目を開けると若干目つきが鋭い。

能力：学力は常に校内トップ、身体能力は群を抜いているうえに大抵の事はそつなくこなす。

そのため様々な部から誘われているが全て断っている。その代わりとして、助っ人等はスケジュールに空きがあれば受けるようにしている。料理は家族の食事を作るようになってから上達していき、今では一流レストラン顔負けの腕前を誇る。

性格：女性や初対面の人、目上の人には敬語を使うが、親しくなると普段通りの話し方をするようになる。

女性にあまり慣れていないため、近付かれると赤くなる。

友人や家族を傷つけるものを嫌い、傷つけるものには容赦はなく、キレるとかなり怖い。

男女問わず人気が高く、かなりモテるのだが自覚はない。

かなり自分に厳しく友人等に甘い性格であり、自分よりも人を優先することも多々ある。

集中すると周りが見えなくなることが多く、時にトラブルを招く原因になる。

家族構成：現在は父親、母親、妹の茜との4人暮らしであおいは長男にあたる。

過去には弟の雪花、妹の桜花がいたが事故により亡くなっている。

家：貴族出身の侍を先祖に持ち、先祖代々の家は通常の豪邸よりも広大で、道場なども入っている。

先祖の影響からかあおい本人も刀を所持しており（許可は取っていない）朝の練習に使用されている。

また、大富豪であり、通帳には信じられないような金額が入っている。

好きなもの：笑顔、甘いもの、水饅頭、適度に辛いもの、読書、アニメ、ゲーム、料理、コスプレ

嫌いなもの：涙（嬉し涙等は例外）、見た目だけで人を判断する人、友人や家族を傷つけるもの（自分も含む）、一部のきのこ類、アスパラ、辛すぎるもの、父親（無理やりコスプレさせるため）、無理やりさせられるコスプレ

名前：萩原京一
はぎわらきょういち

一人称：俺

誕生日：12月25日

身長：168cm

体重：67kg

外見：顔立ちが良いのだが強面、鋭い目つき、褐色の肌、白髪といった外見をしているためほぼ必ずと言っていいほど不良と勘違いされる。

能力：昔から神藤家の道場を使っており、また、不良と勘違いされ喧嘩を挑まれることも多々あるため身体能力は高い方である。学力は中程度をさまよっている。

性格：冗談を言ったり少々キツイことも言うが、誰にでも優しく、悩み事を打ち明けられれば共に悩んでくれるため、あおいも悩み等を聞いてもらっている。

家族構成：父親、母親との3人暮らしで1人っ子。

家：神藤家の隣にあり、一般的な家としてはなかなか大きめ。

好きなもの：紅茶^{ストレート}、牛乳、読書、昼寝

嫌いなもの：トマト、睡眠妨害、勘違い

夢の詰まったキャラ達だな

紹介（後書き）

読んでいただきありがとうございます。初めての作品ですので温かい目で見守ってやってください

朝

AM3:00

いつものように無機質に一定のリズムで音を鳴らす目覚ましを止め、部屋を出て練習着に着替えて道場へ向かう。何をするか？素振りと練習である

「...2997!2998!2999!3000!...!ふう...」

汗を軽く拭いて、練習用の人形を出す。もうボロボロだけだね。

「よし...はあっ!」

軽く構えて居合いを放つ。それをきちんと受け止めて人形は横に真っ二つになる。今までありがとうね、と心でつぶやき片付ける。

AM4:00

朝風呂に入ってゆっくりと汗を洗い流して、お湯から出る。着替えて、朝ご飯を作つてと。

AM5:00

「ご馳走様でした」

まだ誰も起きてないんだけどね。ついやってしまつ。ゆっくりテレビを見て、頭を完全に起こす...よし、そろそろ弁当箱に詰めて、とよし

「おはよ〜お兄ちゃん」

「おはよう、あかね」

別に早くもない妹が起きて来るとは、珍しいこともあるもんだね

「なにか言った？」

「いや何も？それよりも母さんと父さん起こしてきなよ。朝ご飯つくっておくからさ」

「はい」

欠伸しながら部屋に向かっていった。さて、さっきのをもう一回作り、学校へ向かう準備をする。

「足りないもの無し、じゃあ行ってくるよ。朝ご飯テーブルに置いておいたからさ」

「行ってらっしゃい」

妹とようやく起きた両親に見送られ、いつものようにまた朝が来た。だが今日はいつもとは違った1日になる。どこかでそう気付いていた。

今日は2年生になる、特別な日だから。

朝（後書き）

なんかごちゃごちゃしてる気がする…気のせいかな？気のせいだよ
ね（オイ

新たな季節

「ようあおい、おはようさん」

家を出てすぐに背中を軽く叩かれる。振り返らなくても誰だかはわかる

「やあおはよう、京一」

自分の家の隣に住んでいる萩原京一。自分の人生で最初に出来た友人であり、今では親友である。

「たしか今日クラス発表だったな。これでまた同じクラスだったら腐れ縁のレベル越えてるよな」

横に並び歩調を合わせて笑いながら言う。

「だとしたら”また”じゃなくて”いつものように”だね。笑い事じゃなくなるよ…ずっと同じクラスなんだしさ」

そう、小学1年の時から今までクラスが違うことは一度もなかったのだ。なんの因果かは知りたくもないんだけどね…

「運命の糸で繋がってるのか？」

などと笑いながら言うてきたので

「断ち切ってあげようか？」

と笑顔で返すと

「冗談だよ、断ち切るなよ」

と泣きついてくる。「冗談だったんだけどね」

「まあ考えておこうかな」

適当に返事をして放っておく。そうこうしている間に学校にたどり着いた

「まあ冗談は置いとくとするか、クラス分け楽しみだが俺はちょっと用事あるんでな。俺のクラス見てメール送ってくれ」

「わかった、あと会うとしたらクラス決まって落ち着いてからかな」互いに拳を軽く当て、張り出されているクラス分けを見に行く。

「え〜っと…」

A組の名前を順に見ていくがこのクラスにはいないようだ。B組の名前を見ようとした時、後ろから声が聞こえてきた

「…っと押さないでよ！きゃっ！…」

「危ない！」

悲鳴に似た声に反応して振り返ってみれば、バランスを崩して今にも倒れそうな女子生徒がいた。反射的に両腕で体を支えて助ける

「あ、ありがと…助かったわ」

「大丈夫ですか？どこか怪我していたりはしませんか？」

「どこもそういうのではないみたい…まったく、毎年こんなのだと大変よね。」

とりあえず立てるように体勢を立て直し、先に立ち上がって手を引いて立たせ、2人してクラス分けを見る

「ありがと…あなたも自分のクラス探してるの？」

「ええ、しかも友人のクラスもですけどね」

軽いため息を吐き、苦笑しつつ答えると

「なら手分けして探しましょ？」

予想外の言葉を繰り出してきた

「いいんですか？そちらの迷惑になるんじゃない？」

「さつき助けてもらったお礼よ。それに1人よりも2人、でしょ？」

「わかりました。お名前は？」

「私は柊かがみ。もう1人は柊つかさ、私の妹よ。」

「自分は神藤あおいです。もう1人は萩原京一です」

「じゃあ私はここから。神藤君は後ろの方から見てきてくれる？」

「わかりました。ではお願いしますね」

軽い自己紹介を終え、それぞれが名前を順に見ていく。

「え〜と…あ、あった。」

E組の所に自分と柗つかささん、そして遂に腐れ縁越えをした京一の名前を見つけた

「また同じクラスなんだ…まあいいや。柗かがみさんのクラスを探そうかな」

探すべき名前の4分の3が一度に見つかってしまったため、柗かがみさんと合流するまで名前を探すことにした

「柗かがみさん…あったあった」

D組に名前を見つけ、報告しに向かう

「あつ、おかえり。ねえどうだった？」

「自分と京一、柗つかささんはE組で、柗かがみさんはD組でした。」

「そう…また違うクラスなんだ。探してくれてありがとね」

「そう落ち込まなくてもクラスは違っててもすぐ隣ですし、それにクラスが離れた程度で心の距離は変わらないと思いますよ？」

クラスを知らされ、落ち込んでしまった柗かがみさんに話しをすると

「心の距離…そうよね、ありがと。あとなんか色々とごめんね？」

「気にしないで下さい。それに貴女のような綺麗な人には悲しむ顔よりも笑顔の方が似合っていますよ？」

「そ、そう？ありがとうございます…」

笑顔で告げると赤くなってしまった。自分なにか言っただけ？

「ん…そろそろ教室に行かないとマズい時間ですね」

「うそっ！？…ほんとだ、あたしもう行くね？休み時間に会うと思っけどまたね」

「わかりました。ではまた」

京一にメールをするついでに時間を確認した後、一旦別れを告げて教室に入ったのだが

「よう、お前の席はここだぞあおい」

自分の席に京一が座っていたため、ため息を吐いて椅子から落とすと

「おっと…！もうちょっと優しくしろよな、危ないだろ」

落ちる間に体勢を変えて着地し、文句を言いながら自分の席に戻って行った。その後しばらくしてから先生が来て2年生最初のホームルームが始まった。

広がる輪

「あゝ疲れた」

「もうすぐ帰れるんだから、もうちょっと頑張るんだね。」

あいつにとっては果てしなく長かったであろうホームルームも終わり、早速机へへばり付く京一に声をかけたら

「うお」

と返事が返ってきた。終わったらジューズでも奢ってやるかね、そう思いながら教科書やプリント等を整理していると

「おっすこなた、つかさ、みゆき」

「やつほゝかがみん」

「あ、お姉ちゃんだ」

「おはようございます、かがみさん」

聞き覚えのある声と『かがみ』という言葉に反応し、声のした方を見る。やはり今朝の人だ。返事をした友人らしき3人に近寄り、楽しそうに会話をしているのを目で追って行く。

「ふゝん？あおいはああいうのが好きなのか」

「うわ?!」

いきなり話し掛けられてびっくりしてしまった。我ながら情けない

「なんだ京一か、さっきまであんなに疲れてたのに回復早いね」

「なめてもらっちゃ困るな。ところでどうなんだ？」

「ん？なにがだい？」

「さっきの話だよ。ああいう女子が好きなのかって聞いたんだが？」

「ああ…ああ？！ち、違う！そういう目で見てたわけじゃない！」

いきなりなにを言い出すんだこいつは。必死になって否定してしまつたが、今顔赤いんだろうな

「またまた…でも珍しいなお前から好きになるな…っと本人の登場のようだ」

否定しようとしたが京一が声を小さくして視線をずらす。その視線の先にはこちらに近づく女子がいた

「神藤君、今朝はありがとうね」

「いえ、当然のことをしたままでですよ」

「それでも助かったことに変わりないわ」

わざわざお礼を言いに来たのだろうか。それにしても何回お礼を言われたか…そんなことを考えていると

「なにかがみん？その男子がどうかしたの？」

「お姉ちゃんの知り合い？」

「よろしければ紹介していただけませんか？」

先ほど話をしていた3人が近付いてきた。どうやら状況の説明を求めているようだ

「この人は神藤君、さっきも話したけど私を助けてくれたの」

なにやら先ほどの会話の中に自分が登場したようだ。自己紹介しておこうかな

「改めて自己紹介させていただきます。神藤あおいです、宜しくお願いします」

「よろしく〜あと、かがみを助けてくれてありがとうね〜」

「私の名前も探してくれたんだよね？ありがとう〜」

「お話はお伺いしております、本当にありがとうございます。こちらこそ宜しくお願いしますね」

三者三様のお礼を受け取り、思ったことを口にする

「皆さん、柊かがみさんの事を大事に思っ
ていらっしやるんですね」

「柊かがみさんは素敵な友人をお持ちですね」

3人と柊かがみさんに向かって笑顔で言うところ人は顔を赤らめ、柊かがみさんは真っ赤になって俯いてしまった。恥ずかしがることないと思うんだけどな」

「いや〜かがみをここまでするとは…そういうえば自己紹介してなかったっけ。私は泉こなた、まあ気軽に呼んでよ」

「柊つかさです。お姉ちゃんとは双子なんだよ」

「高良みゆきです。宜しくお願いします」

自己紹介をしてもらい、一通り顔と名前を覚えたところで、柊かがみさんが落ち着いたようだ

「改めて自己紹介させてね？柊かがみよ、つかさは私の妹なの」

改めて自己紹介され、言葉を返す前にチャイムが鳴る。

「じゃあ私戻るから。次は帰るときかな？後でね、4人と」

手を振られたので振り返す。その後京一に言われるまで、自分が友人と同じように数えられていることには気付きもしなかった

友達

「終わった〜よし帰るとするか」

「そうだね。帰りにジュースでも奢ってあげるよ」

帰りのホームルームを終え、欠伸をしながら帰る準備をしている京一に話し掛けると

「マジか！サンキュー！」

喜んでいるようだ。なら早く帰る準備をして帰ろうかな

「帰るの？ならみんなで帰ろうよ」

準備が終わり、立ち上がるうとした時に話し掛けられた

「いいんですか？泉さん」

「いいも何も今日はかがみがお世話になったみたいだからね。それに友達になりたいし」

立ち上がり、話し掛けてきた泉さんの方を向く。そういう台詞は終かがみさんが言うべきなんじゃ…

「わかりました。ならこいつもいいですか？」

「ん〜？いいんじゃないかな。凶暴そうだけど…大丈夫？」

「大丈夫ですよ。顔はこんなですが、中身は普通なので」

「そっか、なら安心だね」

京一の机に行き、危険ではないことを泉さんに話すところ承してくれた

「なんだ？俺がどうかしたのか？」

「みんなで一緒に帰るって話しだよ」

聞いていなかったようだ。後で話してやるか、そう決めたとこで

「お待たせ、じゃあ帰るわよ」

教室の入口付近から声がした。朝から聞いている声だ。早速泉さんが一緒に帰る事を話しているようだ

「さて、そろそろ帰りますか？」

入口にいる2人とこちらに近づく3人をくりと見渡し、全員で教室を後にする。

「へ、意外と近くに住んでるのね」

「ええ、今まで会わなかったのが不思議なくらいですね」

「そっだね、でも今日からは友達だし、いつでも会えるよね」

「確かにそうですね。私達は友達なんですし」

「いや〜それにしてもかがみもいい男捕まえてきたね〜はじめ見たときは男に見えなかったけど」

「ちよっ！何言ってるのよ！…でも確かに男の人には見えかったわね」

「よく言われます。名前も女の人みたいですしね〜」

「そんなことありませんよ？私は素敵なお名前だと思います」

「有難うございます」

ただ今下校中なのだが、教室を出てからずっとこの調子である。女の人って凄いな〜

「あだ名をつけるとしたら、あおちゃんときょうちゃんだね〜」

「あだ名ですか〜あだ名で呼んでもらっても結構ですよ？皆さんも呼びやすい呼び方で呼んで下さい。その代わり自分も呼びやすい呼び方で呼ばせていただきます」

「全然オツケーだよ。あおい君」

「私もそれで構わないわ、あおい君」

「私もいいよ？あおちゃん」

「では私もあおいさんと呼ばせていただきますね」

「それでは自分はこなたさん、かがみさん、つかささん、みゆきさ

んと呼ばせていただきます」

呼び方を改められたので、こちらも下の名前で呼ぶ。下の名前で呼ばれることに慣れていないのか赤くなっているようだ

「そういえばさあおい君、ずっと気になってたんだけど」

「なんですか？」

「私達と話してる時顔赤いけど…なんで？」

「こ、これですか？これは…その…女性に近付かれることにまだあまり慣れていないので…」

「ん？お前妹いたよな？」

「妹は女性というより家族だからかな。こっちはならないんだよね」

「なるほど、ならば早く慣れるために私が熱い抱擁を…」

まさか朝から赤くなってたんじゃ…そう考えているとこなたさんが何かを言っただ飛び込もうとした矢先、かがみさんの拳がこなたさんの頭に当たり乾いた音とともにうづくまる

「おおおおお…」

「まったくお前は…」

皆と他愛のない会話をしていると、別れの時間が来たようだ

「じゃあまたね〜」

「それじゃまた明日会いましょ？」

「みんなまた明日〜」

「それではまた明日。失礼します」

「皆さんお気をつけて〜」

「じゃあな。また明日〜」

皆を家の近くまで送り、京一と帰っていると

「今日は賑やかだったな〜」

いきなり話し掛けられた。そちらに顔を向け話しをする

「たぶん、今日”から”になるだろうけどね」

「あんだけ仲良くなりゃな。まだまだ知らない事も多いけどな」

「それでも1日でこれだけ仲良くなれるんだ。すごいことだと思っけど？自分は」

「たしかにな…それよか忘れてないか？」

「あ〜…ジュース？ちよつと待ってて」

そう言って近くのコンビニに入り、ジュースを買って出てくる

「ん、サンキュ。なああおい…」

「どういたしまして…ってなに？」

「あいつらしい奴らだろうからさ、大切にしろよ？」

「なに言ってるんのか。大切にしろよ、じゃなくて大切にしような？
でしょ？」

「そっか…そうだな。大切にしていこうな？」

「分かってるって、じゃあねまた明日」

明日再び会うために告げる別れの言葉。それが今日4つ増えた。それを思う度、自分は笑みがこぼれるのだった

用事

「もう朝か…」

いつものように目覚ましを止めて呟く。今日が何日なのかも知らな
いままに。

「ようあおい」

「やあ、おはよう京一」

何時もの時間に家を出ると京一が後ろから声をかけてきた。声を確
認し、挨拶して振り返る

「え〜っと…」

「おはようあおい君」

「あおい君、おはよう」

「おはようあおちゃん」

「おはようございます、あおいさん」

振り返ると4人+1が並んでおり、4人は挨拶してきた。どうなっ
てるんだ？

「京一、状況の説明を頼めるかい？」

「えゝ状況？なんのことだ？」

「何故、京一と、4人が、一緒に、ここに、いるのかな？」

「落ち着け！わかった！わかったから！説明するから！」

少し強めに尋ねると話す気になったようだ。そこまで恐いのかな？

「まずは理由だな。4人が俺やお前と一緒に登校したい！だそうだ」

「ほほう、それでなんでここに？」

「昨日の会話でこの辺りだって聞いたから来たんだとき。それでお前んちに行こうとした俺を偶然見つけてこうなった、てわけだ」

「そうだったんだ、説明ありがとう。」

大体の経緯はわかったけど、まさかここまでするとはねゝ。驚いたよ

「さて…挨拶がまだでしたね。おはようございます、こなたさん、かがみさん、つかささん、みゆきさん」

微笑んで挨拶すると揃って赤くなる。なんなのかな、今度聞いてみよう

「いやゝ朝からご苦労なことだ」

「ご苦労？なにが？」

「なんでもねえよ」

京一が声をかけてきたのだが内容の意味が分からない。まあいいや、もう学校着いたし

「ん？…何か入ってる」

「どうしたあおい？」

「なにが入ってたの？」

靴を脱ぎ、靴箱から上履きを取り出すと手紙のような物が入っていた。とりあえず靴を入れてと…

「どうかしたの？」

「あおちゃん？」

「いかなさいました？」

「自分はなんともありませんが、靴箱に手紙が入っていたんですよ」

「おいおい…」

「それって…」

「まさか…」

「ラブレター…」

「なんでしょうか…」

手紙を右手に持ち、皆に説明するとショックを受けているようだった。何で京一まで…

「どうなんでしょうか。まだそうと決まった訳じゃありませんし、果たし状や連絡のメモかもしれないし」

「メモはともかく果たし状はないだろ！」

「デュエル!？」

「だよ〜あ、こなたさん違います。自分デッキ持ってきてませんし」

「そつちじゃないだろ！」

「あおちゃん戦うの？」

「命懸けというものですね？」

「大丈夫ですよ？そう簡単には負けませんから」

「いやだから違うだろ！」

中身を予測しているとかがみさんからツッコミが飛んできた。可能性はあると思うんだけどな〜

「まあ教室に入ったら開けてみますので」

「気になるな〜」

「気になるよね」

「同感だわ」

「わたしも気になる」

「私も気になります」

皆口々に言つが、あえて触れないでおく。どうせ教室で開けるんだし

「それで？」

「中身はどんな感じ？」

「なんて書いてあったの？」

「どきどきするね」

「ど、どうですか？」

「まだ開けてませんから、ちょっと待っていて下さい」

教室に着き席に座って丁寧に開けていく。中には薄桃色の紙が入っている

「放課後、お会いできないでしょうか…」

「2人きりで話したいことがあります…」

「お忙しいでしょうからお時間は取らせません…」

「A組の教室で待っています…」

「2年A組女子より…」

声に出して読んでいる。事実であるかどうかを確認するかのように。

「こりゃラブレターだな」

「确实だね…」

「そうとしか見えないわね…」

「あおちゃんファイト!」

「頑張ってくださいあおいさん!」

「そう言われてもですね…」

鳴り響くチャイムを聞きながら、頬を掻きながら声に答える。本当にラブレターとは、こちらが驚いた。だがそれをかき消すことが黒板に書いてあった

「4月17日…?」

「今日がどうかしたのか?」

「皆さん悪いんですが…今日は一緒に帰れません。用事があります」

>かがみview<

驚いた、靴箱にラブレターなんて本当にやる人いたんだ。何だか悔しい。

内容を見る限りラブレターにしか見えなかったし本当にラブレターなんだと思う。

正直そんな物を見たくはなかった。何故かは分からないけど、凄く嫌だった。

だからなのかな。私が教室に戻ろうとした時にあおい君が用事があると云った時、一瞬全身の血が引いていったような感じがして、何も考えられなくなった。

尾行（前書き）

今回はかがみ視点で進みます。それではどうぞ

尾行

>かがみview<

「あ…もうこんな時間なんだ」

あの後、教室に戻ってから今までの時間がひどく短く感じられた。おそろくずつとあおい君の言った用事の内容が気になって、考え込んでいたのが原因だろう

「柊と一緒に帰ろうぜ」

「柊ちゃん、ずっとじつとしてたけど…何かあったの？」

日下部と峰岸が帰りに誘ってくる。だけど私は…

「ごめん、ちょっと今日は無理かな…」

「え…？まじかよ柊」

「みさちゃん、柊ちゃんにも色々あるんだから。じゃあ私達は帰るね」

そう言っつて峰岸は日下部を連れて帰って行った。無理と言っつたのはA組の女子が、そしてあおい君が気になるからだ

「はあ…」

小さく溜め息を吐いて机に突っ伏すと、目の奥から溢れた熱いもの

が頬を伝う。しばらくすると教室の入口から声が聞こえてきた

「お〜い〜」

「お〜いかがみ〜ん」

「お姉ちゃ〜ん？」

「ここで待っていますので、皆さんと一緒に話しませんか？」

いつもの3人と京一君だ。目や頬を拭い準備をして教室を後にする

「お待たせ、じゃあ帰ろっか」

「おっと、まだ帰らないよ？帰る前に確認しないといけないことがあるからね〜」

「確認？何をよ」

「あおい君の用事とやらだよ」

「あんた本気？見つかったら何言われるか…」

こなたの発言に呆れながら応える。まったくこいつは…

「お姉ちゃんは気にならないの？」

「私は少々気になります」

「別に気にならないわけじゃないけど…大丈夫なの？」

「あおいのことだ、気付いたとしても気にはしないはずだ。謝れば笑って済ませてくれるさ」

「だといんだけど…」

正直不安だ。あおい君に見つかって怒られることよりも、あおい君が女子に何て言うのが

「それじゃあ『あおい君尾行大作戦』開始！」

「お〜」

「なんだか楽しみです」

「大作戦ってほどのものじゃない気がするのは私だけなのか？」

「まあまず尾行ってほどでもないんだがな」

小声で話しながらA組にゆっくりと近付く。なかなか緊張してしまう

「そう言えばあおい君は？」

「かがみが教室から出てくるちょっと前にもう向かったよ」

「ってことはA組には今2人きりってこと？」

「あのラブレター通りだな」

こそこそと話していると到着した。ゆっくり教室側の壁に寄り、会

話に耳を傾ける

「…ほど。大体のことは分かりました。」

「では本題に入ります。私と付き合ってくださいか？」

「すみません。気になる人がいるので、貴女の思いには…」

律儀に頭を下げているあおい君が見えた。聞いた限り断っているようだったが、気になる人とは誰なのだろうか…

「そうですか…いい人ですか？」

「まだ知り合って間もないですが、自分の感じた限りいい人ですよ。」

「ならよかったです。私、陰ながら応援してます!」

「ありがとうございます。では自分はこれで」

「どうやら終わったようだ。ってことは…?」

「ねえこなた…」

「なに〜かがみん?」

「あおい君が教室出るとき、私達はどつするの?」

「あ〜…考えてなかった」

「どつしよ〜あおちゃんに見つかっちゃつよ〜」

「つかさん落ち着いて下さい、まだなにか…」

みゆきがつかさに話しかけていると、あおい君は教室から出てそのまま足早に去っていった

「こつちに気付いてなかった?...助かった〜」

「だがあいつらしくないな...まさか用事ってこれの事じゃないのか?」

「まだ何かあるって事?」

「そついやあいつ今日の日付を確認した後に用事があるって言ったよな?」

「そつ言われるとそつでしたね。何かあおいさんの行きそつな所をご存じありませんか?」

「今日かどつかはわからないが、今月中に行きそつな場所なら心当たりがあるぞ」

どつやらあおい君の用事はこれではなかったようだ。ホツとしたいところなのだがそつも言っつていられない

「京ちゃんホント?」

「ああ本当だ。行くか?」

「もつちろん！」

「私は行くわ。このままだとスッキリしないし、行かない理由もないしね」

「お姉ちゃんが行くなら私も」

「私もご一緒させていただきますね」

「決まりだな。俺について来てくれ」

そう言つと早足で廊下を進む。早足と言つてもこちらの事を考えた上での早足である

「あれ？こつち？」

「ああ、こつちで合ってる」

「あんまり通らない道ね」

「知らない道つてなんだか怖いよね」

「大丈夫…だと思いますよ？」

現在私達は京一君に連れられて普段通らない道を通り、目的地へ向けてひたすら歩いている。

「これって…尾行なの？」

「まあ尾行つて言えば尾行なんじゃない？相手の行き先に行こうとしてるんだし」

「大戦は大失敗だな」

「ちよつ！酷くない京一君！」

「楽しいけどそろそろ疲れてきたよ」

「どこか休憩出来る場所はありませんか？」

「まあ待て、もう着く…ほら目的地に着いたぞ」

疲れ始めたつかさとみゆきを見て京一君が励ましていると、ようやく到着した目的地…そこは

「お墓…？」

「よね、どう見ても…」

「ここがおおちゃんの目的地…？」

「誰かのお墓があるんでしょうか…」

「ああ…記憶が正しければな。場所はたしか…この辺りだな」

歩きながら話していると、思い当たる場所の近くに来たようだ。手分けして『神藤』の文字を探す

「みんな…こっちにあったわよ」

「かがみんやる」

「お手柄だな」

「お姉ちゃんすごい！」

「ご苦労様ですががみさん」

私が最初に見つけ、皆に声をかける。皆から褒められると正直照れてしまう

「照れてるのかな？可愛いね〜かがみんは」

「ホントだ〜お姉ちゃんちょっと顔赤いよ？」

「本当ですね、先ほどまで普段通りでしたのに」

「う、うっさい！」

「まあまあ落ち着けよみんな。あおいが来たぞ」

その言葉に反応し反射的に振り返ると、花を持ったあおい君がこちらに近付いて来ていた

特別な日

正直、自分は驚いている。というより誰から見ても、が正しいのだからか

「京一…それに皆さんも…なんでここに？」

「いちゃ悪いのかよ」

「京一君が案内してくれたんだよ」

「まさか用事がここにあつたなんてね」

「えへへ〜驚いた？」

「止した方が良いのかと迷いましたが来ることにしました。すみません」

聞く限りだと、用事が気になり京一が案内したらしい

「よくわかったね。ここに来るって」

「今月中にここに来るとは知っていたが、今日来ると思ったのは殆ど勘だ」

「私達を勘で連れてきたの!？」

「いろんな意味で凄いな…」

「いなかったらどうしてたんだろ…」

「ですがお会い出来たんですから、凄いですよね」

「ですよね〜京一の勘は凄いですね〜」

などと京一の行動について話していると

「そんなに言うな…それよりもあおい、今日言った用事はこれなんだな？」

「そうだけど…なにかあったの？」

突然真顔で尋ねてくる。こちらも尋ねてきた理由を尋ねてみる

「いや〜特にはないんだけどさ。気になっちゃって」

「私も気になったから。それだけよ？」

「私も〜」

「私も同じ理由です」

「だとさ。みんなお前を心配してくれたんだよ」

「心配して下さい、ありがとうございますみなさん」

微笑んで感謝の言葉を述べると皆はいつものように赤く、かがみさんに至っては真っ赤になっていた。早速こなたさんに何か話しかけられているようだ

「そう言えばこのお墓、誰のお墓なの？」

「ご先祖様とか？」

「もしよろしければ教えていただけませんか？」

こなたさんの扱いが面倒になってきたのか、かがみさんが話題を変
える。他の皆も知りたがっているようだ

「…ここには自分の弟と妹が眠っています」

「兄弟…？」

「あおい君の？」

「冗談…じゃなさそうだね」

「そうだったんですか…」

「雪花と桜花の…か？」

「そうだよ。ちょっと待っていて、花と線香を供えたら皆で帰ろう」

皆に近付き、待つように促す。だが皆は待とうとはしなかった

「ねえあおい君…」

「はい、なんですか？」

「お線香：私達もいい？」

「構いませんよ？では…はい」

線香と花を買う際に一緒に買ったライターで線香に火を付ける。それを一人一人に渡して行き、墓前に花と共に供える

「…」

手を合わせ、目を閉じるとしばしの沈黙が続く。自分が目を開けたときには皆は既に自分を待っていてくれたようだった

「お待たせしました。では帰りましょうか」

「そうだね。あおい君…ごめんね？」

「何で謝るんですか？」

「私達、軽い気持ちで後追っちゃったから…」

「まさかこんな所に来るなんて思わなかったの…」

「言い訳になるかもしれませんが、皆さんあおいさんの事が心配だったんです」

「この事考えるまで、ラブレターの方を用事だと思ってたが…連れてきたの軽率過ぎたか？」

皆の謝罪を聞き首を横に振る。皆が悪い訳じゃないのにね

「謝らないで下さいよ。自分が行き先を告げなかったことが原因なんですから、皆さんが悪いわけではありません」

「でも…」

「腑に落ちませんか？なら…お墓に手を合わせてくれましたよね？それで許すことにします」

「ありがとう…ならもう帰りましょ？」

「賛成しずっと動きっぱなしだったから喉乾いちゃったよ」

「どこかに自動販売機ないかな？」

「この辺りは来たことがありませんから何とも言えませんね」

「自動販売機はわかりませんが、たしかコンビニはあったはずですよ」

「んじゃ、そこ行こうぜ」

墓を離れ、少し歩くとコンビニが見えてきた。覚えていてよかったと自分で思う

「皆さんはここで待っていて下さいね」

「へ？何で？」

「今日は自分のせいで疲れたみたいなものですからね。お詫びにジュース奢りますよ」

「いいの？悪いわね」

「ありがと〜ねあおちゃん」

「ありがと〜いぞいます」

「サンキューあおい」

「いえいえ」

そう言っつてコンビニに入る。財布を取り出しながら飲み物のコーナ
ーを物色する。そういえばなにがいいか聞いてなかったっけ…無難
なものにしておこう

>京一view<

あおいがコンビニに入った後、少し気になっていた事を再び考える

「4月17日…か」

「どうしたの？京一君」

「いやな、今日なににか他にあつた気がするんだよな」

「他に？用事とか？」

「用事はさっきので終わっただろうさ。だがなににか忘れてる気がするんだ」

「なにかって？」

「それがわからないからこうして悩んでるわけだ。去年もその前もあつた…気がする」

「去年もその前も…それって誕生日ではありませんか？誕生日は毎年訪れますし」

「そうか誕生日か…言われてみたらそうだな」

「今日なの？」

「ああ思い出したよ。4月17日はあおいの誕生日だ」

「じゃあお祝いしないかね」

「あおい君も、朝言ってくれたらよかったのに」

「余裕無かったんじゃないか？用事で頭がいつぱいでさ」

「なんか可哀相…」

「そうですね。自分の誕生日より先にお墓が思い浮かぶなんて…」

「あおいはいつもそんな感じだ。自分より他を優先させる」

そんな話をしているとコンビニから出てくる人がいた。学生服にジューズ…あおいだ

>あおいview<

「お待たせしました。はい、ジュースです」

「あ、ありがとう…」

「ありがとう、あおい君」

「ありがとう、あおちゃん」

「ありがとうございますあおいさん」

「サンキュあおい」

「どういたしまして。何が好きなのが分からなかったので無難な物にしておきました」

少し笑いながら言い、ジュースを渡していると

「ねえあおい君？」

「なんですか？こなたさん」

「あおい君さ、今日誕生日なの？」

想像していた表情と予想外の質問を同時にされた

「…そういえばそうでしたね。京一から聞いたんですか？」

「まあね。まあ聞いたからって何かする訳じゃないんだけどね」

「興味があったのよ」

「気になっちゃったんだ」

「お気を悪くなさらないで下さいね？」

「構いませんよ。ではまた明日」

家が近付いてきたため皆と別れる。この時皆が笑顔で別れを告げたのは明日が楽しみだからなのだろうか？

>京一view<

「さて、これで心おきなく喋れるな。どうする？」

「とりあえずどこか落ち着いた場所で話し合いたいよね」

「ならうちに来る？ここからも近いし、ちょうどいいと思うんだけど」

「お姉ちゃんの見解に賛成」

「私も賛成です。なるべく早く準備した方がよろしいかと」

「決まりだな。なら少し急ぐか」

俺達は今、とある計画を立てている。そのために少し歩みを早め、柊家に向かう。

「上手くいくといいね」

「ああ、そのためにも頑張るぞ！」

「わかってるわよ！」

「私も頑張る！」

「微力ながら私もお手伝いさせていただきます」

成功させる。そのために皆で頑張る。ああい…今日を忘れられない誕生日にしてやるから、待ってるよ

準備と出会い

「ピンポーン」

「ん…誰だろ…」

帰って来たのはいいのだが、家には何故か誰もいなかった。今は特にやる事もないので、出されていた課題を少し早めに終わらせている

「ピンポーンピンポーン」

「今行きますよ」

聞こえるはずのない返事をして終わった課題を棚に直す。玄関に向かい戸を開けると

「よゝあおい、暇か？」

「まあ確かに暇ではあるけど何か用？」

京一がいた。まあある程度予想はつくけどね

「ゲーセン行くつぜ？金なら少しは奢るぞ？」

「本当？なら行くつかな。もうやることもあんまりなくなってきたしね」

「そんなに暇だったのか。てか金持ちが金で釣られるってどうなん

だ？」

「家に誰もいないからね。課題してたら終わる頃に来た、ってわけ。あとお金に釣られる、じゃくて条件に釣られた、が正しいと思うよ？」

「まあたしかに、直接金渡すわけじゃないしな」

そんな話をしているとゲーセンに着いたようだ

「んじゃ、ちょっと待ってるよ。金崩してくるわ」

「ん〜わかった〜」

そう言うと京一は奥の方へと消えていった

>京一view<

両替ついでにメールを打つ。内容は『あおいの誘い出し成功、準備を頼んだ』で送信。

準備とは勿論あおいの誕生会の準備である。事前に必要な物を揃えておき、あおいの家に押し掛ける。単純だが確実性の高い作戦である

「待たせたな。財布の中身ひっくり返しちまってよ」

「なにしてんのさ、まったく」

適当な理由をつけて遅れた理由を話す。ちなみに俺の役割は、時間稼ぎとあおいの帰宅を見守ることである

「中身は無事だったんだし、いいだろ？」

「ならいいんじゃない？それよりこれやるからさ、はい」

「結局渡すのな…ほらよ」

「どうも。京一もなにかすれば？」

「そうだな、んじゃ少し渡しておくから遊んでこい」

そう言ってあおいに金を渡して、俺は面白そうなゲームを探すことにした

> あおい view <

「さてと、やりますかね」

お金を入れて対戦相手を待つ。夕方だからなのか見た限り客が多く、実際に対戦相手もすぐに見つかった

「まだまだ腕は衰えていないようだね」

久しぶりの感覚を手にしながら対戦相手を倒していく。

「負けた…」

そろそろ感覚が戻って来た。そう思っていた矢先、次の対戦相手が見つかる

「ここでもう、っと」

相手の攻撃を見切り、隙をついて技を決める。よし倒した

「っ、強…なんかいつもの奴じゃないみたい」

「大丈夫なの？ここ」

「頑張つて何とかしてみよう」

対戦相手だろうか、向こうで女性の話し声がした。まだ続けるようだ

「これで…」

「また負けた?!どんな相手だろ」

「ちょ、ちょっとここ」

声のする方に目をやると目があった。1人は陵桜の制服、もう1人は聖フィオリナ女学院だったっけ?…そんな制服を着た女性2人が話しかけてきた

「…女の人？」

「どつやらそのようね」

「残念ながら自分は男ですよ」

「え?すいません!ほらやまとも謝つて」

「こうに言われるまでもないわ。すみませんでした」

「構いませんよ、よくあることです」

その後、対戦を終えたため少し話をした。こちらに來ないあたり、京一はまだゲームをしているようだ

「自己紹介がまだでしたね、神藤あおいと言います。そちらの方と同じ陵桜学園に通っています」

「私は永森やまと。聖フィオリナ女学院に通っていて、こうとは知り合いで学年的には同じね」

「私は八坂こうつて言います。見ての通り陵桜学園の生徒で…っっておなじ学校！？それにやまと、知り合いつて酷くない？」

「じゃあ言い直すわ。一応友達よ、これでいいかしら？」

「ひ、酷い…：そういうえは何年生ですか？私は1年生ですけど」

「自分は2年生ですよ」

「上級生でしたか？なら神藤先輩と呼ばせてもらいますね」

「私もそうさせてもらっわね」

「では自分は永森さん、八坂さんと呼ばせてもらいますね」

「わかりました」

「私はそれでかまわないわ」

呼び方を決め、3人で会話していると少し離れた所から声がした

「あおいくそろそろ帰るぞ〜」

「わかったよ。それではまた」

京一が呼びに来たようなので、会釈をしてゲーセンから出る。京一はしきりに携帯を操作しているが、メールでもしているのだろうか

「あおい、さつき話してたのは知り合いか？」

「さつき知り合ったばかりだけどね〜」

「最近女性以外と知り合っていない気がするんだが…」

「そう言われるとたしかにそうだね」

「ピリリリリ」

「俺…じゃないな。あおいのか？」

「どつやらそうみたいだね」

ズボンの右ポケットから携帯を取り出すと電話が鳴っていた。手早く開き、電話に出る

「はいもしもし、神藤ですけど」

「あおいか？すまんが急に出張になってな、茜と母さんは心配だったんで連れて行くことにしたよ」

「父さん？出張って…何日くらいで帰ってくるの？」

「まだ正確にはわからんが、おそらく長くなるだろうな。気長に待っていてくれ」

「長く…どのくらい？」

「だいたい…1ヶ月くらいだろうか。その間は家を任せたぞ」

「わかってるよ。出張ついでに羽伸ばしてきたら？」

「そうだな、温泉にでも浸かってゆっくりするさ…お前はしっかりしてるから大丈夫だと思うが、何かあったらすぐに電話しなさい」

「わかったよ」

「基本的に家は自由にしてもいいぞ…最後になったが誕生日祝えなくてすまないな」

「いいよ、悪気はないんだろうし、こうして謝ってくれたんだしさ」

「そつか…ならまたな」

「うん…」

電話を切って携帯をしまう。

「お前の親父さんなんて？」

「出張だとさ、母さんと茜連れてね」

携帯をしまったのを確認したのか、京一が尋ねてくる

「妹までか、ってことは家にはお前だけか？」

「そうなるね。じゃあね」

「おう、またな」

自分の家の近くに來たので京一に別れを告げて家に入った。さて何をしようかな…

>京一view<

あおいには家の近くで別れを告げた。だが俺は、あおいが家の中に入るのを目で確認してからあおいの家を離れた。そして携帯を取りだし、電話をかける

「はいもしもし？」

「京一だ。あおいはしばらく家に一人らしい」

「そうなの？わざわざありがとう」

「どういたしまして。それよりそっちはどうだ？」

「もう少しで終わりそうよ」

「わかった。俺もそっちに行って手伝う」

「わかったわ」

携帯を切ってポケットに乱暴に突っ込む。ちなみに電話の相手は柊の姉の方だ。

4人と携帯番号、メルアド、自宅電話の番号を交換したのだが、柊家で準備していることや姉の方が頼りになると思ったのだが、正解だったようだ

「来たぞ、準備終わらせようぜ」

「待ってました!」

「意外と早かったのね」

「もう少しだから頑張ろ」

「助かります」

「…出来た」

ようやく準備が出来たのは午後7時を過ぎた頃だった。意外と手間取ったのは言うまでもない

「意外と手間取っちゃったね」

「でも後は持っただけにしておかないとね」

「あおちゃん喜んでくれるかな？」

「喜んでいただけるといいですね」

「喜ぶさ、きつと」

運ぶ物を纏めてあおいの家に向かう。あくまで慎重に、そして急いで。

「ここが…あおい君の家？」

「時代劇にでも出てきそうな家ね」

「大きいね〜」

「おそらく私の家よりも大きいと思いますよ」

「いいか？入るぞ」

門を開き中に入る。また驚いているようだがほっというインターホンを押す。

「はい」

しばらくして中から返事と共に、「こちらに向かう足音が聞こえてきた

押し掛ける者達

「ピンポン」

「ん…？誰だろ」

時間はもう遅い。ゆっくりDVDでも見ようかと思ってたのに…そう思いながら玄関を開けた

「はい…京一？それに皆さんも？どうしたんですか？」

「ちょっとな…上がっていいか？」

「構わないけど…なに？何かあったの？」

「いいからいいから、お邪魔します」

「お邪魔させてもらっわね」

「おじゃまします」

「お邪魔させていただきます」

「お邪魔するぞ」

上がることを許可すると、皆が挨拶して上がって行く

「ちょ、ちょっと待って下さい。とりあえず居間に案内しますので、勝手に歩き回らないで下さい」

「え〜色々見て回りた〜い」

「わがまま言わない！ここはあおい君の家なんだから言うことはちゃんと聞きなさい！」

「そつだぞ？かなり広いうえに迷いやすいからな。下手に動くとお変だぞ」

「う…しょうがない」

「京ちゃん詳しいね〜」

「実際迷ったからな。あの時は正直参った」

「まあ…そつだったんですか」

「着きましたよ〜」

皆を居間に通す。皆が座つたのを確認して立ち上がる

「さて、自分は飲み物を持って来ますね」

確か冷蔵庫にジュースが入っていたからそれを出せばいいかな…そんな事を考えながらキッチンに向かった

> 京一 view <

あおいは飲み物を取りに行くと言った。そろそろ始めるかな

「よし、すぐ出来るように構えとくか」

「喜んでくれるかな」

「だといいわね」

「絶対喜んでくれるよ〜」

「そのためにも成功させましょう」

すぐに始められるように袋から出しておく。今使わない物は気付かれてはいけないため、机の下や後ろに隠しておく

「そろそろ戻って来るぞ、準備出来たか？」

「オッケー！」

「出来てるわ」

「こつちもいいよ〜」

「いつでもいけます」

あおいが部屋に入って来る。それと同時にクラッカーの紐を勢いよく引く張ると、破裂音と共に中身があおいの方に飛んでいった

> あおい view <

「…………え〜っつと」

何が起こったのかと思ったが、理解しようにも頭が回らない。クラッカーだと分かったのは2、3分してからであった

「これ…クラッカー？」

「そうだぞ。誕生日おめでとう、あおい」

「おめでと〜あおい君」

「あおい君おめでとう」

「あおちゃんおめでとう」

「おめでと〜ございます、あおいさん」

「あ、ありがとうございます」

突然の出来事に戸惑う。だが笑顔で拍手している皆を見ていたら、こちらまで笑顔になってしまった

「よ〜しあれ出そ〜」

「あれってなんですか？」

「ケーキよ。皆で作ったの…私も手伝ったけど、そこは美味しくないかもしれないけど…」

「そんなことないよ、お姉ちゃん一生懸命だったもん。絶対美味しいよ」

「そうですね。思いを込めて作ったんですから、美味しいに決まっていますよ」

皆がケーキ作りを楽しそうに話す。だが食べるにはまだ早い

「食べたいのは山々なのですが、まだ晚ご飯食べてませんし。晚ご飯の後にしませんか？」

「賛成しずっと動きっぱでお腹すいたよ」

「そうね、休み無しの作業だったしね」

「私もお腹ぺこぺこ」

「お恥ずかしながら、私もお腹が…」

「俺もすいたな。あおいくなんか作ってくれるか？」

「いやダメでしょ、今日の主役動かしちゃ。それにあおい君料理作れるの？」

「この中で疲れてないのはあおいくらいだからな、仕方ないだろ。それにあおいは料理作るの上手いぞ。安心しろ」

「そうなんだ。あおい君、頼める？」

「お願いあおちゃん」

「すみませんがお願いできますか？」

「わかりました。祝ってもらおうお礼です、腕によりをかけて作らせていただきます」

皆はお腹が空いているらしく、自分に料理を頼んできた。それだけ一生懸命に準備してくれていたと思うと、目頭が熱くなる。

「皆さんはゆつくりしててください。出来上がったら呼びに来ますので」

「なら私も手伝います」

「いいんですか？高良さん」

「ええ、”今日から”お世話になるんですから。これくらいはさせていただきます」

「わかりました、付いて来て下さい」

”今日から”という言葉が少し気にはなったが、今は晩ご飯作りに集中する事にした

「さてと…食材は十分ありますね。自分は調理しますので、高良さんは食器等を準備しておいて下さい」

「わかりました…あおいさん、少し失礼かもしれませんが…」

「…なんですか？」

「お気を悪くなさらないで欲しいのですが…何故弟さんと妹さんは亡くなられたのですか？」

「…それなら今日のお祝いが終わって、皆さんが落ち着いたらお話
しますよ」

「すみません…急にこのような事をお尋ねしてしまって…」

「構いませんよ、話すつもりでしたんですから。高良さんが謝るこ
とはありませんよ」

鍋を振りながら振り返らずに話す。振り返らなくとも、どんな表情
なのかは大体わかる

「さて、出来ましたよ。高良さんは皆さんを呼びに行ってくれませ
んか？」

「わかりました。えっと…」

「どうしたんですか？」

「皆さんはどのお部屋に…」

「そういうことですか。それなら真っ直ぐ行って、最初の別れ道を
右に行き2つ目の部屋です。わかりましたか？」

「わかりました。行ってきます」

うろつろしていた高良さんに居間の場所を伝えると、教えた道を歩
いていった

「いったただっきま〜す！おおー！これおいしー！」

「ホントね〜ほっぺた落ちそう」

「あおちゃんの作ったお料理とってもおいしいよ〜」

「本当ですね。京一さんの仰った通りですね」

「だろ？特にこのピリツとした辛さが何とも言えんな」

「皆さんのお口に合っただけによります」

現在自分の作った料理を皆で食べている。ちなみに今日は中華料理にしてみた

「…ふ〜う、ごちそうさまでした〜」

「とってもおいしかったわ。あおい君、ごちそうさま」

「ごちそうさま〜あおちゃんありがとう〜」

「御馳走様でした。あおいさん、とても美味しかったです」

「ごちそうさま、美味かったぞあおい」

「お粗末様です。見事に完食しましたね〜」

「美味かったからな。さて次は風呂かな？」

「お風呂も入っていくの？そろそろ帰らないと親が心配するんじゃない」

「…」

「へ？何で帰るの？」

「私達、今日ここに泊まるんだけど」

「…え？」

「そのためにちゃんど準備してきたもん。ね？」

「はい。なかなか手間取ってしまいましたが、着替え等も持ってきてありますし」

「え」と…」

流石に参った。皆、帰る気なんて最初からなかったのか…

「京一、これはいったいどういっ…」

「皆で考えた末の結論だ。どうするかはお前に任せるよ」

「…皆さん、親に許可は取ってあるんですか？」

「もっちろん！」

「最初から泊まるつもりで来てるんだから、当然でしょ？」

「私も取ってあるよ」

「私もこちらを訪ねる前に許可をいただきました」

「俺は隣だしな。すぐに許可取れるさ」

「なら泊まっついていって下さい。自分は歓迎しますよ」

泊まる許可を出した後、皆が笑顔を見せてくれた。まるで最初から許可することを知っていたかのように

誕生日

「ふむむ…」

「どうしたの？京一君」

「いやな、まだケーキもあるからさ。先に風呂に入るべきなのか、後から入るべきなのかってな」

京一はお風呂とケーキ、どちらを先に済ませるかを悩んでいるようだ

「寝る前に食べると太るって言うわよね…」

「お姉ちゃんまたダイエットしてるの？」

「私には理想的な体型に見えるんですけど…」

「今のままでも十分綺麗だと思いますけどね」

「あ、ありがとう…」

体型を気にしているらしいので、太っていないことを伝えると

「ぐふふ…照れてる照れてる」

「お姉ちゃん顔真っ赤だよ？」

「とても可愛らしいですね」

「そ…そんなこと言ってないで、ケーキ食べましょ？」

真っ赤になって話を逸らしてきた。体型について触れられなくなっただろうか？

「逸らしたな…まあいいか。ケーキ食べようぜ」

「そうだね。ならお皿とか持ってこないと…」

「ちよつと待った！主役は動いちゃ駄目！」

「そつよ、準備は私達がするから」

「あおちゃんは座って待っててね？」

「夕食はあおいさんにお任せする形になってしまったので、今度は私達にお任せ下さい」

「そついうことだ。大人しくしてろよ？主役さん」

「皆さんがそこまで言うのなら、そうさせていただきます」

皆に大人しくしているように言われたので、軽く手を振ってキッチンに向かう皆を見送った

>みゆきview<

あおいさんを居間に残し、私達はケーキ用のお皿を探しにキッチンへ来ました

「これなんかどうですか？大きさ的にはちょうど良いかと思うのですが」

「だが、見る限りだと枚数が足りないな…すまないが他のを探してくれないか？」

「わかりました…」

「どうした？」

「みゆきさん？」

「どうかしたの？みゆき」

「大丈夫？ゆきちゃん」

おそらく表情と喋り方に出てしまったんでしょう。皆さんが声をかけてきました

「だ、大丈夫です」

「…ならいいんだが」

「何もなくてよかったよ…あ、ねえこのお皿は？」

「枚数は…あるわね。ねえ京一君、みゆき、これでいい？」

「ん？ああ、なら持ってつてくれ。俺と高良はフォークやら色々探しとくから」

「わかったよ。お姉ちゃん、こなちゃん、行く？」

京一さんに促され、3人はお皿を持って先に居間へ戻って行ったよ
うです

「さてと…」

「フォークと切り分けるものを探せばよいのでしょうか？」

「だな…なあ」

「なんででしょうか？」

「あおいになんか言われたのか？」

「どうしてわかるんですか？」

「夕食の後からだったからな。様子がおかしかったのは」

見通されていた。それだけこの人は人の事を見ているのでしょう

「私の事を言われたわけではありません。弟さんや妹さんの事で…」

「あいつから聞いたのか？」

「いえ、皆さんが落ち着かれてからお話しするそうです」

「そうか…お、あつたあつた。戻るか？」

「これ以上は聞かないんですか？」

「聞いたところで意味ないだろ」

京一さんがフォークと切り分け用のナイフを探しながら仰られた後、見つけたようです

「そうですか。ならもう行きましょつか」

「そつだな」

短く告げると、短く返事を返されました。そしてどちらともなく歩き出しました

> あおい view <

「あ、帰ってきたみたいですね」

「お待たせ」

「はいお皿とフォーク、近くに座る人の分も置いてあげて？」

「わかりました」

帰ってきたかがみさんにお皿とフォークを渡され、近くの席に1組ずつ置いてやる

「わーいケーキケーキ」

「それでは…はい、あおいさん」

みゆきさんがロウソクに火をつけて名前を呼ぶ。やることはわかっている

「Happy birthday あおい君！」

「あおい君、Happy birthday！」

「Happy birthday! あおちゃん」

「あおいさん、Happy birthday」

「あおい、Happy birthday」

「皆さん、ありがとうございます」

目に涙を浮かべながら、皆に礼を言う。そして一気に火を吹き消す

「おゝ、これってなかなか消えてくれないんだよね」

「そうそう、何回吹いても消えてくれないのが1本はあるわよね」

「でもあおちゃん1回で消しちゃったよ？」

「ロウソクの火が小さかったんだろうさ」

「では、切り分けさせていただきますね」

みゆきさんがケーキに刃を入れ、綺麗に6等分に切り分ける。それを一人一人のお皿に入れていき、皆食べ始める

「おいし〜…とどこどこ苦いけど」

「うっ…」

「ちょ、ちょっと失敗しちゃっただけだよ」

「結果も大事ですが、過程も大事ですよ？」

「その過程でつまづいたってわけか」

「まあまあ。失敗していても、気持ちが入っていますから。とてもおいしいですよ？」

「喜んでもらえてよかった」

「いやあ、頑張ったからね〜特にかがみんが」

「お姉ちゃん、絶対成功させるって頑張ってたもんね」

「はい、かなり真剣に取り組んでいましたしね」

「よ、余計な事を…」

チラリとかがみさんがこちらを見る。気になって目を合わせると顔を背けてしまった

「?…?」

「何してんだ?あおい」

「何もしてないよ、強いて言うならケーキ食べてたくらいだよ。御馳走様でした」

「ならあおいの皿は俺が持って行く」

「あ、なら私のも持ってってよ」

「私のも」

「お前らは自分で動けよ！」

顔を背けてた事を不思議に思っていると京一に話しかけられたが、軽くごまかしてお皿を持って行ってもらう

「なら私が持って行きますよ」

「流石みゆきさん」

「ありがとうゆきちゃん」

「まったく、みゆきはこいつらに甘いんだから……」

「だいぶ洗い物が溜まってたが、あのままでいいのか？」

みゆきさんと入れ違いになる形で京一が戻って来た

「それならそのままでもいいよ、皆がお風呂に入っている間に洗っておくから」

「そっぴや風呂どっしする？」

「どづいつ意味？」

「女性から入るのか、俺達から入るのか決まってないだろ？」

「あゝ…どづする？」

「私はどっちでもいいよ」

「私もどちらでも構いませんよ？」

「じゃあみんな一緒に…」

皆が意見を出す中あなたさんが言葉を放った瞬間、鈍い音をたてる

「痛い…」

「まったく、ろくな事言わない！」

「だが全員真つ赤だぞ？」

「し、仕方ないじゃない…」

「あおちゃんと京ちゃんと一緒にお風呂なんて、恥ずかしいよ」

「こんな殿方とお風呂を一緒にするなんて恐縮です…」

「い、いえいえ、一緒には入りませんよ？」

「その台詞男から言うのは問題あると思うぞあおい…」

「まさか…覗くつもり!？」

「見損なっ たわ…」

「変態っていうのかな？」

「信じていましたのに…」

「そんなことする訳ないじゃないですか!」

勘違いされているので、そんな意思は無いことを伝えると

「そんなこと?…私達の体には覗く価値も無いって事?」

「最低ね…」

「あおちゃん酷いよ」

「正直、立ち直れません…」

見事に勘違いされてしまった。こっちが立ち直れません…

「おやおや本気にしてるみたいだね」

「大丈夫よ、私達信じてるから。あおい君も、京一君も」

「大事な大事な友達だもん」

「ですから、私達の信頼にこたえて下さいね?」

「はめられたな…」

「本気かと思いましたよ」

「じゃあお先に…っってお湯は？」

「元々入るつもりだったので、張ってありますよ」

「そっかそれならよかった」

どうやら冗談だったらしい。それでも信頼を失うようなことは、彼女達を裏切るようなことはしないと心に誓った。

男の居ぬ間に探索

「じゃあ、先に入らせてもらおうね」

「上がったら次はあおちゃん達だね」

「ではお先に」

「行ってらっしゃいませ」

女性陣がお風呂場に向かうのを手を振って見届けた後、キッチンで洗い物を片付ける

「…これで最後だね」

「なんだもう終わったのか？まだ始めて4、5分くらいしか経ってないが…」

「まあ綺麗に食べてくれたし、思ったより早く終わったよ」

「ならゆっくり待つか」

「残念だけど、自分はそうは言っていられないんだよね」

「なんだ、まだなんかあるのか？」

「皆の部屋用意しないといけないからね」

部屋に空きはあるのだが、使っていない部屋なので掃除をして個人

のものを運び入れる必要がある。

「荷物は皆が部屋を決めてからでいいとして、徹底的に掃除する必要があるね」

「なら手伝うぞ。1人より2人だ」

「どうも、それじゃ自分は掃除機持ってくるから」

「はいよ〜」

「まずはここか…思ったより汚れてないな」

「埃があるはずだよ。ほら、窓を開けて一旦掃除機で満遍なくやっ
てから雑巾で拭こうか」

「了解！」

普段掃除しているためあまり目立った汚れはなかったが、用心に越
したことはない

「終わった〜」

「お疲れさま。水でも飲む？」

「どうも」

「ふ〜う、いいお湯だったよ〜…それにしても露天風呂からサウナ
まで付いているとは、銭湯みたいだね」

「ホントよね〜、まあ露天風呂最高だったけど」

「私サウナに入りそびれちゃった」

「また次の機会があれば、入ってみたいですな〜」

「皆さん、部屋を用意してますので…はいこれを」

上がってきた女性陣の楽しげな会話を聞きながら部屋の事を話し、家の地図を皆に渡す

「これ地図？」

「はい。部屋に向かう道や御手洗い、今どこにいるのかを把握するために持っていて下さい」

「ありがと、私達の部屋ってこの番号の振ってある所？」

「そうですよ〜誰がどの部屋とまでは決まってるないので、そこは話し合ってから決めて下さい」

「わかった、ありがとあおちゃん」

「いえいえ。それと自分の部屋と、着替え部屋には用がない限り入らないで下さい」

「わかったよ〜」

「では自分達はお風呂に入って来ますので」

「わかりました。ごゆっくり」

注意をして、お風呂場に向かう。何もしないと思うけど…

>こなたview<

あおい君達はお風呂場に向かって行ったようだ。地図も手に入れたし

「よし、着替え部屋に行ってみよう！」

「ちよっ！さつき用がない限り入るなって言われたばかり…」

「なら、入りたい部屋があるからそこに入る！これが理由じゃ駄目？」

「こなちゃん、なんかカツコイイ」

「私も、入らないでと言われると気になってしまっ…」

「しょうがない奴らだな。まあついてくけど」

地図を見ながら着替え部屋を目指す。かがみも文句を言いつつ、ついて来た。素直じゃないなあ

「ここだね…」

「どんな部屋なのかな？」

「着替え部屋ってくらいだから、着替えが沢山置いてあるんじゃない？」

「では入りましょう…」

みゆきさんに促され、扉を開き電気を付ける。

「クローゼットがいつぱいある…」

「これ全部あおい君のなのかな…ん？」

「お姉ちゃん？」

「何か見つけた？」

「これって…」

「ボ○太くん…だね」

「こっちは制服だね。陣代って書いてあるけど…」

「前の学校のなのでしょうか…」

「いや、フル○タの主人公が着てたやつだよ。ね？かがみん」

かがみがクローゼットから見つけたボ○太くんを私に見せる。つかさも同じ所で探していると、案の定制服が出てきた

「そうよ、よくわかったわね。まあこっぴつがあるってことは…」

「そういう趣味の人ってことだね、私と合いそうだよ」

「こなちゃんと趣味で合っつていうことは、あおちゃんオタクなの？」

「つかささん、それはあまりに直接的すぎます…」

「ま、そゆこと。ささ、次行こうか」

「次はあ、あおい君の部屋…よね？」

「なにかがみん、緊張してきた？」

「ま、まあね…」

「私も。だって、お父さん以外の男の人の部屋に入るなんて初めてだもん」

「私もそうね、お父さん以外の男の人の部屋は初めてね」

「私もそうだね。みゆきさんは？」

「父の部屋にはあまり入らないものですから…ですが、同年代の男性の部屋は初めてですね」

「やっぱり皆、同じ年代の男の人の部屋は初めてなんだね」

そんな話をしていると、目的地に近付いて来たようだ

「あおい君の部屋って1番の部屋の隣みたいだね」

「ホントだ…」

「見えてきたよ、あれじゃない？」

「どうやらそのようですね」

「失礼します…うわあ」

「凄いわね…」

「綺麗〜それに広いわね〜」

「整理整頓されていて、とても綺麗ですね」

部屋のドアを開けて私達の目の前に広がったのは、1人部屋としては少し広すぎる空間に白と黒を基調にした綺麗な部屋だった

「これ、男の人の部屋だよな？」

「ああい君の口振りからして散らかってるかと思ったけど」

「片付いてるね…」

「それにしても白と黒以外の色がありませんね…あら？」

「どしたの？みゆきさん」

「これを見て下さい」

みゆきさんが机の上に置いてあった写真立てを手にして戻ってくる

「写真？これ一緒に写ってるのって…」

「あおちゃんが2人…？それに女の人？」

「おそらく、このどちらかが弟さんで、女の方は妹さんなんですよ。」

「ってことはあおい君は双子だったってこと？」

「かがみとつかさみたいに？」

「じゃあ、あおちゃんは双子の弟を亡くしたって事…？」

「恐らくは…」

「なんかまだ見ちゃいけないもの見ちゃった感じだね…」

「戻りましょ？部屋割りしないといけないし」

「そうだね。早く戻らないと、あおちゃん上がって来ちゃうかも」

「皆さん少し急ぎましょうか」

その後部屋を出て、急ぎ足で歩いて戻るとあおい君が上がってくる少し前だった。

>あおいview<

「ふっ、さっぱりした〜」

「風呂上がりは牛乳欲しいよな」

「冷蔵庫に入っ…うわ」

「どうかしたか？」

「着替え間違えたみたいだね」

「どっやったらパジャマと執事服間違えるんだよ」

「電気付けないで探したからさ、間違っちゃって」

執事服を広げながら話す。もう苦笑いしか出ない

「まあ後でまた着替えればいいんじゃないか？」

「それもそうだね。牛乳どうする？」

「後で飲むかな…よし、先行くぞ」

「待って…よし行こうか」

「上がりましたよ」

「待ってたよ…どしたのそれ？」

「パジャマと間違えたらしい」

「あの部屋暗かつ…」

「な！何でそんな服もってるの!？」

居間に行くと、まずこなたさんから尋ねられた。京一が説明するのはいいのだが

「今何か言いましたか？つかささん」

「ううん、何でもないよ」

「ならいいですが。かがみさんこれは、その…趣味です」

「ああそういうこと」

「驚かないんですか？」

「似たようなのがそこにいるからね」

つかささんの声がした気がしたので尋ねてみると違ったようだ。かがみさんの質問に答えると案外冷静な反応を見せ、チラリとこなたさんを見た

「そうなんですか。なかなか興味深いですが、お話しは一旦止めましょうか」

「ひょっとしてあの話かな…」

「見当は着いてるけど…」

「あれだよね…」

「皆さん落ち着かれましたからね。そろそろとは思っていましたが……」

「あおい、お前本当に……」

皆が心当たりのあることを思っているのだろう。みゆきさんには言っただけど、皆の思っている話題が自分のそれと一致するのかわからない。京一が心配そうに話しかけてきた

「大丈夫だよ。自分の意思で話すんだからさ」

「そうか……俺も詳しくは知らないんでな。聞かせてもらおうとしようか」

「……今から皆さんに話そうと思っっていること。それは自分の弟と妹の事です」

過去（前書き）

今回はあおいが語る形で進みます。それではどうぞ

過去

あれは、自分と雪花の誕生日…つまり今日ですね。話していませんでしたが、自分と雪花は双子なので誕生日は同じなんです

「おはようあおい、誕生日おめでとう」

「おはよう父さん、ありがとう」

「雪花はまだか？」

「あいつは起きるの遅いからね、朝ご飯作ったら起こしてくるよ」

「そうか、頼んだぞ」

起きてきた父さんに挨拶して、朝ご飯を作って雪花を起こしに部屋へ向かっていると

「ああ兄、おはよう。雪兄起こしに行くの？」

「おはよう桜花。そうだけどなんだい？」

「私も行く」

「はいはい」

桜花が起きてきて、一緒に行くと言ったので2人で起こしに行きました

「コンコン」

「雪花、起きてるか？」

「完全に寝てるわね、これ…」

「仕方ない…桜花手伝って」

「わかった。よいしょ…」

「ドスッ」

「いってえな、なにするんだよ朝っぱらから…」

ノックしても返事はなく、部屋に入り桜花が体を揺らしても起きる
気配がなかったので、布団の端を持ってベッドから落としました

「雪兄が起きなかったから仕方ないんじゃない？」

「朝ご飯出来てるから早く来なよ？」

「はいはい、わかったよ」

「おはよう雪花、誕生日おめでとう」

「どうも。おはよう父さん」

雪花に朝ご飯が出来ていることを伝えて先に戻ると、父さんに挨拶
する雪花の声が聞こえて来ました

「誕生日おめでとう2人とも。ほらほら雪花、こっちに来てご飯食べましょ?」

「ありがとう母さん。ほら雪花、早く座りなよ」

「ありがとう母さん。あとあんまり急かさなくてくれよ兄貴、まだ眠いんだからさ」

「早く目を覚ましなよ? 今日はお祝いに遊園地に行くから!」

「何で遊園地なんだよ」

「色々あって皆楽しめるじゃない?」

「自分は構わないよ? 楽しそうだし。御馳走様でした、さて準備しようかな」

「家に1人つても暇だし、俺も行こうかな。ご馳走さん」

「私とお母さんとお父さんは準備できてるから、早くしてね」

「へえ、父さん今日は休みなんだ」

「ああ、お前たちの誕生日のために休みを貰ったんだ」

「そうなんだ、ありがとうね。さて自分は準備できたよ」

「よし…俺もできた。行くとしますか」

朝ご飯を食べていると、桜花の提案で遊園地に行くことになりました

た。

「何時頃到着するの？」

「お昼前くらいかな？」

「ってことはまだかかるな」

「結構遠いんだね」

「どうせなら大きいところ行きたいじゃない？」

「まあ気持ちは分からなくはないがな」

「桜花つたら、あおいと雪花に喜んで欲しくて一生懸命考えたのよ？」

「そうなの？ありがとうね、桜花」

「サンキュー桜花」

一生懸命プレゼントを考えてくれた桜花にお礼を言つと

「どういたしまして。こんないいプレゼント考えたんだから、2人には楽しませてもらうからね」

「それって奢ってって事？」

「そういつこと」

「いや、金出すの兄貴なのか？」

「あら？雪花にも同じようにお小遣いあげてるはずだけど？」

「じゃあ2人とも自腹だな、父さんは母さんの分を出さない」と

「私は見てるだけでいいわよ？お腹に響いちゃいけないし」

奢るようになってきたので、応じることにしました。母さんはお腹に茜がいたので自分のペースで見えて回るそうでした。

そしてしばらくして…

「着いた〜！」

「ほらほら桜花、入る前からはしゃがないで」

「てか、何で俺達よかはしゃいでんだよあいつ」

「それは楽しみにしてたからじゃないかしら？」

「ほらみんな行くぞ〜」

遊園地に着いたので車を降り、各々体を伸ばしていると父さんに促されたので入口に向かいました

「子供3人、大人2人と」

「へ〜先に買うんだ〜」

「初めてだから緊張するな…」

「そう？自分はそこまでないけど」

「ほらほらみんな行くわよ？」

「入場券を…はい、お楽しみ下さい」

「広いね」

「でかいな…」

「楽しそうだね」

「3人とも、あまり離れないようにな？」

「辺りにいるから、何かあったら言ってね？」

券を買い、中に入ると圧倒されたのを覚えています。そこで両親から少し話があり、その後乗り物に向かいました

「よし、次はあの乗り物行こうよ！」

「なあ…少し休憩しないか？」

「一体、いくつ乗るつもりなのさ…」

「とりあえずあと5つかな？」

「勘弁してくれ…」

「次はゆっくりしたのを…」

「だらしないな〜ほら…」

「桜花、回るのは午後にしてお昼にしないか？」

桜花に付き合い振り回されると、父さんがお昼ご飯を食べようと伝えに来ました

「え〜まだ回りたい〜」

「あと1つ回っちゃ駄目なのか？」

「しかしな…」

「せっかくの遊園地なんだ、桜花には俺が付いておくからさ。代わりに兄貴持って行ってくれ」

「自分生け贄みたいだね…でも自分からも頼むよ父さん」

「…わかった。なるべく早く戻ってくるんだぞ？」

「さっすが父さん！」

「わかってるって。俺だって腹減ってたんだからさ」

3人でお願いすると父さんが許可をくれました。自分はお昼ご飯側ですけどね

「とりあえず何に乗るか聞いておこうか。遅いときは迎えに行ける

しな」

「うーん…観覧車かなあ」

「絶叫系は午後ってか」

「それに雪兄とあお兄のお陰で乗れるんだもん。ゆっくりしたいでしょ?」

「まあ回るのに時間かかるし、俺も兄貴もゆっくり出来るな」

「じゃあ、行って来まーす」

「行ってらっしやい。じゃあ行くか、母さんとはレストランの前で待ち合わせだからな」

桜花と雪花を見送りながら父さんはそう言うと、端の方にあるレストランに向かいました

「それでね、お父さんったら…」

「おいおいもう勘弁してくれよ。謝ってるだろ?」

「まあ父さんが悪い訳なんだし、謝るのは当然じゃない?」

「あおいまでそんな事を…」

そんな他愛もない会話をしている時でした

「…なんだ?何の音だ?」

「なにかしら、凄く大きな音だったけど…」

「…なんか嫌な感じがする。ちょっと行ってくる」

「行くって…どこ行くのあおい」

「雪花と桜花の所！」

「父さんと母さんも後から来る。急いで行きなさい」

父さんが何か話しかけてきた。そんな認識しか出来ないくらい自分は急いでいました

別れ

自分は雪花と桜花が乗ると言っていた観覧車へ向かいました。おそらく、父さんも母さんを気遣いながら向かっているでしょう

「なに、これ…どうなって…」

観覧車のある場所に着いて言葉を失いました。正確に言うのなら観覧車”だった”でしょうか、そこには原型を止めないほどに壊れた観覧車だった物が山を作っていました

「すみません！観覧車から自分に似た人出て来ませんでしたか!？」

「すまないが見てないね…助かった人はそこで治療してもらってるから、見て来るといい」

「わかりました。ありがとうございます」

怪我人を背負っている男の人に聞いてみると、指を指して言いました。急いで向かい2人を探しましたが…

「いない…じゃあまだ中に…」

「こら！危ないぞ！」

「弟が、妹がまだ埋まってるんですよ！早く助けないと…」

「無理はしないようにしなさい！君はまだ子供なんだから！」

「子供である前に、自分はいいつらの兄なんです!」

助けられた人達の中に2人はいませんでした。焦っていたんでしょね、気が付いたら観覧車の瓦礫をボロボロになって掘り返していました

「兄…貴…?」

「雪花!無事か?桜花は?」

「2つか3つ…隣だったから、まだ下の方だろ…」

「待ってて!桜花見つけたらすぐ戻ってくるから!」

「頼んだ…兄貴」

「よっ!ぐ…う!いた!桜花!しっかりしろ桜花!」

「ああ兄…痛っ!雪兄は?どこ?」

「雪花は上にいたよ。動ける?」

「なんとかかね…」

雪花を見つけて、下の方に桜花も見つけました。後は雪花を助けて出るだけでした

「雪花、桜花は助けた!早く出よう!」

「なら先行つといてくれねえかな…」

「何言ってるのさ！3人で出れば…」

「それがな、出たくても…出れねえんだよ下半身と左腕が動かね…
んだよ…」

「なら助け…!?!」

「長くは保たなそうだな…ここも、体の方もさ…」

「雪花…」

「そんな顔するなよ兄貴…もし死ん…でもさ、近くにいるから…よ」

「どんな形でも、帰ってきなよ…」

「わかってるって…じゃあ…またな…」

出ようとはしましたが、雪花はもう自分の死期を悟っているようでした。

雪花は自分を置いていくように言ってきたんです。自分と桜花は雪花の意思を尊重して、出ることにしました

「雪兄…」

「…今は出ることに集中しよう桜花」

「…うん」

「もつすぐ出られるよ…っ?!」

「また崩れるの!?!」

「急ごう!」

軋むような音を聞きながら進むと光が見えました。出口でした

自分が出口から出るときに桜花が後ろから押してくれた…そんな気がした時、出口は崩れてしまいました

「ありがとう桜花、間一髪…桜花?」

「ごつちだよ、あお兄」

「桜花…なんで…」

「3人とも閉じ込められるよりは2人の方がいいじゃない?」

「お前まで…いなくなるのか?」

「ずっと側にいるよ?雪兄と私はさ。見えないかもしれないけど」

自分は勘違いしていたんです。実際は桜花が押してくれたのではなく、自分を助けるために突き飛ばしたのだそうです

「…それにさ、遊園地来ようって言ったの私だしさ。あお兄まで一緒に雪兄に怒られるよ…」

「…それだけ?」

「あとは、お母さんのお腹にいる赤ちゃんのため…かな？あお兄長男だしさ。死んじゃったら駄目じゃん？」

「馬鹿が…」

「ほらほら泣かないの！お兄ちゃんでしょう？」

「うん…わかってるよ…」

「じゃあまたね？お供え物は…うん…やっぱり花かな。綺麗なのお願いね？」

「わかったよ。またね…」

まるでいつものように話をして、小さく手を降りました。そんな自分に気付いた人が近付いて、下ろしに来ました。

「あおい…雪花と桜花は？」

「…中に残りました」

「…そうか」

「父さん、母さん、自分は…」

「お前が悪いんじゃないさ…」

「これからは4人ね…寂しくなっちゃったわね…」

「雪花と桜花言っただよ？近くに…側にいるって…」

「なら今まで通りね。一緒にご飯とかは無理だけど…」

下に降りると父さんと母さんがいました。悲しげな表情を浮かべていたその顔は、この事と同じくらい、今でも鮮明に思い出されます

思い

「…これで弟と妹の話はお終いです」

「そんな事があったのか…」

「京一君は知らなかったの？」

「あの時は何も話してくれなかったな」

「あの時は沈んでたからね。後はタイミングがなかったからかな」

「あおい君は寂しくないの？」

「そうだよ。弟妹がいきなりいなくなって寂しくなかったの？」

「それに弟さん…雪花君だっけ。双子だったんでしょ？悲しくなかつたの？」

「私はそうだった経験がないので断言は出来ませんが、とても辛かつたのではないですか？」

話し終わると少しの沈黙の後、皆から質問が飛んできた

「確かに寂しかったですよ？でもその時から京一や友達がいまいましたから。それに…今は皆さんがいます」

「なんだか照れるね」

「嬉しいこと言ってくれるじゃない」

「えへへ…」

「私は友人として当然の事をしているだけです」

「俺も同意見だな」

「ありがとうございます、皆さん。自分はそろそろ寝ますね」

「わかったよ、おやすみ」

「おやすみ。まあ私達もほどほどにして寝るから」

「おおちゃんおやすみ」

「おやすみなさい、あおいさん」

「おやすみ。ちゃんと着替えて寝るよ？あおい」

「わかってるよ」

知り合ってくれたことへの感謝、そしてこれからも一緒にいたい。そう思った思いを込め、皆に就寝を告げて自室に向かう

>こなたview<

「さーてと、俺も寝るかな。5番の部屋使わせてもらっぞ、おやすみ」

あおい君が寝た後TVを見ていると京一君が欠伸をしながら立ち上がり、部屋の番号とおやすみを告げて部屋から出て行った

「おやすみ〜…ということは、あと1番〜4番だね。どうする？」

「私は2番がいいな〜」

「私は3番を使わせていただきますね？」

「じゃあ私は…」

「私は4番を使わせてもらおうよ〜」

「…へ？」

かがみが間の抜けた声をあげる。それはそつだ。なにせ1番の部屋は…

「かがみさ、本当は1番の部屋がいいんでしょう？」

「な、なに言ってる…」

「お姉ちゃん好きなんですよ？あおちゃんの事」

「なっ…!!」

「かがみさんがあおいさんを気にかけていたのは以前から知っていましたが？」

「かがみ最近あおい君の話しかしないからさ、すぐに気付いたよ」

「確かに好きだけど…でもどうすればいいのかわかんないのよ…」

「お姉ちゃん告白しないの?」

顔を赤くしながらかがみがコクリと頷く。新鮮だなあ…おっとそんな場合じゃなかった

「駄目だよちゃんと告白しないと。あおい君だったら受け止めてくれるよ」

「そうだよ。せつかく好きになったんだもん、伝えないと」

「かがみさんの思いがあおいさんに伝わるといいですね」

「まったくだ。あおいの初彼になっちまえよ」

「きよ…京一君!?!」

「うわっ!いつからいたの!」「京一さん?お休みになったのではなかったのですか?」

「風呂上がりに牛乳飲もうと思ってたんだが、すっかり忘れてたんでな。さっき思い出して飲みたくなっただんで飲みに来たわけだ」

「どんだけ…」

「それより初彼って?あおい君モテるみたいだけど」

「ああ、あおいは惚れられることはあっても惚れたことはないから

な

「つまり彼女を作ったことはない…ってこと？」

「ま、そういうことだな」

話をしていると京一君が来た。5人での会話がまた始まったわけだ

「まあ、その点はあおい君見ていれば分かるわね」

「あおちゃん優しいよね」

「皆さんに等しく接していますからね」

「あいつにとつちやそれが普通なんだろうさ。それよりどうすんだ？」

「今から部屋に行っても寝てるだろうしね」

「明日かな？」

「なら決行は朝ですね」

「ちょっと勝手に！…まあ告白させてくれるんならいいけども…」

「なら何時に起きられる？」

かがみと告白の計画を練っていると京一君が尋ねてきた。どつちからあおい君の起きる時間を知っているようだ

「今からだとそうね…6時頃には目が覚めると思っわ」

「ならその時間に起きてくれ。おそろくキッチンにいるはずだ。俺達は隠れて見ることにするさ」

「わかったわ。じゃあ、おやすみ」

「おやすみががみ〜」

「お姉ちゃんおやすみ〜」

「おやすみなさい、かがみさん」

「明日、頑張れよ」

かがみは明日のためにもう寝るようだ。私も欠伸と伸びをして部屋から出る

「じゃあ私も寝るよ。おやすみ〜」

「こなちゃんおやすみ〜私もそろそろ寝よ〜」

「それでは私も、おやすみなさい皆さん」

「ああ、おやすみ」

皆と別れ、地図を頼りに部屋まで行く。ドアを開けると使われていないとは思えないほど綺麗な部屋だった

近くの机に地図を置き、布団に潜り込む。ちょうど良い暖かさを保

っていたのか、すぐにまぶたが重くなった

「明日はうまくいきますように……」

薄く開けた目で天井を見ながら祈る。ただただ友人のために、短いながらも強く祈った

「頑張つてね、かがみん……」

そう言った後目を閉じる。既にすぐそこまで来ていた睡魔が私を眠りに誘った

>かがみview<

「眠れない……」

こういうことは初めてではない。だが、こういう思いを抱いのは、こういう思いで眠れないのは初めてだった。

「明日、か……」

ふと視線を天井から壁に移す。その壁の向こうに彼がいるのだ

「あおい君……」

彼はなんて言うのだろうか。ただ、背中を押してくれる皆のためにも伝えようと思う

「おやすみ、あおい君……」

今日は1人の友人として、明日からは恋人として言いたいな。そう
心で願いながら目を閉じた

静かな朝

AM 3 : 0 0

「プンプン…」

「はいはいっと…」

起床の時間を告げる目覚ましを急いで止める。自分の目覚まし、なかなかうるさいからね。こんな時間に皆を起こすわけにはいかないし

「やっど…」

寝間着から動きやすい服に着替えて、そっと玄関に向かう。運動靴を履いて玄関をゆっくり開ける

「では、行って来ますね」

勿論返事はなく、開けた時と同じようにゆっくり閉める。

「返事が返ってきたらびっくりするけどね…」

小さく笑いながら家の前に向かう。そしてそっと走り出し、徐々にペースを上げていく

AM 4 : 0 0

「ただいま帰りました」

返事はなく、ただ迎えてくれたのは冷えた廊下だけだった。その廊下を静かに歩きながら道場に向かう

「今日からはこっちでやろうかな」

今まで素振りしていた模擬刀よりも重い物を取り出す。

「よし、1…2…」

素振りを始める。いつもよりも重い模擬刀に確かな手応えを感じながらも手に馴染ませていく

「2499!…2500!…やっぱり慣れるまでは回数が落ちるね…さてと」

新しく作った人形を置き、少し離れて構える。

「よっ…と…」

胴を狙い、居合いの要領で峰打ちする。胴にまともに当たった人形はその部分から切れ、2つになって吹き飛ぶ

「切れ味と破壊力は上がったけど、なんだかね…」

AM5:00

汗を洗い流すためにお風呂に入る。長湯しすぎず、ゆっくり浸かる

「やっぱり、汗流した後のお風呂は格別だね…」

しばらくして上がり、汗を吸った服から着替えるために着替えを探す
「着替え…やっぱり執事服かな。昨日はほんの少ししか着てないし、
汚れてないし臭いもしないみたいだし」

執事服に着替え終わった後、念のためにファオリーズを何回か吹く。
うん、大丈夫だ

AM5:30

「そろそろ誰か起きてもいい時間なんだけどね」

キッチンに向かいながら呟く。朝ご飯を作るためなのだが

「材料は…あんまりないね」

昨日の晩ご飯を豪勢にってしまったため、あまり食材は残っていないな
かった。

「これならフレンチトーストと…あと1品くらい作れそうだね」

ケーキ食べてたし、皆さん甘いのが大丈夫だよな？と廊下を見て思い
ながら朝ご飯作りに取り掛かる

>かがみview<

「プツプツ…」

「んう…あゝ6時？」

携帯を開き、時間を確認した上でアラームを止める

「京一君はたしかキッチンにいるって言ってたわね」

布団を整えて、部屋を出る。着替えた方がいいのではないかと少し悩んだが、結果がどうあれ話した後に着替えればいいという結論に至った

「いい匂い…何か作ってるのかしら？」

朝ご飯だろうか、少し甘い匂いがキッチン前の廊下まで来ていた。何を作っているのかは気になったが今はそれどころではなかった

断られたらどうしよう。そんな事が頭の中を駆け巡っていた

「しっかりしないと朝の挨拶だけで終わっちゃいそうね…」

頭の中にある考えを振り払うように首を左右に振りキッチンに入る。そこには京一君が言ったとおり、あおい君がいた

「あ、おはようございます。かがみさん」

「お、おはようあおい君」

こちらに気付いて挨拶と微笑みをくれる。顔が赤くなっていくのが分かり、視線を逸らす

「お早いですね〜1番ですよ？」

「え？ああ〜そうなんだ」

「…どうかなさったんですか？」

赤くなった顔を隠すために顔を背けて話していると、心配そうに話しかけられる。やっぱり無理があつたかな

「いや、何でもないけど…ちょっと話したいことがあるんだけど、いい？」

「はい、何ですか？」

話があると言うとフライパンを置き、火を消して私の目の前に来た

「あの…えと…」

「慌てなくてもいいですよ、自分は最後まで聞きますから」

ただ一言、それが喉に引つかかっていた時あおい君が優しく声をかけてくれた。ありがとう、あおい君

「この思いをいつから抱いていたのかは分からない、でも一つだけ確かなことがあるの。それは…それはあおい君のことが好きだってこと…！？」

やっと言えた。そう思った次の瞬間、ふわりとした温もりに包まれた。あおい君だった

「ちょっと何やって…」

「何って、抱き締めているんですよ」

「いや、そうじゃなくて。なんでこんなことしてるのかって聞いてるんだけど」

「おや、好きな人を抱き締めるのに理由があるんですか？」

今おかしなことを聞いた気がする。いや、確かに嬉しい状況には違いないのだが

「今…何て言ったの？」

「ですから、好きな人を抱き締めるのに理由があるんですか？」

「…好きな人？」

「ええ、そうですよ。かがみさんが言ってくれたんですから、自分も言いましようかね」

そう言っであおい君が離れる。少々名残惜しい気もするけど

「自分はおなたが、終かがみさんが好きです。笑った顔も、照れた顔も、困った顔も、あなたの全てが…大好きです」

「本…当？」

「ええ、勿論本当ですよ」

「本当に本当？」

「はい、本当に本当です」

「よかった、本当に…」

信じられなかった。自分の好きな人が自分を好きだと言ってくれた。あおい君に確認して本当にそうなのだと知ると、今まで張り詰めていた緊張の糸がプツンと切れたように私の意識は途切れた

>あおいview<

「おっと…」

急に倒れるかがみさんを倒れきる前に支えてあげる。大丈夫なのだろうか

「かがみさん、大丈夫ですか？かがみさん」

「ん…」

寝ているようだった、きつと疲れたのだろう。俗に言うお姫様抱っこ状態でどこに寝かせておこうかと悩んでいると、首を上げてキスをねだってきたようだった

「本当に寝てるんだろうか…」

そう思わせるほどスムーズな動作に少し苦笑いしながらもリクエストに応えてあげる

「ん…」

彼女の頬に軽くキスする。口にはないがキスされたことを理解し

たのдарう、また静かに寢息を立て始めた

「さすがに寢ている間に唇は奪えませんか、ね？」

かがみさんに言い聞かせるように言い、結局椅子に腰掛けさせテーブルに伏せて寝かせることにした

「さて、可愛い彼女のために朝ご飯を作り終わりましたよかね。皆さんもテーブルに着いてはいかがいです？」

「うわあ、バレてるよ……」

「出て大丈夫かな？」

「ですが出ませんと怒られてしまうのでは……？」

「とりあえず皆、出るぞ」

かがみさんが入ってきたのと同じ入り口からぞろぞろと出てくる。やっていたことはだいたい予想できる

「覗いてたんですか？」

「そうなるかな？」

「ごめんね～あおちゃん」

「すみません。ですが、かがみさんが気になってしまっ……」

「すまん。だが心配は杞憂だったかもな」

「どっぴいっ」と？」

「そういった話は朝ご飯を食べながらしましょうか」

皆が謝って来る中、話が弾もうとしていたが、朝ご飯を冷やすわけにはいかないので同時進行させることにした。

かがみさんは相変わらず寝ているようだ。頭を撫でると若干の反応は見られたが、やはり皆の反応の方が大きかったのは言うまでもなく、ただ赤くなるしかなかった

楽しい日

「ん…私寝ちゃってたの？」

「ええ、とても可愛らしかったですよ？」

「おはようございますかがみさん」

「おはよ〜お姉ちゃん」

「ようやくお目覚めか？よっぽど張り詰めてたんだな」

「こんな事までしてたしね〜」

賑やかな声に反応したのだろうか、かがみさんが目を覚ましたようだ。皆が朝ご飯を食べながら挨拶していく中、こなたさんが携帯の画像を見せる

「んなっ!?!」

「こ、これは朝の…撮ってたんですか？」

「もっちろん！かがみが初めてキスされた記念だからね、撮らないと損だよ！損！」

「あおちゃん大胆だったよね〜」

「とても情熱的でした…」

こなたさんの携帯の画面に映し出されていたもの。それは朝のキスシーンであった。だが、はつきりどこにキスしたと解るようなアングルのものは映されていなかった

「どういうことが、説明してくれる？あおい君…」

「こわ…彼氏さんにもご容赦ないようです」

「そりゃあ意識のない間にファ…ファーストキス奪われたら怒りたくもなるわよ…」

「ちょっと待って下さい。確かにキスはしましたが、唇にはしていませんよ？」

「あおい君、証拠はここにあるんだ。観念したまえ」

「なあ携帯貸してくれ…泉、よく見てみる。本当らしい」

「うそ！？…あゝ本当だ」

かがみさんが顔を赤くして怒りながら尋ねてきた。が、反論に気になった京一のおかげで助かったようだ。危なかったな

「でもあおちゃん『唇には』って言ったけど、他の所にはしたってこと？」

「先ほどのあおいさんの言葉を、そのままの意味で受け取るならそうなりますが…どうなんですか？」

「さすがに唇ではないことはわかったが、そこまではこれじゃわからんからな。聞かせてもらおうか」

「そこは確かに気になるよね」

「あおい君正直に答えてくれる？」

「わかりました。キスしたのは…ここですね」

そう皆に言いながらかがみさんに近付く。そして頬のキスをした辺りをプニプニとつつく

「ほっぺたにしたの？」

「ええ、ねだられましたから。少なくとも自分は寝ている間に唇を奪ったりはしませんよ？」

「ねだられた？」

「お姉ちゃんにってことだよね？」

「あおいさんがねだられたというのなら、そうなりますね」

「こつちからじゃあおいの方からしたような感じだったかな」

「まあ自分はねだられたのなら答えるまでですから」

「私、そんな事したんだ…」

「まあ過ぎたことだし、かがみも朝ご飯食べなよ。」

ファーストキスを奪った疑いも晴れ、真っ赤になったかがみさんを
加えた6人で朝ご飯を食べる。こんな朝も悪くはないね

「ところでさ、いくつか質問があるんだけどいい？」

「なんですか？かがみさん」

「まず1つ目は何時に起きてるの？昨日京一君は『その時間ならキ
ッチンに』って言ってたけど…」

「4時くらいだったか？」

「今は3時起きだけどね」

「3時！？いくらなんでも早すぎでしょ！」

「そんな早く起きて何してるの？」

「ランニングを1時間、素振り等を1時間、その後お風呂に入って
朝ご飯の準備ですね」

「まさか毎日その時間に起きて行動してるの？」

「ええ勿論です。日々精進あるのみですから」

「私なら無理かな〜お姉ちゃんに起こしてもらってるし、今日だっ
てこなちゃんに起こしてもらったし」

「私もさすがにそこまで早くは起きられませぬ」

「じゃあ次ね…え〜っと言いにくいんだけどさ」

「なんですか？言いにくい事って」

「呼び捨てで呼んでくれないかな？」

1つ目の質問に答え終えた。そこまではよかったのだが、顔を赤らめて俯きながらかがみさんが2つ目の質問をしてきた

「聞き間違い…じゃなさそうですね」

「かがみやるね〜」

「度胸あるな〜」

「ちゃんと呼んであげて？あおちゃん」

「あおいさん、呼んであげて下さいね？」

「わかってますよ、では…かがみ…でいいんですよね？…これからは

「うん…お願いね？」

「よかったね、お姉ちゃん」

「いや〜良いものを見せてもらったよ〜」

「呼び方が変わるだけでも、だいぶ違った感じになりますね」

「よかったな…まあろけるのは勝手だが、早く朝飯食べ終えろよ？御馳走様」

要望通り、呼び方を呼び捨てに変えたのはよかったのだが…

「もうちよつと空気読めないのかい？京一」

「いやな？朝飯食べるの止まってるからさ。進めてやろうと思ってな」

「有り難いけど、次からはタイミングを考えてね？」

「こついう時、KYって言うんだよね？ごちそうさま」

「今回は皆さんの食事の進み具合を察じて促してくれたのでしょうね。御馳走様でした」

「まあおかげで食事再開したわけだし、食べ終わったし、いいんじゃない？ご馳走様」

「ご馳走様。美味しかったわ、ありがとうおお君」

「どうぞ致しまし…ん？」

皆が食べ終わって行く中、かがみの呼び方に違和感を感じた

「かがみ、もう一度呼んでくれませんか？」

「あ…おお君？」

「やっぱり呼び方変わってますね…」

「だって、これからはかがみって呼んでくれるんでしょ？なら私も呼び方変えた方がいいのかな〜って」

「最初に言ったとおり、呼びやすい呼び方で呼んで下さって結構です。その方が呼びやすいのであればそれで構いませんよ？」

「じゃあ、今度からはあお君で呼ぶわね」

自分が呼び方を変えたように、かがみも呼び方を変えてきた。あお君か、新しいね〜

「わかりました。さてと…皆さんまだお腹に余裕ありますか？」

「俺はいけるぞ？」

「私もまだ食べれるかも」

「私は大丈夫だよ〜」

「私もまだ入りそうよ？」

「まだ余裕はありますが、何かあるんですか？」

「ええ、デザートがありますよ〜」

「デザートがあるの？」

「ほう、もう材料ないかと思っていたがあったのか」

「美味しいかな」

「美味しいと思うよ？あおい君が作るんだし」

「期待して待たせていただきますね？」

デザートの話をするとう子は皆、目を輝かせて楽しそうにしている。期待に答えないわけにはいかない

「さあ出来ましたよ。スイーツパフェです」

「これあお君が作ったの？凄いわね」

「お店とかにあるのより大きいね」

「すっごく美味しそう！こなちゃんの言ったとおりだね」

「まさかこのような立派なデザートが出てくるとは思いませんでした」

「まさか余った材料でこんなものまで作るとはな」

「ありがとうございます。さあ食べてみて下さい」

褒められて少し照れながらも食事を促す。そこまで凄いのかな

「いただきます…おいしー！」

「ほんとね、ほっぺた落ちそう」

「とつてもおいしくよ、あおちゃん」

「そうですね、全体の甘さのバランス等も素晴らしい仕上がります」

「美味しいな、相変わらず大した腕だ」

「満足していただけましたか？」

「うん！でもまた太りそう…」

「そうだったら朝起きて、あおい君と走れば？」

「いくらなんでもきついだろ…」

「いつもみたいにダイエットすればいいんだよ、お姉ちゃん」

「つかささん、前提で話すのはいかがかと…」

最初は美味しそうに食べていた皆だったが彼女達の中では甘い「太る」という考えが成り立っているようだ

「大丈夫ですよ。カロリーは半分以下まで落としますから」

「そうなの？ならよかった」

「いや、結局カロリー摂取してるんだからね…？」

「聞いてないな。完全にパフェ楽しんでるな」

「でもこれなら、ダイエットしなくてもよさそうだね。」

「ですね。ところであおいさん、今日はどうなさるんですか?」

カロリー控えめなことを知り、かがみは笑顔でパフェを食べていく。その姿を見てみると、みゆきさんに話しかけられた

「自分は特に何かしなければいけないことは…材料を買いつくりたいですかね?」

「じゃあさ、皆で出かけようよ!」

「いいわね。私も本屋に寄りたいたい」

「私も賛成」

「私も新しい本を買いおうと思っていましたので、一緒に行かせていただきますね」

「なら全員一緒に行動だな。俺も楽しませてもらおう」

「ではまずは本屋ですね。材料は最後まで問題ないでしょうし」

「なら着替えて行動しないとね。かがみはあおい君に着替え手伝ってもらったら?」

「なっ!?!」

「こ、こなた〜!」

大体の行き先は決まった。しかしこなたさんの一言を聞いて2人して赤くなり、かがみはこなたさんを追ってどこか行ってしまった

「残念だったなあおい」

「いや、べ、別にそんなこと考えてなんかないから」

「あおちゃん顔赤いよ?」

「やはり彼女というのは特別なんでしょうね。今のあおいさんの表情は今までと違って見えます」

「と、とりあえず2人を追いましょう。下手すると…」

「ピリリリ…」

2人を探しに行こうとすると、誰かの携帯が鳴ったようだ

「誰か携帯なってるみたいだけど?自分じゃないみただね」

「私でもありませんね…」

「俺か?違うな」

「私だ…お姉ちゃん?…うん…うん、わかった。あおちゃんに言うておくれ?じゃ」

「かがみですか?自分の名前が出たようでしたが、何かあったんですか?」

「うん…お姉ちゃんとかなちゃん、迷っちゃったんだって」

「こんな身近に被害者が出るとはな…」

「ちよつと行つてきますので皆さんは出かける準備をしておいて下さい。準備が出来たら玄関で待つていて下さい」

つかさんが言うにはどうやら道に迷つたらしい。初めて来て、地図も無しに迷わなかったらそれこそニュータイプみたいだ。そんな事を思っていると立ち往生している2人を見つける

「はい見つけましたよ」

「おお君！」

「助かった」

「じゃあ戻りましょうか？」

「そうね、行きましょ？」

「早く戻らないとつかさがまた寝てるかもよ？」

来た道を戻りながら話しているとかがみに右手を握られた。握り返すと赤くなり、こなたさんにからかわれた。

「では準備出来たら玄関で待ち合わせましょ」

「うん、じゃあ後で」

「わかったよ、あおい君も後でね」

2人に小さく手を振り着替え部屋に入り出かける服に着替える

「今日は楽しい日になりそうだね」

笑いながら独り言を言って着替える。脱いだ服をお風呂場にある洗濯機に入れて玄関に向かった。その間も笑みは消えなかった

外出くアニメイトく

「…遅いですね」

「また迷っちゃったのかな」

「かがみさんも一緒ですしもう迷われないと思いますよ？」

「だといいたがな」

現在準備をしていると思われるあなたさんとかがみを残して、玄関で4人で雑談している。まだかかるのかな？

「よく女性は準備に時間がかかると言いますよね？」

「ああ確かに。まあこっちの2人の場合はお前が探してる間に準備出来たからな」

「ちょっと迷いそうだったけどね、部屋からは地図と京ちゃんのおかげで助かったけど」

「お恥ずかしながら私もです…」

「まあいいんじゃないか？迷わなかったんだしさ」

「京一ご苦労様…おや、2人も来たようだね」

どうやら京一のおかげでこちらの2人は迷わずに済んだようだ。京一に労いの言葉をかけていると、中から2人が出て来た

「お待たせ」

「ごめん待った？」

「ああ待つ…」

「待つてませんよ、自分達もさつき来たので」

「へ？私達待つてたよね？」

「恐らくあおいさんは気を使ったのだと思います。私達も便乗しましょ」

また空気を読まない京一の口を手でふさぎながら笑顔で話す。つかさんは自分の言動を不思議がっていたが、みゆきさんが説明してくれたようだ

「しかしこうやって見ると、昨日とは違って見えますね」

「昨日はパジャマと制服姿だったからね。どう？どう？」

「はい、皆さん可愛らしいですよ？」

「出たよあおいの天然発言…」

「いやいや、勿論かがみが1番だけだね」

「当たり前だよね」

「まあ、そうじゃなかったら締め上げるだけだけど」

「軽率な発言は控えて下さいね？」

「い、以後気をつけます…」

皆を褒めていると釘を刺された。まあ自分が悪いのだから仕方ないのだが

「…よし、さて行きましようか」

「最初は本屋に行くんでしょ？ならアニメイト行かない？」

「確かに本も置いてありますけど、みゆきさんの読むような本が置いてあるかどうか…」

「ご心配には及びませんよ？もしありませんでしたら、前々から興味を抱いていた本がありますから」

「それって漫画？小説？」

「かがみさんがよく読まれていらっしやるラノベというものです」

「みゆきがラノベをね〜着いたらオススメを何冊か持ってきてあげるわね？」

「是非ともお願いしますね」

戸締まりをして玄関の鍵を閉め、門を閉めると行き先がアニメイトに変わる。歩きながら話していると興味深い事を耳にした

「かがみはラノベを読むんですか？」

「まあね、最近はフ○メタとかあなたに薦められたのとかかな」

「フ○メタ読むんですか？」

「やけに反応いいわね。読んでるの？」

「勿論ですよ！いや〜続きが気になりますよね〜」

「そうよね〜！特にレナードが…」

かがみの趣味がわかった気がする。しかも自分と同じものを読んでいるようだ。やっぱり理解者がいるのは嬉しいね

「あおいの目が輝いてる…」

「かがみの目もおんなじだね」

「2人とも楽しそうだね〜」

「やはり、人と趣味が合うというのは喜ばしいものなのでしょうね。ましてや恋人同士ですし」

「ん？ああ〜フ○メタですか？主人公ソースケが…」

「いや説明求めてねえし」

「よっぽど話すことに夢中になってたんだね〜全く聞いてなかった

みたいだし」

ようやく話に一区切りついたところで皆が話をしていることに気付いた。しかし自分は少々ずれてしまったようだ

「あ、着いたよ」

「久しぶりに来ましたが、色々変わってますね」

「すっっい」

「何度来ても凄いわね…色々な意味で」

「広いですね」

「ところで皆はどこ見るの？かがみとみゆきさんはラノベとか小説でしょ？」

「俺はゲームでも見てみるかな」

「自分は本を見て回りますよ。こなたさんとかささんは？」

「私は全部見て行くつもりだよ」

「じゃあ私はこなちゃんに着いていくね？」

「それぞれ目的地は決まったみたいだし、それじゃ解散！」

着くと中の変化に驚いたが、皆も同じような声を上げていた。中に入るとこなたさんから目的地を聞かれて、解散した後それぞれのコ

「ナーへ向かった

>かがみview<

「みゆきあつた〜?」

「やはりありませんね…今回は諦めて次の機会に探しに行くことにします」

「じゃあ今日はラノベでいいのね?」

「はい、お願いしますね?」

「わかったわ、ちょっと待ってて」

「お待ちしていますね」

みゆきの欲しかった本はなかったらしい。だが今日その本がなかったおかげで、ラノベを薦めることが出来るのだから感謝しなくてはならない。勿論、複雑な気分ではあるのだが

「お待たせ、とりあえずみゆきは小説読むみたいだから長編物を何冊か持って来てみたわ」

「有難う御座います。では…これにしますね」

「他には何か探してるものはないの?」

「いえ、本以外には特にはありませんね。わざわざ私のためにお付き合いですって有難う御座います」

「いいのよ、私も新刊買いに来たんだし」

「先ほどあおいさんと話されていた作品ですか？」

「まあね、たぶん彼もこっちに来ると思うけど」

みゆきに小説を薦めると、嬉しそうに小説を受け取ってくれた。ラノベ仲間が増えそうだな

>あおいview<

「これとこれとこれ…あとはこれかな。あ、頭〇字Dの最新刊出たんだ。買っておかないと…」

今自分は漫画コーナーに来ている。小説コーナーまではもう少しかかりそうだが、そろそろ止めておかないと大変な事になりそうなので残りは次回に回して小説コーナーに向かった

「あ、かがみ。みゆきさんも」

「あおいさん、ちょうどお話ししていたところですよ」

「お話しですか？自分の？」

「そうそう、あお君こっちに来るんじゃないかってね」

「当然来ますよ、フ〇メタ置いてあるのここですよ」

小説コーナーに入るとかがみとみゆきさんが真っ先に目に入り話し

かける。どつやら自分の話をしていたようだ

「それにしても凄い量ですね。何冊あるんですか？」

「今のところ…27冊ですね。フ○メタを入れると30冊です」

「フ○メタを3冊？買い忘れてたの？」

「いえいえ、最新刊以外は揃えていますので。最新刊を3冊買うんです」

「…は？」

「仰っている意味がよくわからないのですが…」

「自分は本を保存用、読書用、予備用の3冊セットで揃えるので。それで3冊なんです」

「なんかこなたみたいだな…」

やはり本の量や3冊ずつ買う点は普通でないといった感じでごちらを見てくる。まあそれが普通の反応だよな」

「とりあえず、かがみとみゆきさんは欲しいものは見つかったんですか？」

「私はもう見つかったわ。みゆきは無かったから私がラノベを薦めたわ」

「そうなんですか？みゆきさんがラノベ…ハイペースで読んだら今

日中に何冊か読めてしまっくんじゃ…」

「大丈夫ですよ。私、それほど読むスピードは速くありませんので」

「よかつた〜まあそれが終わっても、まだあるから安心して?」

会話しながら小説コーナーを出て、会計へ向かう。もう少しで自分の番という時に

「ちよっ!待った〜!」

こなたさんが慌ててこちらに駆け寄ってくる。何かあったんだらうか

「どうしたんですか?そんなに慌てて」

「3人のポイントくない?」

「そういう事ですが、自分は構いませんよ?」

「まったくあなたは…しょうがないわね、わかったわよ」

「私はあまり来る機会がありませんので、どうぞ」

「いや〜話がわかるね〜助かるよ…それにしてもあおい君のその本の量は…」

「あんだとおんなじように3冊ずつ買っらしいわよ?」

「おお!やっぱり保存用と読書用と布教用?」

「自分の場合、布教用ではなく予備用ですけどね」

会計を済ませて、他の客の邪魔にならない場所に移動して雑談する。京一も目当てのものを手に入れて皆と合流したように見えたが、1人姿が見えない

「こなたさんはつかささんと行動していたんですよね？」

「そうだけど…あれ？」

「つかささんは何処にいるんですか？」

「そういえば見当たらないわね」

「泉さん、つかささんは…」

「たぶん置いて来ちゃった…ちょっと探してくる!」

「なら自分達はここで待ってますので、お願いします。何かありましたら京一、かがみ、みゆきさんの誰かに連絡してください」

「わかった。見つけたらここに帰って来ればいいんだね？行ってくるよ」

つかささんがいないことに気付いたこなたさんに短く伝えると、聞き終わると先ほどいた方へと走っていった

「気になったんだけど、なんであお君の携帯に連絡しちゃいけないの？」

「してはいけないということはないんですが、自分はまだ皆さんとアドレスを交換していませんので。もしこなたさんから電話がかかってきたとしても、自分には誰か分からないわけです」

「そういうことなんだ。ならつかさとこなたが戻ってきたらアドレス交換しましょう？」

「そうしていただけると助かります」

「まだあおいさんとは交換していませんでしたね。京一さんとは交換したんですが」

「誕生会を計画してる時だったな。連絡取れた方が都合がいいからな」

「ごめんね皆々お待たせ〜！」

「ふう、つかさごめんね？置いてっちゃって」

「いいよ、ちゃんと見つけてくれたし」

アドレスを交換する話を終わるとつかささんとこなたさんが駆け寄って来た。結構息が上がっていて、肩で息をしながら壁にもたれかかっていた

「2人とも大丈夫なら移動しますけど、行けそうですか？」

「ゆっくりなら大丈夫だよ、走るのは勘弁だけど…」

「私も歩くのは大丈夫そうだよ。ところで次はどこに行くの？」

「自分はどこでもいいですよ？食材は最後で構いませんし、今日一日は皆さんにとことん付き合いますよ」

「ほほう？言うね〜あおい君」

「言ったからには本当にとことん付き合ってもらおうよ？」

「楽しみだね〜」

「覚悟して下さいね？」

「あおい頑張れよ〜？」

「はは…努力します…」

明らかに楽しもうとしているオーラを出している女子陣とそれを少し離れて見ている京一。その様子にただ笑うしかない自分なのであった

外出しゲームセンター」

「これで全員と交換したよね？」

「はい、全員登録し終わりましたよ」

「見せて見せて…やっぱりかがみと京一君は呼び捨てで入れてるんだ」

「まあ、あと呼び捨てなのは妹くらいですかね」

近くの公園でアドレスを交換しながら春の空気を吸い込む。気持ちのいいものだ

「ところで、次どこに行くか決めたんですか？」

「ならば、ゲーセン行こうか？」

「なんでそうなるのよ」

「でもきつと楽しいよ？ UFOキャッチャーとかあると思うし」

「私も最近のゲームにどのようなものがあるのか、少し気になります」

「じゃあ決まりだな。」

こなたさんの提案により、次の行き先がゲーセンに決定した。ベンチから立ち上がり再び目的地へ向けて歩き出す

「こなたさんはゲーム好きなんですか？」

「まあね〜まあ好きっていうか趣味っていうか」

「こなたの場合、ゲームだけじゃなくてアニメとかそういうのもだ
けどね」

「ああ、オタクってやつか」

「そうそう、こなちゃんオタクなんだって〜」

「京一さん、つかささん、そういう言い方は如何かと…」

「まあいいんじゃない？事実だしさ。それより着いたよ〜」

こなたさんの話で盛り上がっていると到着した。この間京一と来た
所とは違い、こちらはアニ〇イトに近いたため時間はかからなかつた

「へ〜京一と来た所よりかなり広いですね」

「ここはこの辺りじゃ大きい方だからね。ゲームも結構置いてある
よ」

「こなたはこのゲーセンよく来るの？」

「いや〜実はここ、最近建ったやつでね。私も今日初めて入ったん
だよ」

「じゃあこなちゃんのよく行く所はまた別の所なの？」

「たぶん俺があおいと行った所がそうなんだろうな。薦められたし」

「そうなんですか？泉さん」

「うん、京一君に近場のゲーセン聞かれたからね。つい行き着けの店を答えちゃったわけだよ」

話を聞いていると、こなたさんはここを以前アニ○イトの帰りに近々オープンすることを知ったこと。京一はこなたさんにゲーセンの場所を聞いて自分を誘った事が分かった

「そうだったんですか。さて…」

「あお君どこ行くの？」

「両替して来ます。遊ぶのなら細かくしておかないといけませんからね」

「なら皆で行きましょう？遊ぶんだったら、多めに崩しておかなきゃね」

「あおい君アニ○イトで結構本買ってるよね。お金大丈夫なの？」

「心配しなくてもこいつは持ってるぞ」

「ちゃんとしてるんだね」

「やはり計画的に行動しているのでしょうね」

「いくらくらい持ってるの？見せてよ」

こなたさんがヒョイと自分の財布を取り上げて広げる。あまり見て欲しくはないんだけどな

「どれどれ〜野口さんが…いない」

「お札入ってないの？」

「そうじゃなくて、野口さんじゃなくて諭吉さんがいっぱい…」

「遊びに行くのに諭吉さん…どんだけ〜」

「正確には何枚あるんですか？」

「1…2…あと8枚あるね」

「そんなに持ってるってことは、あお君何か奢ってくれるの？」

「まあお昼くらいなら…」

かがみに何か奢って欲しいと脅され…じゃなかった、頼まれたので応じることにした

「ホント？ありがとう！」

「かがみだけずる〜い私も私も〜」

「どうせ全員来るんだろ？」

「えへへ、バレちゃった」

「まだお昼には早いのでここで遊んでから向かいましょう」

「まあもともとそのつもりで来たんだし、楽しまなきゃ」

両替し終えたこなたさんが言うと、各自興味を持ったものを調べに行く。自分はしばらくはかがみに付き添うことになりそうだ

「これやってみようかな」

「ほう、これはカエルの軍曹殿ですね」

「そういえばこいつ、ソースケと同じ軍曹なのよね」

「そうなりますね。でもこうやってみると本当にソースケと同じ地位があるのか気になりますね」

「たしかにわかるわ。こんな姿してるのにな」

「まあソースケだってボン太くんとか…」

話しているながら気付いた。彼女はUFOキャッチャーをやりながら話をしていたようだ

「あの、かがみ？」

「なに？」

「今、いくらくらい使いました？」

「3000円ほど…」

「どれが欲しいんですか？」

「えっと…あれ、真ん中あたりの頭が出てるやつ」

「わかりました、自分に取りましょう」

彼女が欲しがっているぬいぐるみを確認する。その上で1000円玉を3枚用意する

「3000円で取れるの？」

「正確には2000円で取るつもりです。1枚目でアームの癖やぬいぐるみの状態を知り、2枚目で取ります。3枚目は予備です」

「頑張ってるね、見てるから」

「わかっています」

1000円を入れてボタンを押す。アームは通常の店よりも比較的強めのようなだ。再びボタンを押して位置を調整してアームが降りる。

しかし、頭を捕らえるにはアームが細いようで、アームのかかった頭は軸が中心からぶれていたようだ。無情にもその場に落ちる

「あゝ惜しかったわね」

「大丈夫です、まだ2枚目がありますから」

再び100円を入れてアームを降ろす手前まで同じ動作をして、ここで少しずらす。理由は頭ではなく、付いているタグに引っかけるためである。アームは考えた通りに動き、そして

「本当に200円で取っちゃったんだ…」

「コツさえ掴めば出来ますよ。それよりも、はい」

「くれるの？」

「これが欲しくて頑張っていたんでしょう？」

「ありがとうございます！大事にするね」

「どうぞ致しまして。では他に行きましようか」

その後もUFOキャッチャーを巡り、ぬいぐるみを手に入れていく。後半では1回で取ることも出来るようになっていた

「そろそろ誰かと合流しましょうか？」

「そうね。これありがとね？」

「いえいえ、こちらこそ楽しませてもらいました。おや、あそこにいるあれは…つかささんとこなたさんですね」

ぬいぐるみを袋に入れて歩いてみると、ハ○晴れと共に太鼓を叩く音が聞こえてきた。プレイヤーは見たところこなたさんとかささんだ

「楽しんでますね」

「いや、久しぶりにやったけどね」

「みゆきと京一君は？」

「ゆきちゃんなら他のゲームやってるよ。京ちゃんは見てないけど…」

「京一ならいる場所は予想出来ていますからちよつと見て来ます」

「終わったらここに来てよ。私達もみゆきさん待ってるからさ」

「わかりました、行ってきますね」

皆に一礼して格ゲーのコーナーに向かうとやっぱりいた。1000円玉を並べて戦っているようだ

「また負けたか…」

「調子はどう？」

「12戦12敗だ。このまま引き下がるのは癪だからな、1回くらいは勝ちたいもんだ」

「全敗ってわけだね。まああつちで待ってるから頑張つてよ」

「何言ってるんだ、お前が勝つんだよ」

「なんで自分が京一の代わりに勝たないといけないのさ」

「いいじゃねえか、ほら100円」

様子を聞いたところ惨敗中らしく、自分を頼ってきた。しかも1回で勝って…

「全く、無茶を、言ってくれるよ…ね！」

「K・O！」

「やっぱり上手いなお前は」

「そんな！さっきまではあんなに弱かったのに！」

「手加減してくれてたんじゃない？」

「あれ、この声聞き覚えがあるよ？」

立ち上がり、反対側に回り込む。なるほど聞き覚えのある声のはずである。見覚えのある人物が対戦相手だった

「永森さんに八坂さん。またお会いしちゃいましたね」

「神藤先輩…どこぞの触れちゃいけない週刊誌の人みたいな挨拶ですわね？」

「なるほど、いきなり強くなったのは神藤先輩に代わったからか…」

「京一に頼まれたので、勝たせていただきました」

「京一？先輩の友人ですか？」

京一がどのような人なのか気になったようで2人は反対側に行き顔を覗かせる

「…ん？なんだ？」

「この人、前に先輩を呼び出した人！」

「私達3人を睨んだりもしたわね」

「何言つてんだ？」

「あゝあれですか。京一、ちょっと待ってて」

「先輩あいつ悪い顔してますよ！」

「ああいうのには関わらない方がいいんじゃない？」

「人を見た目や口調のみで判断するのは如何かと思いますが…話しておきますかね」

京一に対して間違った印象を受けているようなので誤解を解いてやる。まあ勘違いする気持ちも分からなくはないけど

「…つまり自分は呼び出されていませんし、京一は自分達を睨んだわけでもないんですよ」

「そうだったんですか…何も知らずに失礼な事言つてすみませんで

した」

「私も…酷いこと言ってしまつてごめんなさい」

「気にするなつて、よくあることだからさ」

「でも私の気が済みません。せめてお昼奢らせて下さい」

「なら私もこうと一緒に奢らせてもらつわ」

「…わかつた。ならこの2人も加えて全員で行動した方が効率はいない」

「だね。3人とも皆と合流するから付いて来て」

京一への誤解が解けたところで、京一にお昼ご飯を奢ってくれる2人を皆に紹介するとともに、お昼と一緒に済ませるため合流する。途中2人は皆がどんな人が予想をしていたようだけど、おそらく当たりはしないだろうね

「ただいま戻りました」

「すまん。少しあつてな」

「まあちょうどいい時間だし、いいんじゃない？」

「そうですね。お恥ずかしながら、私も先ほどまで遊んでいましたし」

「あれ？後ろにいるの、あおちゃんの知り合い？」

「初めまして、八坂こうつて言います。よろしく…って！そのちっちゃいのは！」

「あ〜どっかで見たと思ったら…」

「こなた、あなたなんかしたの？」

「いや〜格ゲーで毎回のように対戦してくる人なんだけど、あまりにしつこいからそのまま置いて来ちゃうんだよね」

「酷いと思いませんか先輩!？」

「どっちもどっちな気はしますけどね」

「先輩まで…」

「まあこうがしつこいからそうしたんだと思うけど。遅れましたが、自分は永森やまと言います」

「長くなりそうですから、お昼を食べながら話しましょうか」

「そうね、皆行きましょ？」

話すのをほどほどにしてゲーセンを出る。どこで食べるか話している時、近くに安くて美味しい店はないか探していたのは秘密である。すぐにはれてしまうとは思っているけどね

外出くファミレスく

「私これとこれく」

「こなた少しは遠慮しなさいよ？私はこれにしようかな」

「お姉ちゃんもこなちゃんの事言えないんじゃない？私これにするね？」

「そうですね…では私はこれをいただきますね？」

「俺はだな…」

「いや京一の分はそっち持ちでしょ。会計別にするからそっちで頼んでよ」

今自分達はファミレスに来ている。流石に高いものは遠慮しているようで、値段を見ては考えているようだ

ちなみに、八坂さんと永森さんが京一に奢ることを皆に話すと『事情はどうあれ女性に一方的に奢ってもらうのはどうかと思う』とのことなので、京一を庇う形で八坂さんと永森さんのお昼ご飯を自分が奢ることに決まった。まあファミレスだしいいんだけどさ

「あの皆さん、遠慮せずに好きなものを頼んで下さっていいんですよ？」

「え？いいの？」

「ええ、やはり自由に選んで食べていただいた方がこちらとしても

嬉しいですから」

「ならまた考え直しね…え〜と」

「…ふむ、八坂さんと永森さんの自己紹介は名乗っただけでまだ終わっていませんでしたね。今のうちにやっておきましょうか？」

「ですね。改めまして、八坂こうです。今年陵桜学園に入学しました」

「先ほど名前だけは言いましたが、改めまして…永森やまとです。こうとは友人で私は陵桜ではなく聖フィオリナ女学院に通っています」

2人が再び自己紹介をする。終わって少しして注文を聞きに来た店員に、メニューを注文して自己紹介に移る

「ではこちらも自己紹介しますね。改めまして、神藤あおいといいます。陵桜学園では2年生になりました。改めてよろしくお願いしますね」

「俺は萩原京一。陵桜の2年であおい達とは同じクラスだ。よろしくな」

「私は泉こなた。みゆきさん達と同じクラスで陵桜の2年生だよよろしく〜」

「柊かがみよ。私はあお君達の隣のクラスで、皆と同じ2年生よ。よろしく」

「柊つかさです。かがみお姉ちゃんとは双子なんだ〜こなちゃん達とはクラスが同じで、2年生です。よろしくね」

「高良みゆきです。皆さんと同じ陵桜学園の2年生で、つかささん達とは同じクラスになります」

みゆきさんの自己紹介を終えると、八坂さんがなにやら不思議そうにこちらを見た

「あの〜神藤先輩…」

「どうしたんですか？」

「あの泉こなたって人、本当に先輩と同学年…？」

「はい、クラスメートですね」

「すみませんでした！てつきり年下かと…」

「いいよいいよ、こんな外見だとよくあることだし」

八坂さんに尋ねられ、答えればこなたさんの方を向き頭を下げた

「まあ確かにあの背格好だと小学生に見られても不思議じゃ…」

「今失礼な事言わなかった？京一君」

「イヤ、ソナコトカンガエテナイゾ？」

「京ちゃん顔が動いてないよ？」

「先輩かなり怪しいですよ？」

「カタコトなのがますます怪しいわね」

「八坂さんも素直に話したんだし、京一も観念したら？」

「そうさせてもらおう…」

皆に怪しまれたので観念して話すことにしたようだ。話していると注文していたメニューが運ばれてきたので手を合わせて食事始める

「しかし、小学生は酷くない？」

「すまん…」

「まあ確かに高校生には見えないわよね」

「言われないと気付きませんし、言われても…ねえ？」

「どうして私に振るのかしら」

「皆なかなか酷いこと言うね…」

「人によって見方は違うと思いますよ？」

「あおいさんの仰ったとおりです。それに外見はそう映ったとしても、内面は違って映ると思いますよ？」

食事を進めながらこなたさんを励ます。と言っても励ます側は少な

いようなので、食べ終わった自分が再び励ます

「まあ大事なものは外見だけで人を判断するのではなく、内面もよく見た上で判断するということです。たしかに外見も大事だと思いますが、やはり人の真価は内面にあると思いますので」

「へ〜あおちゃんなんか凄いね〜」

「なかなか言えるもんじゃないわね。格好良かったわよ?」

「じゃあ内面を大事にするあおい君には外見も大事にしてもらおうか」

「泉先輩の意見に賛成です。神藤先輩には可愛ら…じゃなかった格好いい服を着させないと!」

「こう、張り切るのはいいけど先輩逃げそうよ?」

「大丈夫だろ。とことん付き合っつて言ったんだし」

「では決まりですね。よろしいですよねあおいさん?」

「いやちょっと待って下さい、聞いてませんよ?そんなこと」

皆は話しを弾ませて次の目的地を決めたらしく、どうやら服を見に行けらしい。既に食べ終わった人は話をしながら待っている

「当たり前じゃない。今決めたんだから」

「一緒に来てくれるよね?あおちゃん」

「一緒に来る以外に選択肢があるなら聞いてみたい気もするがな」

「勿論行きますが…見るだけですよ？」

「え〜！いいじゃん何か買ってくれても」

「やっぱり何か買ってもらおうとしてたんですね。自分は一緒に行くだけです…」

「そこをなんとか！駄目？」

「私もどうしても買いたい物があるの！お小遣いじゃどうしても足りなくて…お願い！」

「…わかりました。わかりましたから頭上げて下さい」

2人が両手の平を合わせ、頭を下げて頼み込んでくる。自分もそこまで鬼ではないし友人と恋人の頼みである。ほっとくわけにはいかない

「流石あおい君話が分かるね！」

「ありがとうあお君！」

「どう致しまして。ですが足りない金額しか出しませんかよ？」

「それで十分よ。皆食べ終わったみたいだし行きましょ？」

「ではお先に会計を済ませておきますね」

「先輩、私達も行きます」

会計を済ませに向かうと八坂さんと永森さんが追いかけて来た。2人はどれだけ食べたのだろうか

「八坂さん達の方が早く済みそうなので、お先にどうぞ」

「いいですか？ではお言葉に甘えて…」

「合計で3450円になります」

「あちゃ〜結構食べたな〜そうか、やまとが…」

「私はそこまで高いの頼んではないし、量だっってこつより少なかつたわよ？」

「じゃあ私が食べ過ぎたのか…」

「いいじゃないですか。過ぎたことですし」

「え〜と…合計で11200円になります」

「はい。…では行きましょうか」

ちようど払って店を後にする。やっぱりゲーセンで細かくしておいてよかった〜

「先輩の会計の時、値段見て店員さん軽く引いてましたよ？」

「それをポンと出す先輩もどうかと思いますけどね」

「はは…」

「あ、あお君達出て来たわよ」

「お〜い、早く行こ〜よ〜！」

軽く笑いながら皆と合流する。さて、今日だけで何円財布から消えるのだろうか。きつと消えた分だけ笑顔を手に入れるのだろうか

外出しショッピング

「お姉ちゃんとかなちゃんさつきあおちゃんと話してたけど、どこのお店行くの？」

「お店の方はかがみに案内してもらいます」

「私ちよつと欲しいものがあるから、そこ行きたいのよ」

「私もかがみと同意見だよ」

「私は特に希望はありませんので、かがみさんの意見を尊重します」

「私達も特につてのではありませんね。まあ神藤先輩の素敵な姿を見られればそれでいいです」

「私には変な物着せないですよ？」

「まあ俺は普通に服探すが巻き込むなよ？」

現在かがみと自分を先頭にお店へ向かっている。それにしても寒気がしたが、一体何なんだ？

「神藤先輩に質問があります」

「はい、何でしょうか？八坂さん」

「どうして柊…は駄目か、2人いるし。かがみ先輩と萩原先輩は呼び捨てなんですか？」

「京一は親友だからです。かがみは恋人ですし要望がありましたからね、当然です」

「先輩達付き合ってるんですか？」

「ええ、そうですよ？キッチンで……」

「恥ずかしい話するな！まったく……」

八坂さんの質問に答えていると横から注意を受けた。真っ赤になつてそっぽを向く姿は可愛らしいかぎりだ

「よしよし、反省しますから機嫌直してくれませんか？」

「都合いいわねまったく……って頭撫でるな！」

「怒ったりデレたり忙しいね〜かがみも」

「デレ？デレって何？ゆきちゃん」

「私にもよくわかりませんね。何なんでしょうか……」

「いや〜いいもの見させていただきました！」

「いいもの？こう、何のこと？」

「そっか〜やまとも属性的には似た者同士だもんね、分かんないか」

「ごめん、意味が分からないんだけど」

「気にしなくてもいいよ、多分言っても分かんないだろうし」

かがみの頭を撫でながら反省しているとまた怒られた。悪いことはしていないはずだけど。そして後ろでは雑談が盛り上がっているようだ、お店の事でも話しているのだろう

「ほら、ここよ」

「あ、ここっってお母さん達と来た…」

「ご家族で来られた際に見つけたんですか？」

「そうよ、え〜と確かこの辺りに…あつたあつた」

「これは…リボンだな」

「値段がリボンとは思えないんだけど…」

「ですが単品ならば、かがみさんのお小遣いでしたら届かないことはありませんよね？」

「先輩はツインテですから2本ですよね」

八坂さんがリボンをつまみ上げながら言うが、かがみは首を横に振った

「私が欲しいのは2本じゃなくて3本よ」

「3本…予想ですが2本はかがみの分、残りの1本はつかさんの

分ではありませんか？」

「つかささんの？」

「よくわかってるじゃないあお君。その通りよ」

「お姉ちゃん何で…？」

「つかさ前来た時に欲しいって言ってたでしょ？それにずっと見てたら私も欲しくなっちゃって」

かがみが説明するとつかささんが首を横に大きく振った

「駄目だよ！そんなの買ってもらう資格ないよ！私お姉ちゃんに頼ってばかりだし、お姉ちゃんの足引つ張ってばかりだし…私、本当にお姉ちゃんと双子…」

「ペチッ」

「…あお君？」

つかささんが今にも泣き出しそうな声で話すが、双子であるのかを疑おうとした時点で手が出してしまった。つかささんのおでこに軽くデコピンする

「なに…？あおちゃん」

「双子ですよ、つかささんとかがみは。どんなに外見が違っていても、どれだけ能力に差があっても、どれほど内面が違っていてもです。つかささんが欠けてもかがみが欠けてもいけないんです。双子

は2人で1つなんですから…ね？」

「ありがとうあおちゃん、私泣かないよ？だからあおちゃんも泣かないで？」

「おや、いつの間にか泣いてしまいましたか？すみません情けない姿をお見せしてしまいました」

つかさを励ますと、元気になったようすでいつの間にか自分の目から零れていた涙を拭ってくれていた

「ありがとね？つかさ励ましてくれて」

「いえいえ、自分だって双子ですから。嫌と言うほど気持ちは分かっているつもりです」

「あお君また泣いてるわよ？…ん、しょっぱい」

「舐められると恥ずかしさ倍増ですね…」

「ねえアツアツのそこ悪いけど、私の忘れてない？」

かがみと話していると不意に指で顔を触られて、その指を口に入れる。どうやらまた泣いてしまったようで涙を拭ってくれたらしい。

そんな事していると頬を膨らませて不機嫌そうにしているこなたさんに話しかけられた

「そついえば何が欲しいんですか？」

「んつとね〜…これ！」

「白のワンピースですか」

「お母さんが着てる写真があつたから着てみようかになって」

「こなたさんのお母さんですか？どのような人なのか一度お会いしたいですね〜」

「それ無理だよ。もう死んじゃってないからさ」

「そうだったんですか…すみません、気が付かなくて…」

「まあ悪気があつて聞いたんじゃないかなさそうだしいいよ。でもまあいい君には覚悟してもらわないとね〜」

「女性に手を上げたんだ。わかるよな？」

「さあ罰ゲームの時間だ、マインドク○ッシュ！」

「うわあああああ…と言うのは置いておくとして、罰ゲームとはなんですか？」

「いや〜神藤先輩も泉先輩もノリの良いことで…」

こなたさんと話していると罰ゲームを宣言された。内容を尋ねると笑顔で八坂さんとこなたさんが笑顔で答える

「勿論女の子になつてもらおう！」

「逃げちゃ駄目ですよ？」

「逃げませんよ。つかさんに手を上げたのは事実ですし、好きにして下さい…」

「よし！手分けしてあおい君もとい、あおいちゃんを可愛くしよう！」

「なんか楽しそうね、あお君悪いけど私もやらせてもらおうわ」

「お姉ちゃんがやるなら私もやる」

「あおいさん、申し訳ありませんが私も…」

「見てみたいから俺も手伝いに行ってくる」

「先輩すみませんが私も見てみたいので…」

皆自分の女の子姿を見たいらしく、反対派は誰もいない。もう諦めて待つことにした

「お待たせ！こっちとこっち、どっちがいい？」

「先輩それじゃ駄目ですって！やっぱり女の子らしさをもっと全面に出して…」

「これ結構重いんだから自分で持ちなさいよこっち」

「自分は男なんですけどね」

「今それを言うなよ」

「こっちもおお君なら着こなせそうだけどどうかな？」

「可愛いの持ってきたよ」

「私は女の子らしく髪留めをと思い、合いそうな物を選んできました」

全員がそれぞれ似合いそうなものを持って帰って来た。服がまるで小さな山みたいになってるよ…

「髪留めは付けます、服は皆さんと話し合って絞って下さい」

「スカートは…これかな？」

「ならそれとこれで。あとこれも合わせて1セットですね」

「これもいいわね、あ、つかさその取って？」

「これ？はいお姉ちゃん。こっちも可愛いけど合わせられそうなのは…」

「はい。これなら合うと思います」

「ありがとう、永森さん！」

「いえ、礼には及びません」

大体の服が決まり、余った服は元あった場所に戻されていく。ファ

ッションショーが始まるわけだ

「じゃあまずこれとこれとこれ、あと髪留めもね」

「わかりました。少々お待ちを…」

「どうなるんだろ、やっぱり着る人によって印象が変わるからね」

「どうなるんだらうな」

「お待たせしました…どうですか？」

「あおい君てさ、ホントに男？」

「それはちょっと酷い…」

「彼氏が女の子に見えるってのはどうなんですか？かがみ先輩」

「まあ、あお君はあお君なんだしいんじゃない。好きなことに変わりない…し」

着替え終えて皆に見せる。ついでに今、髪は前髪を分けて右を髪留めで留め、服は薄手のパーカー、白地にピンクのアクセントのＴシャツ、スカートにニーソックスである

「おやかがみ、嬉しいことを言ってくれますね」

「ど、どう致しまして。それより…どう？私とつかさが選んだんだけど…」

「いいと思いますよ？素敵な服を有難うございます」

「絶対領域だねかがみん！」

「なにそれ？」

「駄目です先輩！通じないみたいです！」

「なん…だと」

「まあ2人は置いて、次はこれを着ればいいんですか？」

服を脱いで次の服を着る。だが最初の服を気に入ってしまったため、あまり魅力は感じられなかった。ちなみに2着目はワンピース、3着目はホットパンツに合わせた物だった

「さてと、楽しんだしそろそろ行くこうか」

「待って、リボン買わなきゃ」

「ならかがみは1本分出して下さい」

「へ？ああ、足りない分出してくれるんだったわね」

「足りない分というよりかがみの分です。」

「お姉ちゃんの分？」

「ほほう、先輩彼女にプレゼントですか？」

「まあ最終的にそうなりますね。ですからかみはつかさんの分を出して下さい」

「考えたわね。じゃあそうさせてもらおうかしら」

「リボンが3点で18000円。ワンピースが1点で32000円。合計で212000円になります」

リボンとワンピースを手に取り会計に行き、リボン代2本分とワンピース代を自分が出す。ファミレスでの約束もあるし、八坂さんの言うとおり彼女へのプレゼントになる

「はいこなたさん」

「ありがとう！大事にするね」

「はい、つかさ」

「ありがとうお姉ちゃん！」

「はいかがみ、プレゼントです」

「ありがとうあお君！」

「はいはい、ラブラブなのは分かりましたから、次行きましょう次」

「次は食料調達ですね。皆さんは何が食べたいですか？」

「な、何で私達に聞くのかなあ？」

「そそそそつだよ、あおちゃんの食べたい物を買えばいいんじゃないかな？」

かがみがかささんに、そして自分がかがみにリボンをプレゼントしてこなたさんにワンピースを渡す。別にいちやついたわけではないのだが、八坂さんに促され食料調達のために移動を始めた。

晩ご飯のリクエストを取ると皆が慌て始めた。理由なら分かりきっている

「皆さん今日も泊まるんでしょう？ならリクエストを頂きませんか」

「バレてる？そんな！私の計画は完璧だったはず……」

「初日から、明らかに数日外泊するであろう量の着替えを詰めたもの持って来られたら誰だって感づきますよ？」

「隠すつもりはなかったんですが、泉さんがその方が面白いからと……」

「ごめんねあお君、私も止めたんだけど……止めきれなかったみたい」

「まあいいですけどね、賑やかな方が楽しくていいですし」

みゆきさんとかがみが阻止できなかったことを謝ってきたが、別に気にしているわけではないので注意したりはしない。こんなやりとりをしていると

「へへえ神藤先輩って皆さんを泊めてるんですか」

「楽しそうね、私達仲間外れみたいになってるけど」

「なら来ますか？部屋なら空いていますし」

八坂さん達が興味を持ったらしく話しかけてきた。別に何人までというのは決まっていけないので、こちらとしては問題ない

「あくでも私んとこ大丈夫かな」

「二つの中の親、たしか厳しかったわよね？」

「そうなんだよね、勉強しろろってさ。たしかに最近分かんないところとかあるけどさ……」

「なら自分達が教える勉強会、ということでの宿泊はどうでしょうか？一応先輩ですし、力になりますよ」

「いいんですか！？ならちよつと電話してみます！」

「私もしておかないといけないわね」

足を止めて携帯で電話しているようだ。永森さんも八坂さんを待っている間に同じように電話している

「……うん……うん！わかった！……許可取れました！勉強お願いしますね！」

「こつちも大丈夫よ。私も予習とかやっておこうかな」

「はは、こちらこそ頼りになるかは分かりませんがお願いしますね」

「頼りになるかは分かりませんが、か…よく言っじゃないか。まあこちとしても復習出来ていい勉強になると思っぞ?。」

「そうですね、私もお手伝いさせていただきます」

「私は遠慮させてもらおうかな…」

「私はどうしようかな」

「こなたもつかさも、復習になるんだからやった方がいいわよ?。」

八坂さんと永森さんは許可がもらえたらしく、今日はどうやら勉強会になりそうだ。人数も2人増えて晩ご飯の作り甲斐もありそうだし、さあ忙しくなりそうだ

外出し食料調達し

「食料調達って言うてましたけど、どこに行くんですか？」

「スーパーとか？それともショッピングセンターとかですか？」

「それについてはご安心を、少し離れたスーパーに行きます。そこが今日は安売りの日なんですよ」

「そうなんだし」

「それで？何が食べたいですか？」

「カロリーの高いのはちょっとね」

「でもちゃんと食べたいし…」

「美味しいものを期待してます」

「私も美味しければ文句ないです」

「だから今晚飯決めてんだろ」

「ならリクエストしていい？」

自分を先頭に歩きながら話す。晩ご飯の話になると、皆は決めかねているようだったがこなたさんがリクエストしてきた

「手巻き寿司とかは？好きなのを巻けるし、美味しいよ？」

「なるほど…他に意見はありますか？」

「たしかに具にもよるけどカロリー低いわね」

「美味しいよね」

「飽きが来ないので良いと思いますよ？」

「まあ結構食べられますからね」

「あんまり食べると後が大変よ？」

「ま、節度を守って楽しく晩飯。そして勉強か」

晩ご飯は手巻き寿司に決まりのようだ。決まったところで目の前に来た…そんなに話し込んでたかな？

「他に意見はないみたいですね。手巻き寿司なら具はごっします。ある程度は決めておいた方がいいでしょうし」

「鶏肉と牛肉に卵にきゅうりにツナマヨかな？」

「あとはカニかまとか？うなぎもあるわね」

「納豆とか？」

「ツナマヨがあるならコーンも捨てがたいですね」

「欲張りすぎじゃない？」

「全くだ。それ全部あおいの負担なんだぞ？」

「まあ人数多いし、いいんじゃないかな。自分だって美味しい料理を食べさせてあげたいですし」

カートを押しつつ値段や量、産地を見ながら皆が言った9品と、他に切れていたものをカゴに入れていく。京一は皆に注意したが、皆が食べて喜んでくれるなら惜しくはない

「これで全部ですかね？」

「飲み物は？私オレンジジュースがいい！」

「俺はジュースならオレンジよりリンゴだな」

「たまにはシユワシユワしたものの飲みたいよね」

「あゝわかるわかる」

「ならリンゴジュースと炭酸オレンジの2本買いますか？」

「そうしてくれると助かる。あ、あとは牛乳もな」

「京一が飲み過ぎるから……」

「てめっ！朝は残ってたろ！？だからフレンチトースト作れたんだろ！」

「まあね、まあ冗談で言ったんだけどね」

冗談を交えながら牛乳とリンゴジュース、炭酸オレンジと予備に1本力ゴに入れる。これでもし2本を飲み終えたとしても大丈夫というわけだ。足りないものもないようだし会計を済ませる

「合計で9800円になります」

「はい…京一持ってくれる？自分本で持てないから」

「しょうがねえな、ほら」

「京ちゃん格好いいね」

「男と男の友情ってやつだね」

「さすがにそこまで暑苦しくはないわね」

「先輩甘い！男の友情ってのは暑苦しくて上等なんです！なんせそこから…」

「うるさいわよ」

「あ」

買い物袋を持つとしたが、流石に30冊を片手に持つのは邪魔すぎたので京一に手伝ってもらう。しょうがないと言いながらも持つてくれるあたりが京一らしいというか。

そんなことをしていると後ろから友情やらなにやら聞こえ、仕舞いには打撃音までした。振り返れば八坂さんが頭を押さえていた…お

そらく永森さんにチョップでもされたのだろう

「これから自分の家まで直接でいいんですか？」

「あく私とやまとは着替えを持って来ないといけないので…どうしよっか？」

「だったら先輩の家の場所を把握してからでも遅くはないんじゃないかな
いかしら」

「そうだね。なら先輩の家までお願いします」

「わかりました。そういえば八坂さんと永森さんは許可を取ったよ
うですが、皆さんは…」

「私達なら最初にまとめて取ってあるよ？」

「ま、最初から断られたりすることはないと思ってたからね」

「あおちゃんならOKしてくれるって思ってたもん。ね？」

「はい。あおいさんとは知り合って日が浅いとはいえ、性格はよく
分かっていますから」

「まあ断られても、俺達は泊まってたがな」

まるで尋ねる事をあらかじめ知っていたかのようにこなたさんが話
し、それに続くように皆が話す。これって要約すると…

「ようするに自分はへタしってことですか？」

「よくは知らないけどそんなんじゃない？」

「へタレ？へチマの仲間かな？」

「それは違つと思えますよ？」

「違つよ。へタレっていうのはへなちよこと似た感じの言葉…だつたはず」

「まあ平たく言つと意思が弱いんですね」

「優しいとは違つのか？」

「ちよつと違いますね。へタレは意思が軟弱で八方美人だったり、単に力が弱くてイジメられる人に使われますから」

「あお君詳しいわね」

「気になることは調べないと気が済まないの…」

「わかります、私もそうですので…」

「あおいの言つたとおりだとするなら後者はないな。あおい強いから」

「前者もあり得ないと思います。八方美人と言つのは誰に対しても如才ない人…つまり誰に対しても抜け目のない人の事ですので」

「まあ単に如才ないだと、気が利いていて愛想が良いという意味も

ありますけどね」

「へ〜そうなんだ〜あ、着いたよ〜」

へタレについて説明していると家に着いたようだ。へタレについて説明するってなんか情けない気がする

「ここですか？結構大きな家ですね〜」

「いやそこ俺んちだから…」

「八坂さんそっちじゃなくて…こっちよ？」

「あ、そっちでしたか。これが…えっと…家？」

「冗談…じゃないみたいね」

「やっぱり最初来た人ってこうなっちゃっよね」

「現に私達もそうでしたしね」

「では八坂さん達とは一旦お別れですね。門の鍵は開けておきますので」

八坂さんと永森さんに手を振って別れる。見えなくなったところで門を閉めて玄関の鍵を開けて中に入る

「ただいま帰りました〜」

「誰もいないけどね〜おじやましま〜す」

「おじやまします。その本部屋に置いてきたら？」

「勿論そうするつもりです。ついでに自分の部屋に入りますか？」

「ですが、お邪魔なのは…」

「構いませんよ？昨日は入ってないでしょうし」

「そうだね、写真しか見てないし…」

家に入り、本を置くついでに皆に部屋への案内をした直後だった。つかさんが一言漏らして口を手で塞ぐ。バレバレだけどね

「…つかさん？」

「は、はいい！」

「どづいづいことですか？」

「あ、あの…その…ごめんなさい！」

「ごめんあお君！あお君達がお風呂に入ってる時に入ったの」

「あちらの着替え部屋にも入らせていただきました。それ相応の罰は覚悟しています」

「言い出したのは私だよ。皆は付いて来ただけだから悪いのは私だけだよ」

「…わかりました」

皆の前に立つと目を閉じて小さく震えている事がわかった。静かに右手を上げる

「ポスト」

「え？あおい君？」

「なに？あおちゃん？」

頭の上に優しく手を置き撫でる。最初はビクリと反応したが、目を開けて状況を直に見るとそれもなくなくなったようで、手を頭から離して次の2人に移る。意味は分かっているようだが

「ん…なんで？あお君怒ってないの？」

「私達は許可なく部屋に入ったんですよ？」

「ですが、ちゃんと謝って下さったじゃないですか。ですからそれで帳消しです」

「あお君…」

「それに自分は絶対に入らないでとは言ってませんよ？用がない限り入らないでと言いました」

「たしかに、そう仰られていましたね」

「自分としては、部屋を荒らしたりしなければ入ってもらっても構

わなかつたんです。しかし目の届かない所で自由に出入りさせるのは如何かと思ひ、ああ言つたんです」

かがみとみゆきさんの頭から手を離し、皆と向き合つ。かがみは今度は怒らないようだ。危ない危ない

「じゃあ私達は怒られなくてよかつたの？」

「まあでも着替え部屋は軽く荒らしちゃつたし…」

「写真も見たしね」

「やはりあの写真は…」

「ええ、自分と雪花と桜花ですよ」

「大事にしてるんだな」

「弟と妹の写真だからね、そりゃ大事にするよ。この話はこの辺りで切り上げましょうか？」

「そうだね。私買い物袋持つてくよ!」

「私も」

「私もお手伝いします」

「落としたらマズいからな、俺も行ってくる。お前らはそこで休んでろ」

パタンと戸を閉めて自分とかがみ以外の皆が出て行く。気を利かせたのだろうか

「皆さん行ってしまいましたね」

「そうね〜…そういえばさ」

「どうしたんですか？」

「ああ君は私が寝てる間にキスしたんでしょ？」

「ええまあ。ですが正確にはかがみにねだられたので…」

「でも私意識なかったからさ…今しっちゃ駄目…？」

「い、いえ駄目という事はありませんが…」

2人きりになった途端にキスの話になり、目を潤ませながらねだってくる。なんだか皆といる時と違う気がするんだけど…

「わかりました、どこにキスすればいいんですか？」

「寝てる時は唇にはしないんでしょ？なら今起きてるから…いい？」

「いいんですか？」

「あ…優しくして…ね？」

「勿論そうするつもりですよ？」

確認するとかがみは小さく頷いて目を閉じた。それに合わせて肩に手を置き、優しく唇を重ねる。しばらくしてゆっくり離すと真っ赤になりながらも名残惜しそうな顔をして、すぐに笑顔になった

「奪われちゃったわね、ファーストキス」

「かがみが望めばいくらでもしますし、自分もしたくなったらさせてもらいますよ」

「じゃあそうになったらよろしくね?」

「こちらこそよろしくお願いしますね。さて…」

「どっしたの?」

「まあ見ていて下さい」

静かにドアに近付き、ガチャリと開けると案の定4人がドアに張り付いていたらしく、部屋へなだれ込んできた

「や、やほ、あおい君」

「元気?...だよね」

「俺は...買い物袋持ってたぞ」

「そ、そろそろ八坂さん達が見える頃ですよ?」

「皆さんわざとらしいです...」

一言告げると皆は観念したように近くに座った。そこまで暗くならなくても…

「ドアの向こうで何してたんですか？」

「君達の甘い話をドア越しに聞いてたのさ」

「ほう…それで？」

「それでって、それだけだよ？」

「皆各々の意思で来たんだ」

「失礼だとは思ったのですが、気になってしまっ…」

やはり2人きりにしたのはこのためだったらしい。ちなみにかがみは赤くなって小さくなっている

「さて、罰でも下しますか…」

「ちよっ！さっきは許したのに！」

「先ほど…部屋に入った事ですか？あれはちゃんと謝ってきたので…」

「しめんなさい！」

「明らかにタイミング間違えてますよね？」

「むぐう…」

「こなちゃん、もうよそつよっ」

「皆で罰を受けましょう？」

「…だな」

「それでは罰は…食後の皿洗いをお願いします」

罰の内容を發表すると、皆はポカンとされていた。しかしすぐに尋ねてくる

「え？これだけ？」

「はい、これだけですよ？」

「もっと重たいのかと思っちゃった」

「どんな酷いのが来るかと思えば皿洗いかよ」

「そう？じゃあ厳しくないこうか」

「いえ、これだけでも食事をなさる人数を考えますと十分かと…」

「ならこれでいいですね？」

確認を取ると4人は首を大きく縦に振る。そんなにお皿洗いたいのかな…

「ピンポン」

「本当に来ましたね」

「みゆきさんすごい！」

「いえ、偶然だと思いますよ？」

「偶然でも当てると凄いよな」

「わかるわかる〜クイズ番組とかでもそうだよ〜」

「では自分は八坂さん達を…そういうえば買い物袋の中身はどうしました？」

「ジュースは入れて来たよ？何か入れる物があるなら入れてくるけど」

八坂さん達を出迎えようとして、ふと買い物袋を思い出す。流石に袋に入れて放置はマズいと思うけど…

「なら私達は買い物袋の中身を冷蔵庫に入れてくるから、あお君は八坂さん達を上がらせておいて？」

「おやかがみ、もう大丈夫なんですか？」

「まあね、それより…」

「わかってます。皆さんはキッチンで買い物袋の中身を冷蔵庫へ移動させて下さい。自分は八坂さん達を上がらせて来ますので」

「了解」

「迷わないように行かなきゃね」

「大丈夫だろ、地図があれば」

「私が地図を持っているので大丈夫でしょう」

「ほら行くわよ」

かがみに促され皆はキッチンの方へ歩いていき、自分はそれと逆方向へ歩き玄関に行く。玄関に着くと2つの影が見えたので、それを確認して玄関を開けた

暖かい時間

「ここはこれをこうして…はい、出来ましたね」

「はあなるほど」

「かがみ先輩、ここやり方は分かるんですが…」

「あ、ここは…」

現在自分とかがみで2人に付いて勉強を教えている。ちなみに他の4人は…

「ね、え京一君、休憩しない？」

「さっきしただろ。ほら次はここだ」

「ゆきちゃんここは？」

「ここはこちらの式を…」

こなたさんは京一に教えてもらいながら休憩しつつ進めている。つかささんは時間は懸かっているものの、1つ1つ丁寧に解いているようだ

「ね…続きは晩ご飯食べてからにしない？」

「まったくあんたは…」

「まあまあ、落ち着いてかがみ。構いませんか？八坂さん、永森さん」

「自分達は構いませんよ？息抜きできますし」

「私も。色々まとめておきたいですし」

「では皆さん休んでいて下さい。少し早いですが晩ご飯の準備をします」

息抜きついでに時間を見る。19:30と晩ご飯を食べるには微妙な時間ではあるが、準備をしたりすれば良い時間になると思う。皆に一言言っただけ席を立ち、キッチンへ向かう。向かうんだけど…

「何で付いて来るんですか？」

「いやさ、手伝おうかな」と

「休憩していませんですか？」

「いいのよ。どうせ勉強したくないから言ったんだろっし」

「そんなことないよ」

「先輩ホントですか？」

「そうなの？」

「…まあ6割くらいは」

「半分超えてますね」

「やっぱり勉強する気ないんじゃない」

「い〜じゃん！サボってゲームするわけじゃないんだから」

頬を膨らませながら皆の言葉に反論するこなたさん。たしかにゲームよりはマシだとは思っけどね

「まあ手伝ってくれるのでしたら助かりますよ」

「ほら！あおい君だって手伝ってって言ってるよ？」

「助かるとは言ったが手伝ってくれとは言っていないだろ」

「ま、こなたに付き合うのは後にして…何を手伝えばいいの？」

「酢飯：はご飯炊いてからだから、鳥を煮て切りましょうか。牛肉は甘辛く味付けして煮ておきましょう」

「先輩！私ツナとマヨネーズ混ぜて、コーン開けます！」

「だいぶ楽なの選んだわね」

「じゃあ俺は酢飯だな、結構力いるし。それまでは…納豆でも混ぜるか」

「いいよいいよ、私はきゅうり切っとくから」

「じゃあ私は卵を巻いて切ろうかしら」

「お姉ちゃん私も手伝うよ」

「なら私はお鍋の様子を見ています」

「私は…かにかまかしら？」

大体の役割分担はできたようで、自分は牛肉を煮る役目になった。といっても最初にご飯を炊かないと意味がないのだが

「よし、スイッチと」

「炭入れたんですか？本格的ですね」

「やはり美味しいものを食べたいじゃないですか。手軽に美味しくなるのならやるべきだと思いますので」

「へ…あ、ツナマヨこんな感じで良いですか？」

「どれどれ…ふむ、醤油を少し入れてみて下さい」

「わかりました」

「あお君つなぎの長さはこのくらい？」

「もう少し長くてもいいですよ？」

「わかったわ」

「先輩、かにかまの準備は出来ました…次は何をやればいいですか

「？」

「なら酢飯を混ぜるときにこれで扇いで下さい」

「団扇ですか。わかりました」

皆にアドバイスしながら準備を進める。ご飯も炊けて、酢飯作りに取りかかる。そして…

『いただきます！』

「では早速卵を…」

「どう？上手くできたかな」

「ええ、とても美味しいです！」

「本当？よかった」

「いいよいいよ…あ！鶏肉あんまり取らないですよ？」

「まだあるんだしいいだろ」

「鶏肉好きだからさ、いっぱい食べたいんだよ」

「そうだったのか。なら俺の分やるよ」

「いいの？ありがと〜！」

「どういたしまして。やっぱり好きなものは多く食べたいからな」

食べ始めから皆に注意するこなたさんに京一は自分の分の鶏肉をあげたようだ。やっぱり京一は優しいな

「…何見てんだ？」

「うん？京一は優しいな…って改めて思ったただけだよ」

「そうか？俺は同じ状況になったらやって欲しいと思ったことをやっただけだが…」

「その行動を優しいとおおいさんは言っただと思えますよ？」

「最初見た感じよりだいぶ優しいですよね」

「そうだよ。京ちゃんは優しいんだよ？」

「そうかね？ごちそうさま」

皆で優しいと言っていると、京一は手を合わせて逃げるように去っていった

「…ご馳走さまでした…何か悪いこと言っちゃいましたかね？」

「そうじゃありませんよ、京一は照れくさくなっただんです。ご馳走さまでした」

「へ～京ちゃん照れてただよあ、ごちそうさまでした」

「意外な一面もあるのね。…ご馳走さま」

「まあ京一だって普通の男の子ですからねそういう面もありますよ……と」

「あお君どこいくの？」

「お風呂の準備をします。こなたさん達はお皿洗いをお願いします」

「京一君は？彼もお皿洗うんでしょ？」

立ち上がり指示を出すとかがみさんから質問があった。それを見てこなたさんがニヤニヤし始める

「そ〜だよね〜京一君もおおい君とかがみがラブラブしてるの聞いてちゃったからね〜」

「へ〜え？ま〜たいチャついてたんですか」

「うるさいなあ、ほっとけ！」

「はは、まあ京一には見つけ次第伝えておきますよ」

「わかりました。私達はお先にお皿を洗っておきますので」

みゆきさんがそう言ったのを聞いてお風呂に向かう。その際こなたさん達が何か話していたようだが聞き取れることは出来なかった

「……よし、後はお湯を張るだけかな」

「あおい、なんか手伝うことは…」

「京一？こっちはないね。こなたさん達とお皿洗うんじゃないかな？」

「だったな。とつとと済ませて風呂入るかな」

「だったら皆に自分はお風呂に入るって伝えといてよ」

「わかったよ。今度は着替え間違えんなよ？」

後ろから出てきた京一にお皿洗いと伝言を伝えると、笑いながらキツチンの方へ向かっていった。さて着替えを用意してお風呂入るって

「着替えよし！さて…は…」

「あおい…入るぞ…って気抜きすぎだろ」

「い…じゃん、命の洗濯だよ？」

「何言ってるんだか…ん？」

「どうしたの？京一」

「いや今更衣室の方でなんか動いた気が…」

「まさか…ちゃんと伝えただよね？」

「当たり前だろ！」

カラカラ…と扉が開く。そこにいたのは皆であった。自分達入って

るんだけど…

「なっ何で皆さんここに？」

「ふふ〜赤くなっちゃって可愛い〜ね〜」

「こっち見ても大丈夫よ？水着とかタオル巻いてるから」

「まあ水着は私と泉先輩しか着てませんけどね〜どうです？」

「何でそんなもの持ってきたの？先輩も、こっちも」

「そりゃ勿論！」

『イベントの為！』

水着を着た2人がガッツポーズで高らかに言う。なんでこんなにテンション高いんだろ…

「イベント…？なんだかよく分かりませんね。もう一度聞きますが何故皆さんここへ？」

「皆あおちゃんにお返ししたいんだよ」

「お世話になりっぱなしだからね。背中でも流してあげようかな〜ってかがみが」

「いや言ってないし！何勝手に…」

「流したくないの？」

「そんなこと…ない、けど…」

「なら後でお願い出来ますか？自分もかがみの背中流しますから」

「あ、あお君がそういうなら…いいよ？」

「いいね〜可愛いよかがみ〜」

「見事なデレツぷりです先輩！」

一度洗ったのだが、顔を赤くしているかがみを見たら頼まないわけにはいかない。その頼みを承諾したかがみの反応に、水着2人が親指を立てて話し掛ける。その中に気になる言葉が出てきた

「あの〜質問してもよろしいですか？」

「何ですか神藤先輩？」

「さきほど言っていた『デレ』ってなんですか？」

「あ〜何て言えばいいんだろ…例えでかがみ先輩と神藤先輩を出させてもらいますね？」

「構いませんよ〜」

「私もいいわよ」

「例えばいつもツンツンしていて彼女らしく振る舞わないかがみ先輩。ですが神藤先輩と、ある状況になると…イチャイチャしたりデ

レデレしたりしちゃいます」

「デレはデレデレのデレだったんですね。ある状況ってなんですか？」

「2人つきりとか、あとは優しくされたり構って欲しい時とかですかね」

「なるほど……」

「なんか分かる気がするけど言われると恥ずかしいな……」

皆でお風呂に浸かりながらデレについての話しを聞く。その後はお互い真つ赤になりながら背中を流し合ったのだった

お風呂と勉強

「しっかしまあ…」

「何ですか八坂さん。あまりジロジロ見ないで下さいよ…」

「先輩ってスレンダーっていうか羨ましいっていうか…」

「軽く女性の敵よね」

「先輩は腕とか太くないんですね。男の人なのに」

「脚も細いよね」

「本当だよ〜どっちかっていうと女の子だよね。胸ないけど」

「あおいさんは男性ですから当然ですね」

「ははは、そりゃそうだ」

今自分はサウナで皆に囲まれている。まあ見るだけならタダって言うし…

「それにしても広すぎるくらいのお風呂にサウナに露天風呂…ここ、銭湯ですか？」

「いえ自分の家ですよ…ってのしかからないで下さい！何か当たってますし」

「当ててるんです」

「はかがみ。彼女さんから一言！」

「なぐに赤くなってるの？」

「いや、これはその…」

「こら、あおいをいじめるなよ」

「いじめてないよ？からかって遊んでるんだよ」

「そうですよ。そういえば萩原先輩はどっちが好きなんですか？」

「どっち？なにがだ」

「胸ですよ。大きいのですか？それとも小さいのですか？」

胸を当てられたりかがみにジト目で見られたりしていると、京一にも飛び火したようだ

「ちょっとこら、そういう質問は女性がするものじゃないわよ？」

「同感だな。ってかそういう質問はあおいにしろよ」

「駄目ですよ。先輩どうせ『自分ですか？自分はいかがが好きですか』とか言うでしょうし」

「よく分かりましたね〜」

「合ってるのかよ。それにしても…」

「似てないわね」

「あくまで簡単に真似しただけですよ！本気でやれば…」

「そろそろ出よっか」

「そうだね」

「ではお先に失礼します」

八坂さんが自分の物真似をしている間にこなたさん、つかささん、みゆきさんはサウナから出て行った。つまり八坂さんは無視された事になる

「聞いてないし！酷いと思いませんか先輩？」

「いいじゃないですか。ほら皆さんも行きましょっ？」

「よくないです！こうなったらサウナに閉じこもってやる！」

「そう。頑張っつてねっつ」

「え？一緒じゃないの？」

「やるっつて言っただ覚えはないけど？」

パタンとドアを閉めて八坂さん以外がサウナから出る。大丈夫なのだろうか

「八坂さん出て来るかな…」

「まあ彼女がやるって言ったんだし、万が一の時はあお君が助けるでしょ？」

「やっぱり自分なんですか…」

「当然でしょ？この家の人なんだし、さっきの事もあるから罰として…ね？」

「分かりました、ならかがみ達は先に着替えて下さい。自分はなるべく長くお風呂場に残った方が良いでしょうし」

「分かったわ。皆上がりましょう？」

「わかったよ…あ、前にも言ったけど覗かないでね？」

やはり八坂さんに何かあった際の責任者はこの家の人間である自分のようだ。了承して着替えを促すと、更衣室からこなたさんが顔を出して注意してきた。このやりとりたしか2回目だね

「大丈夫ですよ。しませんから」

「ってかお前の体なんて見てもなあ…」

「なんの！こっちは選り取り見取り！かがみ以外は選び放題…」

「アホか！！」

「むぎゃー！痛い…」

ツッコミと共にこなたさんを叩くかがみ。そして頭を押さえて涙声になったこなたさんは中に引きずられていった

「お姉ちゃん以外ってどういうこと？」

「かがみさんにはあおいさんがいますからね。そういった意味なのでは？」

「まあ選んだら京一には色々と覚悟してもらいますけどね？」

「笑顔で恐いこと言うなよ…大丈夫だって選んだりしないから」

「神藤先輩、萩原先輩。皆さん着替え終わりましたよ？」

「報告ありがとうございます。永森さんは八坂さんに付いていないくていいんですか？」

「大丈夫ですよ、そろそろ出て来るはずですから」

背中を扉に向けて皆と話す。京一と戯れていると扉が少し開いて永森さんが顔を出してきた。永森さんは着替えが終わったことの報告をした後、自分の質問に対してサウナを見ながら答えた

「ああ…もうダメ…」

「本当に出て来たが…大丈夫なのか？」

「軽い脱水症状を起こしていますね。永森さん…」

「分かってます、すぐに持ってきますので…」

「わかりました。…八坂さん大丈夫ですか？」

「なんとか…サウナには引きこもらない方がいいですね…」

「そりゃそうだろう。当然だな」

「お待たせしました！スポーツドリンクです」

「わざわざすみません。はい八坂さん、ゆっくり飲んで下さい」

「ありがとうございます。先輩もありがとうございます…」

出てきた八坂さんの様子を見て行動を起こす。永森さんが持ってきたスポーツドリンクを自分が受け取り、八坂さんに回すとゆっくりと飲み干した。どうやらある程度は回復したようだ

「プツハー！生き返る〜」

「さっきまで干からびてたとは思えないな」

「人をミイラか何かみたいに言わないで下さい！」

「とりあえず無事でよかつたわ」

「やまとお〜」

「ち、ちよっと…先輩達見てるからやめなさいよ」

「自分達は気にしなくて結構ですよ。それよりも八坂さんは着替えられてはどうです?」

「え?あゝそつか、先輩達は私が着替えないと着替えられないんですね。ちょっと待ってて下さい」

八坂さんの無事を確認して笑顔になった永森さんに、八坂さんが嬉しそうにペタペタと引っ付く。自分が着替えを八坂さんに促すと、永森さんから離れて素早く更衣室に入っていた

「着替え終わりましたよ。私達は外で待ってますので。ほら、やまとも行くよ」

「ではお先に…」

「さて、2人が待つてるし早く着替えようか」

「だな。この後はまた勉強だよな?」

「まあね、あまり遅くまではやらないと思うけど」

「ふん…ま、俺はわからないやつフォローに回るがな」

「8人だし必然的にそうなるね…よし行こうか」

着替え終え、扉を開けて更衣室を出ると正面に2人が待っていた。合流して皆が待っているであろう居間まで一緒に行く

「お待たせしました」

「意外と早かったわね。先に勉強始めちゃったけどいいの？」

「大丈夫だろ、教えなきゃいけないのは4人だし、半分はそっちに
いるんだしな」

「私達の事だよな？」

「こっちは私とつかさだね。あっちは…」

「私とやまとでしょうね。言い出したのは私ですし」

「それでは始めましょうか。あおいさんは八坂さん、京一さんは泉
さん、かがみさんが永森さん、私がつかささんでしたよね？」

「ええ、合ってますよ～さて…ここからですよね？」

みゆきさんが確認して勉強が始まった。まあこれも後輩の為、復習
を兼ねて頑張りますか

「そうですね、ちょっと分からないですよ～」

「ああここはこの式ではなくこっこの式の方が…」

「あ～ならこっこの式はこれに…」

「ここはこついでこっちがこつなる。何で分かるか？」

「え～と…何で？」

「なら順を追って説明するぞ?」

「よろしく願います…」

「これは…こうなりますよね?なら…ここはこれでいいんですか?」

「正解よ?飲み込み早いわね?じゃあ次は…」

「あ、ここはこの間授業でやったんですが理解できなくて…」

「じゃあまず…」

「ではこちらの問題を解いてみて下さい」

「うん…あ、これさっきゆきちゃんから教えてもらったやつと同じ感じだね」

「はい、同じ方法で解けますからやってみて下さい」

「え〜と…出来た!」

「正解です、やりましたね。では…」

1人1人が集中した成果が、順調に進んでいるようだ。これを活かせばなお良いのだが

「いや〜助かりました。これなら今度あるテストでいい点取れそうです!」

「こちらこそ良い復習になりました」

「こつちもなかなか手応えがありました。分からないところも理解できましたし」

「飲み込みが早くてこつちも助かったわ」

「こつちはなかなか大変だったがな」

「後半ちよつとは頑張ったじゃん！」

「つかささんも頑張りましたよね？」

「うん！ゆきちゃんのおかげだよ」

「では皆さん頑張られたのでコーヒーでも入れましょうか。京一は紅茶だよね？」

皆も頑張ったことだし、温まれる飲み物を提案する。京一は紅茶党だから紅茶を入れようと思う

「ああ、ストレートで構わない」

「では作ってきますね〜」

「行ってらっしゃい。京一君て紅茶派なんだ〜」

「まあな。飲んでたら気に入ったんだ」

「飲んだってどこで？」

「コンビニとかにあるだろ？リプオンだよ」

「あ〜あれですか。…先輩って影響されやすいんですか？」

「どうなんだろうな。だが結構こだわるぞ？例えば煎れる時は…」

「はいストップ！京一は語りだしたら止まらないんだから。はい」

自分がいない間に紅茶の話で盛り上がったようだ。だが熱が入る前に打ち切らせて皆に配る

「ん、サンキュ。頭を使った後の紅茶もまた格別だな」

「へ〜ちゃんとカップに入れるんだね」

「こういうのは雰囲気から大事にしたいですからね」

「凝ってるわね〜コーヒー好きなの？」

「そこまではないですけど、結構飲みますからね。揃えてみました」

「こういうのに入れると、美味しそうなのがもつと美味しそうに見えるよね〜」

「見栄えますから、それに実際にとっても美味しいですよ？」

「あ…本当だ、体が暖まりますね」

「少し甘めなのもいいですね」

「本当だ、甘い」

「暖まるね」

「あんまり苦くないし、飲みやすいわね」

「気に入ってもらえたようでよかったです。自分は八坂さんと永森さんの部屋を用意して来ますので、それでは」

皆の自分のコーヒーへの反応を見た後、手早く伝えることを伝える。そして掃除器具を取り出して2人の部屋になるであろう部屋へと向かう。

「よし！さて…終わりましたよ。場所はここと、ここです。地図を見ながら向かった方がいいですよ？」

「わざわざすみません、私達のために…」

「ありがとうございます。お言葉に甘えて使わせてもらいます」

「どう致しまして。では自分はもう寝ますので、おやすみなさい」

『おやすみ』

掃除を終わらせて戻り、部屋の場所を伝えて就寝を告げる。皆の返事に会釈をして居間を後にし、自室に帰ってベッドに入る。

安心しきっていたのだろう。自分が眠りについた後、部屋のドアが開いたことを自分は気付きもしなかった

4人の朝

「ピピピ…」

「ん…朝か…」

手探りで時計を探りながらも片方の手で目を擦る。だいぶ眠気を払えたかな

「さてと…?!」

布団から出ようとすると違和感を感じた。体が動かないのだ。つまり必然的に布団からも出られない。困ったものだ

「こういうのって金縛りとかいうのかな…そこまで何かした覚えはないんだけどな」

一般的に金縛りは、疲労から来るものや霊的な何かが乗っているため起こると言われている。霊だったらなんとなくレアな気分になれそうな気がするよね

「原因は何だろ。脚の指は…動く。腕は動いたし…」

とりあえず疲労による金縛りではないらしい。じゃあ霊的なものかな、などと頭を捻っていると

「んん…」

「うむう…」

声が出た。その上お腹の辺りで何かが動いた。確認するため携帯を開いて、画面の照明で照らし出す。何故ライトを使わないのか？眩しすぎるからね

「これは…八坂さんとかがみ？何でここに？というか何でこの組み合わせ？」

照らしてみると、八坂さんとかがみが自分の胴体に被さるように眠っていた。色々と聞きたいこともあるが、今は寝てるので…

「2人ともそんな格好で寝ていては風邪を引いてしまいますよ？」

這い出るようにしてゆっくりと布団から脱出し、手前で寝ているかがみを抱えて布団の中に寝かせる。次に八坂さんも同じ要領で寝てもらおう

「これで大丈夫でしょう。では行って来ますね」

小さく手を振り、部屋を出て着替え部屋に向かう。着替え部屋でジヤージに着替えて顔を洗い、歯を磨いて外に出る。勿論、玄関の鍵は閉める

「2人のおかげで30分は部屋にいたから、いつもの半分しか走れないみたいだね」

別にその分工夫すればいいんだけど。そう思いながら走り出す

「ただいま帰りました〜って誰も起きちゃ…」

「残念だったな。起きてるぞ」

家に帰り、鍵を開けて入る。靴を脱いで靴箱に直しながら、帰った旨を廊下に向かって小さな声で言うと言つて返事が返ってきた

「何で？え、何で？」

「そんなに驚くことないだろ」

「いやだつてまだ京一が起きるにはまだ早いよね？」

「たまには早起きしないとな。それより手合わせするか？」

「いいけど、朝ご飯作つてからね？」

「手伝おうか？」

「ならお風呂掃除を任せるよ。後ではいるからさ」

「わかった。徹底的にやつてやる」

京一が起きていることにも慣れ、それぞれの持ち場に向かう。今日の朝はコンソメスープと海藻と野菜のサラダにトーストである

「分量はこのくらいかな？次はスープと…」

「洗い終わったぞ。お湯張つといていいのか？」

「うん、頼むよ。こつちももう出来るからさ」

「なら終わつたら道場にいるから来いよ？」

「わかったよ」

スーブを作りながら話し、出来上がったのを確認して火を消し、サ
ラダを冷蔵庫に入れて道場へ向かう

「さてと…始めるか」

「こっちはいいよ。何割くらいでやればいいのか？」

「3〜4割だな。後ウェイトは付けてくれよな？」

「分かってるって、そっちは全力で来るんでしょ？」

「当然！」

柔軟体操を終わらせてウェイトを付ける。すると京一が間合いを詰
めて足払いからのストレートを仕掛けてくる

「よつと、動きにまだ隙があるよ。もうちょっと早くね！」

「これでも全力でやってんだがな！」

足払いを低くジャンプして避け、ストレートを体を反らし、後ろに
手を着いてバックスプリングの要領で避ける。ついでにアドバイス
もしてやる

「じゃあ今度はこっちから行こうか」

「おらあ…！」

着地の勢いで間合いを詰めると、京一が攻撃を仕掛けてくる。それを避けつつ背後に回り、足首に足を掛けて引く。バランスを崩したところで背中に掌で打撃を加える。

「甘いね、少し単調すぎ…」

「きゃあ〜!!」

「っ痛〜何だ?」

「今の声かがみの声も聞こえた!ちょっと行ってくる!」

「俺も行く!」

京一が床に倒れるとほぼ同時に悲鳴が聞こえた。かがみの声が聞こえたのでおそらく自分の部屋だろう。

「かがみ!? 一体何が…」

「おはようあお君…」

「先輩おはようございます…」

「何で2人があおいの部屋にいるんだ? つか何か怒ってる気が…」

「気のせい…:じゃなさそうだね。あの〜何で怒って…」

「問答!」

「無用！」

「ええ〜？」

部屋に入ると2人はこちらを見ながら怒りのオーラを出していた。理由を尋ねると八坂さんに左頬を、かがみに右頬を叩かれた

「本当〜にごめん！」

「構いませんよ。いい眠気覚ましになりました」

「怒らないで下さいよ〜謝りますから〜」

「怒ってませんよ。誰かさん達にありもしない罪で叩かれたので拗ねてるだけです」

「反省してるみたいだし許してやれよ。こいつらだつて勘違いでやつたことなんだし」

「まあ許しましょう。と言うより部屋に入って怒っている理由を尋ねた時に話していただければ、このような事にならずに済んだのでしようけど…出来れば次は無ないようにして下さいね？」

まだ頬は痛むが、2人が反省したようなので最後に釘を刺して微笑む

「ごめんね？はい氷。まだ痛む？」

「大丈夫ですよ、だいぶ楽になりました」

「すみません、私達が部屋にいなきゃ…」

「そういえば何で自分の部屋にいたんですか？」

「私が、かがみ先輩に言ったんです。神藤先輩皆さんに気を配りすぎて疲れてるみたいだから出来るだけ近くにいてみては？って」

「それで1人で行くの恥ずかしいだろうからって八坂さんも一緒に来てくれて…」

自分の質問に対して2人が答える。部屋にいた理由は分かったが、金縛りと思ったなんて言えるわけがない

「なるほど、それである状況ですか」

「でもびっくりしたわよ。起きたら布団の中にいたんだもん」

「先輩に何かされたかと思いましたよ！」

「何かしたのか？」

「風邪引いちゃいけないから布団の中に入れてはしたけど？」

「それって抱えて、ですか？」

「ええ、女性を引きずるのは問題があるでしょう？」

「いや抱えるのも問題あるんじゃない？」

布団の中にいた事を不審に思っている2人に布団に入れた理由を話す。抱えたことを話すと真っ赤になったが、他にどうすればよかつ

たというのだろうか

「そ、そういえば何であお君ジャージなの？」

「ああ、お前らが叫ぶまで手合わせしてたからな」

「手合わせ…戦ってたんですか？」

「まあな。結構いい勉強になった」

「どっちが強いのか？」

「俺の方があおいよりも弱いな」

「十分強いと思うけど？」

「あくまでお前と比べてだからな」

「へ〜神藤先輩の方が強いんですか」

「まあ早起きして色々してるからその成果なんじゃない？」

かがみが逸らすように尋ねてきたジャージ姿への疑問は、どちらが強いかという質問に変わっていた

「そういえばそのまま部屋に来ましたから汗が臭いますね…」

「だったな。ちょっと風呂入ってくる」

「分かったわ」

「また一緒に…」

「いえ、しばらくは勘弁して下さい。心臓が悪いので」

「一緒に入ることには何も言わないのね」

「皆さんがそうなされたいと言うのなら自分は何も言いませんよ？
頻繁にされては困りますが。それでは」

「行つてらっしゃい」

2人に軽く頭を下げてお風呂場に向かう。もうすぐ誰か起きてきて
もおかしくない時間だから、上がったときに2人きりということ
はないと思う

>かがみview<

ああ君と京一君がお風呂場に向かう。その背中を見ていると罪悪感
を感じた

「何で信じてあげられなかったんだろ…」

「かがみ先輩？」

「ああ君は私達を信じてくれてるのに、それなのに…」

「確かにそうですよね。知り合つて間もない人達を自分の家に泊ま
らせて、しかも部屋付きで殆ど自由ですからね。よっぽど信賴して
ないと出来ませんよ、こんなこと」

「そんな人を私達は疑った…許してくれたけど、私は…」

「泣かないで下さいよ？」

「え…？」

後悔の念に駆られ、視界が歪む。目に涙が滲むのが分かったが、八坂さんに不意に泣くなと言われた

「泣いたら私が神藤先輩に怒られちゃいますから。先輩は私とやまとが京一先輩を外見だけで判断したときとか、ファミレスの内面の話のときとか怒ってたように見えましたから」

「ああ、あの時ね。そういえばいつもと様子が違ったわね」

「多分神藤先輩は外見だけで判断した事、あと京一先輩を外見だけで判断して貶した事に対して頭に來たんだと私は思います」

「つまり友人を傷つけられたからああなったって言うの？」

「ええ。ですからかがみ先輩がここで泣いて、それを神藤先輩に見られたら…」

「ご愁傷様ってことね。それにしてもよく見てるわね」

「一応、人を観察するのが趣味なんで。あとは…」

「まだ何かあるの？」

八坂さんの話に耳を傾け、よく見てみると感心した。見ている理由は趣味らしいのだが、彼女は語尾を濁らせた。理由を聞いたのだが、聞かない方が良かったのかもしれない

「あとは……先輩の事が好きだったっていうのもあります」

本当、聞かない方が良かったのかもしれない。そんな私の様子に気付いたのか、彼女が言葉を進める

「勘違いしないで下さい。あくまで”だった”ですから、過去形なんです。ゲーセンにいたのも偶然じゃなくて、遭う確率を考えて朝からいたんです。でも……」

「私が隣にいた、と……」

「かがみ先輩と一緒にいる神藤先輩はとても幸せそうでした。先輩の横には私じゃなくてかがみ先輩が似合うんです」

「なんか……ゴメンね？」

「なんで謝るんですか？私は神藤先輩は駄目でしたが、いつか必ず！先輩に負けない恋人見つけますから！」

「ふふ……強いよね……」

「かがみ先輩ほどじゃありませんよ。先輩の頬あんなに腫らしちゃって……」

「そついう意味じゃない！」

「痛！痛いですよ先輩〜！」

何か勘違いしている八坂さんにツッコミを入れる。少々やり過ぎたのか、かなり痛がっている。八坂さんが頬を押さえていると2人が帰ってきた

「上がりましたよ〜ってまだ2人だけですか？それに八坂さんどうしたんですか？」

「先輩聞いて下さいよ〜！かがみ先輩が打つたんですよ〜」

「何かあつたんですか？」

「話せば長くなるんだけど、まあ色々〜…」

「隙あり！」

「ちよっ！」

私が説明していると、あお君の横に行った八坂さんがあお君の頬にキスをした。油断も隙もない奴だな…

「や、八坂さん？」

「かがみ先輩、さっきのお返しです！」

「キスされちゃいましたね…まあ自分にはかがみがいるんで気にしません」

「私も全っ然！全く！気にしてないわよ！？」

「怒らないで下さいよ〜かがみ〜」

「別に怒ってないわよ!」

「やっぱり怒ってんじゃねえか」

「え〜い、うるさい!」

怒っているわけではない。八坂さんの行動力に、その行動に、少し妬いてしまっただけ。ちょっときつい言い方になったけど、気にしてないから。信じさせてね、あお君

騒がしい朝

「おはようございます。皆さんお早いですね」

「おはようございます。よく眠れましたか？みゆきさん」

「はい、お気遣い有難うございます」

「とりあえず高良先輩には聞こえてないみたいですね」

「みたいね、あと3人…」

「何かあつたんですか？」

「いや、何でもないんだ」

「他の皆さんが起きてくるのが遅いですねという話していたんです」

「あら、早起きした方がいいことあつたんですか？」

「おはようございます永森さん。そういった意味で言ったわけではないので、あまり深く考えないで下さい」

みゆきさんの次に永森さんが起きてきた。かがみと八坂さんは叫んだことを気にしているようで、自分は皆に今朝の事を聞いていくことになっている

「ならいいんですけど」

「それより夜はよく眠れましたか？」

「ええおかげさまでよく眠れました。もしかして心配してくれていいんですか？」

「環境が変化すると眠れなくなる人もいるそうですね。状態を気にするのは先輩として、友人として当然じゃないですか」

「そ、そうですね？ありがとうございます…」

永森さんも今朝の事は寝ていたらしく知らないらしい。気遣うと顔を赤くしたが、後ろの2人の視線が痛い…

「やまともセーフと。それにしても先輩に優しくされて…いいな」

「私達も気遣われて抱えられたんだけど、記憶にないから実感が湧かないのよね」

「なににせよあと2人だが…そんなに恥ずかしいのか？」

「いえ、叫んだこと自体はそこまでないですよ。先輩のベッドで寝ていたことが問題なんです。やまとに知られたら…」

「こっちはこなたが問題ね。まだ起きてきてないから何とも言えないけど」

溜め息混じりに2人が小声で話す。起きてきた2人は意味が分からないといった感じだったが顔を洗いに行ったようだ

「まあ後の2人は起きるの遅いし、大丈夫だと思うけど」

「誰が起きるの遅いって？まったくかがみんもひどい」と言っね〜」

「うわっ！…あ〜びっくりした。ってあんたいっつも遅いじゃない。事実を言ったまでだけど？」

「だから今日は頑張ってみたんだよ。褒めて褒めて〜」

「こなたさんおはようございます。早起き出来ましたね、ですがあまり眠れなかったのでは？」

「そんな事ないよ？部屋に入ってすぐ寝ちゃったから。まあ1回起きちゃったけどね」

1回起きたという言葉に2人が反応する。よほど気になるのだろう、聞き耳を立てているようだ

「起きた？何かあったんですか？」

「ん…ちよつとね〜」

「おい、こつち見てるぞ…」

「まさか起きたのって…」

「いや〜朝から彼氏を攻撃するとは、なかなか凶暴な彼女さん達だね〜」

「ぐ…バレてる…」

「泉さん何かあつたんですか？」

「こつがまた何かしたんですか？」

戻つてきて、たじろぐ2人を見たみゆきさんと永森さんがこなたさんに話を聞こうとする。2人にとっては絶体絶命というものだろうか

「まあ私が知ってるかぎりは…と、まあこんな感じだよ」

「まあ、そのような事があつたんですか…」

「詳しい話は本人から聞いた方がいいわね…」

「うああ…やまとが睨んでる…」

「こなたのやつ、余計なことを…」

「ま、いいんじゃないかねえか？友人同士で隠し事するよかさ」

「まあそうなんですけど…」

「皆の前で話すことないんじゃない？」

こなたさんが朝あつたことを見聞きした範囲で話す。自分が叩かれた後の話を途中まで聞いていたらしく、2人も完全にはいかないまでも状況を把握したようだった

「いや〜やつぱり話したくなっちゃおうよね〜」

「それでも話すな！」

「ちょ！叩かないでよー！」

「うるさいー！」

「こっ、何があつたか正直に話して…？」

「やまと、目が、目が笑ってないよ？」

「話してくれる？」

「……ハイ」

かがみは赤くなりながらこなたさんを叩いて追い回している。八坂さんは笑顔の永森さんに詰め寄られ、正座で朝の事を説明しているようだ。長引くのかな…

「4人はお取り込み中のようなので、朝ご飯の準備でもしましょうかね」

「なら私もお手伝いします」

「俺も何かしよう」

「いいんですか？みゆきさん、朝の事お聞きにならなくても」

「ええ、確かにお二人があおいさんのベッドで眠っていたというのは驚きましたが…私はあおいさんを信じていますから」

「有難うございます。朝ご飯の準備ですが、みゆきさんは作ってあ

るスープを温めて下さい。京一は冷蔵庫からドレッシングとサラダを出してくれる？自分はテーブル拭いてお皿出すから」

「スープはこれですか？」

「そうです、それです」

「サラダはこれだな、ドレッシングはこれか？」

「それで合ってるよ、テーブルに並べておいてね」

自分とみゆきさんと京一は4人が取り込んでいる間に朝ご飯の用意を進める。トーストは…まだいいかな

「ふああ～おはよ～…て何してるの？」

「おや、おはようございますつかささん。用意が終わったら起こしに行こうと思っていたのですが…」

「なんだか今日は起きれたよ。何かいいことあるのかな？」

「あるといいですね。どうぞ席に着いて下さい、もうすぐ朝ご飯が出来ますからね」

「うんわかった～…ねえあおちゃん、お姉ちゃん達何やってるの？」

「あ～あれは…知られなくなかった事をこなたさんに話されて追いかけているんですよ。八坂さん達は話し終わってお説教に入ってますね」

「へ〜みんな朝から元気なんだね〜」

起きてきたつかさんを席に案内して、現在の状況を簡単にまとめて説明する。それにしても本当に元気だな〜

「あおいさん、スープが温まりました」

「わかりました。皆さん朝ご飯ですよ〜席に着いて下さい」

「ふう、このくらいで勘弁してあげるわ。ほら行くわよ」

「し、死ぬかと思った…待ってよ〜」

「朝ご飯出来たみたいよ？早く来た方がいいんじゃない？」

「いや…足が痺れて動かないんだけど…」

「ふうん。頑張ってたね？」

「置いてかないでよ〜やまと〜」

「分かったから引つ張らないで。ほらゆっくり立って…」

4人は落ち着いたようだ。全員が席につき手を合わせて朝ご飯を食べ始める。なかなか騒がしいけど、今日も楽しくなりそうだ

暇な日

「へ〜そんな事があつたんだ」

「いや〜かがみんなも八坂さんも大胆だよ〜あおい君だつて1人の男の子だつていうのに」

「改めて言われると…ねえ？」

「自分が何かするとも思っていたんですか？」

「いえ、思っていないから行つたんですけどね」

「それで勘違いして悲鳴をあげて、それを聞きつけた先輩を叩いた、と」

「ほんつと〜にすみませんでした！」

「いくら謝つても足りないと思うけど…ごめん！」

「先程も謝ってもらいましたから、もう謝らなくても結構ですよ。気にしてませんから」

朝ご飯を食べながら、つかささんが朝の出来事をこなたさんから知らされる。永森さんの一言を聞いた2人はまた自分に謝ってきたが、自分は気にしていないことを伝えると申し訳なさそうな表情から笑顔に変わった

「やはり女性には笑顔が似合いますね。自分は好きですよ？そーい

う表情」

「それってかがみのってこと？それとも八坂さんのってこと？」

「今のは笑顔が好きだという意味で言ったんですよ。特に2人のうち、どちらの笑顔が好きという意味で言ったわけでは……」

「片方は彼女だがな」

「いや勿論彼女の笑顔が1番だけども、皆笑顔が似合うから順番付けたくないんだよね」

「…神藤先輩って天然なんですか？」

「ま、大抵こんな感じだな。天然かどうかは俺には分からんが、やるときはやるぞ？」

自分の発言を聞いて天然と言う永森さんに京一が腕を組んで答える。本人の目の前でそういうことを言わないでほしいものだ

「まあ勉強とか料理が出来るのは分かったけどね、かがみにとっては料理できる彼氏は助かるよね」

「ま、まあ確かにね。忙しい時はお弁当頼めそうだし」

「作るのはい構いませんが、自分のお弁当と同じになりますよ？」

「別にいいわよ。早速明日頼める？」

「分かりました。でしたら苦手なものがあったら今のうちに言って

下さい」

「うーん…貝類くらいかな？」

「私はもずく！」

「なんであんたも答えるのよ！あんた普通に料理出来るだろ！」

「うーかがみが冷たい…」

「なるほど、分かりました」

天然から料理の話になり、明日かがみの分もお弁当を作ることになった。かがみは貝類、こなたさんはもずくが苦手らしく、メモ帳を取り出して書き込む

「あ、私の分は作らなくても大丈夫だからね？ただ苦手なもの知ってほしくて言ったただけだから」

「そうでしたか。ではこれは次の機会に役立てることにしましょう」

「ねえそついえば、今日は何するの？」

「そついえば私達、今日はまだ何をするのか決めていませんでしたね」

「そついえばそうですね。何しますか？」

「うーん…やることは昨日やっちゃったからねーあんまり浮かんでこないよ」

「あんまりつてことは、ちょっとは何か浮かんだの？」

「私の部屋の片付けとか？」

「却下！」

「じゃあ…うん」

「無いのか？なら各自部屋の整理でもするか」

「いいねそれ。あおい君にはお世話になったし、それくらいはしないかね」

ご馳走さまと手を合わせ、お皿を片付けて皆は部屋に向かう。自分は洗い物があるのでキッチンに残る。

>かがみview<

「片付けるっていつでも汚れないし、荷物は纏めてあるし…布団畳んで換気しとこうかな」

流石に借りた部屋を散らかすほどの勇氣は私にはない。そのためいつも整理整頓しているのだが、今日ほどそれが裏目に出たのはおそらく人生初だろう…いや言い過ぎかな？

「はは、やることなくなっちゃった…とりあえず、あお君に報告しとこうかな」

部屋を出てキッチンへ向かう。この道も慣れた道になり、部屋から

キッチンまでなら地図無しでも行けるようになった

「さてと、自分もこれが終わったら部屋を片付けようかな」

「へえ？見た感じかなり綺麗だったけど？」

「あれ？…かがみ？部屋の片付けに言ったんじゃないんですか？」

「別に私は散らかしてないからね。布団だって畳んで、今は窓を開けて換気中よ」

「行動がお早いですね。自分は最初に戻ってくるのはてっきりみゆきさんかと思っていました」

「まあ迷ってなきやいいんだけどね。それより…大丈夫？」

「昨日の晩ご飯の時よりも少ないですよ？まあ洗ったのは自分ではなく皆さんでしたけどね」

「手伝おっか？手が空いてるし」

今お皿を運びきり、洗おうとしていたらしい。スポンジに洗剤をつける彼に後ろから声をかけると、振り返って不思議そうに尋ねてきた。事情を話し、手伝うため袖を捲り横に行く

「ありがとうございます。お皿はこっちに、トング等はそっちにお願います」

「わかったわ、にしても多いわね…」

「8人分ですからね〜今日の朝ご飯で出た洗い物は26ですね。鍋やボウルを合わせてですけど」

「聞くとやる気なくすわね。まあ全部空なんだし楽なのは分かるんだけどね」

「皆さんよくお食べになりますよね〜昨日の手巻き寿司も完食でしたし」

「まあそれだけ食べてもこっちの成長には回されないんだろうけど」

「何か言いましたか？」

「ううん、何でもない。気にしないで？」

自分の胸を見ながら呟くと、彼が反応を示す。内容は聞こえていなかったらしく、内心ホツとする。だが聞いていて欲しかった自分もそこにはいたのだ

「そうですね、わかりま…」

「やっぱり聞いて…!」

「ははは、わかりました。聞きましよう」

「笑わないでよ!こっちは結構真剣に悩んでるっていうのに…」

「何かあったんですか？」

「ああ君はさ…どのくらい大きさが好き？」

「どのくらいと言われましても、何の大きさか分からないんですけど…」

最初はいつものように笑っていた彼だったが、悩んでいると言つと真剣な表情で耳を傾けてくれた。

「胸だよ。ね？かがみん？」

「きゃっ！！」

「おっと！…驚くのは構いませんが、次からはお皿から手を離さないで下さいよ？」

説明をしようとした時、すぐ後ろからこなたが話に割り込んできた。それに驚いて持っていたお皿から手が離れたが、彼が掴んで渡してくれた。危ない危ない

「ありがとう。それでさっきの話だけ…」

「こなたさんは胸と言っていました、まさか大きさって言うのは…」

「そ、かがみは胸の大きさはどのくらいが好きなのかを聞いていたのだよ！」

「なるほど…ですがそれは男性にする質問ではありませんよね？」

「まあそれだけ気になってるんじゃないの？私は気にしてないけど」

「そうなんですか？」

「貧乳はステータスだ！希少価値だ！って言ってたからね、それ聞いたらこんな感じになったわけだよ」

こなたが胸を張って言うが…いや、あえて触れないでおこう。そろそろ質問に答えられるだろうかとじっと見続けていると、こちらに気付いたらしい

「自分は大きさは気にしませんよ。その人の個性の一部と捉えますし、どの大きさも可愛らしいと思いますよ？」

「あお君それじゃセクハラ…」

「え？いや、そんなつもりで言ったわけではないんですけど」

「まあいいわ、答えてくれてありがとう」

「ところで、こなたさんは部屋の片付け終わっただんですか？」

「いや、なかなか片付けられなくてさ、ちょっと息抜きに来たんだけど…」

「あおちゃん皆終わったよ」

皆が片付けを終えて戻ってくる。それでもまだ片付けきれないなんて…

「ちょっと見て来ます」

「私の部屋に？待ってよ〜」

「私も行くわ。なんか人手がいりそう」

「…ここですね」

「カチャ…パタン」

「…どうやってここまで散らかるんですか？」

「いや〜普通にしてるだけなんだけど〜」

「かがみの言うとおり人手がいりますね。京一達を呼んで来ますね
「？」

「頼むわ。とりあえず私は散らばっている服から片付けとくから、
よろしく」

「頑張つてね〜」

「まさか逃げたりしないわよね？」

「や、やだなあ冗談だよ冗談」

あお君のいない間にこなたの下着や衣類を片付ける。見ちゃったら
集中出来ないだろうし。はあ〜今日中に終わるのかしら…

気合いの入るお昼頃

「やっと終わった」

「ちゃんと整理整頓しないからこうなるのよ。反省しなさい」

「いいじゃないですか、今回は多目に見ましよう。皆さんで頑張ったんですし」

「でもほとんどあおちゃんがやったよね」

「ええ、私達は指示に従って動いただけですので」

「これだけ動いたら腹減るな……」

「そういえばもうお昼ですね。ご飯にしましょうか」

「作るのはいくつじゃなくて先輩なんだけどね」

こなたさんの部屋を片付け終わり、皆でキッチンに移動を始める。
何にしようかな

「そういえばあお君の部屋はいいの？」

「別に皆さんがご帰宅された後にでも出来ますからね。ゆっくりやるとしますよ」

「なになに？あおい君の部屋片付けるの？」

「そういえば部屋のどこを片付けるのか聞いてなかったわね」

「少し整理するだけですけどね。具体的には机やベッドですかね」

「片付ける所ないと思うんですけどね」

「目の届かない所に埃は溜まりやすいですからね、そういった所を掃除されるのではないでしょうか」

「似たような感じですね。それよりもお昼ご飯どうしますか？リクエストがあるのでしたら、出来る限り応えますけど」

自分の部屋の話しながらキッチンに向かいつつリクエストを取る。なければならないで何か作るのだが

「じゃあ…炒飯食べたいな。今日の朝はトーストだったからご飯食べたいし。あお君いい？」

「あ、だったらピーマンは入れないでね？」

「苦手なんですか？」

「う、うん…駄目かな？」

「構いませんよ。ピーマンは使わなくても炒飯は作れますから」

「ありがと〜あおちゃん！」

「どういたしまして、なら炒飯と何か一品作りましょう。それで構いませんか？皆さん」

「食べられれば何でもいいよ…早くね」

「私もお腹が空いてしまったので、出来るだけ急いでもらえると嬉しいです」

「私も先輩の料理なら何でもいいんで、早く食べたいです…」

「こう大丈夫？私もお昼には問題ありませんが…急いで下さい」

「皆だいが疲れてるみたいだな」

「出来る限り早く作りますので、皆さんは座ってお待ち下さい」

疲れ気味の皆にそう言ってキッチンに急ぐ。ご飯はお昼用に炊いておいたし、卵も食材もある。取りかかろうかな

「京一、テーブルを拭いてお皿をこっちにお願い」

「ここ置いてくぞ」

「どつも…よっと」

「あとのくらいだ？」

「ん〜1、2分かな」

「こういつ時って1分1分がやけに長く感じるよね」

「わかるわかる。それにいい匂いはするのにまだ来ないってところ

「がちよつとした罰ゲームみたいね…」

「京一これ運んでおいて〜」

「はいはいつと」

炒飯をお皿に盛って、京一に渡す。全部盛り終わったところで、同時進行していたもう一品を完成させる

「出来た、京一手伝って」

「はいよつと、人使いのお荒いことで」

「京一と自分以外疲れきってるからね。お待たせしました、炒飯と唐揚げの黒酢餡掛けです」

「どっちがメインか分かんないけど、いただきます〜す」

「いただきます…美味し〜疲れた体にはお酢がいつて言うわよね〜」

「酢に含まれる酢酸は疲労の原因である乳酸を分解して、血行の循環不良や乳酸の働きを抑える作用があるため、お酢は疲労回復に適していると言われています」

「流石みゆきさん。ですが最近になって乳酸は疲労物質ではないという研究成果が報告されているのをご存じでしたか？」

「いえ、そこまでは…」

「それでも優れた調味料である事は変わらないですけどね。黒酢の

場合は必須アミノ酸を含んでいますし。先ほどみゆきさんの仰った酢酸は乳酸を分解するだけではなく、糖分と共に摂取することにより、運動によつて消耗されたグリコーゲンの回復を促進させる働きもありますからね」

「……」

「あ、あれ？何か変なこと言いましたか？」

「いや、ここまで凄いやと思つてなかつたからさ……」

「先輩つて凄いですね」

「言つただろ？やるときはやる、つてな。こりゃあ明日のテストもいけるな」

食事しながら会話をしていると京一がテストの事を口にした。皆固まつたが何かマズかつたのだろうか

「テスト？明日？本当？」

「ああ。なんだ？HRの時先生が話してただろ？」

「あはは、聞いてなかつた……」

「そう言われますと、確かにそうでした……」

「私はラブレターの事で頭がいっぱいだったから、聞き逃したかも……」

「かがみ先輩ラブレター貰ったんですか？」

「私じゃなくてあお君がね」

「先輩モテるんですね。そんな気はしてましたけど」

「まあ今まで貰った数は大変な事になってはいるんだが…今はテストの方に集中しようか」

「かがみはあの時のことで苦しんだらしい。今度何かしてあげよう。それにしても八坂さんが現実逃避している気がする…気のせいじゃないかいいんだけど」

「たしかに勉強するっていう条件で泊まりましたけど、早速明日その成果を見せなきゃいけないなんて…」

「八坂さんドンマイ。そういえば永森さんはテストいつなの？やっぱり明日？」

「そうだったような気がします。詳しくはフィオリナの友人に聞いてみますけど」

「まあ今からでも詰め込めば遅くは無いわよね」

「よ〜し頑張ろ〜」

「私もそれなりに頑張ろっつと」

「私も頑張ります…！」

「さて、俺はどこまで行けるかな？」

「いつもの辺りとか？」

「頑張りなさいよ？」

「OK！そつちも頑張つてね！」

「ということは少し休憩をして、午後は楽しく勉強ですね。今度は自分達も行つ側ですが」

皆でテストに向けて意気込む。早速昼ご飯を食べ終え、お皿を片付けて居間に向かい勉強の準備を始める。自分は勉強道具を出して、洗い物をするためにキッチンに向かう。永森さんは早速メールを打っているようだ。あ、そうだ

「今の内にアドレスを交換しておきませんか？八坂さんも永森さんも皆さんのアドレスを知らないわけですし」

「それもそうね。それじゃあ……」

「はい京一、自分の分もやっついて？」

「しょうがねえな。ほら」

「ありがと。では自分は洗い物してきますので、交換しておいて下さい」

「わかったよ〜行ってらっしや〜い」

京一に携帯を渡して今度こそキッチンに向かう。まあ何も起こらないと思うし、話したりするだろうからゆっくり洗おうかな

>こなたview<

「それってあおい君のだよな？見せてよ」

「ん？ほれ。あんまりいじるなよ？」

「ありがとう…あおい君の携帯ゲットだぜ！」

「中身を見るのは八坂さんと永森さんのアドレスを交換してからにしましょ？」

「楽しみだね」

「男性の携帯電話の内容を見るのは初めてです…」

「まあ京一君以外みんなそうだと思うよ？」

京一君からあおい君の携帯を借りて、先に2人とアドレスを交換する。早くいじつとかないといつ戻ってくるかわかんないからね

「ん？ネットは趣味なものとかウィキとか？特に面白いものはないね。次はデータかな？」

「何かあった？」

「こっちにも特についていうのはないかな。次はアドレス…」

「泉先輩さつきから何してるんですか？」

「あおい君の携帯に何か面白いものがないか探してるんだよ。まだ見つからないけどね」

「ないなら作ればいいんですよ！これなんかどうです？」

あおい君の携帯を探索していると、八坂さんに話しかけられた。振り向くと笑顔で携帯の画面を見せてくる。そこにはあおい君の眠っている姿が映し出されていた

「こ、これはレアな！」

「今朝、先輩の部屋に行った時に撮ったんです。ちなみにかがみ先輩にはあげましたから、あとは待ち受けにするだけです」

「甘い、甘いぞ！これを見よ！残念ながら待ち受けにはこちらを使う！」

「これはキスシーン！？なんて羨まし…じゃなくて何でこんなものを…」

「ふっふっふ…しかもこれは2人のファーストキスのシーン！私にとってこの程度朝飯前なのだよ！」

「こなた！あんたまた隠し撮りしてたのね！」

「人聞きの悪いことを言わないでほしいね、富竹さん泣いちゃうよ？」

「誰だよ！」

「富竹さん知らないの？こりゃあ人生損してるね〜」

「そんな人知らなくても損はしないだろ」

「我々の計画を邪魔しないで下さい。手を出さなければ危害を加えないと約束しますから」

「計画って言ってもあお君の携帯の画面変えるだけでしょ？」

「あーヒドい！もうちょっとのってけると思ってたのに！」

「今のうちに待ち受けをキスシーンに…寝てるのはどうしよっかな」

「携帯の電源を落とす時の画面はどうでしょう？」

「いいね！ちょうど携帯も眠るし」

「自分もちょうどいいと思いますよ？」

「よしできた！ほら見て…よ？」

「どうしたんですか？こなたさん」

「あおい君？いつからそこに？」

「ついさっきですよ？さあて…八坂さんもこなたさんも、話をしましょうか？」

『ひいいい…』

明らかに八坂さんではない声と呼び方に振り向くと、あおい君が笑顔で立っていた。ああ…テスト受けれるかなあ…

テストへ向けて

「…そういうわけで待ち受けと電源が切れるときの画面以外は何もいじってないよ！ホントだよ！？」

「皆も見てましたから嘘はありません！信じて下さい！」

「…信じましょう。確認したところ今仰った所以外は何も変わっていませんでしたし」

「本当？じゃあ…」

「許しますよ、というよりこの程度で怒ったりはしません。この2枚は厳重に保管させていただきます。お2人もあまり人に見せないで下さいね？」

「ラジャー！」

「ありがとうございます！あゝ寿命が縮んだ…」

とりあえず2人と一緒に正座をして事情を聞くと、2箇所以外には手を付けていないらしい。嘘をついているようには見えないし、友人を疑うのも嫌だし許すことにしたけど…そんなに恐かったかな？

「ああ君凄いい迫力だったわね…」

「本気で怒っていたんじゃないですか？こうと泉先輩がふざけるから…」

「あおいの本気はあんなもんじゃないぞ？」

「京一さんは見たことがあるんですか？」

「ああ、だいぶ前に一度だけな。普段のあおいからは全く想像できないぞあれは……」

「あおちゃん、本気で怒るとそんなに凄いだ……」

「ほら皆さん、勉強しないと時間が過ぎていきますよ〜」

「先輩がさつきより恐く……ほんとこんな姿からは想像つきませんね」

「どうしたんですか？自分がどうかしましたか？」

「うっん？何でもないよ〜」

皆がこちらを見ながら小さな声で何かを話している。非常に気になるがそんなことより勉強をするべきだと思つので、皆に呼びかけ座らせて勉強を始める

「あお君ここはどうするの？」

「あ〜ここはこうして……」

「ねえあおちゃん、ここってこれでいいの？」

「え〜と……はい、あってますよ〜」

「なああおい、こここの式が分からないんだが……」

「ここは…」

「ねえねえあおい君ここは…」

「ちょっと待って下さい。どうして皆さん自分ばかり頼るんですか？みゆきさんがいるじゃないですか」

「そのみゆきさんもあおい君を呼んでるみたいだよ？」

名前を呼ばれて分からないところにアドバイスしていく。だが自分ばかり頼るといふのには納得がいかず、それを口にした時にはみゆきさんも自分を呼んでいた

「すみません、ここが少々理解出来ないのですが…」

「ここは…こう考えると分かりやすくなりますよ？」

「ありがとうございます」

「次はあなたさんですか。見せて下さい」

「いいけど、いいの？頼っちゃっても」

「ここがこうなってこれがここに來ます。もう諦めました、ですがみゆきさんやかがみも頼ってあげて下さい。教え方は丁寧ですし、場所的に近いと思うので。どうしても分からないという時だけ來てもらえると思います」

「わかったよ、みゆきさん…」

「お姉ちゃん」は？」

どうやら自分の意見を聞いてくれたらしく各々が席の近い人に聞いているようだ。これで少しは効率的に勉強できる

>京一view<

「ねえそついえばあおい君てどの位頭いいの？」

「気になるわね。みゆきに教えるくらいだからかなりいいんだろうけど」

「ゆきちゃん頭いいもんね」

「そんな…私なんてまだまだです」

「謙遜するなよ、むしろ誇るべきだと思うがな」

「頭が良いのは分かりましたが、神藤先輩の順位はどうなんですか？」

「萩原先輩、私も知りたいです」

「あおいに聞こえなきゃ…ってもう聞こえないか」

皆はあおいの順位を知りたいらしい。そりゃあ頭のいい高良に教えただから気になるのは仕方ないだろう。幸いあおいは勉強に集中しているようだし、今なら何話したって聞こえないだろう

「それじゃ最初のテストの時の順位からいこうか」

「最初？っていうと小学校かな？長くなりそうだね…」

「いや、話す順位はこのときのだけだ。あとはテストの結果発表の時にでも話してやるよ」

「それはいいけど、どれくらいだったの？その最初のテストの順位」

「…ダントツの最下位だ」

「へ？でも先輩頭よさそうですよ？」

「その後から努力したんじゃない？だとするとよっぽど悔しかったってことになるけど」

「悔しいってことはまずないな。あいつは名前だけしか書かなかつた、自分の意志で最下位になったんだ」

「あおちゃんが自分で？なんで？」

期待して聞いていた皆が驚きを隠せずに話す。理由を聞いてくるつかさの声を聞きながらチラリとあおいを見る。まだいけるな

「理由はたしか…『自分が答えを書いたら誰かの上に立つことになるかもしれない、だったら書かない』だったはずだ」

「凄い理由ですね、それで？それを聞いてからどうしたんですか？」

「とりあえず一発殴った」

「うわぁ…」

「よく当たったわね」

「その後、テストは自分の実力を知るためにやるんだって事を教えたら次からは真面目にやってたな」

「へへあおい君て昔から素直だったんだね。京一君が一回注意するだけでいうこときくなんてさ」

「まあ互いに唯一の親友だからな」

「唯一の親友？」

「ああ、俺もあいつも…」

「京一、勉強より話す方に集中したら駄目だよ？」

「あ、ああ……続きはまたの機会に話してやるよ。今は勉強だ」

「どうやらあおいが話をしていることに気付いたようだ。小声で皆に約束をして勉強に戻る」

「まあ大体の話の内容は分かるけど、今日は勉強しないとね？」

「聞こえてたのか？結構小声で話してたつもりなんだがな」

「あんな人数で声を潜めて何か話してればいやでも気になるよ。だから一旦手を止めて来たんだよ。何を話してるかは耳を澄ませば聞

「こえたし…まあ聞いてないことにするけど」

「サンキュ、さあて…スパートかけるか」

「そうね。あんまり時間ないし」

「自宅に帰ってからでもできますが、やはり少しでも多くこなしませんと」

「これだけ勉強したの初めてかも」

「こなちゃんはいつも勉強しないの？」

「私は大抵一夜漬けで乗り切るからね。こんな時間から勉強はしたことないよ」

話していた分を取り戻すようにペースをあげる。八坂と永森もそれを見てあげてきたようだ。それにしても一夜漬けでなんとかなるのか？聞いてみるか…

「なあ泉、一夜漬けって…」

「ん？言ったとおりだよ？まあ赤点は回避できるし、ゲームする時間はあるしね」

「お前に復習の文字はないのか？」

「ないね！あっても消しちゃうね！」

「復習は大事だよ？私は違う所見ちゃったりして、だんだん何を復

習してたのか分からなくなっちゃっけど…」

「まあつかさはやる気があるからまだマシとして、こいつは…」

「かがみさん、泉さんも今はこうして勉強しているわけですし少し押さえた方が…」

「そうそう。かがみも注意する暇があるなら勉強したら？」

「残念だけど、勉強しながら話してるから問題ないわ」

「むづ…無駄なところで器用だね。その器用さを何で料理とかに活かせないかな」

「うるさい！」

「2人とも落ち着いて下さい。今は言い争いをする時間ではありませんし、他の皆さんの迷惑になりますよ」

「い、ごめん…かがみもからかってごめんね？」

「分かってるんだけどつい…ごめん。私も悪かったわ」

「とりあえず一件落着か？」

言い争いを止めて勉強を再開する。皆も集中し始め、聞いたり聞かれたりを繰り返しながら順調に進んでいるようだ

「…今日はこのくらいにしましょつか？ 晩飯はどうします？」

「そうね…結構暗くなってきたし、もう帰るわ。晩ご飯は自分の家で食べるからいいわよ」

「早く帰らないと夜道は怖いからね」

「脅かさないでよ」

「ですが泉さんの言うとおりです。危険なことにかわりはありません」

「ましてや私達は女の子ですからね」

「神藤先輩と萩原先輩のどちらか一方だけでも一緒にいてくれたらいいんですけど」

「なら自分が皆さんを送りますよ。京一はどうする？」

「どうせなら2人の方がいいだろ。俺も行く」

「いいの？京一君の家ってあお君の家の隣よね？それにあお君わざわざそんな…」

「いいんですよ、皆さんを送っていきたくから送るんです。それに危ないですから」

「俺も、女ばつかで道端歩いてたら危ないだろうからな。無理にでも送らせてもらおうか」

外に目をやると、すっかり日も落ちて暗くなっている。帰り道の事を不安げに話していた事や、俺とあおいを除けば女子だけである事

から皆を送っていくことにした。あおいにしてみれば彼女さんが気になるんだろっかな

夜道

「すっかり暗くなっちゃったね」

「やっぱり夜道はちょっと怖いね…」

「そうですね。ですが男性が2人もいらっしやいますし、安全かと思えます」

「たしかにそうね。それにしても寒いわね…」

「大丈夫ですか？これ着て下さい」

「いいの？あお君寒くない？」

「平気ですよ。鍛えてますし、恋人が寒さで震えているのは見てられませんから。返すのは家の近くで構いませんよ」

「流石にちよつと大きいけど…暖かいわ、ありがとう」

「いえいえ。今日は彼氏らしいことは出来ませんでしたから、このくらいはしませんとね」

「先輩のコート…やっぱり彼女にしか貸さないのかな。いいな」

夜道を歩きながら話す。寒がっているかがみにそつとコートを掛けてあげると、嬉しそうに礼を言ってきた。後ろから視線を感じるが…何だろうか。振り向いてみると八坂さんと目があった

「…どうしましたか？八坂さん」

「いえ何でも、何でもありませんよ！コートが暖かそうなんてちつとも…」

「八坂さんも寒いんですか？」

「いえ、そういう訳じゃないんですけどね…」

「萩原先輩のは駄目なの？」

「いや、駄目とかそういうのじゃないけど」

「寒いなら寒いって言った方がいいぞ？テスト明日に控えて風邪、なんて悲しいすぎるからな。ほら」

「ありがとうございます」

「どうしたの？顔赤いけど…早速風邪ひいたの？」

京一が八坂さんに上着を着せてあげたようだ。赤くなっているようだが本当に風邪じゃないんだろうか、心配だ

「ん…いや、風邪じゃないと思う。特に熱っぱいわけじゃないから」

「ならいいけど…無理はしてないわよね？」

「そんな事してないから、平気平気」

「なら大丈夫ですね。他の皆は寒かったりしませんか？」

「私は大丈夫だよ。こんなこともあるうかと重装備だからね」

「私もあお君が貸してくれたから大丈夫よ」

「私は重ね着してるし、大丈夫だよ」

「私も特に問題はありませんよ」

「私は寒いのが苦手だから、ちゃんと暖かくしてるから」

「私も萩原先輩のおかげで暖かくなってきました」

皆に尋ねると微笑みながら返事をしてくれた。しかし萩原、ねえ…

「八坂さん、永森さん。そろそろ名字ではなく下の名前で呼びませんか？」

「へ？いいんですか？」

「自分は構いませんよ？まあ皆さんがどうするかは皆さんの判断にお任せします」

「私はいいよ」

「私はつかさとかぶらないように下の名前で呼ばれてたから、特に問題ないわ」

「私も」

「私もそちらの呼び方の方が親しみやすいと思うので、構いませんよ」

「俺も別に気にしないからな、好きにするといい」

「だそうです。これからもよろしくお願いしますね、こうさん、やまとさん」

「あ…はい、あおい…先輩」

「あおい先輩…でいいですよ、今度からは。皆さんとの距離を縮めるきっかけを作っていたいただいてありがとうございます」

呼び方を変えるように掛け合ってみると、皆がそれを了承してくれた。永森さ…じゃなかった、やまとさんが意図を理解してくれたらしく頭を深々と下げ、こうさんもそれを見て少し遅れて頭を下げた。

「どういたしました。ですが頭を下げられるほど大層な事をした覚えはないんですけどね」

「なに？あお君照れてるの？」

「べ、別に照れているわけでは…」

「ちょっと赤くなってるよ？」

「考えていたことを悟られてしまい、少し動揺しているだけですよね？」

「うぐ…」

「おやおや図星かな？」

「みたいだな」

「ほらほら、あお君をいじめないの…あゝもう着いちゃったみたい。はいあお君、それじゃ皆また明日ね」

「あおちゃん、泊めてくれてありがとうね。皆明日ね〜お姉ちゃん待ってよ〜」

「ええ、また明日」

皆にからかわれていると、かがみ達の家に着いたようだ。コートを返され、手を振りあって別れる。

「かがみ達の家がここなら…次に近いのは私かな？」

「では道案内をお願いします」

「了解〜それよりどうだった？彼女さんの家は」

「どつと言われましても…綺麗で庭等も手入れされていそうでしたね」

「むづ…普通すぎてつまんない」

「他に何と言えば良かったんですか？」

「そう聞かれると困るんだけど…あ、み…はまだ言わない方がいい

かもね」

「み？何ですか？」

「何でもないよ、気にしないで」

「そうですか？」

「泉さん、あおいさんには伝えなくても宜しいんですか？」

「いいのいいの、その方が楽しそうだし」

かがみ達の家の話をしていると、こなたさんの声が徐々に小さくなつていき、最後あたりは聞き取れないほど小さくなっていた。みゆきさんと2人で何か話しているようだが…

「こなた先輩にみゆき先輩、何を小さな声で話してるんですか？」

「ちよつと声大きい！静かにしてよ、あおい君に聞こえちゃうよ！」

「先輩達、結構聞こえてますよ？」

「むしろただ漏れだな」

「まあ楽しそうで何よりですけどね」

「流石あおい君！空気読んでくれるね！」

「まあ何かした場合、またお説教しますけどね？」

「勘弁して…それだけは、ホント」

「夢に出てきそうなんで、やめてもらえると助かります…」

盛り上がっている話に念のために釘を刺すと、どんよりとした顔で深々と頭を下げられた。まだやると決まったわけじゃないのに…

「なにも問題を起こさなければなんにもしませんから、安心して下さい」

「よかった〜これは問題にはならないね。おっと、楽しい時間は終わりみたいだよ。それじゃね〜」

「ここでしたか。それではまた明日〜」

「じゃあな〜…さて次は誰だ？」

「私は最後でしょうね、都内ですし」

「みゆき先輩もですか？」

「も、ということはどうさん達もなんですか？」

「ええ、私達も都内です」

「なら方向は同じですよ、行きましようか」

「そうですね。ではまず駅に向かっていただけますか？」

「なら少し急ぎましようか。乗り遅れたりしたら大変ですし」

こなたさんにも手を振り、次に送るのは都内に家のある残りの3人。次の目的地が駅に決まり、少し早歩きで向かう。家が都内のどこかは後で聞けばいいかな

「少し早く着きましたね」

「あのまま歩いてたら発車しちまってるがな」

「あおいさんの判断が正しかったということですね」

「でもいいんですか？わざわざ家まで送ってもらっても」

「やまとの言うとおりですよ。電車に乗ってまで送ることないんじゃないですか？」

「電車を降りてすぐに家があるという訳ではないでしょうし、電車の中でも危険がないとは言いませんからね」

「酔っ払いとか？」

「痴漢とかもいるでしょうし。だからさっきから京一先輩が睨みを利かせてるんですね」

「周りを見るだけだ。睨んでるつもりはないんだがな」

電車に乗り、空いている席に座って話をする。その間にも京一が周りの人の動きを見ているのだが、人はどうも睨まれていると感じるらしく、距離を取るように周りに近寄らなくなった

「…何故逃げる？」

「先輩目が、というより見た目がちょっと…ねえやまと？」

「まあ言いづらいけど…よくて不良かしらね」

「そこまで恐いか？つてかそんなのがこんな普通の4人と座ってるのは有り得んと思うが？」

「私達は京一さんの内面を知っていますから」

「内面を知らないから周りの人は逃げたんだと思うよ？」

「…まあ気にしないがな。むしろ理由はどうあれ、こっちの方が安全でいいと思うがな」

「フフ…あ、もう着きますよ。降りる準備をしましょう」

電車が止まりドアが開く。そこから混雑を避けるため、急いで降りて駅を後にする。ゆっくりしてたら人混みで降りられなくなるからね

「こうさんとやまとさんの家はどの辺りにあるんですか？」

「私の家はもうちょっと先に。やまとの家は私の家から少し離れた所にあります」

「まあ少しと言っても結構離れてると思うけど？」

「ではまずはこうさんのお家からですね。夜も更けてきましたし、

「急ぎましょう」

「あれ？仕切るのあおい先輩じゃないんですか？」

「みゆきさんの方が土地勘がありますし、判断力もありますから。自分は別に構いませんよ」

「それじゃ高良の言うとおり急ぐとしようか。こう、道案内頼むぞ」

「呼び捨てなんですか…分かりました。ちゃんとして来て下さいよ。」

「この家に行くのも久しぶりね」

「こうさんの案内のもと、こうさんを先頭に歩いていく。しばらくすると歩みを緩めたので、おそらくこの辺りなのだろう」

「着きました、ここが私の家です。それでは私はここで…はい京一先輩、ありがとうございます」

「ええ、ではまた」

「ああ、またな。まあ学校で会ったりするんだらうがな」

「そうですね、機会は幾らでもありますからね。またお会いしましょう」

「じゃあまたね？寝坊してテストに遅れるんじゃないわよ？」

「送っていただいてありがとうございます、それでは。あとやま

と一言余計だよ?」

「次はやまとさんですね。道案内をお願いします」

「わかりました。そこまで複雑な道順ではないので、迷わないと思います」

「このメンバーに迷いそうなのはいないだろ」

「まあね、みゆきさんもやまとさんも京一もしっかりしてるしね」

「あおい先輩はどうなんですか?」

「こいつは普通にしとけば迷ったりはしないさ。何か別のことに集中してたりすると道間違えたりするがな」

「あおい先輩ならしっかりしていると思っただんですが。意外ですな」

「お恥ずかしながら、私も読み物に耽るあまり、周りが見えなくなることかありまして…」

「みゆきさんも集中すると周りが見えなくなるんですね」

「どうやらみゆきさんも自分と同じようだ。こういう仲間がいると安心するよね、自分は変じゃないんだって感じがしてさ」

「あの〜盛り上がっているところ申し訳ないんですけど…私の家通りに過ぎましたよ?」

「す、すみません！ここですか？」

「はい、ここで合ってます。それにしても先輩達にも弱点があるんですね」

「周りが見えなくなる話をしていて周りが見えなくなるなんて…」

「なんていうか…ドンマイ」

「それではまた。多分私を見かけるのは、こうと一緒にいるところだと思いますが」

「わかりました、ではまた」

「それではまたお会いしましょう」

「じゃあな…最後は高良か」

やまとさんに手を振って別れて、最後に一番家が遠いみゆきさんを送るため歩き出す

「ええ。少し遠いですけど、お願い出来ますか？」

「ここまで来ておいて、帰るわけにはいきませんよ。道案内よろしくお願いします」

「ありがとうございます。私の家はここからですと…こっちです」

「それにしても都内に住んでいるのが3人もいるとはな。正直驚いたな」

「まあね。でも住むところが違うだけだからね、それに近いし」

「お隣ですからね、親しみやすいというのもあるでしょうし…あ、着きましたよ」

「大きいですね」

「なんか高そうな感じだな…」

「そんな、あおいさんの家ほど立派ではありませんよ…」

みゆきさんが謙遜するその家は京一の言うとおりの高貴な感じ漂う豪邸だった。たしかにみゆきさんには似合う家である

「なるほど。この家で育ったからこそ、みゆきさんの今の人柄があるわけですね」

「そんなことはありませんよ。お話はまた明日にしましょう？それではおやすみなさい」

「はいまた明日。おやすみなさい」

「またな、おやすみ…さてと、俺達も帰るか」

「そうだね。それにしてもみゆきさんの家は大きかったね」

「いや、お前ん家の方が広いだろ」

「そうかなあ…まあ別に気にしなくてもいいんじゃないかな、大きい

「さなんて」

「なんかムカつく言い方だな…まあいい。電車に乗り遅れないように走るか」

「途中でバテないでね！」

みゆきさんを送って帰りに走り出す。明日はテスト、勉強の成果が
でるか楽しみだ

テスト初日

「よし出来た。さて、と…いただきます」

現在の時刻はAM6:00。お弁当と朝ご飯を作り終わり、居間に運んでめざ〇しテレビを見ながら朝ご飯を食べる。ふむ…若干薄いかな？

「ご馳走さまでした。あ、お弁当詰めなきや…」

今日はなかなか忙しい。お弁当が2人分というのが直接の原因だろう。まあ了承したのは自分なのだが

「お弁当、鞆の中身、制服…よし、テレビは消したし、戸締まりよし、鍵と財布よし…さて、行って来ます」

準備をし終えて玄関に向かい、靴を履いて外に出る。玄関の鍵を閉め、門から出て閉めた後に伸びをする。京一の家の方を見るとそろそろと歩いてくる人達が見えた

「おはようございます。今日もよく晴れそうですね」

「おはよう、晴れそうですねあおい君って洗濯物はどうしてるの？」

「夜の間に戻して、朝起きてから干してますね。雨が降りそうな日は部屋干しするつもりです」

「ああ君おはよう、お風呂の残り湯を使うと余計な水使わないらしいわよ？」

「おはようございます、かがみ。勿論やっていますよ？ですから朝お風呂に入るときはお湯を少な目にしてます」

「あおいさんおはようございます、殊勝ですね。ですがお一人で全てをやらなければならないのはお辛くありませんか？」

「大丈夫ですよ？お気遣いありがとうございますみゆきさん。おはようございます」

「おはようさん。まあお前のことだ、楽しんでるんだろうな」

「おはよう京一。たしかに楽しいよ？やりごたえもあるし」

予想通りいつものメンバーだった。だが皆の少し後ろから感じる気配は…もしかして

「…こっちゃんですか？」

「うわあ！な、何でバレたんですか！？ちゃんと隠れてたのに！」

「うおっと！何でこんな所にこっちゃんか？」

「つけてきたんじゃないか？高良と同じ駅から乗るなら可能だろうし」

「いや、その…一緒に登校しようかな～と思ったんで。でもちよつと恥ずかしくて…こんなことに」

「言ってくれたらよかったのに」

「いや、隠れてたんだから言いたくても言えないでしょ」

「こうして出て来たんですから、一緒に登校してもいいんじゃないですか？」

「私はあおいさんの意見に賛成です。お断りする理由もありませんし、大切な友人ですから」

電柱の影から見えていたこうさんに声をかけると驚いて出て来た。どうやら恥ずかしくて隠れていたらしく、自分の一言で皆は一緒に登校することを了承してくれた

「それじゃ今日からお願いしますね！」

「今日だけじゃないんだ。よろしく〜」

「こら、酷いこと言わないの！今日からよろしくね？」

「またお話ししようね？よろしく」

「賑やかになりますね。よろしくお願いします」

「よかったですねこうさん、今日からよろしくよろしくお願いします」

「拒否られたらどうしたんだっていつのは置いといて…よろしくな」

皆が歩きながら挨拶すると、こうさんは嬉しそうに頭を下げた。そ

んな事をしていると学校に着いたようだ。こっさんとは靴置きで別れ、教室に向かう

「じゃあまた休み時間にね？ちゃんと頑張りなさいよ？」

「分かっていますよ、また後で。かがみも頑張って下さいね」

「まあ頑張ってみるよ。またね」

「自信はあんまりないけど…また後でね」

「成果がでるといいですね、それではまた後で」

「じゃあ後でな。こっちも頑張るから、そっちも頑張れよ？」

皆でかがみを励まし、かがみに皆が励まされる。かがみを送り、教室に入ってテストに備える。時間ギリギリまで勉強をしてテストが始まる。

先生が教卓に立ち、テストの説明を行う。因みに1時限目の先生がお休みのため、我らが黒井先生が教卓に立っている

「ほな、用紙を配るで合図があるまで裏返したらあかんからな？」

「…」

「そろそろやな…よし、始め！」

合図と共に裏返し、名前を書いて問題を解く。ちょうど勉強していたところが問題として出てくる。何度も復習した成果はきちんと現

れたようだ

>つかさview<

(あ、ここ皆で一緒に勉強した時にやったところだ。よし…)

いつもならいくら頭を捻っても出てこないものが、今日に限ってとめどなく溢れてくる。分からなかった問題が分かるのが嬉しい

(これなら行けそう…！)

>こなたview<

(ここは…京一君達とやったところだね。え〜と)

いつもなら一夜漬けで手に入れたその場しのぎの知識が、今回は一緒に頑張って手に入れた知識として頭に入っている。ちょっといつもとは違うけど…

(こっちの方が何かいいね、まあ柄じゃないけど)

>みゆきview<

(今回も手応えのありそうなテストですね…あおいさんに教えていただいた問題も出ていますし)

順々に問題を解いていくと、ふと手を止めてしまう問題が幾つかありました。そんな1つの考え方をあおいさんに教えていただいてから、少し見方が変化した気がします

(皆さん頑張っているんですから、私も頑張らないと…)

>京一view<

(全員ちゃんと出来てんだろうか…まあ人の事言ってる場合じゃないか)

問題を頭で考えながら、ペンを回してあおい達をチラ見する。皆は頑張っているようだ。

(さて、再開するかな。答えも出たしな)

>かがみview<

(え〜とここがこれだから、こっちがここに…うん。入るわね)
問題が次々と解けていく。昨日の勉強が活きたのか、それとも教えてもらったからなのかはわからないけど

(今回は手応えありって感じね。やっぱり皆でやった方が覚えやすいのかしら)

>こづview<

(あ、ここが違うのか。だったらこっち…これかな?)

先輩達に教えられた事が頭の中にはつきりと残っている。そのおかげでだいぶ空欄が消えてきた

(全部埋められるかな?ペース上げれば…!)

> あおい view <

「4 限目」

「そこまで！一番後ろの席に座っている人は回収して下さい」

「ふっやっとならったか」

「お疲れ様、と言いたいところだけどまだ初日が終わったただけだからね。まだまだ頑張らないと」

「それ言うなよ。もう疲れたって…頑張るといやあ、勉強したところ出たな」

「確かにあったわね。でもまだ初日なのにバテるの早すぎじゃない？」

「そんな事言っちゃって…かがみだって寂しかったんじゃないの？」

「べ、別にそんな事…」

「分かりやすいな本当」

「お姉ちゃん赤くなってるよ？」

「テストが終了してすぐに入って来ましたから、可能性はあるかと…」

「別になんだっていいでしょ！」

顔を赤くしながら話すかがみ。否定しているが、おそらく皆に会いに来たのだろう。素直じゃないね本当

「はいお弁当。皆さんどうでした？テストの方は」

「ありがと。今回は結構上狙えるかもしれないわ」

「私も。まあまだ始まったばかりだけどね」

「今回はちょっと自信あるんだ」

「私もです。手応えがありました」

「俺も少しは上がりそうだ。下がる事はないと思う。お前は？」

「自分もいい感じだったよ。やっぱり皆でやると覚えやすいんだろ
うね」

机を向き合わせ、皆で食べる為の場所を作って座る。皆それぞれ手
応えを感じているようだ

「まあ今はテストのこと忘れようよ。いただきます」

「そうね。うわあ、美味しそう…いただきます」

「ほんとだ〜ねえ、作り方教えてよ」

「いいですよ〜」

「ありがと、あ、ちょっと待って、何か書くもの出すから…」

「……むう」

「どうしたんですか？かがみさん」

「なぐんかつかさと盛り上がってるのを見て妬いちゃった、とか？
それとも料理できたらあんな風に話せるのかな、とか？」

「…！そんな事考えてなんか…」

「ホントかな？怪しいな」

「あんまりからかうんじゃない。お前と違って悩みがあるんだろう
からな」

「酷っ！もうちょっと優しい言葉をかけても罰は当たらないよ？」

「どうかしたんですか？」

つかささんに作り方を教えて、騒がしい方の話しに割り込む。かが
みの元気がない気がするけど…

「…何かあったんですか？」

「別に何も無い。あるとするならお前のせいだな」

「あおちゃんの？あおちゃんはずっと私と料理の話をして…」

「それが問題だったんだろ。結構へこんでるぞ？」

「元氣付けてあげて下さい。大事な恋人なんですよね？」

「かがみ。その気はなかったとはいえ寂しい思いをさせてしまいましたね。ちゃんと気付くべきでした、すみません」

頭を下げる。理由は何であれ彼女を傷付けてしまったことには変わりない

「…別に気にしてないからいいけど？まあ、次からはちゃんと構いなさいよ…？」

「勿論ですよ。構わないわけじゃないですか」

「いや〜やつぱりかがみはツンデレだよ〜見てるだけで疲れが吹き飛ぶよ！」

「私はツンデレじゃない！」

「危なっ！テスト期間中なのに頭が悪くなったらどうすんのさ〜」

「そうなたら仕方ないな。諦める」

「当たったとしても、これ以上悪くはならないんじゃない？とりあえず気が済むまでやるけど」

「あおい君つかさ〜みゆきさ〜ん助けて！2人が冷たいよ〜！」

「大丈夫ですよ、泉さんの頭は叩いたくらいでは悪くなりませんよ」

「あ…叩かれること前提なんだ」

「こなちゃんなら大丈夫だよ」

「あはは…根拠はないんだね」

「かがみを説得してみます」

「おお！頼りになる！」

かがみの怒りを買ったこなたさんに助けを求められ、説得することにした。果たして上手くいくだろうか

「かがみ、こなたさんも反省しているでしょうし、許してあげてはどうです？」

「でも……分かったわよ。でも一発くらいはいいでしょ？じゃないと気が済まないんだけど…」

「分かりました。でも一発だけですよ？」

「ありがと。さ～て…」

「どうだった？許してくれるって？」

「ええ、一発で許してくれるそうです」

「あゝ結局叩かれるんだ…」

観念したような声で喋っていたこなたさんは、この後小さな断末魔

の叫びをあげた。いつもと変わらないお唇。それを見ているだけで
テストの疲れは消えていった

テストの終わりと言話

「…やめ！一番後ろの席に座つとる奴は回収頼むわ」

「ああ…やっと、やっと終わった…」

「お疲れ様、これで今回のテストは全部終わったね」

「それじゃ今から昼飯か、解放されたら腹が減るもんだな」

「ならもうちょい腹減らさへんか？」

「…はい？」

「毎回これだけの物を運ぶんはしんどいんや。せやから手伝つてくれへん？」

「それは年…」

「なんや？」

「いや…何でもないです」

京一が先生に捕まったようだ。漏らした小言を聞かれてしまった以上、手伝わざるを得ないだろう。ドンマイ京一

「ならそれ職員室な。うちは先行つとるで」

「なんで俺が…ちょっと行ってくる」

「行つてらっしゃい。席は作つておくよ」

「おつすあお君。あれ？…京一君は？」

「黒井先生のお手伝いのために…」

「へえ、率先してやるなんて偉いわね」

「連れて行かれました」

「あゝ強制なんだ…」

「京一が小言を言わなければ代わることも出来たんですが…」

「言つちやつたつてわけね」

「ええ…」

2人で教室の入口を見ながら軽く溜息を吐く。その後は皆で場所を作り、京一を待っているとおある変化を感じた

「あれ？そこは京一の…」

「別に場所はどつだつていいでしょ？」

「とか言つてちやつかりあおい君の隣キープしてるし」

「やはりあおいさんの側にいたいんですね？」

「…別に？なんか間に空席があるのが嫌だっただけよ」

「そのなんか空いてる間の席は俺の席だったんだがな…」

「おかえり、お疲れ様。席は空いてる所ね」

「分かってる。まったく…なんでまたテスト用紙を見なきゃならぬんだ？」

「でもテストって返されるよね？」

「今言うなよ…今はテストって聞くだけでイヤなんだ…」

どうやら京一はテストにうんざりしているらしい。座りながら溜息を吐いている。京一が座ったところで皆でお弁当を食べる。

「はいかがみ、お弁当です」

「ありがとう。いきなりでごめんね？」

「たしかにいきなりで驚きましたが、苦ではありませんから」

「あおちゃんごめんね。私がちゃんと起きたら作れたんだけど…」

「いいですよ、気にしてませんから」

かがみにお弁当を渡す。今日はつかさんが作るはずだったらしいのだが、寝坊してしまっただけらしく、朝電話があっただけの分を頼まれていたのだ

「ところで聞いてて気になったんだが…」

「何？…私？」

「そつだ。あおいの前で言うのは不本意なんだが…」

「態度が以前と違っつていうのなら気付いてるよ」

「やっぱ気付いてるよな。何でなんだ？」

「理由は簡単なんだけど…とりあえずこの場所じゃ言えないわ」

「何か言いづらい事なの？」

「そついうのでもないんだけど…確かなのは、嫌いになったとかそついうのじゃないってこと」

「自分は信じますよ、疑う気なんてありませんし」

「ごめんね？あ、あお君だけになら…」

何かを隠している様子のがみが手招きする。何だろっ…とりあえず耳を貸してみる

「あのね？よくこなたがよくからかってくるでしょ？だから、皆の前ではああいう風に振る舞うようにしてみたの。これが理由よ…皆の前でだけだから、我慢してね？」

「分かりました…はは」

「何で笑うのよ！せっかく話したのに！」

「いえ、息がかかってくすぐったかったもので…つい」

「それで、理由は何だったの？」

「さほど深刻な理由ではありませんから、あまり気になさらないでください。ご馳走さまでした」

「そう言われると余計に気になるんだが…まあいいか。その言い方なら平気だろう」

「そうですね。あとはあおいさんにお任せしてもよろしいかと」

「やっぱり彼女の問題は彼氏が解決しないとね。ねえかがみん？」

「そうですね、期待させてもらっわ」

「むう…リアクションが薄いな」

「もうこの話はお終い。それよりもお昼休み終わっちゃっわよ？はいあお君、ご馳走さま」

「はい、お粗末様でした」

かがみが食べ終わって空になったお弁当箱を、渡した時と同じようにして自分に渡してくる。時計を見たかがみが皆に言うが、自分とかがみ以外はまだ食べている最中だ

「ちよっ！まだ半分あるんだけど！」

「ご馳走様でした。何とか間に合いました…」

「ごちそうさま。私もギリギリかな？」

「残るは俺とお前か…」

「フッフッフ…実は私はまだ60%しか力を発揮していないのだよ。見せてやるっ…これが80パー…」

「ご馳走さん。残念だったな」

こなたさんが、どこぞの弟の方のような台詞を喋っている間に京一が食べ終わったようだ。残るはこなたさんのみとなってしまった

「待つて！せめて最後までやらせてよ！」

「そんな事してる暇があるなら早く食べなさいよ」

「そうだよこなちゃん、時間ないよ？」

「分かったよ普通に食べるよ…」

「頑張つて下さいね、皆さんと待っていますから」

「ご馳走さま…うっ、お腹苦しい…」

「頑張りましたね。大丈夫ですか？」

「ありがと〜多分大丈夫」

「あ、もうお昼休み終わるからまた放課後ね」

「ではまた放課後に」

「じゃあね〜」

「また後でな」

「お姉ちゃんまた後でね〜」

「また放課後にお会いしましょう」

かがみが教室から出るのを見送ると、お昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。あとは午後か〜

「ほな、気い付けて帰るんやで〜」

「午後はテストに比べると断然楽だったな〜」

「確かにね。プレッシャーとか圧迫感とかそういうのがないからかな…」

「おっす〜帰ろっか」

「そうですね」

「やっと帰れるか〜やけに長く感じたな」

「だよね〜つかさとみゆきさんは準備出来てる?」

「ちょっと待って…出来たよ」

「私も準備終わりました」

「では帰りましょうか」

「そつえば、京ちゃん。あおちゃんとの…」

「こらつかさ！あんまり大きな声で言わないの！」

「そつだよ！あおい君に聞こえたら…」

「ああ、それならあおいは知ってるぞ？」

帰る準備をして教室を後にする。つかさんが何か言おうとしたが、内容は大体分かっている

「勉強している時に話してたことだね？それなら聞いたよ」

「ですが京一さんは、集中しているので聞こえていないと…」

「皆の声が気になったんだそつだ。それで俺に注意してきたんだろ」

「つまり、あの時の会話は…」

「ほとんど聞いていましたよ？」

「なら話は早いわね。私達は、2人の今までの話が聞きたいの。お願いできる？」

「私も！私達…友達だよな？」

「別に話せる範囲内であれば話すことはできますよ？」

「じゃあ早速…」

「待った。移動しながらじゃ話に集中できないだろ」

「あ、そっか…」

「どこか落ち着いてお話を聞ける場所は…」

「ならあそこは？最近オープンした喫茶店！スイーツが美味しいらしいのよ〜」

「じゃあそこ行こっか。頼みすぎないようにして」

「わ、わかってるわよ。ただ美味しいって聞いただけで別に頼むなんて一言も…」

「はは…かがみ、案内頼めますか？」

「ええ、任せて」

かがみが嬉しそうに返事をして歩みを早める。よっぽど甘いものが好きなんだね

「…あつた。ほらこじよ？」

「へ〜最近オープンしたって言うだけあるな。人が多い…」

「あ、空いてる席発見！皆、こっちこっち」

「人が見てるんだからはしゃがないで……」

「ありがとうございます、こなたさん」

「ほらお姉ちゃんも座って？」

「う、うん……」

「京一さんもどうぞ？」

「ああ、すまん」

こなたさんが見つけた席に皆が座る。正面には京一、左には仕切りの壁、右にはかがみ……。圧迫感はあるけど、話すにはちょうどいいかもしれないね

昔話

「さて…まず何から話せばいいんだ？」

「とりあえず2人が知り合ったあたりからかしら」

「あおい君は話さないの？」

「自分は必要な時だけ話します。主な話しは京一に任せますよ」

「分かった。じゃあ話すとするか」

「ではよろしくお願いします」

「たしか…知り合ったのは小学1年の時だったな。あれは昼休みか

…」

>京一view<

『何だよお前！僕達は今遊んでるんだ！』

『お前ら、ボールを花壇に入れたり、花を踏み荒らしておいて遊ぶのか？』

『お前には関係ないだろ！それにわざとじゃない！』

『わざとじゃないなら謝らなくていいのかよ！』

『だからお前には関係…』

『ありますよ。彼も皆さんと一緒に花を植えたんですから』

教室の前でサッカーをしている2人に声を掛ける。原因は花壇にボールを入れ、花を踏み荒らしたうえに反省していないからだ

そんないつ喧嘩になってもおかしくない状況に首を突っ込む奴がいた。それがあおいだった

『たしか同じクラスの…村山？』

『神藤あおいです。まあ殆ど話したことはないですから覚えていないんですけど』

『何でもいいけど花くらいで怒るなよ！』

『お前らなあ！いい加減に…』

『この花は、先生が1人1人に手渡しで配って一緒に植えたものなんです。花と皆が一緒に成長出来るようにと願いを込めたものなんです。花くらい、じゃありません』

『だからなんだって…』

『まだわかりませんか？あなた達はその花を踏みにじったんですよ？皆さんの気持ちを、先生の思いを』

『そんなつもりは…』

『なら謝ってくれませんか。自分達ではなく、先生に』

『…わかったよ。僕達が悪かった…行ってくるよ』

『わかってもらえてよかったです』

そのあと2人は職員室に行ったんだろうな帰りに先生がなんか言っていたから。残った俺達は倒れた花を直したり、水やったりしたな。

『…凄いなお前』

『君も凄かったですよ？萩原君』

『俺の名前知ってるのか？』

『とりあえず同じクラスの皆さんの名前は覚えましたから。それにしても…』

『な、なんだよ…』

『いえ、あんなに嫌々植えていた割には大事に思っているんですね』

『別に…あいつらが泣いてたからやったただけだ』

『あれは…女子達ですか？』

『ああ…花壇にボールが突っ込んできて泣いたからさ、俺が注意したわけだ』

『へえ…女子に弱いんですか？』

『そういつわけじゃないが…お前だって女子だろうに』

『おや、自分は男子ですよ?』

『…冗談か?テレビの見過ぎか?』

『失礼ですね、本当に男子ですよ』

あの時は驚いた。女だと思って話してた奴が男だったんだからな。本気で疑ったよ。

本当に失礼だったね、あの時の京一は

まあ今思つとな。あとは…帰りの時か

『それでは皆さん、さようなら』

『さようなら、なあ神藤一緒に帰るか?』

『いいですけど、帰り道はどの方向なんですか?』

『正門から出てあとは…え』と』

『と、とりあえず行きましょうか』

『そ、そうだな』

『…なあ、せっかく知り合っただから友達にならないか?』

『え?まだ友達じゃなかったんですか?』

『友達のつもりだったのか…ならよろしくな。改めて萩原京一だ』

『お昼に名前言いましたけど改めて、神藤あおいです。こちらこそ、よろしく願います』

この時友達になったんだっけな。懐かしいな

『…じゃあ俺の家ここだから。また明日な』

『ええ。それにしても自分の家の隣だったんですか。近いですね』

『隣？そこのか？』

『いえそちらではなく、反対の方です』

『反対？つつつと…この無駄にでっかいやつか？』

『無駄って…まあそうです。それが自分の家です』

『ほんとに近いんだな。これなら一緒に帰ったり、遊んだりできるな』

『そうですね。ではまた明日』

『…知り合った時の話しはこのくらいか』

『昔から優しかったんですね先輩達は』

『先輩？…やっぱりお前らか』

「先輩達がこのお店に入るのが見えたからやまとが入るうって…」

「嘘言わないの。本当はこうに引きずられて隣の席に座りました」

「やまとさんも大変ね…」

「大丈夫です。もう慣れましたから」

「そ、それで他にはないんですか？」

「小学生時代はもうあまりないな。あるとしてもこないだ話したテ
ストの話くらいだし、あとは…」

「あとは？まだ何かあるの？」

「…雪花と桜花が亡くなりました」

「え〜と…誰ですか？」

「あおいの弟と妹だ。弟の雪花は双子だがな」

「手短に説明すると…という事です」

2人がこちらのテーブルに来た時、あおいが口を開いた。一番言い
辛いことをあいつは自分で言ったのだ

「小学生時代に亡くなったんですか？」

「ええ、3年の時に…」

「…じゃあ次は中学時代だな。お前ら聞いてるだけじゃ暇だろ、何か頼めよ」

「そうね…でも1つ気になることがあるの」

「なんですか？」

「茜ちゃんっていう妹がいるのよね、その茜ちゃんは…」

「言いたいことは分かりました。学校の事ですよね？」

「学校…そっか、3年の時に事故があつてその後に茜ちゃんが産まれたんなら…」

「そうです。茜の年なら小学校に通いますね。普通は、ですが」

「何かまずいことでもあるの？」

「茜は少し難しい病気なんです。最近では体調も良いんですけど、悪くなればまた入院するでしょうね」

「そんなにひどいんですか？」

「ええ…残念ながら。ですがまだ死に至るほどではありませんし、治療法も見つかりそうなので」

「そうなんですか、よかった」

あおいの話を聞いて皆は安心したようだ。今度はメニューと財布を

交互に見ながら唸っている…お、注文始めたみたいだな

「さて、そろそろいいか？」

「いいよ、注文終わったし」

「そうね、頼むわ」

「あおいもいいか？」

「…覚悟はしてるから平気だよ」

「何であおちゃんが覚悟するの？」

「話したくない事とかあるんじゃないですか？先輩も人間ですし」

「そうですね。たしかに中学時代はあまり知られたくはないんですが…皆さんになら知られても構わないと思っただんです」

「一応言っとくが、覚悟を求められるのはあおいだけじゃないぞ？」

「どゆこと？」

「過去を知る覚悟…それが皆さんに求められるんですね？」

「ああ…」

皆が静かにこちらを見る。覚悟なら出来ているといった感じの目だ。先ほどから話なら聞いているし、出来てないわけないか

「じゃあ話すとするか…中学に上がって、あおいは変わった。2人の事故を自分のせいだと考えてたんだろ。荒んでた」

『ぐっ！…覚えとけよ！』

『また喧嘩か？らしくねえ事するようになったな』

『京一には関係ないだろ…それに自分でやりたくてやってるわけじゃない』

『僕が…僕があいつらにお金を集られて、殴られてたら…』

『なるほど、それでか…じゃあこっちの傷は何だ？』

『これは…転けた』

『せめてもう少し上手い嘘吐くんだな。転けたくらいでこんな傷出来るわけないだろ？』

『朝練で…』

『手がズタズタになるまでやる朝練を見てみたいもんだな』

『本当に朝練で出来たんだ。気付いたらこんな手に…』

『まだ自分のせいとか思ってたのか？』

帰り道を歩きながら話す。あおいの手は深く切れて酷いことになっていた

『実際そうだろ…自分が止めていればあんな事には…』

『お前はまだ小学生だった。どうしようもなかっただろ』

『それでもだ！あの時行くなって言っておけば！』

『何も起こらなかった、か？…ふざけてんのか？』

『京一…？』

『あの時観覧車に乗ってたのはお前の弟妹だけだったか？止めてりゃ誰も死ななかつたのか？てめえは結局、身内の事しか考えてねえじゃねえか！身内が死んで！へこんで自暴自棄になって！…てめえは逃げてるだけじゃねえか』

『京一に何が分かるんだよ！』

『てめえの弟妹なんぞ知るか！俺には兄弟はいねえ。それでも目の前で苦しんでる友人見るとな…分かるんだよ』

『京一……ごめん』

俺達は家の前で言い合ってた。本音をただ相手に言い合うだけだった。あの時が初めてだった。誰かのために泣いたのも、あおいの泣いてる姿見たのものな。これがたしか中学2年の時だったな。

その後だな、事件が起きた…というより降りかかってきたのは

鬼の如く

「事件？」

「ああ事件だ。巻き込まれたとか、起こしたとかじゃない。狙われたんだ…たしか休みの日か。学校なかったし」

『いい天気だな…散歩でもするかな』

『やあこんにちは』

『てめえは…がっ！』

『餌になってもらうよ？君』

『……………』

『京一…いないのか？』

『ピリリリ……………』

『ん、京一だ…もしも京一？』

『残念だけど俺は京一じゃないよ。変わってあげようか？』

『あおい…か？なんか変なことになっちまったみたいだ…』

『何…一体何がどうなって…』

『君がさあ、お金貰おうとするの邪魔したからだろう？言ったよなあ？覚えとけってさあ』

『この間の君か。貰おうとしてた、じゃなくて、あれは集るって言うんだよ』

『気に障るねえ…まあいいや。この人返して欲しかったらさ、君の学校の体育館まで来てよ。それじゃ』

『体育館…か』

俺は家を出て散歩してたんだが、途中でこの間の奴にあつてな。何回か後ろから殴られて、気付いたら体育館で倒れてた。俺の携帯で話しているあいつが言うには俺達の通ってる学校の体育館らしい

京一が何処にいるか分かった自分は、体育館に向かいました

『京一！』

『ギリギリだね。あとちょっと遅れてくればよかったのに』

『京一を返して貰えるかい？』

『なら謝罪しろ。邪魔してすみませんでした、くらいがわかりやすいだろ』

『謝ることないぞあおい…お前は間違ってたんだから』

『五月蠅いなあ、黙っててよ』

『ぐっつ！』

『京一…分かった、謝ればいいんだな？』

『物分かりがいいね謝ったらちゃんと…』』

『…正しいことをして、どうもすみませんでした』

『…それが君の謝罪かい？友人消えちゃってもいいの？』

『謝る気はない。それでも京一は助ける』

『じゃあ消えちゃえよ！』

おそらくこの間の奴がリーダーだったんだろう。一言放っただけであおいを後ろから狙う奴らが出て来た

振り返るまでには鉄パイプが振り下ろされましたが、自分には当たりませんでした。そこにはボロボロの体で走ってきて、自分を庇ってくれた京一がいたからです

『何やってんだよ京一！』

『大丈夫…か？どうせボロボロなんだ。こんなもん食らってもあんまり変わらない…』』

『可哀相になあ…まあそこまでやったのは俺達だけ。邪魔しなきゃこんな事にはならなかったのになあ。ハハ…』』

『…もういいか？』

『ああ?』

『もう話すことはないか?』

『あおい...?』

『京一、後で病院に連れて行ってやるからな。そこで大人しくして
いてくれ』

『何だ? さつきとは違うなあ。気でも狂ったか?』

『ただ完全に頭に来ているだけだ、気にするな...!』

『頭に来た、ねえ...じゃあその頭潰してあげるよ! やっちやえ!』

『それはこっちの台詞だ。今、潰してやるからな...!』

この時だな。俺が初めてこいつが本気で怒るところを、本気を出して戦っているのを見たのは

あの時は流石にね...

『何でだよ! 数はこっちが圧倒的なのに!』

『時間かかるなら手伝って...やろうか?』

『大丈夫だ。怪我人は寝て待ってる』

『駄目です! 強すぎます!』

『くっそ…まだまだ！まだ集めれば…！』

『おい、なんか電話してるぞ？』

『応援でも頼んだんだろ…ちょうどいい、纏めて潰せば効率的だ』

『そついう問題かよ…』

『京一を傷付けた仲間だ。仲良く消えてもらわないとな』

『あおい…お前、本当にあおいか？』

『他に誰がいるんだ？』

圧倒的だった。いつものあおいとは何もかもが違った。口調も、性格も…同じところは俺を友人として見てくれたことくらいだったな

「やっぱり恐かったですか？」

「まあ私達に怒った時よりは恐いんだろうけど…」

「そりゃそつだ、お前達の時なんて可愛いもんさ」

「そ、そんなに？」

「ああ…あの時のあおいは表現しづらいほどの威圧感があったな。もし表現するとすれば…相手の言葉を借りて、鬼だな」

「鬼って…」

「実際にこいつは俺を護るように戦ったんだが…その後ろ姿に鬼を見た。その日は眠れなかったな。相手も鬼を見たらしい」

「最後はどうなったの？」

「相手は増援に増援を繰り返して、最終的に…70人くらいだったな。それを1人で倒してあおいの勝ちだ」

『許して…俺が、俺が悪かった…』

『あおい！もうその辺に…』

『いや、駄目だ…せめて逃げられないようにしてからだ』

あおいは全員を倒した後にリーダーの両脚と腕を潰して俺を病院に連れて行った。一番近いところにな

「…これで終わりだ。質問は？」

「その不良っぽい人達は？」

「あおいが通報したらしい。リーダーが何もかも話したおかげで俺達はお咎め無し」

「京一君は？結構ボコボコにされたんでしょ？」

「入院しましたよ。肋も何本か折れてましたし」

「なかなか退屈だったな、あれは」

「おお君は？大丈夫だったの？」

「こいつは朝練で出来た傷意外は無傷だ…全く腹立たしいがな」

「その後は？学校とか…体育館とかは？」

「あゝそれは…」

あおいが視線を逸らして言葉を濁す。仕方がないので俺が説明する

「校舎は無傷だ。だが体育館は内側は半分廃墟状態だった」

「自分が相手を倒す際にちよつと…」

「ああ、なるほどね…」

「まあそれもあいつらのせいになったから…」

「お咎め無し、ですか…」

「今はもう直ってるんですか？」

「いや、元々旧くなってたからな。そのまま取り壊して新しくなった」

「つまり証拠は消えたわけだね？」

「まあそうなりますね」

クリームソーダをつつきながらあおいが言っが、質問はまだ終わっ
ちやいないだろ

「じゃあ…あおちゃんと京ちゃんは普通に卒業したの？」

「ああ、あおいにはあだ名が付いて、俺には変な噂がたつたがな」

「あだ名と噂？どんな？」

「あおいは鬼とか神藤の神に鬼付けて鬼神とかな。俺には関わった
ら鬼が出るゝとかだな」

「あれ？休日の話だよね、それに聞いている限りは生徒出て来てない
し」

「言つたろ？リーダーが何もかも話したつて。話した場所が学校近
くの病院だったし、俺の病室に聞こえるくらいうるさかつたからな。
聞いている人間がいても不思議じゃないだろ」

「噂は広がりやすいつていいますからねゝまあ先輩、ご愁傷様です」

「高校じゃ呼ばれていないので、少しは楽ですけどね」

「たしかに皆からは神藤君とか呼ばれてるわね。何で？」

「簡単だ、呼ぼうとする奴がないからだよ。あだ名や噂を聞いて
怖がつた奴は来たがらなかつたみたいだし、来た奴は知っていたと
しても小学時代からの知り合いだったり、あおいの性格をよく分か
つてる奴らだつたからな」

話を聞く皆の顔が曇ったり晴れたりと変化する。女子ってのは表情豊かなもんだ

「質問よろしいでしょうか、これで最後にしますので。聞き辛いのですが…中学時代に友人はいらっしゃったんですか？」

「…いや、誰もいなかった。お互いが唯一の友人だったんだ」

「それでこの間…」

「そつだ。小学生時代からの知り合いも友人と呼べるほどじゃなかった。だから互いが唯一の親友になったんだ」

「小学生時代に友達はいたんですが、本気でぶつかってきてくれたのは京一だけでしたね」

「そつか…でもさ酷くない？」

「ん…何でだ？」

「私達は親友じゃないの？」

「ああそついうことが…いいんじゃないか？親友で」

「何か適当ですね…まあ京一先輩らしいですけど」

「まあそつ言うなって。あおいはどうだ？皆は親友か？」

あおいに話を振る。視線がそちらに移り、あおいは考えるように固まっている

「…親友じゃないんですか？」

「いや、質問してるのはこっちなんだけど…」

「そうでしたね。自分は親友だと思っていましたよ？」

「一緒に夜を過ごした仲だもんね」

「つかさ、その言い方は誤解されそうだからやめてくれる？」

「誤解ですか？ふむ…」

「いや、出来れば考えないで下さい」

「分かりました。今度調べてきます」

「あおいさんは勉強熱心なんですね」

「いえいえ、みゆきさんに褒められるほどではありませんよ」

「ははは、分かんなくてよかったな」

意味を考えるあおいに笑いながら話しかける。意味分かったらこいつら生きて帰れんのかな…

「おやく？かがみんや京一君も分かっちゃうのかな？」

「う…そんな事ないわよ？ねえ？」

「まあ俺はあおいと違って健全な男子なんでな、意味は分かるぞ？」

「なんか自分が健全じゃないみたいない方やめてくれるかな……」

「じゃあさじゃあさ、京一君耳貸して〜」

「ん？何だ？」

「……とかさ、ないの？」

「無いな。そういうのは持って無いだろうし、持たないだろうな」

「そんな！あおい君本当に持ってないの！？それでも男！？」

「な、何、何ですか？あんまり揺らさないで下さい〜」

「お前にとっては刺激の強いもの……だと思っぞ？」

「何？刺激？カラ〇ーチヨ？ハバネ〇？ジヨロキ〇？」

「先輩……これから頑張って下さいね？」

「あお君？そういうのを持ってくれとは言わないけど、少しくらいは持ってた方が……その……あ……」

泉に肩を揺らされ、こうには肩を叩かれ、かがみからは真面目に訴えかけられているようだ。あおいは混乱してるみたいだし、色んな意味で修羅場だが……ほどほどにしるよ？親友”達”

意外な敵

「…つくしゅ！」

「あら、あお君風邪？」

「まだ酷くはありませんけど、早く治したいですね。」

「何？かがみにお弁当作れなくなるから？」

「それもありますけど、休んでしまったら皆さんに会えないじゃないですか」

「嬉しい事言ってくれるね〜でもそういうのは1人に言うべきだよ。ねえかがみん？」

「何で私に振るのよ！」

「恥ずかしがるなよ。お前ら恋人だろ？」

「そうですよ。恥ずかしがらなくても…」

「うるさい！」

視界がぼやけ、手足が怠い。そんな中話しているとドンとかかがみが押す。冗談だったのだろうが、ここは川の橋の上だ。いつものように、とはいかず体は易々と水に浸かってしまった

神藤家

「くしゅ…う〜」

「ゴメン。私のせいで風邪引いちゃって…」

「かがみのせいじゃありませんよ。元々風邪っぽかったんでしょから、気にしないで下さい。それより休ませてしまってますみません」

「いいのよ、私が押したから落ちちゃったんだし…」

「そういえば連絡はどうしたんですか？」

「あお君のは京一君が、私のはつかさが先生に知らせたみたい。私も風邪扱いだけど親にはメールで事情を話しておいたから大丈夫よ」

「そうですか…両親に気付かれなくてよかったですね〜」

「ゴメンね…ゴメン」

体を拭き、パジャマに着替えてベッドで話していると、かがみの目に涙が溜まるのが見えた。ただ少し酷くなっただけなのに…

「謝らないで下さい。かがみは悪くありませんよ」

「でも…」

「でしたら、風邪薬と水を貰えますか？寝ていないといけないので。それでおあいこです」

「分かったわ。水は…キッチンよね、薬は？」

「薬は居間の棚…中段の右から3つ目の引き出しですね」

「じゃあ取ってくるから、大人しくしててよ?」

「分かってます。お願いしますね」

パタンとドアを閉めてかがみが部屋を出る。これでかがみが納得してくれればいいんだけど…

>かがみview<

「え〜と…あつた。あとは水ね」

彼の言うとおり薬があつた。あとは水を汲んで持つていくだけなのだが、胸が高鳴る。やはり2人つきりなのが原因だろうか

「我ながら不謹慎ね…」

確かに2人つきりなのだが、彼は今風邪をひいている。今日中に治るといいんだけど…

「まあその辺は本人次第だろうけど…」

意味も何も考えずに呟き、コップに水を入れてあお君の部屋に向かう。しかし自分で言うておいてなんだが、どっちの意味なんだか…

「両方? だったらやっぱり私は…」

こなたの言うツンデレってやつかな。どっちでもいいか、好きなこ

とには変わりないんだし

「お待たせ、薬と水…」

『月○蝶でああある!!』

「あ、お帰りなさい」

「人が薬取ってきてる間に何やってんのよあんたは！」

「いえ、1人では少し寂しかったもので…ゲームでもと思ひまして」

「あ…そっか…」

1人部屋には広すぎるこの部屋で、彼はただ私が戻ってくるのを待つしかなかったのだ。しかも動けるのは私1人。考えてみれば、気を紛らわせる物を探していても不思議ではなかった

「寂しかった?ごめんね」

「構いませんよ。それよりかがみは皆さんの前では我慢していたんでしょ? 皆さんいませんし、自由に振る舞って下さって結構ですよ」

「じゃあちよっとお願ひがあるんだけど…いい?」

>京一view< 学校

「よつやく昼か、あおいがないだけでここまで暇とはな」

「かがみもないし…恋人に突き落とされるのってどんな気分なんだろ」

「それはちょっと…」

「まあ今気になるのはあいつらが何やってるかだな」

「まあかがみが看病してあおい君は寝たきり…ってのが一般的な解答かな」

「他にはどんな解答があるんですか？」

高良からの質問に頭を捻る泉。しばらくして考えるのを止めた。どうやらい考えは浮かばなかったようだ

「そつえばお姉ちゃん、あおちゃんの家にいるんだよね？」

「まああの場所からだつたらあおい君の家の方が近いし、可能性は高いね…ということとは？」

「あの家にはあいつら2人だけだろうな。看病のために部屋で2人つきり…」

「恋人に看病してもらうなんて、ロマンチックですね」

「ほんとだよな」

「ロマンチックどころじゃないんじゃないか？」

「下手すると無限にイチャイチャしてそうな2人が夕方まで2人っ

きり…かがみにとっては夢のようなシチュエーションだね」

あいつ大丈夫なのか？あおいが風邪ひいてるの忘れてなきやいいんだが…心配だな

>かがみview< 神藤家

「どうですか？」

「ん…居心地いいわよ。変なこと頼んでゴメンね？」

「いえいえ、こちらとしても可愛いかがみを見られて癒されていますから」

「もお！あんまり恥ずかしいこと言わないでよ…」

「フフ…分かりましたよ」

薬を飲んでからお昼にお弁当を食べて、今自分がかがみの頭を膝の上に乗せて頭を撫でているところだ。

「ですが…何故このような事を？」

「前にあお君が頭撫でてくれたことあったでしょ？だからまた撫でられたいな…って思って。膝枕はされてみたかったから…じゃ駄目？」

「理由としては十分だと思いますよ？何か希望があれば言って下さいね」

「わかったわ。それよりどう？薬飲んだら楽になったりした？」

「だいぶ楽になりましたよ…まあ眠気がしますけど」

「薬飲んだら眠くなるわよね…私も寝ちゃおうかな…」

「かがみの場合、疲れが溜まっているんでしょうね。眠たいのなら寝てもらっても構いませんよ？」

「そう？じゃあ…」

布団を捲って潜り込み、もぞもぞと登ってくる。自分の横から顔を出して、頬を赤く染めながら笑顔を向けてくる。不覚にもドキドキしてしまう

「おやすみっ！」

「…！お、おやすみ…なさい」

頬にされた、いきなりのおやすみのキスに動揺して敬語を忘れかける。彼女は素早くこちらに背を向けて狸寝入りを始める。まったく…態度が全然違うんだね

「…寝てますか？」

「スウ…スウ…」

「寝てますね…なら…」

「きゃ！…スウ」

狸寝入りをしている彼女を後ろから抱き締める。突然の事で小さく悲鳴をあげたようだが、そのまま寝息を立てているふりを始める。それに払いのけるどころか、まわっていた手を握ってきたあたり、この状況を気に入っているようだ

「ずっと、ずうっと一緒にいましょうね？かがみ」

「…あたりまえじゃない」

「やっぱり起きてるんじゃないですか」

「私だって空気くらい読むわよ…」

「かがみ…愛してますから」

「私だって、あお君に負けないくらい好きなんだから…」

握られていた手から手を離し、くるりとこちらを向くかがみ。お互いに顔を見ていると自然に唇を合わせていた。それから2人で寝てしまったのだろう。胸の辺りにかかる息を感じながら時計を見ると、すでに夕方の時間を指していた

「かがみ、起きて下さいかがみ。もう夕方ですよ？」

「ふえ？ああ、おはようあお君…ん〜」

「おはようございます…ってキスは数時間前にしましたよね？」

「あれはおやすみの…これはおはようのよ」

「おはようといっても今は夕方なんですけどね」

「いいじゃない、ほら…」

破壊力の高い顔でキスをねだられる。断る理由もなく、自分としてもキスしたくないわけではないのでそれに応える

「まだかかるか？だったら黙っとくが」

「うわ！きよ、京一？」

「どど、どこから入ってきたのよ！」

「玄関から入ってドア開けて、だ」

「あ、鍵閉めてなかった…」

「過ぎた事ですから、気になさらないで下さい。それより京一だけ？」

「いや、あいつらは部屋の外にいるぞ？泉は聞き耳立ててるかな」

「ちょ！なんでばらしちゃうの！」

「なるべく早く出てきた方が身のためだと思うがな。それに俺達は見舞いに来てるんだろ」

「むう…わかったよ」

「あおちゃんお見舞いに来たよ〜大丈夫？」

「はいあおいさん、今日の授業の分のノートです。かがみさんの分も峰岸さんから受け取っていますよ？気分はどうですか？」

しづしづ現れたこなたさんとは違い、つかさんとみゆきさんは純粹にお見舞いに来てくれたようだ。嬉しいね

「ありがとうございます皆さん。もう大丈夫みたいです、ご迷惑をおかけしました」

「ありがとね、来てもらっちゃって」

「いやいや、こつちも可愛らしいかがみの声を聞かせてもらって大満足だから。お互い様だよ」

「あお君みたいなこと言うなあ！」

「おやあ？あおい君はそんなこと言ったのかな？ていうか添い寝までしちゃってるし」

「うるさいな〜もう！」

「あおちゃん、お姉ちゃんと一緒に寝てたの？」

「ええ、お昼頃から一緒に寝てました」

「まあ、素敵ですね」

こなたさんに状況をからかわれ、声を荒げるかがみ。2人きりの時

とはまるで違う態度なのだが、頬は赤いままだ。そんな姿を見て
ると自然と頬が緩んでしまうのだが、大事にしていけないと…そう
思う

テストの結果

「おはようございます皆さん」

「おはようあおちゃん…」

「どうかなさったんですか？つかささん」

「どうした？元気ないぞ」

「だって今日はテストの…」

「あゝ確か結果発表だったっけ」

「そ、朝からこんな調子なのよ。もうちょっと自信持ってもいいの
にね」

「そうですね、皆さんと一緒に頑張られたんです。きっといい結果
ですよ」

「みゆきさんの言うとおりです。つかささんも頑張っていたじゃない
いですか」

「悪かったら悪かった時だ、次頑張りやいいんだよ」

「そゝそゝ良くても悪くても、あおい君の奢りで喫茶店行けばいい
んだし」

「私もなかなか出来ましたから、先輩ならいい点いつてますって」

「みんな…ありがとう」

皆でつかさを励ます。こなたさんの言葉は聞かなかったことにしたいものだ…

「それでは、また帰りに…あ、こなた先輩ちょっと」

「ん？何かな？」

「……」

「いいねそれ！早速言ってみるよ」

「それじゃ頼みましたよ」

「またね〜ごうさん」

「それじゃ私もまた後でね。つかさ、どんな結果でもあんまり落ち込むんじゃないわよ？」

「うん、ありがとうお姉ちゃん」

「さて、あおい君ちょっとお話が…」

「なんですか？」

「賭けしない？」

「賭け、ですか？」

「そう賭けだよ、テストの結果でね。私、もしくはこうさんの方が順位が上ならあおい君の奢りで喫茶店に行く。あおい君の方が順位が上なら私とこうさんの2人の奢りで喫茶店に行く、どう？」

呼ばれて席を立ち、こなたさんの席に行くと言った話を聞きかかれた。話していると他の皆も集まってきたようだ

「へえ、楽しそうだな。乗ってみるよ」

「乗ってもいいですけど…何故こうさんが出てくるんですか？」

「そりゃあこの話はこうさんが考えたからね、出て来ても不思議じゃないよ」

「…でしたらこなたさんは？」

「楽しそうだから参加してみたんだ〜それより乗るんでしょう？だったら結果を楽しみにしないとね〜」

「あおちゃんいいの？こなちゃんテストはいつつも点数いいよ？」

「こうさんも今朝の言い方ですと、かなり高そうですが…」

「構いませんよ。勝ったとしても負けたとしても、あのお店にまた行けるんですからね。楽しみです」

「さてはお前、あの店気に入ったな？」

「たしかに雰囲気もよかったですし、出て来た品々もとても美味し

かったですよね」

「値段の割にスツゴク美味しかったよね〜でも私は、あおちゃんの作った料理の方が美味しいと思うけどな〜」

京一の言うとおり自分はあるお店を気に入った。つかさんは自分の料理の方が美味しいと言ってくれたが、まだまだだ

「ありがとうございます…そろそろ席に戻りましょうか、先生来ましたし」

「あ、ホントだ〜」

「それではまた後ほど」

「頑張れよあおい」

「応援どうも。まあ頑張るっていつでも受け取るだけなんだけどね」

「皆おるか〜？それじゃ空き時間のうちに廊下に張り出しとくさかい、よく自分の順位を確認せ〜や…そや、暇やしテストでも返そか」

「うわ、暇って…」

「時間の有効活用や！文句あるかい！」

「いえ、特にないです…」

先生が少し早めに説明を始める。しかし時間が結構余ってしまった

らしく、この時間で全教科のテストを返すようだ。確かに有効活用
かもしれない

「…次！神藤！」

「はい」

「今回も頑張ったみたいやな。次もこの調子でな」

「はい！ありがとうございます」

「どうだ？勝てそうか？」

「まだ見てないから分からないね。まあ大事なのは順位なんだけど」

「…次！萩原」

「はい」

「復習やらしっかりしとるみたいやな。ちゃんと出来とるわ」

「どうも。ま、頑張りましたから」

「どう？出来てなかったところ、ちゃんと出来てる？」

「ああ、ばっちりだ」

その後もテストの返却は続き、男子が終わり女子に移る。朝自習半分
分終わっちゃったけど…大丈夫なのかな

「次〜泉〜」

「はいはい〜」

「授業聞いとらん割にはよ〜出来とるわ」

「は、はい…ありがとうございます」

「どうだった？あおちゃんに勝てる？」

「分かんないね〜彼の实力を見るの今回が初めてだからね」

「次、高良〜」

「はい」

「今回もよ〜出来とるで。次も頑張り〜」

「はい、ありがとうございます」

「ゆきちゃんどう〜」

「いい感じですよ〜つかささんも自信を持って下さい」

「う、うん…」

「…次〜柊！」

「はい…」

「よく頑張ったな。今回一番順位上がったんは柊や、皆も見習うんやで」

「あ、ありがとうございます！」

どうやらつかささんはいい成績だったようだ。先生の言葉からもつかさんの表情からもそれは読み取る事が出来た。よかった

「やりましたね、つかさん」

「えへへ…ありがとう、皆で頑張ったから出来たんだよ」

「つかさんが一生懸命頑張られたから結果が出たんですよ」

「さて、それが自分らの今の実力や。次はそれより上を目指すんやで？分かった奴から休憩や」

「ほらほらあおい君、順位見に行こ？」

「そうですね、行きましようか」

「おすす…ってどっか行くの？」

「あ、お姉ちゃんだ〜」

「その調子だとよかったみたいね」

「うん、心配かけちゃってゴメンね？」

「いいわよ、妹を心配するのは姉として当然だから。それより何で皆立ってるの？」

「順位見に行くんだとき。皆で行くぞ」

「ああ、張り出されてるんだっけ」

「ほら、かがみも行きますよ」

「ちよっ！分かったから引つ張らないの！」

教室に入ろうとするかがみを巻き込んで張り出された順位を見に行く。既に人が集まって来ている

「こりゃあ早めに覗いた方がよさそうだね…」

「女性陣はやめた方がいいでしょうね。かがみの時のように倒れたら大変ですし」

「あゝ…あれはもう勘弁して欲しいわね」

「そっか、お姉ちゃん押されて倒れちゃったんだっけ」

「そ、皆の前でお姫様みたいに抱えられちゃったんだよ」

「うるさい！仕方ないでしょ！？倒れたんだから！それに抱えたのはあお君なんだし、そういうのはあお君に言つてよ！」

「…あれ？何か自分の事悪く言われてませんか？」

「まあそれは置いて…ここは俺達に任せてもらおうか」

「大丈夫ですか？全員分覚えるのは大変なのは…」

「大丈夫ですよ。メモ帳とペンは常に持ち歩いていますから」

「ならお願いできる？」

「ええ、少し待っていて下さい」

京一を連れて順位を見に近付く。まあ2人の方が探す人数も半分だしね。全員分をメモして離れる。結構大変だねこれ

「どつだった？」

「3位：みゆきさん、12位：かがみ、28位：こなたさん、37位：京一、46位：つかささん…こんな感じですね」

「私、こんなに頭よくないよ」

「つかささんの努力の賜物ですよ」

「ふっふっくん見たか！私の実力…ってあれ？あおい君のは？」

「そうでした、ちょっと行ってきますね」

「今回は皆順位上がってるわね。特につかさのなんて凄いじゃない」

「先生にも褒められちゃったんだ」

「へえ、つかさの成績ってそんなに悪かったのか？」

「うん、でもちゃんと頑張れば出来るって分かったから。ずっとこの調子でいきたいかな」

「次からもこの成績をキープするんだぞ…お、帰ってきた」

「ただいま」

「おかえり〜どうだった？私より上？それとも下？」

「とりあえず…上ですね」

戻ってきて結果を知らせる。こなたさんは納得いかないようだが、結果は結果だ

「なにそれ？ちゃんと順位教えてよ〜！」

「気になる言い方ね。ちゃんと教えなさいよ」

「京一君だって知りたいよね？ね？」

「俺は聞かなくても分かってる。どうせ1位だろ？」

「そっなの？あおちゃん」

「ええ、まあ…なんで言っちゃうかなあ、京一」

「気にするな、皆に問い詰められるよりはマシだろ」

「やはりあおいさんは優秀なんですね」

「いえいえ、きっと偶然ですよ。いつも上位の人が欠席されたとか、調子が悪かったのでは…」

「何言ってるんだ、10年近くそんな偶然続くわけないだろ」

「ずっと同じ順位って1位の事だったんだね」

「まあちよつと考えれば分かるんだけど。最下位と1位以外に居続けられる順位なんて、なかなかないからね」

順位がばれると皆が食いついてくる。気付かれないようにその場を後にしようとする1人以外は、であるが

「…こなたさん？」

「な…何かな？」

「賭けは自分の勝ちでいいんですよね？」

「賭け？ああ、そうだったね…」

「まさかとは思つが、なかったことにしようとしてなかったか？」

「そんな事ないよ？ちよつとど忘れしただけだよ」

「なら何故目を逸らしているんですか？」

「これは…はいすみません、逃げようとしてました」

「正直でよろしい。で、さっき言ってた賭けって？なに賭けてたの？」

「喫茶店のメニューをどちらが奢るかです。自分の方が順位が高かったので、こなたさんとごうさんの奢りですね」

「何でこうさん？まあいいわ、喫茶店行くなら私も行くわ。奢りなんでしょう？」

「来たいなら来てもいいよ？食べ過ぎて太っても…」

「そのくらい分かってるわよ。ちゃんと考えて食べるから」

「ならやまとさんも呼ぼうよ。あそこなら待ち合わせも出来るし」

「そうですね、ちょうどお話しをするのにも向いていますし」

「あ…ちょっと…これ以上増えるのは…」

「来たいなら来てもいいんでしょう？なら呼ぶわ。つかさメール打って送っておいて」

「わかった〜こなちゃん、ゴメンね〜？」

早速メールを打ち、やまとさんに送るつかささん。正直こなたさんとごうさんには可哀相だが、賭けだからね。それに仕掛けてきたのはあちらからだし、仕方ないよね。ご愁傷様

喫茶店にて（前書き）

新年明けましておめでとごうございます。今年も青陰、あおいの日々をよろしく願います。

喫茶店にて

「私クリームソーダとあと、ポテトも下さい」

「じゃあ私はチョコパフェとティラミスかな。最初はこのくらいにしとかないとね」

「なら私はチーズケーキのストロベリーソースかけと、ホットミルクで」

「私はチョコレートケーキとカプチーノをお願いします」

「では自分は…ホットサンドとホットコーヒーを貰えますか？」

「なら俺はヒレカツサンドとストレートティーを頼むとしようか」

「よく頼むね〜皆…すみません、サラダ下さい」

「私もサラダ下さい…」

今、自分達は喫茶店にいる。午後のホームルームが終わってからすぐ来たのだが、向かっている最中も2人は暗い顔をしていた

「かしこまりました、少々お待ち下さい」

「かがみ先輩〜やまと〜もうちよっと抑えて下さいよ〜」

「わざわざ名指ししないの！それにあお君に聞いたけど、賭けを持ちかけたのはあんたら2人なんでしょ？だったら文句を言わない！」

「あちゃ〜先輩話しちゃったんですか…」

「話さないでほしい、とは言われていませんからね。聞かれたのなら話してしまいますよ」

「ぬぐう…仕方ないですね、悪いのはこっちですし」

「気にしていませんよ。そういえばこうさんは何位だったんですか？」

「私ですか？」

「そ〜だよ！私達こうさんの順位知らないんだよね〜教えて教えて〜」

「それ言ったら私だって先輩方の順位知らないんですけどね」

頼んだ品を待っている間に話は賭けや順位になる。まあたしかに順位は気になるけど

「だったらあおい君のメモ帳貸してあげれば？あれに私達の順位書いてあるし、こうさんの順位は本人に書いてもらえばいいじゃん？」

「でしたら少し待って下さい」

「ああそついやお前、自分の順位書いてないんだつたな」

「…はい出来ました。やまとさんもどうですか？」

「私ですか？たしかにテストの結果は出ましたけど…」

「え？結果出てたの？」

「…メールで教えたはずだけど？」

「あれ？そうだったっけ？」

「…まあいいわ。それよりなんで先輩知ってたんですか？」

「なんとなくですよ。まさか本当に結果が出ているとは思っていませんでしたけどね」

「まあテストが始まったのは陵桜より1日遅れてでしたけどね。陵桜よりは人数少ないので早く終わったんじゃないですか？」

「そうだったんですか。はい、これが自分達の順位です。空いているところに書いてもらえますか？」

メモ帳を開き、ペンと一緒に渡す。メモ帳に見入るのは構わないのだが、他のページは出来るだけ見ないでほしいものだ

「…書けました、これが私達の順位です」

「え〜と…こうさんが17位で、やまとさんが19位だね」

「お2人とも凄いじゃないですか〜」

「あおい先輩に言われるとなんだか哀しくなります…」

「ということで、メモ帳の中身を見せてもらいますよ！」

「ちよっ！止めて下さいよ！」

「あっ！いいじゃないですか、減るもんじゃないんですし」

「他のページに何が書かれているのか気になるので、見せてもらっていいですか？」

「まあそこまで言うのなら…ですが見ても特別変な事は書いてありませんよ？」

「なんでやまとには優しいんですか！不平等じゃないですか？」

姿勢の全く違う2人。メモ帳の中身を見たいという点以外は似ていないのだが、息は合っている。今は足をバタバタさせるこうさんを落ち着かせることにしようかな

「許可を取ろうともしないで取り上げる事と、許可を取ろうとする事は姿勢が全く違うのではありませんか？」

「そうね、たしかにいきなり取り上げるのは駄目だと思うわよ？」

「じゃあちゃんと許可を取ったら貸してくれるんですか？」

「それはそうですよ。貸してはいけない理由はありませんからね」

「でしたら…さっきはすみませんでした。改めて、メモ帳を見せてもらっていいですか？」

「はい。ちゃんとと言えるじゃないですか、偉いですよ」

頭を下げて謝るこうさん。改めてちゃんとした姿勢で頼んできたので頭を撫でてあげる。偉い偉い

「よしよし」

「うっ…やめてくださいよ…」

「とか言っても満更でもなさそうだけど？」

「いやそりゃあ…」

「ああ君、いつまでこうさんの頭撫でてるの？」

「おや、かがみも撫でて欲しいんですか？自分は構いませんが」

「いやそういう意味で言った訳じゃないんだけど…」

「…で？何この状況」

現在の状況を説明すると右にはかがみ、左にはこうさんが座り自分が撫で続けている。やはりかがみは撫でられたかったようで、満足そうな顔をしているがこうさんをじっと見ている…なんなんたる

「あのかかがみ？」

「ん？何？」

「いつまで撫でていればいいんですか？」

「え？ああそうね、もういいわ」

「私ももういいですよ？」

「わかりました…あ、来たみたいですよ」

「えっと…どれが誰のだっけ？」

「そのホットサンドはあおい先輩ので、ストレートティーは京一先輩のですね。ティラミスは…かがみ先輩のです」

「サンキュ。よく覚えてたな」

「皆さんがどんなのを食べるのか気になりましたからね。気にしてたら覚えちゃいました」

「ありがとう、こうさん」

「こんなの軽いものですよ！ですから頼むメニューを減らして…」

「悪いけど、それはないわね」

「先輩、先輩の彼女なんですからなんとかして下さいよ」

「そう言われましても、個人の自由は尊重したいので…」

「駄目ですか…」

こうさんが溜息を吐きながらテーブルに突っ伏そうとするが、タイ

ミング悪く残りのメニューがテーブルに到着する。残念だね

「まあ嘆くのは止めときます。今はこっちの方が楽しそうですし」

「メモ帳まだ読んでなかったんですか？」

「楽しみは後の方まで取っておくものですよ？え〜と…」

「何が書いてあるの？」

「最初の方は殆どメモですね。日時と場所、用事の内容まで事細かに書いてありますね。あ…」

「何？何か面白いものあったの？」

「かがみ先輩、つかさ先輩、こなた先輩の苦手な食べ物を書いてありますよ〜」

「本当だ。京一君のも書いてあるし、これは…レシピかしら」

「そうですよ。苦手なものを入れないレシピを考えているんです」

「へえ、ちゃんと考えてくれてるんだ」

「みたいですね。ちょっとページを空けてから結構後ろまでレシピ書いてありますから」

パラパラと捲ってメモ帳を最後のページまで目を通す。それはいいのだが…

「いつの間にか皆さん見入ってますね」

「そりゃあ横でそんなもの見てたら見たくなるわよ」

「い〜じゃん？見たってさ」

「どのような事が書かれているのか気になってしまったもので…」

「私がピーマン苦手だって言ったの、こんな綺麗に書いてたんだね」

「まあ俺の分まで書かれてるなんて驚いたがな」

「空いてるページは私達の分ですか？」

「分かりましたか。まだ教えていただいていない人がいますからね、少々ページを空けてレシピを書いたんです」

「先輩、料理好きですね〜」

「家では基本的に家事担当ですからね、いつの間にかこんな風になっ
つてしまいました…熱っ」

「そうなの？お母さんとかは料理とかしないの？」

「家にいるときは作ってくれますよ、自分は手伝いにまわりますか
ら。しばらくは自分で作るようになりましたが」

「各々頼んだメニューを食べながら話す。ホットサンドは熱かったの
で、しばらく放置する。まだ食べるには熱すぎたみたいだ」

「それで…1ヶ月後だっけ？あお君の家族が帰ってくるのって」

「ええ、正確に1ヶ月というわけではありませんけどね。おおよそです」

「結構長いわよね…ねえ、もしあお君さえよければ私達の家に来ない？」

「…お気持ちは嬉しいんですが、今は断らせていただきます」

「何で？断るような理由あるの？」

「かがみやつかさんの家族のご迷惑になりかねませんし、それに…」

「それになに？」

「刀を素振りしたり、朝早くから走り込みするわけにはいかないでしょう？」

「だったら大丈夫だよ。かがみん家の近くに神社があるから、そこで素振りすればいいじゃん？走るときは静かに家を出ればいいんだし」

「成る程…ですが関係者に一度許可を頂きますと」

「ああ、それなら何とかするわ。心配しないで」

神社の事を考えながら話していると、かがみがさらっと言う。何だ

ろう、何かあるのかな

「かがみは知り合いなんですか？」

「知り合いっていつか身内ね」

「身内？」

「そういえば言ってなかったわよね、私のお父さんがその神社の神主なの」

「そうなんですか、立派ですね」

「かがみもつかさもお正月とか巫女姿で神社にいるよ、萌えるよ？」

「巫女ですか、きっと似合っているんでしょうね」

「萌えるでしょうね、いつそあおい先輩も巫女に……」

「まあそれはやるかは分からないけど……どうするの？私的には来て欲しいんだけど」

「私も！あおちゃんお家に1人つきりなんて寂しそうだもん」

「……わかりました。そこまで言うのでしたら断るのも悪いですし、泊まらせていただきます」

「本当？やった……じゃなかった、準備もあるだろうから私達は先に帰るわね。こなた、こうさん、美味しかったわ。ありがとう」

「ありがとうこなちゃん、こうさん。今度はゆっくり話そうね?」

「こなたさん、こうさん、ありがとうございました。またこうして皆さん一緒に集まって話したいですね」

「いってことさく満足してもらってこっちも嬉しかったし。明日報告してもらってチャラかな?」

「最初は賭けしたこと後悔しましたが、なんだか今はやってよかった気がします。ではまた明日」

「皆さん自分達は先に失礼しますが、なるべく2人を嘆かせない程度に楽しんで下さいね」

「分かりました。それではまた今度」

「あおいが柊家に行くなら…結局朝はやまと以外は皆揃うのか」

「やまとさんも同じ学校でしたらよかったです」

「仕方ありませんよ、みゆき先輩の言葉は嬉しいですが今更学校変えるのも難しいでしょうし」

食べ終えた皿を片付けた後、2人に対するお礼と、皆に先に帰る主旨を伝えて店を後にする。

「それにしても、いきなり来て問題はないんですか?自分を知らないのでは…」

「皆にあお君の事は話してあるから大丈夫よ？」

「つまりご家族は自分の事を知っているんですか？」

「うん、お泊まりから帰った後に話したんだ」

「それで知っているわけですね。納得しました」

「じゃあ準備したら私達の家に来てね、お父さんとお母さんには私達から話しておくから」

「待ってるね」

「ええ、分かりました」

かがみとつかさんと家の前で別れて、早速準備するために急いで家に入り支度を始める。しばらくはこの家に誰も居なくなるのか

「よし…準備出来た。忘れ物はないし、戸締まりは…出来てるね。じゃあ、しばらく行って来ます！」

荷物を纏めて廊下に向かって声をあげる。玄関と門の鍵を閉めて柵家に向かう。

「あつた、ここだね…」

空いている右手でインターホンを押すと、しばらくの間後、玄関が開く。そこには優しい笑みを湛えたかがみがいた

柊家にて

「この度此方の御家で御世話になります、神藤あおいと申します。ご迷惑をかけることもあるかと思いますが、精一杯役立てるよう努力します故、何卒宜しく御願ひ申し上げます」

玄関から上がり、居間に案内され正座をして挨拶する。結構緊張するものだ

「あお君…堅くなりすぎ」

「しかし、かがみやつかささんのお姉さん方や両親に挨拶するんですからこのくらいはしませんと…」

「そんなに堅くならず、顔を上げてくれるかな」

「はい…」

「じゃあまずは私から自己紹介するわね。柊いのりよ、かがみ達の長女なの。よろしくね」

「次は私ね、柊まつりです。いのり姉さんの妹でかがみの姉よ、よろしく」

「私は柊ただお。いのり達の父親だよ。よろしく」

「よろしくお願ひします。それはいいんですが…こちらの方は…」

「私？そういえばまだ自己紹介してなかったわね。柊みきです、か

「がみ達の母親よ？」

「母親…ですか？失礼ながら全然そのように見えないのですが。自分の目にはお若く映りましたので。」

「あらあら嬉しいこと言ってくれるのね。」

「たしかにお母さん年相応には見えないわよね…」

「だよね…」

驚いた。てつきり姉妹の1人かと思っていたのに…母親と聞いてもまだ信じられないんだけど

「それより部屋はどうするの？空いてる部屋なんてないし…」

「だったらかがみの部屋でいいじゃない。恋人なんだし。」

「なっ！？お母さん、何言ってる…」

「じゃあいのり、まつり、つかさの部屋かしら。私の部屋やただおさんの部屋もあるわね。」

「私は大歓迎だよ？」

「こらまつり、かがみの彼氏さんなんだからたぶらかさないの。私の部屋の方が安全よ？」

「相部屋という事ですか…自分はもちろんかがみの部屋に行きますが。かがみ、構いませんか？」

「う、うん…わかった」

「やっぱり彼女のところに行くよね〜はあ」

「分かってたけど…寂しいわ〜」

「つかささん、いのりさんとまつりさんが落ち込んでいるんですけど…何かあったんですか？」

「いのりお姉ちゃん達お付き合ひしてる人いないから、落ち込んでるんだよきつと」

小声で話しをしていると2人が近付いて来た。話を聞かれていたのだろうか

「あおい君、ちょっと頼みがあるんだけどいいかな？」

「なんででしょうか？自分出来る範囲の事ですか？」

「もちろんよ。呼び方の事なんだけど、この家で過ごすんだからお父さんとお母さんはともかく、私達2人は姉になるんだから呼び方を変えてくれる？」

「姉上？」

「いくらなんでも、そりゃないでしょ」

「でしたら…お姉ちゃん？」

「ぐ…駄目、いいけど駄目！」

「駄目ですか…なら、姉さん？」

「うん、このくらいがしっくりくるね。はい決定！」

「姉さん達もういい？あお君連れて行きたいんだけど」

「あゝ部屋に？荷物もあるからね。案内してあげなよ？」

「ほらあおい君、早く行ってあげなさい」

「はい、ではまた後ほど」

かがみの声にいのり姉さんとただおさんが反応する。立ち上がったから改めて気付いたが、今の今まで正座してたんだね自分

「ほらここよ？あんまり見せられるものじゃないけど…」

「はゝこれはまた可愛い部屋ですね」

「そ、そうかな…あ、荷物はそっちにね」

「ここですか？」

「うん、布団は私のベッドの横に敷いて寝ればいから、そこなら邪魔にならないでしょ？」

「そうですね…しかしなんだか緊張しますね」

「まだ緊張してるの？普通にしていれば大丈夫よ、悪い人なんていないし」

「そういう意味ではないんです。皆さん良い方ですし…緊張している理由は…彼女の家に上がるのも、彼女の部屋に入るのも初めてなんですよ」

「だったら仕方ないわね。私だってその…同じなんだし。恋人ができたり、家とか自分の部屋に上げたりするの初めてなんだから…」

「ちょっとまつり、押さないでよ」

「いのり姉さんが下がってくれないからじゃん」

お互いに赤くなって俯きながら話す。しばらくそのままだったのだが、部屋の外から声が聞こえたのでドアの方を見ると…

「姉さん達何してるの!」

「うわ見つけた…」

「まつりが大人しくしてないから…」

「ドアを少し開けて中を見ていたようですが…なにをしていたんですか?」

「妹の色恋沙汰は姉として気になるのよ。だからこっそり見てたわけ」

「どんな恋愛してるかってのも気になってたしね。でも聞いてたと

おりみたいだし、安心したわ」

「聞いてたとおりですか？」

「そうそう、話していると君の事2、3分に1回は出てくるからね」

「私そんなにあお君の話してたの？」

「そうよ、姉としては妹に恋人ができて嬉しいんだけど、1人の女としては何とも言い難い心境よね」

「だからって妹から彼氏取るうとする？」

「いいじゃない貸してくれたって、今日から1ヶ月は弟も兼ねてるんだから、私達にだって権利はあるじゃん！」

「権利を主張するのはいいけど、あお君は物じゃないんだから！」

右腕をかがみが、左腕をいのり姉さんが引つ張り、まつり姉さんはベッドに腰掛けて観戦モードに入っている…まあ若干右に重心を傾けるから左には動かないんだけど

「そういえば、かがみの誕生日はいつなんですか？」

「いきなりね…7月7日よ？つかさも同じね。それがどうかしたの？」

「いえ、自分は約1ヶ月の間ここ柊家で家族と同じように暮らすわけですよね？」

「そっただけど？だから姉さん達を姉さんってつけて呼んでるんですよ？」

「ええ。ということは、自分がかみやつかさんの兄さんになるわけですよね？」

「兄っ!？」

「へへあおい君の方が誕生日早いんだ。だったらお兄さんだね」

「はい、この間誕生日を迎えましたし」

「ならかがみはお兄ちゃんって呼ばないとね？」

「うっうっ…」

「呼ばないんですか？自分はどちらでも構いませんが」

「皆々夕食何が良かったら上にいる人もちよつと来て〜」

みきさんの声に皆が反応する。いのり姉さんは左腕から手を離し、まつり姉さんと降りていった。すんなり離してくれたね…以外だ

「ほら、早く降りますよかがみ」

「うん、ああ…い、お兄ちゃん」

「はは…2人きりの時は今までどおりで結構ですよ。自分が家族の一員であり、柊家の皆さんがいらっしやる時にはその呼び方でお願ひ出来ますか？」

「分かったわ、あお君」

「それと…」

「まだあるの？早く行かないとお母さん心配するわよ？」

「すぐに終わりますよ…たとえ家族の前ではかがみが妹だとしても、かがみは自分の大事な恋人ですから…言いたいことはこれだけです。行きましようか？」

「うん！」

「…お待たせしました」

「いのりとまつりから聞いたが、随分馴染めたみたいだね」

「はい、結構引っ張られてきました」

「ふふ…すっかり気に入られたみたいね」

「そりゃあ、初めての弟だもん。気に入るわよ」

「かがみとつかさにとっては初めてのお兄ちゃんだけどね」

先ほど引っ張られたと思ったたら今度は左右から姉さんに抱きつかれた。つかささんはわけが分からないようだが、かがみは唸っておりいつ怒るか分からない。ちよつと怖いよかがみ

「ねえまつりお姉ちゃん、あおちゃんがお兄ちゃんってどういっ」

と？」

「……ってことよ。だから次からはお兄ちゃんって呼んであげるのよ？」

「わかった」

「お兄ちゃんか……すっかり家族の一員だねあおい君」

「はい、改めてよろしく申し上げます」

「そういえばお礼を言っていなかったね。うちのかがみとつかさがそちらにお世話になったようで……」

「お世話？自分の家に外泊したことですかね。こちらこそいろいろと手伝っていただきましたし、風邪をひいた時はかがみを休ませる事になってしまいました、すみませんでした」

「いやいや、あれほど熱心に頼まれたら断るわけにもいかないからね」

「そんなにですか？」

「そう、初めてだったよ。かがみは本当に君のことを好きなんだね」

「もうお父さん！今そういう話しなくてもいいでしょ！？それに2人もいつまで引っ付いてるつもり！？」

ただおさんに話しかけられたが、今度はそれほど緊張せずに話すことが出来た。だがそんな話をしているとかがみが真っ赤になって反

応ずる。かがみに睨まれながら怒られた2人は渋々、しかし早々と離れていった

「そ、そういえば夕食がどうか言っただけ？」

「そうそう何にするのかよね？あおい君の歓迎会も兼ねてパーティにきたいね、パーティと」

「まったく…でも歓迎会は賛成ね、あおいお兄ちゃんは何がいい？」

「自分が決めていいんですか？そうですね…辛いもの以外なら何でも構いませんよ？」

「一番困る解答ね…」

「まあいいじゃない、あおい君に気に入られるような料理を作ればいいんだから。かがみもつかさもお兄ちゃんのために手伝ってね？特にかがみは頑張らないとね」

「お、お母さん…」

「妹達が頑張るのでしたら自分も頑張りましょうかね」

「あらいいの？」

「お世話になるんですから、そのくらいはさせて下さい」

「そう？悪いわね」

姉さん達が無理やり話を逸らす。かがみがそれに反応して自分に話

題を振るが、自分が決めるのは無遠慮のような気がするので断ることにした。みきさんはそれでも楽しそうだからいいとして…かがみとつかささんも頑張るのか…楽しみだね

夕食

「ねえあおいお兄ちゃん、切り方これで合ってる?」

「合ってますよ、それはこちらのお皿にお願いします」

「このお皿ね?」

「ええそうです、こちらはこれで終わりですね」

「こつちも味を調整して終わりよ?つかさ、味を見てくれる?」

「…うんちようどいいかな、調整するほどじゃないと思うよ?」

「つかさが言うなら問題ないわね。じゃあ2人の切った材料を入れて、少ししたら持って行きましょうか」

みきさんの作った割下をつかささんが味見して判断する。みきさんの言葉を聞く限り料理に関しては頼りにしているようだ。材料を分担して入れて、しばらく様子を見てるとちようど良い具合に出来上がってきたようだ

「…いい感じね。お母さんはこれを持って行くから、3人はお皿とお箸を…」

「それは自分が持って行きましょう。あまり女性に重い物を持たせるわけにはいきませんからね」

「あらいいの?」

「ええ、その代わりとして自分の運ぶ分を担当していただけますか？」

「ふふ…あおい君は優しいわね。流石かがみが彼氏に選んだだけあるわ…あ、今はお兄ちゃんだったわね」

「たしかに今はお兄ちゃんだけど、それでも恋人だって言ってくれたから…」

「あらあらラブラブなのね…じゃあ、あおい君頼んだわよ？」

「分かりました、このまま運んでも問題ないですか？」

「ええ大丈夫よ？あつちの準備は出来てるから、食卓まで運んでね？」

「お兄ちゃん手伝おうか？」

「いえ、自分は大丈夫です。それより…たしか入りきらないで余った具材がありましたよね？つかささんは、それを深めのお皿に入れて運んでもらえますか？」

「わかった〜」

つかささんには重そうに見えたのだろう。自分に近付いて持とうとするが、運ぶものは他にもあるのでお皿とお箸は2人に持ってもらう、つかささんには具材を運んでもらうことにした

「お待たせしました〜」

「出来たよ」

「今日はすき焼きよ、どんどん食べてね」

「いいの？かがみまた太るんじゃない？」

「う…今日はいいの！あおいお兄ちゃんの歓迎会なんだし、明日から食べすぎないようにすれば問題ないわよ！」

「ははは…ほらほら、皆も早く座って食べようじゃないか」

「は…い。ほら、あおいお兄ちゃんも座りましょ？」

「ええ、そうしましょうか」

「じゃあ反対側には私が座ろうかな？」

「いのりお姉ちゃん、お兄ちゃんのことよっぽど気に入ったんだね」

「まあね。でもあくまで弟として、妹の恋人としてだから、そんな警戒しなくていいわよ？かがみ」

「…ならいいんだけど」

座る間際のいのり姉さんとかささんの言葉を耳にして、かがみがいのり姉さんをジト目で見ると、そんな視線を感じたのか薄く笑みを浮かべながら、かがみの方へ顔を向けるとかがみも表情を戻したよ。うだ。

そんな事をしていると自分達以外の皆が食べる準備を終えたようで、それに気付いて慌てて準備をして食事を始める。話に夢中になると大変だね…

「それでね、こなちゃんが…」

「姉さん達少しは考えて取ってよ、つかさの取る分がなくなっちゃうじゃない」

「大丈夫ですよ、つかささんの分はこちらに取ってありますから。はいつかささん」

「ありがと〜お兄ちゃん」

「わざわざごめんね、あおいお兄ちゃん。つかさも話をするのはいいけど、取らないとなくなっちゃうからね」

「わかった、次からは気をつけるよ〜」

「…」ご馳走様でした。美味しかったです」

「あおい君も手伝ってくれたから美味しくできたのよ?」

「お役に立てて良かったです」

「それにしても見事になくなったわね〜」

「かがみがあんなに食べるから…」

「いのり姉さんだって結構食べてたんだから、人のこと言えないじ

「やない」

「私がかがみほど体重に神経質じゃないからいいのよ」

食べながら雑談をし、食べ終えてからも食器や鍋等を洗いながら雑談をする。食器の量は多いものの、洗う人数も多いから助かる

「そういえばあおい君、お風呂はどうするの？先に入る？」

「どうでしょうか。ただおさんは…」

「汗もかいているだろうし、私は後で入ることにするから、遠慮せず先に入ってきなさい」

「いいんですか？ではお先に入らせていただきますね」

ただおさんが譲ってくれたことで一番風呂に入ることになった。脱衣所で服を脱いでお風呂場に入る。やっぱり人の家のお風呂は違うんだね

「少し熱めかゝいい感じだね」

「疲れた体に染み入るよう…みたいなの？」

「まあ似たような感じですけど。それより何をしているんですか？いのり姉さん」

「弟の背中を流してあげようと思ってね」

「まつり姉さんまで…」

「まあ大体はまつりの言うとおりよ？弟の背中、流してみたかったからね。可愛い妹達もお兄ちゃんの背中を流したいみたいだし」

「入っていいかな、お兄ちゃん…」

「ああいお兄ちゃん…入るわよ？」

お湯を被っていると脱衣所から声とつごめく影があった。話と声を聞いていると、どうやら4姉妹全員が背中を流すために入って来るようだ

「みきさんとただおさんには許可をいただいたんですか？」

「もちろんよ。ゆっくりさせてあげなさいって言ってたから背中流すだけだけどね」

「あゝそうなんですか…」

「なに？その言い方。あ、そっか私達と一緒にお風呂に浸かりたかったのね」

「違いますよ。ただ女性は男性とお風呂に入りたがるものだということがわかり…」

「それは間違ってるわね、確実に」

「私達はお兄ちゃんだから入るんだよ？京ちゃんでも入っちゃうけど…」

「京ちゃん…ああ、もう1人の友達の子ね？まあ、あおい君だからっていろいろはあるわね。ほら背中こっちに向けて」

「わかりました…はい、どうぞ」

脱衣所との仕切り越しに話をして背中を向ける。カラカラ…と開ける音が聞こえたということは入って来たのだろう

「後ろ見てもいいけど、あんまりジロジロ見ちゃ駄目よ？」

「いや、あおいお兄ちゃんあんまりそういうの拘らないから」

「むう、赤面する弟はどんなものと期待したのに…」

「ていうか私達、お父さん以外の男の人とお風呂入るの初めてじゃない？」

「私とつかさは前に一緒に入ったわよ？」

「お兄ちゃんの家泊まった時にね」

「ってことは私達2人だけなのね…」

「なんか今更恥ずかしくなってきた…」

「大丈夫ですよ、後ろは見ませんから。それに一応目を瞑っておきますから」

「だったら大丈夫かな…動かないでね？」

「わかってますよ」

ゆっくりと背中を擦りながら話をする。2人は恥ずかしくなったらしく、声が徐々に小さくなっていった。おそらく赤くなっているのだろう

「お姉ちゃん達顔赤いよ？」

「大丈夫？姉さん」

「まあ大丈夫といえば大丈夫かな」

「正直言つとキツイわね…」

「でしたら話題を変えましょうか？」

「そうしてくれると助かるわ」

「でしたら…そうですね、皆さんはよく一緒に風呂に入られるんですか？」

「あんまりそういうのはないわね。つかさが時々一緒に入るつって言うくらいかな」

「だって1人じゃ寂しくって…」

「私達入るとき普段は1人ね。考えてみたらお風呂場でこつという風に4人でいるの珍しいのよね」

「だったらあおい君のおかげね。あおい君が来なかったら、こんな

風にはならなかったでしょうね」

「自分は何もしていませんよ。入ってきたのはそちらの意思ですし」
「それでも、長女として少しでも姉妹の貴重な時間を作ってくれたことに感謝してるわ」

背中のお湯を流しながら、いのり姉さんがお礼を言う。その言葉には妹達を大切に思う、長女としての思いが感じられた

「それじゃ私達は戻るから、ゆっくり浸かってね？」

「そうですか。背中ありがとうございます」

「いいのよ、私達が勝手にやったんだから気にしないの」

「お兄ちゃんまた後でね」

「いきなり来てゴメンね？じゃあ後で」

「ではまた後ほど」

本当なら後ろを向いて手を振りたかったのだが、先ほどの事を考慮して背中を向けたまま挨拶をし、全員が出るまでそのまま待つ。かがみが出たことを音で確認して体と髪を洗い、お風呂に浸かる

「ふう…」

疲れた体に、というわけではないがお湯が体に染み入るようだ。いいねお風呂

「1ヶ月…か」

この調子で1ヶ月振り回されることになるのだから、さすがに疲れそうだな

「まあ、楽しいだろうけどね」

息子が出来たこと…弟が出来たこと…兄が出来たこと…それを心から受け入れてくれている

「嬉しい限りだね、こんな自分を受け入れてくれるなんて…」

顔にお湯をかけて考えることを止める。キリがないからね

「さて上がるのかな…」

お風呂から出て着替える。今度ただおさんの背中を流してあげようかな、そんな事を考えながら着替えを終えて脱衣所を後にする

夜、そして朝

「上がりました、次に入る方どうぞ」

「あおい君、いのり達は大人しくしていたかい？」

「比較的大人しくしていましたよ？あくまでも自分から見て、ですが」

「私が許可を出したら、嬉しそうに走って行ったものだから君を心配していたんだが…問題なさそうだね」

「心配していただいてありがとうございます。大丈夫ですよ、背中以外は触れられていませんから」

「なんか私達酷い言われようじゃない？」

「いのり姉さんがはしゃぎすぎたんじゃない？」

「まあそれは自覚してるけど…」

「なら明日は体を…」

「いえ、それは勘弁して下さい」

姉さん達が次を企んでいるようだ。しかも明日などと言い出したので、頭を下げてやめてもらう。2日連続でなんて身が保つか不安なところだ

「ほらほら、まつりもからかってないでお風呂に入ってきてなさい」

「は〜い…あおい君また後でね〜」

「駄目よ？あおいお兄ちゃんは私の部屋で荷物を整理しないとけないんだから」

「確かにやらなければなりません、それは明日学校から戻って来てからでも…」

「じゃあこのまま寝ると思うから、お休みなさい。ほらあおいお兄ちゃん行くわよ」

「ただおさん、みきさん、明日の早朝に境内を使用させていただきます。お先に失礼します、お休みなさい…」

「あ、ああわかった…お休み」

「わかったわ、お休みなさい」

「お休みお姉ちゃん、お兄ちゃん」

「寝るときくらい2人きりにしておくわ。お休み」

かがみに半ば引っ張られる形で階段を上り、かがみに続いて挨拶する。階段を上っている最中は引っ張らないでほしいね

「…勉強道具はどこに置きましょうか？」

「それはこっちの棚に置いてくれる？私の勉強道具もそこに置いて

あるから」

「わかりました。服は…」

「ダンスに使ってない所があるからそこにに入れてて？」

「わかりました…」

「あれ？入れないの？」

「恋人とはいえ、女性の使用しているダンスを開けるようなことは
しませんよ」

「じゃあそれ貸して？ダンスの中を見て入れておくから」

「お願いします」

「私は別に見られても…」

「何か言いましたか？」

「…ううん、何でもなし。それよりこれ何なの？」

小さな声で何かを言った気がしたのだが、気のせいだったようだ。
尋ねた後、首を横に振りながらかがみが自分の荷物の1つを指差す。
それは本来竹刀等を入れる入れ物である

「…自分の刀が入ってますけど？」

「刀って…素振りですってやつ？」

「ええ、それはどこに置きましょうか？」

「端っこに置いておけばいいかしら、邪魔にはならないと思うし」

「わかりました。え〜と…このあたりですかね？」

「そうね、そこに立てかけて置けばいいわね」

「本はどうします？」

「読書用の？だったら私の本棚に置いてくれる？」

「いいですか？」

「そうよ。それで終わり？」

「あとは朝使うものですね。歯ブラシ、歯磨き粉、ウエイト等です」

「2つ目までは分かるとして3つ目は」

「朝はウエイトを着けて行動するので」

「なるほど、じゃあ整理するものはこのくらいね。歯ブラシと歯磨き粉は明日使って下に置いとくといいわ」

「そうさせてもらいます…しかしここまでコンパクトになるとは…」

「ねえ…」

来た時には膨れ上がっていた荷物入れが、今では小さく纏まっ
ている。明日になれば中身は1つになるし、さらに小さく出来るだろ
う。そんな事を荷物入れを見ながら思っていると服の裾を軽く引
っ張られた

「どうかしたんですか？」

「一緒に寝ちゃ駄目かな……」

「それは妹としてですか？それとも恋人としてですか？」

「どっちがいいの？」

「どちらだと思います？」

「いじわる……」

「いじめているつもりはないんですけどねえ」

「駄目なの……？」

「そういうわけではありませんが……」

「そうよね、風邪の時も一緒に寝たし。それで？どっちがいいの？」

「もちろん恋人ですよ？……さて、寝ましようか」

かがみの問いに答えながらアラームをセットして布団を敷き、寝る準備をする。終わったところで布団を被り、電気を消す。あとは軽く雑談しながら睡魔が来るのを待つだけだ

「明日は神社の方で素振りするんでしょ？」

「ええ、そのつもりですよ」

「大丈夫なの？危なくない？」

「大丈夫ですよ。自分が素振りで使っている刀に刃はありませんか」
「ら」

「じゃあ切れないの？」

「それは持ち主の技量次第ですね」

「ふん…」

「おや、眠たいですか？」

「うん…でもあお君が起きてるなら、私も起きてたい…」

「無理はなさらないで下さい。自分ももう休みますから」

「そっ？じゃあ…おやすみ」

「はい、お休みなさい」

軽く触れるだけのキスをする。かがみはよほど眠たかったようで、すぐに眠ってしまったようだ。

「よほど疲れていたんですね…」

髪を撫でて自分も眠りにつく。床で寝るの久しぶりだな

「ふふふ…」

「はいはい…さて行こうかな」

かがみを起こさないように布団から出て着替える。その後歯を磨き、顔を洗い、ウエイトを着けてから走りに行く

「ところどころ星が見えない…少し曇ってるね。朝までに晴れるといいけど…あ、一応もう朝だね」

走り終えて空を見る。曇りは好きじゃないし、やっぱり青空がいいよね

「さてと、次は素振りだね…」

部屋に戻り刀を持って神社へ向かう。一応人目に付かないところでやるつもりだ

「…ふう、ついでに掃除しておきたいけど用具の場所わからないしなあ…」

素振りを終えた後、軽く掃こうかと思ったのだが用具が見当たらず、諦めることにした

「ただいま帰りました」

「あら？あおい君、どこかにお出掛けしてたの？」

「みきさん、おはようございます。朝は日課で走り込みをしたりしているのです…」

「頑張ってるのね」

「それで、昨夜許可をいただいたとおり少し境内を使わせていただいたので、掃こうかと思ったのですが…用具がどこにあるのかわからなくて…」

「そんな事までしてくれなくてもいいのに」

「使わせていただくからには、せめてそのくらいはさせていただきますよ」

「そこまで言うならわかったわ。用具の場所はかがみ達も知ってるから、あの子達から聞いてくれる？」

「みきさんからは教えていただけないんですか？」

「私は朝食の用意があるから、っていうのはこじつけなんだけどね。やっぱり恋人から聞いた方が覚えやすいんじゃない？」

「ちょ、ちょっとお風呂に入ってきます」

「ふふ…いつてらっしい」

戻って来るとみきさんが起きていた。ニコニコしながら尋ねてくるみきさんに対する返答が見つからず、考える時間を作ることと汗を洗い流すことを兼ねて、着替えに制服を持ってお風呂に逃げる

「ふう、シャワーもなかなかいいね。上がりましたよ」

「あ、あおいお兄ちゃんおはよう」

「おはようございます、かがみ…つかさんはどうしたんですか？」

「いつも通りまだ寝てるわよ？もう少し早く起きられないのかしら…」

「まだ少し早いですから、後で起こしてきましょうか？」

「そうね、この時間に起こしてもまた寝ちゃいそうだし」

「あらあおい君、さっきの質問には答えてくれないの？」

「…みきさんの言われたように、恋人から教えていただいたほうがよさそうです…これが答えでも問題ありませんか？」

「素直に答えてくれてありがとうね？」

「何かあったの？」

「いえ、少し話をしていただけです。詳しい話はまた後ほど。自分がかがみと自分のお弁当と、朝ご飯の手伝いをします」

かがみに尋ねられるが、後で話せばいいだろう。別に後ろめたい事ではないし、そんな事をするつもりもないしね

「…よしお弁当は出来た。次は朝ご飯ですね、手伝いますよ」

「私も早く起きたんだから手伝いくらいはしなきゃね」

「ありがとう2人とも。でも2人のうち1人は今のうちにつかさを起こしに行ってくれる？そろそろ起こさないと、あの子自分でお弁当作るから」

「では自分が起こしてきますね」

「わかったわ、こっちはやっておくから」

朝ご飯をかがみとみきさんに任せてつかささんを起こしに向かう。起きてくれるだろうか

「ここだね…つかささん、入りますよ？」

「すう…すう…」

「まあ返事はないよね、寝てるんだし」

いつものように寝ているのなら、おそらくそう簡単には起きないだろう

「つかささん朝ですよ、起きて下さい。」

「んんう…」

「駄目か…」

揺さぶってみたが僅かに反応しただけで起きはしない。まあこのく

らいで起きないことは予想はできていたけどね

「つかささん、起きて下さい」

「ん…んう…あおちゃん…？」

「起きましたか。おはようございます」

「へ？あ、お、おはようございます…じゃなくて何で私の部屋にいるの？」

「かがみもみきさんも起きていますし、学校ですからね。起こしに来ました」

「へ？そうだったんだ…あ、私着替えるから下にいてね？ちゃんと降りてくるから」

「分かりました、ではまた後ほど」

つかさんがベッドから起きて話したのを確認して部屋を出て、階段を降りる。真っ先に気付いたかがみが近付いてくる

「どう起きた？まあ大体想像出来るけどね。先にあおいお兄ちゃんが折れ…」

「おはようお兄ちゃん、お姉ちゃん、お母さん」

「え？…つかさ？何でこんな時間に…まさかあおいお兄ちゃん…」

「起こしてきましたよ？言いましたよね、起こしてきますよ」

「さすがというべきか、何か無駄な才能というか…」

「後者は遠慮したいですね…」

「ほらほら、朝食の準備が出来たから座って。つかさは顔を洗って、歯を磨きに行つてからね？」

「かがみはもう行つてきたんですか？」

「朝ご飯の準備が終わつてから、あおいお兄ちゃんがつかさを起こして来る間にね」

「まあ行くとするならその間ですよね」

座つて話をしていると皆が起きてくる。みきさんに促され、一度こちらに顔を出した後洗面所に向かつて行く。上手い誘導だ、慣れるんだろつね

「つかさが早起きなんて珍しいわね」

「いのりお姉ちゃん、私1人で起きたんじゃないよ？お兄ちゃんに起こしてもらつたんだ」

「へえ…でもいつも目覚ましじゃ起きないわよね？」

「それを考えると、あおい君の起こし方って…」

「まつり姉さんの想像してるような起こし方じゃないと思うけど、あんまり煩くはなかったわよ？むしろ音立ってなかったし」

「まあ揺さぶって名前を呼んだだけですからね、音は立ちませんよ」
「たったそれだけで起こすなんて…才能ってやつかしら？」

「いのり姉さん、それはさっきかがみも言っていましたよ？でも寝ている人にとっては複雑な気分になれる才能ですよね…まあ、場合によつては使えますが」

「たしかにね。自分で起きるのはともかく、誰かに起こされるとなんか嫌よね」

「それはまつりだけじゃない？」

7人で食卓を囲み、朝ご飯を食べる。うん、美味しいしやっぱり賑やかだと楽しいね

「では、行って来ます」

「行って来まゝす」

「行って来るね」

「行ってらっしゃい」

皆に見送られながら玄関を出る。朝の雲はなくなり、今は澄んだ青空が広がっている。今日も楽しくなるといいな

日常と思い

「おはようかがみ、つかさ、あおい君」

「おはようございますあおいさん、かがみさん、つかささん」

「おはようさん、3人とも」

「おはようございます。あおい先輩、かがみ先輩、つかさ先輩」

「おはようございますあなたさん、みゆきさん、こうさん、京一」

京一の家の前に行くとき既に他の皆は集まっていたようだ。早いね

「早めに出たんですけどね」

「そうよね、まあ私としてはあなたがこんな時間からいるっていうのが信じ難いわ」

「むう…ヒドいね。でもそんな事言ったらつかさだって珍しいじゃん？」

「つかさはあおいおに…あお君に起こしてもらったのよ。自力で起きてくれたら助かるんだけどね」

「あはは…次からは頑張るよ」

「まあよかったじゃん？この時間に起きたんだしさ」

「うん、お兄ちゃんのおかげだよ。起こしてくれてありがとう」

「…お兄ちゃん？」

「って言いましたよね…」

つかささんの言葉にかがみと共に固まる。こなたさんとこうさんがつかささんに詰め寄って顔を見合わせた後、笑顔でこちらを見る。何だろっ…

「あおい兄さん」

「なるほど、こうなるわけですか…」

「かがみも家じゃお兄ちゃんって呼んでるんだよね？」

「つかさ…喋っちゃったのね…」

「ごめんなさい」

「ま、学校に着くまでだけでもあおい君には皆のお兄ちゃんをやってもらおうか」

「じゃあ俺は弟か」

「私もお兄さんとお呼びした方がよろしいのでしょうか？」

「どちらでも構いませんよ。好きな方でお呼びになって下さい」

「では、今はお兄さんと呼ばせていただきますね」

結局この場の全員の兄になったようだ。しかしみゆきさんの兄とは、なんとも恐れ入る。因みに真っ先に兄と呼んできたのはこうさんで、呼ぶなり嬉しそうに左腕に抱き付いてきた。それを見たかがみが對抗するように右腕に抱き付き微笑んでいる

「おやおや、最近あおい君…じゃなくて、お兄ちゃんにデレないと思っただらやっと思っただらね」

「こ、これは寒いからよ！別に他意はないんだから！」

「ふん、ホントかな？」

「でしたら先輩も一緒に抱き付きますか？あおいお兄さん暖かいですよ」

「そうしよっかな。よいしょ…」

「楽しそうに話されていますが、変わった会話ですね」

「抱き付かれる側としては困った会話ですけどね」

「いーじゃん、登校中に妹達に抱き付かれるなんて萌えるでしょ？」

「近くを通る他の生徒の視線が痛いですけどね」

「気にしない気にしない。仲良しに見られてるだけだっけ」

こうさんの提案により、こなたさんも抱き付く事になった。両腕は既に取りられているため背中からよじ登って首に腕を回し、ぶら下が

つてくるが、そのままの体制では辛そうなので少し背中を丸める。
正直鍛えていてよかったと思う

「なんか凄いな…」

「お辛くありませんか？お兄さん」

「お兄ちゃん大丈夫？」

「平気ですよ？心配していただいてありがとうございますみゆきさん、つかささん」

「心配なさそうだな…お、校門見えてきたぞ。どうするんだ？」

「勿論このまま突っ切る！」

「こら、あおいお兄ちゃんの意見を無視しないの！あおいお兄ちゃん、どうするの？」

「こつさんとは靴置き場で別れますから、とりあえずそこまで行きましょうか」

流石に校門だけあつて多数の生徒や門に立つ先生がいる。その中をこの状態で進むのだから、視線の数も尋常ではない

「…なんかついて行く俺達も恥ずかしくなってきた」

「そうですか？私は別に気になりませんが。では私はここで」

「ええ、それではまた」

「…じゃあ私もここで。また後で会いましょ？」

「わかりました。ではまた後ほど」

「これで両腕が使えるな」

「いや…まだみたいだよ」

「私達まだ抱き付いてないもん！ね？ゆきちちゃん？」

「はい。仮にも妹なのですから、甘えさせていただきます」

「…まあ、もう教室なんだがな」

「お兄ちゃんの席まで！いいでしょ？」

「別に構いませんよ。ですが自分の席で妹は終わりにしましょう。構いませんか？」

「ラジャー！」

かがみと教室の前で別れ、両腕が使えるようになったと思ったが、今度はつかさんとみゆきさんが抱き付いてきた。まあ自分の席までなのでそう長くはないけれどね

「はい、着きましたよ」

「これって結構恥ずかしいんだね…」

「貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます」

「抱き付かれる側は更に恥ずかしいんですけどね。こなたさんも…どうぞ降りて下さい」

「んしょ…わざわざしゃがまなくてもよかったのに。でもありがとう」

「いえいえ、どう致しまして」

「おすす」

「あ、かがみ。早かったですね」

「まあ鞆から机に移すだけだし、そこまで時間はかからないわよね」

「そっか、そんなに急いで会いたかったんだね」

「ち、違っ！別にお兄ちゃんに…」

「ほう？こなたさんは自分のことを指していませんよね？」

「いや…その…」

「それに、さっき妹は終わって今はもう元の呼び方に戻したよ？」

「え？そうなの？」

「ええ、つい先ほどです」

自分とこなたさんの言葉に徐々に赤くなっていくかがみ。可愛いね

「ううん…」

「よしよし。意地悪してしまいましたね、すみません」

「…いいわよ、嫌いになったわけじゃないんでしょ？」

「当たり前じゃないですか、かがみを嫌いになるなんてことはありえませんが」

「うんうん、やっぱりかがみはこうでなきゃね！」

「うるさい！」

「うう、痛い…って私だけ！？あおい君だってからかったじゃん！」

「あお君はちゃんと謝ったからいいの！」

「ですがごなたさんだけ罰を受けるといっつのは不平等な気がします。ですから自分にも罰を受けさせて下さい」

「…わかったわよ」

「ペチッ」

「これでいいでしょ？」

「はい、若干弱めな気もしますが」

「…なんとも優しい罰だな」

「キーンコーンカーンコーン」

「じゃあ私は戻るわ。またね？」

「ええ、それではまた」

鐘が鳴り、かがみが教室に戻る。入れ違いに先生が入ってきてホールのムルムが始まった

「お…終わった」

「ほら、今からお昼なんだから頑張つて」

「お昼食べましょ」

「かがみんも来たし、たまには屋上で食べない？」

「いいね〜ぽかぽかしてそう」

「この季節にはちょうど良いかもしれませんね」

「いいですね〜では行きま…」

「お〜い神藤、ちょっといいか？」

「…ん？自分に用があるようですね。自分は後から来ますから、お先に屋上へ向かって下さい」

「わかった、じゃあ後でな」

皆は先にお弁当を持って屋上へ向かう。自分は声を掛けてきた2人に話を聞くことにする

「それで、自分に用事とはなんですか？」

「へえ、この子が神藤君か…」

「ええそうです。実はちょっと部活を手伝って欲しいんだ」

「部活…ですか？」

「ああ、新入生も入ってきたしデモンストレーションと实力を見るのも兼ねてね。お願い出来るかい？」

「今日は…特に何もありませんね。構いませんよ？」

「ありがたい。じゃあまた放課後に体育館で会おう」

「サンキュー神藤、正直断られるかと思ってたからマジで助かるよ。じゃあな」

「ええ、体育館ですね。わかりました」

お礼を言って廊下を走りながら手を振ってくる2人。廊下は走るものじゃない気もするけど…まあいいや。屋上に行こうかな

「遅くなりました…ってごうさん？」

「こんにちは先輩」

「俺達が来た少し後に来たんだ。いつもここで食べてるんだとさ」

「ほらここに座って、早く食べましょ？それで、用事はなんだったの？」

「部活のお手伝いを頼まりました」

「へえ、何部なの？」

「……あ、聞くのを忘れていました」

「…まあなんていうかドジだね」

「とりあえず体育館で行うそうです」

「場所が分かってるだけ救いですね」

お弁当を食べながら話をしていると、何部なのか聞いていないことがわかったが、目的地はわかっているのだから問題はないだろう

「ふう、ご馳走さま。美味しかったわよ、あお君」

「どう致しまして。その言葉とその笑顔が次の原動力に繋がりますから、嬉しいかぎりです」

「そ、そう？嬉しいこと言ってくれるわね」

「照れちゃって…まあ、話は教室に戻ってからしよっか…ふあ…あ」

「うん…じゃないと私、寝ちゃいそうだよ」

「それじゃ私達は教室に戻るわ」

「あ…かがみ先輩ちょっと…」

「私？なにか用事？」

「少し話しづらい事なので…」

「わかったわ。私はもう少し屋上にいるわ、まだこうさんと話したいこともあるし」

「わかったよ〜じゃあまた休み時間にね」

かがみは屋上に残ってこうさんと話をするらしい。さっきこうさんと小声で話していたことと関係あるのだろうか

> こう view <

先輩達は屋上から去っていった。この周囲には他に誰もおらず、いるのは私とかがみ先輩の2人だけである

「それでなに？話って？」

「実は…まだ諦めきれないんです」

「諦めきれないって…あお君のこと？」

「……はい」

「でも、だからって言って私に話したってあんまり意味はないと思うけど？気持ちは個人の物なんだし、あお君に伝えないと意味はないだろうし」

「伝えますよ、今日の放課後…ここに呼ぶつもりです」

「今日なんだ…」

「私が自分で諦めきれないなら、先輩に諦めさせてもらうまでです…ですから、許可してくれませんか？」

「…わかったわ。ただし！あお君が何て言っても私に報告すること。いいわね？」

「わかっていきますよ。私は、先輩に選ばれなくて伝えるわけじゃありませんから…大丈夫ですよ」

「そう？あお君には私から放課後、屋上に来るよってしておくから」

「ありがとうございます」

「だから、こうさんは放課後の事だけ考えてて？」

「わかりました…すみません、辛いですよね」

「いいのよ。友人がこんなに悩んでるのに放っておけるわけないでしょ？あ…こなた達には言わないでね？またからかってきそうだから。じゃあ頑張ってるね」

手を振りながら、かがみ先輩も屋上から去る。私はちゃんと伝えられるのだろうか。あおい先輩は何て答えてくれるのだろうか

「って、今この場で考えても仕方ないか」

屋上から降りる扉を引いて階段を降りる。後ろで扉の閉まる音を聞きながら歩みを進める

「感情を閉じ込められたらいいのに…」

好きだった。確かに自分がかがみ先輩にそう言った。だったらこの思いは何なんだろうか？今朝もそうだ

「かがみ先輩より先に抱き付いちゃったな」

ツンデレのかがみ先輩はその方が抱き付きやすいとしてもだ

「人を好きになる…か」

今までの人生で人を好きになったことはある。ただそれは馬があったり、憧れや尊敬から来るものだった。でもこれは明らかに違う

「苦しいよ…あおい先輩…でも」

あおい先輩に頼っちゃ駄目なんだ。先輩にはかがみ先輩がいるし、かがみ先輩の言った通り個人の感情なんだから

伝える思い、始まる活動

「ほな、気い付けて帰りや〜」

「さて帰るか、お前は部活だよな?」

「まあね、じゃあ行つて…」

「ああ君ちよつといい?」

「あ、お姉ちゃんだ〜」

「今日はよく呼ばれますね…なんででしょうか?」

「実は…こうさんが屋上に来て欲しいって言ってたんだけど」

「わかりました…そうですね、みきさんやただおさんには遅くなると伝えておいて下さい」

「わかったわ」

「では行つてきますので〜」

「あれ?屋上はそつちじゃないよね?」

「ええ、先に部活への参加が遅れると連絡を入れに行きますから」

「そついうことですか、部活動頑張つて下さいね」

手を振って皆と別れる。さてこうさんに呼ばれてるみたいだし、急ごうかな

「お、来たな。そんなにやる気だところっちも張り切りなくなるもんだ」

「あゝ…とても大事な用事が出来まして、参加するのが遅れてしまひそうなんですけど…」

「それをわざわざ言いに来たのか？」

「はい…駄目でしょうか」

「いいよ。こっちだって頼んだ身だ、そっちの都合を無視するわけにはいかないだろうが」

「ありがとうございます!」

「こっちはぼちぼち始めとくから、用事終わったら来てくれよな」

「はい、わかりました」

一礼して急いで校舎に戻り、階段を昇って屋上に向かう。こうさんはいるだろうか？

> 113 view <

「来た…」

屋上への扉を丁寧に開けて先輩が屋上に立つ。よほど急いで来てく

れたのだろう。少し大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出してこちらに近付き笑顔を見せてくれた

「かがみに聞きました。自分に何か用があるんですか？」

「……先輩は……」

「なんででしょうか？」

「ラブレター貰ったことありますよね？」

「ええ、ありますよ？」

「でしたら直接、好きだと伝えられたことは？」

「はい、あまり多くはありませんが」

「だったら大丈夫だね……よし」

「こっちゃん？」

「あおい先輩、私は先輩に伝えたいことがあります」

「伝えたいこと……ですか？」

私の言った言葉を確認するように先輩が尋ねる。その言葉に短く頷き、先輩の目を見る

「私は、会った時はただゲームが強い人だと感じていました。でも……最初に会った日の事が頭から離れなくて、先輩の顔がいつも思い

浮かんで…だから、次の日やまとを誘ってゲームセンターに…」

「なるほど、あの場にいたのは偶然ではなく、必然だったわけですか」

「来るという確証はありませんでした。ただ休日でしたし、ああいう大きな所にいるんじゃないかなって思ってた…」

「それで、その考えは当たっていたみたいですね」

「はい…あの時また会えて嬉しかった。でも…隣にはかがみ先輩がいたんです」

「その日の朝に付き合うようになりましたからね…すみません、気付かなくて」

「いいんですよ。あの日お二人が一緒に楽しんでいるのを見て、私は先輩への思いを勘違いだったことにして諦めたんです」

「そうだったんですか…」

「でも…今は胸が苦しくなるくらい、先輩が好きなんです。諦めたはずなのに、かがみ先輩の幸せを願ったはずなのに」

泣いていた。いつからなのかは分からないほど自然に。先輩はそんな私を優しそうに見つめていた

「…これが私の伝えたいことです。答えをくれますか？」

「…すみませんこうさん、あなたの思いには答えられません」

「いいんです、答えてくれただけでも私は…救われましたから。」

「でしたら、お役に立てたようですね。よかったです」

「そういえば先輩、部活は…？」

「へ？ああ、こちらを優先したので報告以外には行っていませんね」

「なら終わりましたし、今からですか？」

「そうなりますね。では自分はこれで…」

「でしたらその前に2つ、お願いしていいですか？」

「自分に出来ることでしたら喜んで」

「ならまず…」

「…これでいいんですか？」

「ありがとうございます。一度されてみたかったですよね」

先輩が私を抱きしめる。1つ目のお願いである

「今朝抱き付いてきましたよね？」

「乙女心が分かってませんね〜抱きつくのと抱きしめられるのは色々違うんですよ？」

「まあ朝は抱き付かれましたからね。今とは立場的に逆ですし」

「それに…こっちの方が暖かいです。そろそろ離れましょうか」

「では次ですね。もう1つはなんですか？」

「もう1つは私にする事じゃありませんよ、むしろ本当にお願いなんです」

「どのようなお願いなんですか？」

「かがみ先輩を幸せにしてあげて下さい。これが…私のお願いです」

「わかりました。その願いを叶えられるよう、努力しますよ」

お願いに対する先輩の返事を聞いて笑みが零れた。かがみ先輩にはちよつと妬いちゃうな…

「そろそろ行かないとマズいですよね。先輩、また明日」

「ええ、明日お会いしましょう。それでは」

放課後の屋上に残ったのは私1人だけ。夕陽が作った影には抱きしめてくれた先輩の影はなく、他に残ったのは軽くなった心と温もりだった

> あおい view <

「まさか告白されるなんてね…」

意外だった。こうさんが自分の事を好きだったなんて

「まあ誰を好きになるのかは自由だし、時間も関係ないしね」

その相手に選ばれたのは嬉しい。しかし自分がかがみを好きになった。かがみも自分を好きだと言ってくれた

「…お願い、叶えないとね」

幸せにしてあげる。そのつもりはあるが、どこからが幸せなのかは人によって違うのだろう

「かがみの幸せか…なんだろう」

ここで一度考えることを止める。体育館に着いたからだ。考えることは帰りながらも出来るからね

「神藤〜！こっちこっち！」

あの2人を探しているとあちらが先に気付いたようで、動きを止めて自分と呼ぶ。ありがたいね

「へえ、バスケット部だったんですか」

「言っただけだったか？そりやすまなかったな」

「いえ、尋ねるのを忘れていた自分がいけなかったんですから、謝らないで下さい」

「そうか？まあいいや、ちょっと待ってな…部長〜神藤が来ました

よ」

「そうか、わかった。しかしだ、来たじゃなくてこっちから呼んだんだから来てくれたが正しいんだからな？」

「そうでした、すみません！」

「挨拶が遅れたね。俺がバスケット部の部長だ」

部長と名乗る人が目の前まで来る。その人はお昼休みに自分に話しかけてきた1人だった

「部長だったんですか。今日はよろしくお願いします」

「それはこちらの台詞だね、よろしく頼むよ。じゃあまずは更衣室でユニフォームに着替えてもらえるかい？」

「カゴに入ってるから、適当に着てくれ。番号も好きなやつでいいからな」

「分かりました」

2人にお辞儀をして更衣室へ向かう。入るとさすがに部活中だからであろう、だれもいなかった

「これは小さいし…これくらいかな？…うんよし。着替えましたよ」
「これでいいんですか？」

「お、出て来た…やつは細いな」

「へえ、5番か。何か意味があるのかい？」

「今朝の占いで今日のラッキーナンバーでしたから」

「そ、そうなのか…」

「ま、着替えたんだし部活しようか。ほらついて来て」

部長の後ろを歩き、プレー中のコート横にいる顧問らしき人のところまで来る。すると部長がその人と話をし始め、しばらくして笛を吹く。すぐにこちらを注目するあたり、新入生もやるものだ

「え、今回は神藤君にも部活に参加してもらおうことになった」

「神藤あおいです。今日はよろしくお願いします」

「じゃ、まずは実力を見ようか？5-5で1セット限り。10点マツチで」

部長がメンバーを選び、少し経った後コートに並ぶ。さあいよいよ部活だ

バスケット

「神藤先輩！」

「どうも。このままいきますよ…っと！」

1年生からボールを受け取りシュートを打つ…よし、入った

「やりましたね！」

「いえ、自分だけでは出来ませんよ」

「今度は神藤か…」

「1年生の経験不足をカバーしつつ、全員で多角的に攻めるか…やるね彼」

相手は2年生と3年生のチーム。こちらは自分と1年生の混成チームであるが、なんとかかなりそうだ

そんな事を考えながらメンバーを見回していると、顧問の隣にいる部長や相手の部員が何か言っているようだ。だが笛の音にかき消されてよく聞こえなかった

「4-3…このままリードを守っていけば勝てるけど、そこまで甘くないよね」

「抜かれた…神藤が来るぞ！」

「残念ながら決めるのは自分ではありませんよ?」

ゴールの近くでボールを構えてジャンプする。当然ながら相手が阻止するためにジャンプするが、予定どおりゴールに向けてではなく反対側にいる1年生にパスを出す

「しまっ…」

「入った…入ったよ!」

自分にマークが集中した結果、反対側の1年生には気付いていなかったようだ。相手が気付いた時には既にシュートした後だった

「これで6-3…まずいな、このままじゃ」

「だったらこっちはこちらの戦い方でやるまでだ」

「…相手の様子が変わりましたね」

「大丈夫ですよ、この調子でいけば勝てますって!」

「それは先ほどまでの話です。ここからが本番のようですよ?」

相手チームの雰囲気が変わった。1年生はまだ気付いていないようだが、リードを守るのは難しくなるだろう

「パス…」

「させるかって!」

1年生がパスを出すのが、届く前に取られてしまい、流れるようなプレーで得点を取られた

「これで6 - 5！落ち着いてやれば勝てないわけじゃない、確実に行くぞ！」

「流石経験のある部員だけあるね…状況に対応してきてる」

「このままじゃ負けちゃいますよ！」

「落ち着いて下さい、ペースを乱せば何も出来ずに試合が終わることもあり得るのですから。焦らず、迅速に行きましょう」

得点を取られ1年生達が焦りを見せる。しかし焦るだけでは何も出来ないで落ち着くよう指示を出し、自分も深呼吸をする

「さあ、いきますよ？」

「コート端からシュート？んなもん入るわけ…」

「入れやがった…まじかよ」

「これで9 - 5だね」

相手からボールを取り、その場から高めのシュートを放つ。ボールはゴールに入り、3点を取得する

「また差が開くか…だがおかげで良いことを考えついた」

「何だそれ？」

「とりあえずボール！」

「わかった、ほらよ！」

「ここから！よし、頼むぞ！」

相手がボールを奪い、ジャンプしてシュートをする、その後の合図と共に1人が走り出す。ボールはゴールには届いたもののリングに弾かれたようだ

「弾かれるのは分かってる！だから！」

「俺を走らせたってわけか！」

走ってきた相手が弾かれたボールをジャンプで掴み、そのままダクシュートを決める

「よっしゃあー！」

「これで9 - 7ですね……」

「もう時間がありませんよ！？」

「あとのくらいですか？」

「ええっと……あと1分切ってます！」

「ここからは総力戦ですね……いきますか」

「させるかよ！」

ボールを取り、その場からまたシュートする。しかしジャンプした相手の手に軌道を変えられ、ボールは相手ゴールのネットを掠めてコートから出る

「あと10秒！」

「負けるかあ！」

「ぐ…届かない！」

相手がボールを受け取り、チームメイトが時間を告げる。それを聞いた相手が片手でボールをゴールに向けて投げる。そのボールの軌道を逸らすためジャンプして手を伸ばすが…届かない

ボールはリングに当たり、弾かれて上に跳ねるが、そのままゴールに入った

「入った…ってことは…」

「3点だから…9 - 10で勝ち？」

「試合終了！」

「負けてしまいましたね…すみません」

「謝らないで下さいよ、先輩頑張ったじゃないですか！」

「そつだぞ？敵ながら天晴れってやつだ」

「ありがとうございます」

「…まあ敵として呼んだんじゃないんだけどね」

「デモンストレーションと言っていました、先ほどの試合がそんなんですか？」

「まあね。おかげでいい練習になったはずだよ」

握手を求めてくる部長。それに応えて終了時間がやってきた。後片付けを手伝い、その後着替えて更衣室を出る

「ではお疲れ様でした」

「ああお疲れ様…なあ神藤、バスケット部に入ってくれないか？お前なら即戦力になるしさ」

「すみませんが、どの部活にも所属したくないので」

「…わかった。無理に入れんのも悪いし、諦めることにするよ」

「スケジュールに空きがあれば、また手伝いに来れますので…では」

「はは、だったらまた頼むかもな。じゃあまたな」

体育館を後にして下校する。すっかり暗くなってしまった道を急いで帰る

「ただいま帰りました」

「お帰りなさい、あおい君」

「ただいまです、みきさん」

「お帰り。部活の手伝いをしていたんだって？疲れたろう」

「なかなかいい運動になりましたよ？ただおさん」

「あ、お帰りあおいお兄ちゃん」

「ただいまかがみ。連絡してくれたんですね、ありがとうございます」

「お帰り」

「ただいまつかささん」

「お帰り、かがみ達から話聞いているわ。お疲れさま」

「ただいまいのり姉さん。あまり近寄らない方がよろしいかと…」

「汗掻いてるなら先にお風呂入る？」

「ただいままつり姉さん。一応拭いたんですけどね…入ってもよろしいですか？」

皆に帰ったことを知らせて、お風呂の許可をただおさんに求める。
ただおさんは笑顔でこちらを見ている

「私はさつき入ったから構わないよ。夕食は上がる頃には作り始め
と思うから、入って来なさい」

「では入らせていただきますね」

部屋から着替えを持ってきて、服を脱ぎお風呂に入る。昨日のこと
もあるので一応警戒しておく

「…今日は入って来ないのかな」

いや、別に寂しいわけではない。ただ意外というか、予想外というか

「ゆったり出来るからいいけどね」

体と髪を洗ってお風呂に浸かる。今日は昨日よりぬるめだ

「そろそろ準備してる頃かな？」

しばらく浸かって上がる。体や髪を拭いて着替えを済ませ、お風呂
場を後にする

「上がりましたよ」

「どうだった？一人きりのお風呂は」

「お姉さん達がいなくて寂しくなかった？」

皆の所へ行き、上がったことを報告すると笑顔のいのり姉さんとま
つり姉さんが待っていた

「ば、晩ご飯の準備を手伝ってきます」

「ぬう…はぐらかされた」

「もうちょっと反応するかと思ったんだけどね」

どうやら来なかったのは上がってきた自分をからかうためだったようだ。姉さん達の質問をはぐらかして調理場へ行くとみきさん、かがみ、つかさんが晩ご飯の準備をしていた

「あ、あおいお兄ちゃんどうしたの？」

「晩ご飯のお手伝いをしていましたね」

「率先して手伝ってくれて嬉しいわね、あの子達にも見習って欲しいわ」

「疲れているのだと思います。自分がその分手伝いますから」

「あらそう？なら…これとこれを切ってもらえる？」

みきさんが両手に野菜を持って笑顔で告げる。まあ、これで済むのなら軽いものだ

「切り方は…こうですか？」

「ええ、こっちの方は…こう切ってね？私はつかさの方を見るから」

「わかりました」

「ねえ、あおいお兄ちゃん」

「かがみ？どうかしたんですか？」

「これ、味見してくれない？お味噌を入れる量分らないからお母さんに聞こうかと思ったんだけど、忙しそうだったから…」

「わかりました…ふむ、これならあと少し入れた方がいいですね」

「そう？少しってどのくらい？」

「このくらいですね。もう少し…」

材料とかがみのところを往復しながら調理する。かがみもかがみなりに頑張ってるんだね

「…いい感じですね、美味しいですよ？」

「じゃあお味噌汁は完成ね」

「かがみ、あおい君。そっちは…終わってるみたいね。こっちも出来たから器に注いで運びましょうか」

「テーブルは上の物の片付けや拭いたりなどはしなくてもよろしいのですか？」

「それならさっきのりが片付けて、まつりが拭いてたわよ？ただおさんも調味料は持って行ったし」

みきさんの指示のもと、晩ご飯が食卓に並ぶ。姉さん達はちゃっか

り動いていたらしい

「いのり姉さん、まつり姉さん」

「どうしたのあおい君？」

「なに？なにかあった？」

「テーブル、ありがとうございます」

「べ、別に何もしてないわよ！？私寝転がってただけだし」

「私だつてテレビ見てたんだから！」

微笑みながらお礼を言うと、2人とも必死に否定する。なかなか見られない絵だと思う

「あおいお兄ちゃんどうしたの？」

「いえ、やはり姉妹なんですな〜と思っただけです」

「何だか分からないけど、まあいいわ。これで運ぶものも終わりだから、座つて食べましょ？」

かがみが言い切る前に皆が座り、手を合わせて食事が始まる

「ご馳走様でした…さて、片付けましょつかね」

「いや〜悪いね」

「持って行つてくれるの？ありがとう」

「大丈夫？あおいお兄ちゃん」

「かがみも乗せます？」

「いや、私は自分で持つていくからいいわ……」

手を合わせて食器を持ち上げると、姉さん達が素早く食器を重ねてくる。行動が早いね、まあ運ぶけど

「お姉ちゃん達、お父さんに何か言われてたけど大丈夫なのかな？」

「姉さん達が？」

「あおい君、それ流しに置いて？」

「あとは私達がやるからさ」

「…絞られたみたいね」

「洗って来なさいって。まあ準備よりは楽だろうけどね」

「手伝いましょうか？」

「ありがたい、とは思っけど自分達でやるわ。自分達で蒔いた種だし」

「わかりました、頑張ってください」

「ふふ、応援ありがとう」

「では、自分がかがみの部屋にいますね。おそらくそのまま寝ると
思いますので。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

お皿洗いを任せて、自分がかがみの部屋に行く。勉強と読んでいな
い本を読み終えるためだ

「とりあえず今日の復習から…」

「あれ？あおいお兄ちゃん部屋にいたんだ」

「ええ。机借りていますよ？あと2人きりの時はいつも通りで結構
ですよ？」

「机はいいけど…ごめんね？まだ慣れてなくて」

「別に謝る必要はありませんよ？そうだ、かがみ1つ質問よろしい
ですか？」

「ありがとう…って突然ね…なに？」

「かがみにとって幸せってなんですか？」

ボンツと音が鳴ったのではないかと思うほど、瞬時にかがみは真っ
赤になった。なんて返事するのだろうか。体ごとかがみの方を向い
て返事を待つ

「いやそんなの…いきなり言われても…でも」

「でも？なんですか？」

「私はっ！今あんたといられて十分幸せだから！」

「…答えていただいてありがとうございます」

「お…お風呂！お風呂入って来る！」

「はい、いつてらっしゃい」

勢いで言ったのか先ほどより赤くなり、タンスから衣類を何着か掴み取った後、逃げるように部屋から出ていった

「嬉しいことを言ってくれるね…でも」

先ほどの言葉を思い出す。それだけで胸がいつぱいになる。だが、目はタンスに向ける

「…自分の服、着れるのかなあ」

かがみが開けた棚、そこは自分の衣類が詰められた棚である。かがみの棚は1段下だ

「自分が持つて行ったら怒るだろうし、かといって持つて行かないと大変だし…そうだ」

部屋を出て居間に戻る。そこに頼める人物がいた

「つかささん、ちょっといいですか？」

「お兄ちゃんどうしたの？」

「実は…ということで、かがみに着替えを持って行ってあげて下さい」

「うんわかった。それで着替えてどこにあるの？」

「自分の棚がここですから、この棚以外ですね」

つかささんを部屋に呼び、かがみの着替えを選んでもらう。男の自分よりも、つかささんの方が適任だろう

「では頼みましたよ？」

「うん、ちゃんと持って行くよ」

「…これでよし」

タンスの棚を元に戻して勉強を再開する。しばらくするとドアを開ける音がした

「お兄ちゃん、お姉ちゃんにはちゃんと持って行ったからね？はいこれ」

「自分の服…持って来て下さったんですね、ありがとうございます」

「えへへ、どういたしまして。それじゃおやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

「今つかさの声がしたけど寝たの？」

「ええ今部屋に入って行きましたよ」

「そう。ああ君、ありがとね」

「なにがですか？」

「着替えよ。ああ君がつかさに言ったんでしょ？じゃないとつかさが知るわけないもんね」

かがみが顔を仄かに赤く染めながら礼を言う。ただ当然のことをしたまでだ

「お礼ならつかささんに言って下さい。その着替えを選んだのも持って行ったのもつかさんなんですし」

「そうね、明日起きてきたら言うわ…ねえああ君？」

「なんですか？かがみ」

「さっきああ君に言われたこと考えてみたの。そしたら今は大切な人がいる、そのことが幸せなんだって私は思う」

「そうですか、すみませんね。結論を急かしてしまいました」

「いいのよ、それにお風呂に入る時に言ったあれだって本心から言っただと思う。言った後恥ずかしかつただけど、後悔はしなかった

から

「ならよかったです…さ、寝ましようか？」

「そうね…え？こっちで寝ないの？」

かがみと話をして区切りが付いた所で寝る準備を始めるが、かがみが驚くのも無理はない。自分が畳んだ布団を敷こうとはせずに、かがみのベッドに腰掛けて動かないからだ

「今日はこちらで寝ましようか」

「ちよっ！それは駄目よ！」

「いいじゃないですか、昨日は自分の布団で寝たんですし」

「いやそうだけど…ベッドは1人用だし…」

「自分の布団も1人用なんですけどね…」

「う…どうしても一緒に寝たい？」

「じゃあ、どうしてもです」

「じゃあってなによ！…もう、しょうがないわね…」

「素直じゃありませんね、本当に」

「悪かったわね！」

口では文句を言いながらも一緒に寝たいらしく、自分が布団に入る

ともぞもぞと潜り込んでくる。からかうと真つ赤になって叩いてくるが力が入っていないので、照れ隠しなのだろう

「そういえばさ、手伝った部活って何部だったの？」

「バスケット部でしたよ？」

「へえ、やっぱり試合とかしたの？」

「ええ、1年生と自分のチームと2年生と3年生のチームで試合をしましたね」

「それってなんか酷くない？」

「まあ自分は部員ではありませんからね。それに部長は1年生の実力を見ると言っていたので、実力差を埋めるための処置でしょう」

「かなりプラス思考ね…それで結果は？勝ったの？」

「いいえ、9 - 10で負けました」

「そう、惜しかったわね」

「それでも皆さんを勝たせてあげられませんでした…正直悔しいです」

「でも頑張ったじゃない？」

「…そうですね？」

「そうよ。あお君が皆を信じたから、皆があお君を信じたからこれだけ追い詰めたんじゃない？胸を張りなさい、よくやったわ」

その言葉の後、眠ってしまったのだろう。いつものように起きたときにはかがみに抱き付かれた状態で、顔を洗いに行くと泣いた跡がついていた。自分は彼女に涙を見せたのだろうか、恥ずかしいね

リベンジと報告

「では行って来ますね」

「じゃあ行って来ます」

「行って来るね」

「はい行ってらっしゃい」

いつもと同じように登校する。京一の家の前まで来るがまだ京一以外には誰もいないようだ

「よお…おはよう」

「おはよう京一。珍しいね一人？」

「ああ…」

「みゆきもまだ来てないみたいね」

「そうだね、それにしても京ちゃん早いね」

「まあちょっとあってな…ふああ」

「眠そうだけど、どうかしたの？」

「アニ〇イトに行ったときに買ったゲームで行き詰まってな。おかげで寝不足だ」

眠たそうな欠伸をする京一。正直やめてほしい、こっちまで欠伸が出そうだ

「遅くなりました…」

「おはよ〜…」

「おはようございます先輩方」

「おはようございますみゆきさん、こなたさん、こつちゃん」

「ゆきちゃん、こなちゃん大丈夫？」

「まあみゆきはまともな理由だとしても、こなたの方は大体想像つくわ」

「実は虫歯が…」

「なるほど、ということとは歯医者行きか」

「あつひ…」

京一が言った歯医者という言葉に怯えているみゆきさん。よっぽど行きたくないのだろうか

「みゆきさんは歯医者は苦手なんですか？」

「ええまあ…」

「それで、こなたはどんな理由なの？」

「私はネットゲで…」

「やっぱりまともじゃないわね」

「失礼な！昨日は良質な物が…」

「はいはい、わかったわよ」

「むづ…あおい君に京一君、こうさんなら分かってくれるよね？」

「自分はネットゲームはしませんけどね」

「俺もだな。ゲーム機でゲーム出来りやそれでいいじゃねえか」

「はは…って論点ずれてません？」

「こうさんに指摘された後、改めてゲームの話で盛り上がる。京一はこなたさんにアドバイスを求め、こちらでは話に付いて来ていない3人と話をする」

「へえ〜かがみはシューティングゲームをするんですか？」

「まあね、つかさはこないだみたいに太鼓のやつったりね。みゆきはこないだ何やってたの？」

「私は泉さんに勧められて脳トレというものをさせていただきました。あおいさんはどのようなゲームをされるんですか？」

「自分は音楽、レース、格闘、シューティング、RPG等ですかね」

「ふん、結構色々やるのね」

「さすがに家では格闘、シューティング、RPGの3種類だけですけどね」

「ほほう、あおい君も格ゲーするのかい？」

前を歩いていたこなたさんがこちらを向いて話に入ってくる。どうやら京一へのアドバイスは終わったらしい

「まあ最近は勉強等で忙しいですから、あまりやる機会はありませんけどね」

「…私をいじめたくせにですか？」

「いじめた覚えはないんですけどね」

「実力あるみたいだね。今度対戦しない？」

「私もりベンジしたいです！」

「予定に何も入っていないければ構いませんよ？」

「よし！さっそく今日の放課後ね！」

自分が返事をする嬉しそうに話すこなたさん。まあスケジュールには何もないから後は部の人次第だね

時は流れて放課後

「ほな日直は戸締まりよろしゅうな」

「おゝす、帰ろつか？」

「早く早く！こうさんとは校門で待ち合わせだから！」

「神藤、今日空いてるか？剣道の…」

「あゝあおい君は彼女と今からデートだから無理だよ？」

「なっ！？」

「ちよつとこなた！あんた何を…」

「そうか…今日は自分達で何とかするから神藤も頑張れよ？」

「あ、いや、ちよつと…行っちゃった」

「これで遊べるね！」

「勝手に人で理由を作るな！」

真っ赤になったかがみがこなたさんを叩く。デートか…そういえば
した事ないね

「…あ、先輩方！こつちですよ」

「こうさん、お待たせしました」

「いえ、私もさつき来ましたから。それより先輩…何かあったんですか？」

「どうしてですか？」

「こなた先輩は頭押さえてますし、かがみ先輩は顔赤いですし」

「まあ色々…」

「まあ…大体の状況は推察出来ますけど、触れないでおきます。行きましようか？」

「こうさんと合流して学校を後にする。このままゲームセンターへ向かうようだ」

「そうだ、言ってませんでしたけどゲーセンではやまとも合流しますから」

「やまとさんも？彼女もゲームするの？」

「いえ、基本的にやまとは私を見るだけですわね」

「見てるだけって結構暇だよな」

「だよなえ。やまとさんは暇じゃないのかな？」

「分かりませんね、暇なら暇でどこか見て回るとかすればいいのに、私を見るだけですからね」

やまとさんの話をしているとゲームセンターが見えた。近付いていくと、入口のドアの横にやまとさんが立っているのが分かった

「今日は早かったわね。こんにちは先輩方」

「こんにちはやまとさん」

「そりゃあ、合流してから寄り道しないで来たからね」

「…じゃあ、いつも遅れるのは寄り道してるからなのね？」

「違う！そんな事するわけないじゃん！」

「冗談よ。早く入りましょ？」

やまとさんの一言でこうさんが少し慌てるが、やまとさんはそんな事はお構いなしでゲームセンターに入ってしまった。自分達もそれに続いて入る

「で？あおいとはどっちから対戦するんだ？」

「私は見ておくから、先にこうさんと対戦しなよ」

「では私から行きますね！私の特訓の成果を見せて…」

「…あ、1000円玉がありませんでした。両替してきます」

「なんだか先輩らしいですね…」

「よし…さあ、やりましょつか？」

「お手柔らかに…!」

100円玉を入れて対戦を始める。特訓したというだけあってか、技を次々と繰り出してくる。だが負ける気はない

「K・O!」

「よし!」

「うわぁん!もうちょっと手加減してくれたっていいじゃないですか!」

「いえ、手加減するのは失礼かと思ひまして…」

「こなた先輩!後を頼みます!」

「わかった!仇は取るよ!」

「こなたのやつ、相当強いわよ?」

「分かっていますよ」

こうさんはこなたさんの手を握り、その後やまとさんと共にベンチに座った。さて…勝てるか?

「く…ぬう…」

「ふ…くう…」

「K・O!」

「こなた先輩が負けた!？」

「危なかつたです…」

「やく強いね!半分も減らせないなんて」

「こなたさんこそ、ガードの使い方が上手ですね。それにあの技はたしか…」

「そうだよ? いや、話が通じると嬉しいね!」

「ちよつと!…もう」

>かがみview<

ああ君がこなたに勝った。それは嬉しいのだが、話に夢中になってこなたと2人きりの世界に入っている。前にもつかさとこんな事あったわね…

「かがみ先輩も落ち着けないですね」

「何が?」

「あおい先輩のことですよ。かがみ先輩のこと放つといてこなた先輩と話し込んでますし…」

「ゲームの話なんでしようけど、他の人そっちのけですね」

「しょうがないわよ、あお君はそつという人なんだから」

「でしたら3人で話でもしますか？」

こうさん達と話をするために自動販売機の前にセットされている休憩所の椅子に座る。ここからなら皆の動きが見えるし、疲れたからと理由を付けることも出来る

「それでこつつたら…」

「そうなんだ、あ、こうさんから聞いたんだけど、やまとさんってゲーム見てるだけなの？」

「ですね。理由としてあげるなら離れるところが探して、いなくなるからですね」

「だっていきなりいなくなるんだもん。そりゃ探すよ」

「探す側が心配されるってどうなの…」

話をしているとあお君がこつちに近付いてきた。おそらく近くにいなかったから心配したのだろう

「大丈夫ですか？すみません、話が長引いています…」

「いいのよ。こつちも3人で話してるから気にしないで？」

「そうですか？何かあったら呼んで下さいね？」

「ふふ、何かあったらって…何かあるのかしらね？」

「でもかがみ先輩は、あおい先輩のそういう所を好きになったんじゃないですか？」

「いや、そこだけってわけじゃないけど…こうさんだってあお君の事好きだったじゃない」

「まあ、そうなんですけどね」

「こう、あおい先輩の事好きだったの？」

「昨日までは、ね。見事に振られちゃったけど」

「そういえば、まだ報告受けてなかったわね。出来るだけ詳しく報告してね？」

「私も興味あるわね。聞かせて？」

「やまとまで食い付いてくるとは…では話しましょう」

「…あおい先輩、そんな事言うのね」

「そしたら先輩が…」

「あお君そんな事を…」

私は話に夢中になっていた。彼女があお君にした事、あお君が彼女にした事を聞けるなんて。それ以上に、自分の恋人を好きだった人からこんなに早く話しを聞けるなんて思わなかった

「…これで私の話は終わりです」

「話してくれてありがとう」

「こちらこそ、先輩を呼んで下さってありがとうございますございました」

「ふふ…私達、何だか似てるわね」

「片や恋人、片や振られた人。同じ人を好きになって、同じ人に告白して…」

「それで同じ人に抱き付いたり、抱き付かれたり？」

「ちょっとやまとくからかわないですよ」

「あれ？なんでやまとさんがそんな事知ってるの？」

「ここから、そういうメールが来ましたから」

「やっぱり2人は仲がいいのね」

「まあ中学時代からの付き合いですから、仲がよくもなりますよ」

「あの時から振り回される生活が…」

「そんな事言わないですよ」

あお君の話の後は2人の話で盛り上がる。やまとさんは口ではキツいことを言っているけど、少し笑みを浮かべているようにも見える。多分からかっているだけなんだろうな

「でもやまとさん、こうさんの事大切に思ってるんでしょ？」

「別にそんな事は…」

「でもさっきいなくなるって言ってたわよね。つまりいなくなると寂しいってことじゃない？それってやっぱり、大切にしているからそうなると思うのよね」

「まあやまとも寂しがり屋ですからね、しょうがないですよ」

「も？も、って何？」

「先輩もって事ですよ。そうじゃないですか？」

「そうなのかな…あお君にも言われた気がするけど」

「私から見ても寂しがり屋ですよ？あおい先輩の方をチラチラ見えますし」

「へっ?!そんな事してた？」

「無自覚ですか…」

やまとさんの話から、私の話に変わる。やっぱり人に見てもらわないと気付かないこともあるのね…恥ずかしいけど。2人にかからかわれていると、あお君達がこちらに来たようだ

「かがみ、こうさん、やまとさん。お待たせしました、話し終わりましたから行きましょうか」

「わかったわ。ほら行きましょ?」

「先輩、応援してますから!」

「何か出来る事があったらいつでも言ってお下さいね?」

「ありがとう2人とも」

「何の話ですか?」

「なんでもないわよ?」

2人が応援してくれる。それはいいんだけど、あお君は気付いていないようだ。あお君たら、こういう事には本当に鈍いわね…

「それで?行くってどこに行くの?」

「それはまだ決めて…」

「じゃあデートすれば?」

「はあ!?」

「ああ、学校で言ってたやつか。いいんじゃないか?」

「でも今からじゃ暗いよね?」

「明日は休日ですし、明日でもよろしいのでは?」

「ちょっと何勝手に…」

「おや、デートをしたくないのですか？」

「いやしたいけど…じゃなくて！」

「ならいいじゃん、私達の事は気にしなくていいからさ？」

「では改めて…明日、デートをしてくれませんか？」

「うん、わかった…皆、明日私とお君と出掛けてくるから…」

「わかった」

「かがみんさ、素直に『おお君とデートしてくるから』とか言えな
いかな？」

「うっさいなあ、私的にこれで精一杯なのよ！」

彼にデートの返事をする。さすがに恥ずかしいから言葉を換えると、
早速こなたにからかわれた。けど明日…楽しみだな

デート

「よし、素振り終わり！…なのはいいんだけど…」

現在の時刻はAM4:40。境内の掃除を朝練の後に入れたため、走り込みと素振りを50分にして掃除を5:30までするようにした

「さて、どうしたものか…」

自分が悩んでいるのは掃除用具の場所の事ではない。場所はかがみに聞いているし、実際今素振りを終わらせて掃除用具を取りに向かっているところだ

悩んでいるのはデートの事だ。昨日誘ったのはよかったのだが、肝心の内容がはつきりしていないのだ

「それにしても、デートする2人が同じ家から出るってどうなんだろう…」

自分が今お世話になっている柊家。その柊家の姉妹の1人が恋人なので、下手をすれば待ち合わせの前に会うことになる

「家を一緒に出るのもありなのかな…」

結局まだデートをするとは報告していないが…ただおさんやみきさんも、付き合っているのは知っているから教えても問題はないだろう。あるとするなら…

「姉さん達か…」

知れば確実にからかってくるだろう。かといって知らせなければ、後で何を言われるか分かったものではない

「…知らせておいた方がいいね…よし」

もうすぐ時間だ、満足は出来ないが結構綺麗になった。掃除用具を戻して柵家に入ると、トントントン…と包丁の刃がまな板を叩く音が聞こえてきた

「おはようございますみきさ…あれ？かがみ？」

「あら、おはようあおい君」

「おはようあおいお兄ちゃん」

「おはようございます…早いですね、かがみ」

「ま、まあ目が覚めちゃったからね。それよりお風呂入るんでしょ？早く行ってきたら？」

「そうしましょう。では行って来ます」

2人にお辞儀してお風呂場に向かう。それにしてもかがみが起きてたのには驚いたね

> かがみ view <

「何とか気付かれないで済んだみたい…」

「あおい君に言えば手伝ってくれと思うんだけど？」

「それじゃ意味ないの。出来るだけ自分の力で作りたいたいから……」

「それじゃもうひと頑張りしましょっか。ちゃんと教えてあげるから」

「うん！」

「…それで？デートはどこに行くの？」

「な、なんでお母さんが知ってるの!？」

危つく食材の切り口が変になるところだった。あゝびっくりした

「あら当たってたの？様子がいつもと違うからそうかとは思っただけ
ど…」

「お母さんに隠し事出来ないわね……」

「でも分かりやすかったわよ？お母さんも最初のデートの時はそう
だったし」

「そうなの？やっぱり皆そうなのかな」

「ええ、でしょうね。あの時は……」

「へ〜お父さんがそんな事してたんだ〜」

「上がりましたよ〜」

「あおい君が上がってきたみたいね。…うん、いい感じだからこっちは詰めていいわよ?」

「何か作っているんですか?手伝いましょうか?」

「もうすぐ終わるから休んでいいわよ…あ、デートに行くなら準備しておいた方がいいんじゃない?」

「何故それを…出掛ける際に知らせようと思っていたのですが」

「女の勘、っていうのかしらね?」

「女性の勘は凄いですね」

「何でこっち見ながら言うの?」

「何でもありませんよ。自分は準備してきますね」

あおいお兄ちゃんがこちらを見ながら感心しているが、何か違う意味が含まれていそうな…まあいいや。とりあえず手伝いには来ないみたいだし

「…よし出来た!」

「頑張ったわね。それじゃ詰めて包んでおくから、かがみも準備してきなさい?」

「ありがとう。それじゃお願いね?」

お母さんに後を任せて部屋へ向かう。一生懸命作ったんだから食べ
てくれるだろうけど、どんな反応するのかな。喜んでくれるといいな

「あおいお兄ちゃん、入って大丈夫？」

「少し待って下さい…よし、入って大丈夫ですよ」

「私も準備するから、外でちょっと待ってて？」

「わかりました」

ドアをノックすると返事が聞こえた。少しして出てきた姿はまあ、
あくまで個人的感想だけど…いつもよりかっこよかった

「お待たせ」

「へえ…」

「なによ…あんまりじろじろ見ないでほしいんだけど」

「いえ、可愛いな〜と思っただけね」

「う…あ、ありがとう…」

「あ、いたいた…あおい君、かがみ、2人の分の朝ご飯作っておい
たから」

「ありがとうございませす。では行きましょつか」

「そうね、ちょっとお腹空いたし」

「動き回るでしょうから、朝の間に食べておかないと保たないでしょうね」

食卓に着いて食事を始める。今日はいつもよりおかずが多い…作りすぎたものがこちらに回ってきたのだ

「ご馳走様でした。さて…もう少ししたら行きましようか」

「ご馳走さま、じゃあテレビでも見てましょ？」

食べ終わってお皿を片付けた後、リモコンでテレビを付ける。さすがにこの時間はニュース番組しかないが、天気の確認も出来て少々時間も潰せる

「今日もよく晴れそうね」

「来週から少し曇りそうですね…そろそろ出ましようか」

「うん。じゃあ行って来るね」

「わかったわ。いのり達には私から言うておくから、楽しんで来なれい」

「はい、では行って来ます」

玄関に行くとお母さんが見送りに来た。姉さん達に教えると帰って来てから質問責めに遭いそうなんだけど…

「…さて、どこへ行きましようか？」

「……」

「かがみ？どうかしたんですか？」

「へ？ああ、こなたあたりがどうか潜んでそうだったから……で、何？何か言った？」

「たしかにこなたさんならやりかねませんね。自分が言ったのは、どこへ行きましょうかと聞いたんです」

「え、それってつまり……」

「どうするのかを明確に決めてないもので……」

「……まあ、お互い初めてだししょうがないって言ったならそこまでなだけで」

「すみません。こういう時は自分がしっかりするべきなんでしょうが……かがみの意見を無視して決めるといふのは嫌だったものですか」

「あ……」

「そっか、そこまで気遣ってくれたんだ。ちょっと頼りないと思った私が馬鹿だった」

「……まあ今日はデートなんだし、2人で行きたい所を決めていけばいいじゃない。その代わり、退屈させたらただじゃおかないからね？」

「分かりました…では最初どうしましょうか？」

「私が決めていいの？じゃあ行きましょ？」

あお君と手を繋ぎ、そのまま目的地に向かう。目的地といってもただお店等は開いていないため、歩いたり、バスに乗ったりしながら近付いていく

「ここですか？」

「そうよ、大した所じゃないけどね…」

来た場所は高台へ続く坂道の途中。上に目的地があるというわけではない

「ここから見る景色が好きなのよ。高台の上には家が結構あるけど、この坂はただ上に続くだけの道。でも、横にはこんなに綺麗な景色が広がってる。なんかそれが気に入ったの…おかしい？」

「いいと思いますよ？視点を変えてみると面白い発見がありますからね」

普通の人ならなんだ、と言いそうな所をあお君と一緒に同じ景色を見てくれた。それだけで幸せだ

「そうね〜そろそろ行く？次はあお君の行きたい所ね？」

「でしたら行きましょうか、もう少し高いところへ」

次に来たバスに乗り駅へ向かう。そこから電車に乗って、しばらくして着いたのは…東京タワー。まだ時間が早いためか、私達が1番乗りのようだ

「デートの定番ではありませんが、2人で来てみたかったので」

「へえ〜高いわね〜あ、あお君あっち見てみましょうよ」

「はは、楽しんでますね〜」

「この床…乗って大丈夫なの？」

「ガラス…ですね。乗ってみましょう…」

ただ高いだけだと思っていたけど、2人で来るだけでとても楽しく感じる。デートってこういう気持ちでするんだ

「いい時間帯ね、お店も開いてるし行ってみましょ？」

「何か欲しいものがあつたんですか？」

「ん〜…まあね、ほらほら早く」

あお君の腕を引きながらお店へ向かう。お店と言ってもここからなら遠くはないし、あお君なら入れないこともないだろう

「このお店ですか…自分以外の男性が全く見あたらないのですが」

「そりゃあ女性ものしかない所に男の人は入ってこないでしょ。恋人同士でもない限りはね」

「なるほど、自分は大丈夫というわけですか」

「そういうこと。まあ、あお君の場合普通に入っても問題なさそうだけどね」

「おや、それはどういう意味ですか？」

「冗談よ冗談。あんまり気にしないで？それより…これ、似合うかな？」

「ふむ。たしかにいいと思いますが、その服装でしたらこちらの方が…ほら、似合ってますよ。お金は自分が払いますから、気になる物があったら言って下さい」

「そ、そう？じゃあこっちにしようかな…」

「あお君と買い物を楽しむ。あお君だったら女の子に見えるように…」
「ディネートすれば、入っても違和感ないなあ」

「あ、そうだ。お金は後で渡すからさ、自動販売機でジュース買って来てくれる？喉乾いちゃった」

「お金はいいですよ？奢りますから」

「そう？ジュースは変なのじゃなきゃいいから、頼んだわね」

「わかりました」

「今のうちに…」

あお君にジュースを任せる。本当のところはそこまで喉は乾いていない。あお君の前でこれを買うのは流石に恥ずかしいので、席を外してもらった

「こ、これ下さい…」

「サイズは大丈夫ですか？試着も出来ませんが…」

「大丈夫です、会計を…」

「かがみ、買って来まし…」

運が悪いとはこの事だ。タイミング悪すぎでしょあお君…結局これも気を使わせてしまった、と言うあお君が奢ってくれることになった…でもその後、内緒であお君に小物を1個買った。流石に奢られっぱなしは嫌だし

「ごめんね、買い辛い物買わせちゃって…」

「構いませんよ。それにしてもかがみが買ったかった物が下g…」

「道端でそんな事普通に言うなあ！」

「おっとそうでしたね。すみません」

「もう…この話はお終い。お昼だし、ご飯にしましょ？」

「おやそんな時間ですか。お昼はどうしましょうか？」

「近くに公園があるといいんだけど…」

「公園ですか？行きましようか」

「近くにあるの？」

「ええ。まあそこも定番のようですが」

彼に手を引かれて着いたのは芝公園。ネーミングからしてなるほど、公園だと納得出来る

「じゃあここで食べましようか」

「いい考えだとは思いますが、ご飯はありませんよ？」

「あるわよ？…ほら」

「お弁当ですか。朝作っていたのはもしかして…」

「そ、これよ。味見はしたから大丈夫だとは思っ…」

「ではいただきます…かがみ、とても美味しいですよ。出汁巻きもちょうどいいですし」

「よかった〜ねえ…お弁当もつと美味しく作れるように頑張るからさ、また食べてくれる？」

あお君が私の料理を褒めてくれた。あお君が料理好きな理由が分かった気がする。食べてくれる人の笑顔が見たいから、笑顔を見ると嬉しくなるから次も頑張ろうってなるんだ

「もちろんですよ。その代わり……」

「ちょ……!」

「次は指に気を付けて下さいね?」

私の手を取り、彼が言う。その指には絆創膏が貼ってある。料理の最中に切ってしまったものだ

「…分かってるわよ、切りたくて切ったわけじゃないし。でも心配してくれてありがとう……」

「どういたしまして。切るのは最初のうちです。慣れてくればそのような事は減ってきますよ?」

「そうなの?じゃあ練習しないとね」

お昼を食べながら料理の話で盛り上がる。食べ終わってからは午後の事で話し、落ち着いたところでまたデートを再開する

「さて…次はどこへ行きますか?」

「次は…どっち?」

「自分は公園に連れて来ましたので、次はかがみですね」

「私?だったらそろそろ行きましようか、時間勿体ないし」

「ですね。では案内お願いします。荷物は自分が持ちますから」

あお君が私の手を握り隣に来て、荷物を右肩に掛けて微笑んでくる

「ここ行こっか？」

「服屋ですか？この間はリボンでしたからね」

「まあこの間の所とはまた違うけどね」

選んだ場所は服屋。リボン目当ての前回とは違い、今回はちゃんと服を見るつもりだ

「前は自分に原因があったとはいえ、女装させられましたが…今回もするんですか？」

「するわけないでしょ…あ、これ可愛いな」

「上下セットで…割引対象外、ですか」

「いいじゃない、あお君が買うわけじゃないんだし」

「ですが、値段が…」

「まあまだ良いのがあるかもしれないし、見て回りましょ？」

とりあえず気になった物は保留して、財布と相談しながら考える。
結構悩むわね…

「うーん…」

「3着の中から1着ですか…」

「迷っわよね〜」

ああ君と悩む。最初に見た1着と後で見つけた2着の中から1着を選ぶ。これがなかなか難しく、結構時間がかかっている

「…ああ君だったらどれ着たい？」

「その質問はどうかと思いますが、かがみに合うとするなら…自分的にはこれとこれですね」

「これは外れるわけね。あと2着…」

「1着は自分が払いますよ。かがみはもう1着を買って下さい」

「いいの？私、今日奢られっぱなしだけど…」

「気になさらないで下さい、楽しい時間の対価だと思えば安いものです」

「じゃあ…こっちよろしく、私はこっち買っから」

「わかりました」

3着のうち1着を戻し、彼に1着渡して会計に向かう。大事にしな
いとね…

「今日はありがとうね…」

「こちらこそ今日は楽しかったですよ」

「また…デートしようね？」

「かがみさえよければ、いつでも構いませんよ」

電車で揺られながら話をする。彼の肩に寄りかかると安心出来たのか、彼の言葉に胸が一杯になったのかは分からない。けど、そこで電車の記憶が途切れているということは、そのまま寝てしまったようだ

>あおいview<

「かがみ、起きて下さい…駄目か」

電車が駅に到着したが、かがみが起きる気配はない。よっぽど楽しかったんだろうな

「仕方ないか。よつ…と、これで我慢して下さいね」

かがみを背負って素早く電車から降り駅から離れる。なんだか後ろから抱きつかれているみたいだ

「…ただいま帰りました」

「お帰りなさい…あらあら」

柘家に戻るとみきさんが迎えてくれた。眠っているかがみと自分を交互に見ながら優しく微笑んでいる

「かがみはこのまま部屋で寝かせて来ますので、起きて来るまでは起こさないであげて下さい」

「分かったわ。あおい君は大丈夫なの？」

「自分はまだ眠くありませんから、お手伝いできますよ」

「じゃあ後で呼ぶわね？」

「わかりました、それでは後ほど」

軽く一礼して部屋へ向かう。ドアを開け、ベッドの布団を捲ってかがみをゆっくり降り降ろして寝かせる

「おやすみ、かがみ」

布団を掛けて軽く髪を撫でると、嬉しそうに微笑んでいる。きっといい夢を見てるんだろうね

半日振りの会話、そして準備

「で？デートはどんな事をしたんだい？」

「楽しかったですよ？景色を眺めたり、買い物をしたり、一緒にお弁当を食べたり」

「お弁当はどうだった？美味しかった？」

「ええとても。味は勿論、気持ちが詰まっていました」

「あの子頑張ったからね。早起きして作ってよかったわね、かがみ」

「今はまだ眠っていますけどね。それだけ楽しかったのだと思います」

「青春だね〜いいよね〜」

「買い物って何買ったの？」

「小物と服…ですね。似合うと思います」

「あおい君のは買わなかったの？」

「自分のは買っていませんね。かがみが楽しかったであれば、自分はそれで十分ですから」

晩ご飯を食べながら皆の質問に答える。帰ってきてから早3時間、ずっとこの調子である。まだかがみは寝ているようだ

「…ではおやすみなさい」

「はいおやすみ」

晩ご飯やお風呂を済ませた後も話は続いたが、夜も更けてきたので寝ることにする

「今日は別々に寝ましょう。睡眠を邪魔したくはないので」

電気は付けずに、自分の布団を敷いて目を閉じる。明日は皆で遊ぶのかな

>かがみview<

「ん…」

ここ…私の部屋？なんで…駄目だ、頭が回らない

「時間は…5時か」

デートの帰りに電車に乗って…降りた記憶はないから途中で寝ちゃったのか…

「だとしたら、あお君が運んでくれたのかな」

横を見ると布団は畳まれている。まあ夕方から寝ているのは私くらいだろう

「居間かな…」

まだ少しぼやけている目を擦って部屋を出る。しんと静まり返った廊下からは人の気配は感じられなかった

「誰もいないのかしら…」

玄関へ行つて靴を見る。人が外へ動けば靴だつてなくなる…ようやく頭が回ってきた

「ああ君のだけないわね…」

ああ君の以外はまだ置いてある。ただ、彼のスペースだけが空いていた

「外…?」

靴を履いて外に出る。とりあえず境内に向かおうかな、近いし

> あおい view <

「……ん?」

いつものように境内を掃いていると人が来た。ここは神社の境内だし珍しい事ではないのだが、来た人物が意外だった

「おはようございます、かがみ」

「おはよ。帰ってきてから掃除してたの?」

「帰ってきてって…かがみ今何時なのか分かります?」

「5時でしょ？電車で寝ちゃったのよね私。運んでくれてありがとうね」

「どう致しまして。ですが勘違いをなさっているようです。今は5時は5時でも午前5時ですよ？」

「……へ？」

いまいち状況が飲み込めていないかがみに説明をする。半日眠っていたと言われれば誰だって驚くよね

「そっか、そんなに寝ちゃったんだ…」

「ええ、とてもよく眠っていましたよ？背負っても、起きる気配はほとんどありませんでしたし」

「せ、背負って帰ったの!？」

「そうですね？いい体験になりました。意外と軽かったですし」

「意外と？意外とはなんだ」

かがみがジト目でこちらを見てくる。流石女の子、体重関連は反応が早いね

「はは、冗談ですよ。それより自分に何か用ですか？」

「え？いや特にそういうのじゃないけど…やる事もないし、掃くの手伝おうか？」

「ありがとうございます。大体は終わっていますから、集めて処分しましょう」

「分かったわ、ちょっと待ってて」

「でしたらこれを使って…」

「いいの、少しでも動いて頭を回しておきたいから」

自分の箒を渡そうとすると、かがみは断って新たに箒を取りに行った。戻って来てからは2人で掃き、終わった後自分はお風呂に入った

「上がりましたよ、何かお手伝いしましょうか？」

「いいわよ。今日は日曜日だからどうせしばらくは起きてこないでしょうし。3人分だけ作っちゃうから休んでて？」

そう言うとみきさんは1人でキッチンへ行った。ご厚意を無駄にするわけにもいかないのでテレビを見ることにしたが、そこにはかがみもいた

「あおいお兄ちゃんもお母さんに言われたの？」

「ええ。自分も、という事はかがみもなんですか？」

「まあね…あ、出来たみたいよ？」

朝ご飯が出来たらしく、みきさんが運んできてくれた。なんかここまでされると悪いな

「ご馳走様でした、とても美味しかったです」

「ふふ、ありがとう」

「ご馳走さま。それであおいお兄ちゃん、今日はどうするの？」

「そうですね、皆さんと遊びましょうか。皆さんが時間を下さったから昨日デートへ行けたわけですし」

「それもそうね…じゃあみゆきとこなたにはこっちから電話しておくから、あおいお兄ちゃんは京一君とこうさんとやまとさんに連絡お願い。つかさは…まあ時間を見ながら起こせばいいわね」

「わかりました。つかささんは自分が起こしますよ」

早速片付けをしてメールを打っておく。すると早くもやまとさんから返事が返ってきた

『遊びの件、了解しました。皆でという事はこつちも誘うんですよ？でしたら、こつちの集合時間は30分ほど早めにした方がいいですよ。どうせ遅れて来るでしょうから』

「はは…こつちさんの事をよく分かっていますね」

「ねえ、何時から遊ぶ？それによってみゆき達の電車に乗る時間が変わってくるだろうし」

「今から余裕を持ってこちらに来れるとするなら…9時ですかね。ここを集合場所にしましょうか」

「9時ね？じゃあ伝えとくわ」

集合時間と場所を決めてメールを送る。京一とやまとさんには普通通りに送り、こうさんには30分早めの集合時間を記して送信する

「これでよし。そちらはどうですか？」

「こつちも連絡したから大丈夫よ。あおいお兄ちゃんを着替えは…してるわよね、お風呂入ったし。じゃあ私もお風呂に入って着替えようかな」

「昨日の服装のままですからね、それが良いかと」

そう言うと、着替えを取って来てお風呂の方へ歩いて行った。チャンネルいじっとこうかな…

「上がったわよ」

「おや、思っていたより早かったですね。もう少しかかるかと思っていたのですが」

「いくらなんでもそこまで長くは入らないわよ。約束もあるんだし」

「たしかにそうですが…まだ時間は結構ありますよ？」

「…ま、まあ髪も乾かさなきゃいけないからね」

どうやら時間を見ていなかったようだ。かがみは時間に影響のない程度にゆっくり入ったつもりだったのだろうが、まだまだ時間は余

っている

「そう来ましたか。しかし…改めて見るとストレートは新鮮ですね」

「お風呂の後とか寝るとき以外はしないからね、見る機会はあるまいらないかもね」

まだ乾いていない髪を指でクルクルと遊びながら微笑んで話すかのみ。話を聞いているとインターホンを押す音が聞こえた

「誰かしら…お母さんがちょっと見て来るわね」

「この時間だと京一達というわけではなさそうですが、今のうちにつかささんを起こしてきますね」

「そうね、お願いするわ」

まだ来ないだろうが準備をしたりすれば時間がかかるだろう。なので今のうちに起こすことにした

「つかささん、入りますよ」

失礼だが勿論起きてはいない。なので前回のようを起こして、完全に目を覚ましたのを確認してから部屋を出る。少しすると部屋から出て来たので一緒に居間へ行く

「お姉ちゃんおはよ…あれ？こつさん？」

「こつさんお早いですね、先程お越しになったのはこつさんだったのですね」

「こんにちは…でいいんですかね？この時間って」

「いいんじゃない？細かい事は気にしなくていいのよ」

居間へ行くところさんとかがみが楽しそうに会話していた。先程インターホンを鳴らしたのは彼女のようだ

「しかし、何故こんな時間に？まだ8時ですよ？」

「いや〜いつも遅れてやまとに迷惑かけちゃいますからね。ですから早めに来てみました」

はは…と笑いながら話すこうさん。なんだか悪いな…

「こうさん実は…」

このままでは悪いので事情を話す。こうさんは納得しているようだ

「なるほど…まあ、私が遅刻しないように考えてくれたんでしょ
うね」

「でしようね。やまとさんらしいわ」

「やまとさん、こうさんにはちょっと厳しいこと言うけど一緒にいる時凄く楽しそうだもんね」

「やまとにとっての私はどのくらい大事なのかは分かりませんが、やまとは私の1番の親友ですからね〜私も一緒にいて楽しいですし」

つかさんがポヤポヤとした表情でやまとさんの事を話すと、こつさんは微笑んで頷きながら話していた

「なんだかあおいお兄ちゃんと京一君みたいね。それよりもつかさ、そろそろ着替えた方がいいんじゃない？こつさんもいるんだしさ」

「はうつ？！」

その後つかさんはパジャマ姿であること洗面台へ顔を洗いに向かい、少しした後戻つて来て部屋へ行き着替えてきた。その慌ただしい姿を見ながら話を弾ませる

「ピリリリ」

「電話ですね…もしもし？」

「あおいか？父さんだ」

「父さん？何かあったの？」

「いや、特に何も無いんだが…そっちでは何も無いか？ちゃんと暮らせてるか？」

「大丈夫だよ？今は家では暮らしてないけどね」

「なんだ？野宿でもしてるのか？修行みたいだな」

「はは…違つよ、自分の家じゃなくて彼女の家で暮らしてるって意味だよ」

自分の一言の後、少しの間声が聞こえなくなった。ショックだったかな？

「…彼女？彼女が出来たのか？」

「出来たけど…なに？まさか駄目とか言わないよね」

「いや、唐突だったから驚いただけだ、よかったじゃないか。帰って来たらちゃんと紹介してくれよ？」

「分かってる、勿論そうするつもりだよ…彼女にコスプレ服押し付けたりしないって約束するならね」

ぬう…と言葉に困る父さんの姿がすぐに浮かんだ。さあ、なんて答えを出すのかな

「…分かった、約束しよう。それにお前に押し付けるのもやめにする」

「本当に？それは助かるよ」

「まあ彼女も出来たし、そういう事するわけにもいかないだろ。それにこっちにはまだ逸材になるやもしれぬ…」

「…とりあえず言っておくけど茜と母さんにも駄目だからね？」

「よ、よくわかったな…まあいい。父さんは仕事と戯れる事にするよ。じゃあまたな」

徐々にテンションの下がって来た父さんは電話を切ったようだ。電

話して来た割にはあまり深くは聞いてこなかったね

「…お父さんなんて？」

「ちゃんと暮らせているのかを聞いてきましたね」

「暮らせてるかっていうのは大丈夫ね。自分の家ではないけど」

「それは伝えました。そうなった経緯を話してはいませんけどね」
質問に答えているとインターホンの音に遮られた。みきさんが知らせに来たという事は来たんだろうね

「よう、来たぞ。そうだ、あおい…荷物がお前宛てに来たみたいだから業者さん連れてきた」

「どうも…結構大きいねこれは…父さんから？」

「何が入っているんですか？」

「結構重たそうだけど、ゲームでも頼んだの？」

「いや、あおいお兄ちゃんの場合買いに行くだろ」

「気になってしまいますね…」

玄関に入って来た4人と家の中にいる3人に挟まれる。そんなに気になるかな…

「とりあえず開けてみましょう。皆さん上がって下さい」

「それじゃお邪魔します」

皆を居間へ通す。やまとさんはこうさんが来ていることに驚いていたが、すぐにいつものように接していた

「早く！早く！」

「では…あれ？これ、もしかして自分のゲーム…？」

「ソフトにW〇iにP〇3…しかも60GBの奴じゃないですか？」

「よく分かりましたね〜そうですよ？」

「何か紙が入ってますね。なにになに…」

「あつちで茜が暇になるといけないと思って借りてた、スマン。下の方に謝罪の気持ちを入れといた、だつてさ」

開けると中には見覚えのある物が入っていた。なるほど、持ち出してたのか

「下にまだ入ってるみたいよ？」

「これは…ボ〇太くん…」

「しかも量産型ですか…」

「まあ通常のボ〇太くんは持っていますからね。文面上であれ、謝ってますから許しましょう」

「で？これどうするんだ？」

「一度自分の家に行きましようか。その後皆で遊びに行きましよう」

「賛成…でもどこに？」

「そうですね…カラオケなんてどうですか？まだ行っていませんよね」

「カラオケですか、いいですね。行きましよう」

カラオケの言葉にやまとさんが素早く反応する。ひよっとすると…

「こうさん、やまとさんって…」

「お察しの通りカラオケ好きですよ？私もよく一緒に行きますし」

「それはよかったです。盛り上がれそうですね」

目的地が決まった以上、準備をする。出した物をまた直し、かがみはりボンで乾いた髪をツインテールにしている…よし、出来たみたいだし行こうか

カラオケ、再会

「少し待って…はい、いいよ」

「ここでもいいのか？」

「よし、ありがとう」

自分家の玄関から荷物を入れて、自分の部屋まで持って行く。流石に玄関に置きっぱなしというわけにはいかないだろう

「こつこつという時男の人って凄いなあって思っちゃうよね」

「京一君は分かるけど、あおい君は女の子にも見えるからね」

「それにしてもボ○太くんが送られてくるとは…先輩ってフル○タ好きなんですか？」

「ええ、自分もかがみもそうですよ？まあ父さんもそうですよ」

「へ〜お父さんも…キャラクターは誰が好きなの？」

「たしか大佐殿が好きでしたね。わざわざ車を購入して痛車にしましたし」

「うわあ…」

あ、引いてる…まあ自分も最初は驚いたけどね

「痛車か〜こんな身近なところに持つてる人がいたんですね」

「痛車って大事にする人多いよね〜」

「そりゃあ車なんだから大事にするだろ」

「というか、キャラに傷つかないようにするだろ。せっかくプリントしたんだし」

「ね、ねえ…さっきから話してる『イタシヤ』って何?」

「イタリアの車…なのでは?それにしてもこつが車の話に反応するなんてね」

「なるほど…省略するとイタシヤになりますね。ようやくスッキリしました」

痛車について話している自分達とは違いつかささん、やまとさん、みゆきさんは意味が分かっていないようだ。一応説明した方がいいね

「…という事です。分かりましたか?」

「イタリアの車じゃなかったんだね〜」

「それほどまでにキャラクターを愛するというのは凄いですね」

「分かりましたが…こつが反応する物って結構な割合でろくなものがありますね」

「おや、こつさんは自分にも反応を示しましたよね。ということとは

自分はろくなものではないわけですね？」

「い、いえ、先輩は違いますよ！だって先輩は私達と先輩方の橋渡しをして下さったじゃないですか！」

説明をするとは皆は納得したようだ。やまとさんはこうさんの方を見ながら話していたが、自分が話しかけると慌てて否定した

「はは…ありがとうございます。あ…着きましたよ？」

「笑わないで下さいよ、私なりに真剣に答えたんですから…」

「すみません。そして自分をそのように思っただけで、ありがとうございます」

「は、早く入りましょう。時間がもったいないです」

やまとさんが睨んでくる。といつても本気で睨んでいるわけではなさそうだ。笑ったことを謝った後、カラオケ屋に入る

「ねえあお君、あお君はここに来たことあるの？」

「ええ、時々来ますけど…どうして分かったんですか？」

「だって迷わずここに来たでしょ？それにお店のシステムに慣れているみたいだからさ」

「御名答、割引券を手に入れる度にここ来て歌ってんだよ」

「色んな所で割引券見るからね。流石は○ダックスだよ」

時間を決めて部屋へ行く。今回は割引券持ってきてないからちょっと高いけど…

「それで、誰から歌うんですか？」

「早く歌った方がいいわよ？ほら」

かがみが指差した方を見るとこなたさんが次々と曲を入れている。これはしばらく回って来そうにないね

「出逢いは風の中 恋に落ちたあの日から 気づかぬうちに心はあなたを求めてた」

「では自分は飲み物を持って来ますね」

「私は何でも構いません」

「私、オレンジジュース」

「私はお茶でお願いします」

「じゃあ私もお茶で」

「俺は紅茶で。なかったら適当に頼む」

「私は一緒に行って手伝うわ、1人じゃ持ちきれないだろうし」

「ありがとうございます。では行って来ますね」

早速こなたさんが歌い始めた。しばらくは歌うこともなさそうなので、かがみと一緒に飲み物を取りに行く

「よし、これであとは自分達の方ですね。かがみは何にします？」

「私？そうね…じゃあアップルジュースでいいわよ？」

「分かりました…はいどうぞ」

「ありがとう。あお君は何にするの？」

「そうですね…炭酸は歌う前には向いていませんよね…では自分もアップルジュースにします」

全員の分を注いで部屋へ向かう。部屋からドリンクバーまでが離れているうえに、ペースを落として歩いたので部屋に着いた時には既に数曲歌い終えたようだった

「あ、おかえり〜歌ってたから聞かなかったんだろうけど、私の分もある？」

「ありますよ…はいどうぞ。お茶ですが」

「ありがと〜次歌ったら私が入れたのは終わるからさ、誰か次歌う？」

「勝手に曲入れておいて何を言うかと思えば…私はまだいいわ」

「じゃあやまとさん、はい！」

「私ですか？では…」

こなたさんがやまとさんにマイクを差し出す。やまとさんはきょんとしていたが、マイクを受け取り曲を入れる

「夏が来るから海へ行こうよ　ちょっとだけ立ち止まって　迷う日もあるけど」

「ほう…上手いな」

「カラオケにはよく来ますからね。ほら、好きこそ物の上手なれって言いますし」

「ふう…次はこうが歌う？」

「私はまだいいよ。先輩達に回して？」

「では…席順的に京一先輩で」

「今度は俺の番か…席順ってことは次あおいだな。準備しとけよ？」

「分かってるよ」

「時代を越えて人は争いを繰り返す　繋いだ糸もすぐに切れてしま
う」

京一が歌い始めた。その間に曲を入れるんだけど…さて、何にしようか

「京一先輩ってアニソンとかは歌わないんですか？」

「一般的な曲を歌っているのはよく聞きますけど、京一はあまりそ
ういうのは歌いませんね」

「…ほらよ、次お前だろ」

「ん、ありがとう」

「この曲は…アニソンかな？」

「I have this vacancy in my head
There's just something that
I always tearing me apart」

「洋楽…ですかね？上手ですね」

「まあそうだけど、あるアニメのエンディングなんだよ」

「それにしても声高いわね」

「…はい、次どうぞ」

歌い終えて次に回す。その後は昼食としてメニューを頼んでまだま
だ歌う

「叶えるために生きてるんだって 忘れちゃいそうな夜の真ん中」

「あれから数えきれないほど 夢を叶えてきたけど 心はまだ君を
思ってるよ」

「走る南風に乗って 蒼く染まる風を切って 心ごと駆けだしているんだ」

「I'm proud 届きそうでもつかめない いちごのように
甘く切ない事 夜中思い浮かべてた」

「バレンタインデー・キッス バレンタインデー・キッス バレン
タインデー・キッス リボンをかけて…」

「つばめよ高い空から 教えてよ地上の星を つばめよ地上の星は
今何処にあるのだろう」

「君がいるから 明日があるから 一人きりじゃ生きてゆけないか
ら」

「たどりつく場所さえも わからない 届くと信じて 今 想いを
走らせるよ」

やまとさん、京一、自分、かがみ、つかささん、みゆきさん、こな
たさん、こうさんの順で歌う。ようするに席順である

「…いや、楽しかったね」

「また来たいですね」

「そうですね…ん？」

「どうかしたの？あお君」

「あいつは…」

時間が来たので片付けをして部屋を出る。すると会計へ向かう道の途中、こちらの方へ歩いてくる集団の1人に見覚えがあった

「てめえは…神藤！」

「うわっと…いきなり何するんですか！」

「無抵抗の人を傷つけといて、よくそんな事が言えたな！」

「無抵抗の人を自分が…？いつです？」

「傷つけといて忘れるなんて、いい身分だな！」

「お、おい！落ち着けよ！」

「お客様、どうかなされましたか？」

「チツ…出来れば邪魔がない時に会いたかったな…」

相手は自分に気付くなり、いきなり殴りかかって来た。それ自体は避けたために無事だったが…相手の連れが止めたり、店員が騒ぎに駆け付けたりしなければ、延々と続きそうな勢いであった

「さっきの人…ああ君の事凄い顔で見てたけど、知り合い？」

「ええ…名前は池山清一、同級生です」

「俺達と同じ小学校、中学校出身のやつだったよな。今はたしか、うちの学校のA組にいたはずだ」

「あの人も陵桜の生徒なんだ…しかもあおちゃんと京ちゃんとは昔から同じ学校だったなんて…でもだったら学校で危なかったりしない？」

「いえ、学校じゃ人目に付くでしょうからそれはないと思いますよ？」

「さっきの様子から見てもあまり人前で暴れるタイプじゃなさそうですね」

「みたいね。それより私が気になったのは話の内容の方ね」

「京一は何か知らない？」

「…いや、俺は知らないな」

「まあ、あお君強いらしいし、大丈夫だとは思っけど…気を付けてね？」

「それは分かっていますよ。それは、ですけどね…」

引っかかるのは何時、何処で、誰を傷付けたのかだ。それも重要だが、何かあったとしても皆を巻き込まないようにする事も重要だね

アルバイト

「おはよう京一。皆はまだ来てないの？」

「おはよう京一君。そういえばいないわね……」

「京ちゃんおはよ〜」

「よ、おはよう3人とも。他の奴らはまだ来てないぞ……って言うても俺もさっき出て来たんだがな」

翌朝、いつものように京一の家の前で待ち合わせる。また皆で行きたいな〜カラオケ

「おはよ…皆…」

「ごなたさんおはようございます…どうしたんですか？目の下に隈ができていますけど…」

「どうせまたネットゲーしてて徹夜したんでしょ？」

「流石に3日連続で完徹はキツイよ…」

「どんだけ〜…」

ふらふらと危なっかしい足取りでごなたさんがやって来た。よっぽど眠いんだろうね

「すみません、ちょっと遅れました!」

「お待ちせしました！行きましようか」

「おはようござん、みゆき。でもそこまで待つてないし、今からでも間に合うからあんまり気にしなくていいわよ？」

「あなたさんが来て少し経つとござんともみゆきさんが走ってきた。しかしかがみの言ったとおり、集合時間は早めなので今からでも十分間に合う」

「でも、遅れたのは事実ですし…」

「遅れた自覚もありますし、遅れを取り戻そうと走って来て下さいました。それだけで十分ですよ」

「ですが…いえ、これ以上は無料というものです。ありがとうございます」

「構いませんよ。それより行きましようか？立ったままではあなたさんがつらそうですし」

「自分の言葉に若干の反応を示すあなたさん。みゆきさんとござんも心配そうに近寄っているが、眠そうな事を除けば大丈夫だろう」

「あゝ保健室で寝たい…」

「仮病は駄目よ？寝てないのはあんたが悪いんだから」

「休み時間に寝たらどうだ？寝ないより少しはマシだろ」

「そうさせてもらおうよ。誰か後でノート見せてね？」

「自分が見せますよ。ですから安心して眠って下さい。授業中は駄目ですけどね」

「ありがとう、頑張ってみるよ…ふあゝあ」

話していると学校に着いた。かがみとは教室の前で別れたが、あの顔は心配しているのだろう

>放課後<

「はいこなたさん、今日の授業のノートです。明日返して下さい結構ですから」

「ありがとう…ううダルい、まだ眠い…」

「大丈夫？ほら帰るわよ。ついでに立ち読みもしたいし」

「立ち読み…今日何か本の発売日なんですか？」

「まあね。こなたがいつも読んでるのが今日出でて、私が読んでるやつももう出てるはずだから行こうと思っただけ」

「だったねゝよし、行こうか」

立ち上がり帰る準備をすることたさん。立ち読みかゝ何か読むものあるかな

「今回も面白かったけど、他には特にっていうのはないわね…」

「ん…応募者全員サービス…？」

「クオカード…ですね。これがどうかなさったんですか？」

「全種コンプせねば…よし、バイトをしよう！」

「こいつ分かりやすいな…というか眠いのは何処へ行った」

「そんなものは吹き飛んだ！」

「ふむ…自分もアルバイト始めてみましょうかね」

「あおい君も？お金には困らないみたいだけど」

「お金に困らないからといって働かないという訳にはいきませんか
らね。勉強の一つだと思って精一杯やりますよ」

「なら一緒に頑張ろうよ！」

いつまでもただ使う側にいるのは嫌なので、これを機会にアルバイトを始めようと思う。もちろん皆といる時間を極力減らさないようにね…

「…で、どうだった？」

「ふふん、勿論…採用！」

「まあ、あお君は出来そうな感じするけど…あんたが働く姿は想像出来ないわ」

「それはちょっと酷い…」

「はは…どれどれ、喫茶店か…俺も受けてみようかな」

「京一君も来なよ、なかなか給料良いところだよ？」

「そうさせてもらひゃ」

「京一、その…大丈夫？」

「まあ欲しい物もあるからな、多少の無理は押し通すさ」

笑いながら働く事を決意した京一。それ自体はいい事なんだけど…
大丈夫かな京一

「…それで、京一さんも採用なされたんですね？」

「ああ…だがコスプレ喫茶なんて聞いてねえぞ！」

「え〜言っただけじゃなかったっけ？」

いつもの顔で京一をいなすこなたさん。京一には説明しなかったんだ…因みに今日はアルバイトは休みで、学校も終わり皆で勉強と遊びを兼ねて柊家に集まっている

「コスプレ喫茶か…こなたとあお君にはピッタリね」

「ええ…ですが最近ハ〇ヒの期間らしく自分と京一がコスプレ出来る人間がいらないですよ。ですからしばらくは清掃です」

「まあFaOeだったら京一君はアーチャー出来るんだけどね」

「なんだそれ？まあいい、まだコスプレしないで済むならマシだな」

「京一君がコスプレ好きならあおい君と揃って良い人材になるのにな」
「ねえ…しないの？」

目をうるうるさせてこなたさんが迫るとふう…と京一が軽く溜め息を吐く。こういう趣味は、好きな人が楽しめればそれでいいと思っは思っ

「…まあ、しなきゃならないってなったらやるさ。だから心配するな」

「そうなると凜も必要だよね！かがm…」

「私はやらないわよ？」

「絶対ピツタリだと思っただけどな」という訳で！

こなたさんがごそごそと何か取り出した。すぐに分かったが凜とアーチャー、そしてア○シンのコスチュームだった

「バイト先から理由付けて借りて来たんだ」ささ、着てみてよ。ア○シンはあおい君ね」

「何で私が…あお君と京一君は部屋から出てて？」

「分かりました」

「文句を言いながらもちゃんと着てくれるんだね、流石はツンデレ」
「うっさい！」

部屋を出て廊下で着替える。さすがに廊下で着替えるのは結構恥ずかしいな…

「カツラとかいいのかな…自分あそこまで髪長くないけど」

「いいんじゃないか？…できた、可笑しくないか？」

「大丈夫だよ。さて…かがみ、もう入ってもよろしいですか？」

「あ、ちよつと待って…よし、入っていいわよ？」

「では…へえ」

部屋に入ると凛のコスプレをしたかがみがいた。服を着替えただけで結構印象が変わるね…あ、ちよつと赤くなってる

「どう？似合ってる…かな」

「ええとても。可愛らしいですよ？」

「そ、そう…よかった。あお君も似合ってるわよ？」

「まさしく武士といった感じですね。お似合いです」

「だよね、素振りとかするって言ってたから持って来たんだけど、予想通り…いや、それ以上だね京一君のアーチャーも」

「京ちゃんかつこい〜」

「そうか？ってかこれがさっき言ってた奴か…こんな格好して歩いてたら変に見られそうだな」

「いやいや、さすがにそんな事はさせないよ？この中で大丈夫なのはかがみくらいでしょ」

「まあ…普通にありそうな服だしな」

「ふ〜む…若干目立つ気はしますが、それほど違和感はありませんね」

「あんまりジロジロ見ないでよ！」

「すみません、つい見入ってしまった…」

見ているとかがみに怒られた。結構新鮮だからつい見入ってしまったのがマズかったのだろうか…皆が帰ってからもう一度謝っておこうかな

> 清一 view <

「ピンポン」

「…誰だお前？」

「俺の事は知らないでしょうね。でも…この写真の奴には覚えがあるんじゃないですか？」

「こいつ…！一体どういう関係だ？お前とこいつは」

この人は神藤が中学の時にやられたのは調べればすぐに分かった。写真を見せたら案の定目の色が変わって食いついてきた

「ちょっとした憎しみの対象…ですかね。あなたもこいつ憎いでしょっ？」

「おかげでサツに世話になったからな…憎んでないわけないだろ」

「だったら手を組みませんか？こいつ相手に1人じゃ勝ち目がありませんから」

「勝ち目？俺は仲間と一緒に仕掛けて勝てなかったのに、お前みたいなやつと組んで勝てるのか？」

「ええ…ただし時間がかかりますがね。その間に出来る限り多くの人と金…そして情報が欲しいですね」

神藤に勝つためには相当の時間が必要だ。その準備をするために段取りを話す。さあ楽しくなってきた

誕生日への備え、そして悩み

「まったく、昨日は疲れたわ…」

「そうですか？自分は楽しかったですよ？かがみのコスプレも見られましたし」

京一の家に向かって歩く。今日はちょっと雲が多いね、しばらくしたら曇りそうだ

「まあ私もあんまり悪い気はしなかったけどさ、その…慣れてなかったし、恥ずかしかったって言うか…」

「最初はそうですよ。自分だってそうでしたし、こなたさんだってそうだったのだと思いますよ？」

「そうよね…ま、慣れる気はないけどね」

「お姉ちゃんもうコスプレしないの？」

「進んではやらないわよ。どうしてもやらなきゃならないって言うんだったら、そういう時はやるけどね」

「そうですか…ではその時のためにコスプレに慣れておきましょう」

「ああ君、まさかと思うけど私をそっちの世界に引き込もうとしてない？」

「……そんな事ありませんよ？」

「なら今の間は何？」

そんな事を話していると京一の家に着した。京一は先に来ていた皆と話しをしているみたいだ…こなたさんとこうさんもいるね

「おはようございます、皆さん」

「ようあおい、かがみ、つかさ、おはようさん」

「あ、おはようございます。あおいさん、かがみさん、つかささん」

「あおい先輩、かがみ先輩、つかさ先輩おはようございます」

「おはようあおい君、かがみ、つかさ」

「おはよう京一君、みゆき、こうさん、こなた」

「京ちゃん、ゆきちゃん、こうさん、こなちゃんおはよう」

各々挨拶をする。当たり前のように行っているが、なかなか出来る事ではないと思う。親しき仲にも礼儀ありっという言葉があるくらいだしね

「いやいや聞きましたよ〜かがみ先輩。随分可愛いコスプレしたそうですね〜」

「ぐ…こなた辺りから聞いたのね…」

「あたりですよ。というよりこなた先輩から聞いた話からして、こ

「なた先輩以外に話してくれる人はいないと思いますよ？」

「なんかさく私酷いこと言われてない？」

「いや、自業自得でしょうが」

「あれ？でもあおちゃんもそういうの好きだから話したりするんじゃないの？」

「泉さんが話をして下さったのはあおいさん達のいらっしやる前でしたからね。あの時点で先ほどの話を話すことの出来るのは京一さんと泉さんだけでしたから」

「そついえばそつだね」

やっと納得出来たらしく、笑顔を見せるつかささん。こういう笑顔を見てるとこっちまで笑顔になる

「あ、そつだ。皆今日開いてる？」

「私とつかさは空けてるわよ？」

「私も特に用事はありませんね」

「私も暇ですよ」

「自分と京一はアルバイトが入ってますが、その後であれば大丈夫ですよ」

「そつか…まあ私もバイト入ってるんだけどね」

「それじゃ私達が空けてる意味ないでしょうが！」

「恐いよ〜あおい君助けて〜」

予定を聞いてきたこなたさんだったが、自分自身も予定があるらしい。それを知ってかがみが怒るが自分の後ろに隠れてやり過ごすらしい

「かがみ落ち着いて下さい。確かに予定はありますが、その後は空いていますし、こなたさんは自分達よりも早く終わりますから。自分達も出来る限り早く戻るよう急ぎますので」

「本当よね？だったらいいけどさ…あお君今日何があるかは知ってるの？」

「いえ、特に何があるのかは知りませんけど」

「今日は私の誕生日なのだよ、祝って祝って〜」

かがみが落ち着いたからなのか、こなたさんが後ろから出て来て両手を上下に元気よく振っている。こなたさんの言つとおり祝ってあげよう

「そうだったんですか〜おめでと〜ございます」

「俺やこうもさつき知ったんだがな。ちゃんと祝ってやったよ」

「知らなかったんでプレゼントはまだありませんけどね」

「そうですね…誕生日ですし、プレゼントも買わなければいけませんよね」

「期待してるよ、とは言っても出来る限りのでいいからね？」

「わかってますよ…あ、もう着いちゃいましたか、ここでお別れですね。続きはお昼にしましょう」

「ああ、じゃまたな」

靴からシューズに履き替えた後、手を振ってこうさんと一度別れる。かがみとも教室の前で別れたけど、休み時間や空いた時間にはこっちに来るだろうね

「さて、何にしようか…」

「ゲーム…は持ってそうだし駄目だよな」

「それは駄目だろうね…」

「ああ君、京一君。あなたのプレゼント決まった？」

「かがみ、いいところに来て下さいましたね。プレゼントは何が良いいと思います？」

「あなたさんはみゆきさん、つかさんと仲良く話している。そこから少し離れて悩んでいるとかがみが来た。ちょうどいい、プレゼントの事聞いておこうかな」

「まったく浮かばないんだ。何か良い物ないか？」

「そつね…私はやっぱり普段から身に着けられる物がいいと思うわよっ。」

「なるほど…参考になるな。ならバイト帰りに買いに行くとするか」

「そつだね。かがみ、ありがとうございます。そつだ、かがみもプレゼントは身に着けられる物がいいんですか？」

「へ、私？私もやっぱり身に着けられる物がいいかな…皆と一つでも繋がってられるように…ね？」

「ふ〜ん？かがみんもロマンチックな事言い出すようになったね〜」

「こ、あなた！？あんた何時の間にかこっち来たのよ」

「ん〜今だよ？かがみが喋ってる時にね」

かがみの問いにニコニコしながら答えるあなたさん。よほど話していた事をあなたさんに聞かれたくなかったようで、すでに真っ赤になっっている

「それで先輩方はプレゼントどうするか決めたんですか？」

「ええ、と言っても大まかにですけどね」

「買いに行くから一緒に来るか？バイト終わってからになるだろうがな」

「助かります。同じようなの買ったら困りますからね〜」

「物にもよるだろうけど、そうなたらちゃんを使い分けるから大丈夫だよ。それより…私の家でやるんだよね？」

昼休みになり、お昼ご飯を食べながら今日の事を話す。どうやら「なたさんの家でやることになっているようだ」

「私の家は遠いですし…出来れば泉さんのお家で開かれた方が皆さんの都合も宜しいかと思えます」

「まあ私達の家でやってもいいけどね。近いし」

「自分の家も使えますよ？」

「うーん…私はいんだけどね、お父さんが何言い出すか分からないからね。出来れば家で開きたいんだけどさ…2人問題がねえ？」

「あなたさんがこちらを見ながら皆に投げかける。何か不味い事でもあるのだろうか」

「厳密には京一君よね…」

「俺？俺何かしたか？」

「まああおい君は女装すればバレないし、かがみんっていう彼女もいるからね。後者だったら説明すればすんなり入れるだろうね」

「先輩の家ってそんなに男性に厳しいんですか？」

「まあお父さんがね」と言うことで、京一君頑張っただけ！

「俺だけかよ。まあ努力はしよう…」

話からして疲れたらしく、手をヒラヒラと振りながら力無く京一が答える。そんな昼休みも終わり、午後の授業を過ごして放課後が訪れる

「私達はバイトだから、途中まで一緒に帰るよ」

「はいはい。そうだ、あお君と京一君はどのくらいに終わるの？」

「自分達はこなたさんよりも1時間ほど遅れて終わりますよ。何故そのような事を？」

「あんまり遅いようなら先に準備しておこうと思ってね。もちろんこなたから許可貰ってからになるけどね」

「なるほど、終わる時間が分からないと合わせようがありませんからね」

「私はいいと思うよ？むしろ先に準備してくれた方がすぐ楽しめるし」

「そうね、私達は準備しておくから。終わったらメールしてね？」

「わかりました。それではまた後ほど」

道をかがみ達とは違う方に曲がり、手を振って別れる。前に祝ってもらった分、返せるかな

災難と誕生日

「ふう…よし、だいぶ綺麗になった。そろそろ上がる時間か？」

「みただいね。店長、自分達はお先に上がらせていただきますね」

「はい、お疲れ様」

「京一は少し待ってて？着替えるから」

「ああ、こなたの父親に男だつてバレないようにか…一応俺も行くんだし、する必要なさそうだな」

「京一のもあるけど着る？」

「着ねえよ！」

店長に挨拶をして、着替えた後話しをしながら店を出る。綺麗にするっていいね

「あ、やっと来た！遅いよ？女の子…っと、あおい君は女の子のふりしてるだったね。何にせよ、待たせるなんていい度胸してるよね」

「そう言われましても、自分達は今終わったばかりなんです…」

「というより、待ってるなんて言った覚えはないんだがな」

「冗談だよ〜一緒に帰ろ〜よ〜」

待っていたこなたさんに京一が素っ気なく言い張ると、寂しそうな声で腕を引つ張ってくる。さすがに女性を1人で帰らせるような事はしないけどね

「俺達は今からプレゼントを買いに行くんだぞ？貰う本人が来たら楽しみがなくなるだろ」

「いいんだよ、私はお店の前で待ってるから。プレゼントは皆に見てもらいなよ」

「皆？今の言葉通りなら俺以外にプレゼント見るのはあおいだけだが」

「分かってないな、私が1人で待ってたとでも？」

「ああ君と京一君もバイト終わったの？」

「すみません先輩、思ったより時間かかりました。はいあんまんです」

「お〜どもども。帰ってから払うよ」

こなたさんが言いきる前に自分の名前を出される。声のした方を向くと、道を歩いてくるかがみ達がいた。こなたさんはやまとさんから袋を受け取って、美味しそうにあんまんを食べている

「かがみ、それにやまとさん…皆さんも。一体どうして？」

「ここから今日はこなた先輩の誕生日だと聞いたんです。それで向かおうと思ったのですが…」

「場所を知らない事をうつかり忘れてたみたいで、それであおい先輩の家の前でやまと待ち合わせして合流したんです」

「こなたの家で準備じゃなかったのか？」

「こなちゃんの為に皆で頑張ったら早く終わったんだ」

「それで時間に余裕が出来てしまいましたので、こなたさん達のアルバイト先に訪れたのですが…」

「その時こなたが出て来たわけ。あお君と京一君はもう少しかかるって聞いたから、少し話をしてちょっとコンビニ行ってきたのよ」

「なるほど、そういう事でしたか。しかしここで話すのもなんですし、プレゼントを買いに向かいながら話しましょう」

「それで先輩、質問なんですけど…なんで女の子の格好してるんですか？」

「これですか？これはですね…」

移動を始めると真つ先に自分の格好の話になったが、事情を説明するところさんとやまとさん以外は理解したようだった。本当はやまとさんはプレゼントを選ぶ時に呼ぶつもりだったんだけど…まあいいかな

「…京一先輩、これなんかどうですか？」

「こなたにプレゼントするって考えると少し違う気がするな。それ

よりは…俺はこっちが似合うと思うがな」

「お〜そういうのもあるんですか〜京一先輩はそれにしたらどうですか?」

「そうだな、だが俺のは決まったがこうのが決まってないからな。あっちにまだあったし行ってみるか」

「そんなんですか?だったら行ってみましょうよ」

「あおい先輩、これ…こなた先輩に合いますかね?」

「ふむ、いいと思いますよ?」

「なら私はこれにします。一緒に見て下さってありがとうございます」

「いえいえ。こちらこそ色々と見て回れましたから、良い参考にさせていただきましたよ」

プレゼントを買うためにお店に入り、自分はやまとさんと、京一はこうさんと回っている。やまとさんは決まったみたいだね

「先輩は何にするか決まったんですか?」

「ええ、少し待っていて下さい……これです」

「ブローチですか、いいですね」

「ありがとうございます。さてお互いにプレゼントも決まりました」

し、会計に行きますか」

「そうですね…そういえば、こうと京一先輩はもう選んだんですね」

「既に選んだのであればお店の外にいますよ？」

「だったら外に出れば分かりますね。いなかっただら電話してみます、もしかしたら京一先輩に迷惑かけてるかもしれないし」

会計に向かい、順に済ませながら話す。やまとさんとこれだけ話すのは初めてかもしれないね

「あ…やまと、あおい先輩。選び終わってたんですか？」

「そうよ？…それにしても、こうが先に外にいたなんてね。意外だわ」

「私は人のプレゼントを選ぶのにあんまり時間はかけないからね。悩みはするけどさ、それでも結構早いと思うよ？」

「へえ、初めて聞いたわ…というより何でこういうのは早いのに、待ち合わせの時は来るのが遅いのかしらね？」

「そう返されるとは…でも今日はいいいじゃん。遅れてないし、先輩の誕生日なんだからさ？」

「…それもそうね。今日はこれ以上に時間の話はしないわ」

お店を出るなりこうさんと2人きりで話を始めたやまとさん。自分

はかがみ達の方へ行つて会話に参加する

「おかえり。あお君はどんなの買ったの？」

「自分のはですね…ですよ？」

「へーそうなの、それなら身に着けられるわね」

「京ちゃんは？何買ったの？」

「是非知りたいですね、泉さんに聞こえない程度でお願いします」

「俺のは…だな。こなたの場合あまり使わないだろうが、たまに役に立ってくれると思う」

「頑張つて選んでくれたんだもん。きつと使つてくれるよ」

「なにに？あおい君も京一君も何買ったの？見せて〜」

次の目的地はこなたさんのお家なので、こなたさんを先頭にして歩く。しかし話しているのが気になったのか、こちらに近付きプレゼントを袋から出そうと手を伸ばしてきた。危うくこなたさんにプレゼントを取られるところだった

「いいじゃんケチ〜！」

「よくありません、差し上げるときまで見せるつもりはありません
よ」

「ていうか、包んであるんだから開けるわけにもいかないでしょ」

「あそつか、そついえばそつだよな」

「まさか包んでないなんて事は思っでないよな？」

「ははは、まさか」

「せめてそついつ台詞は目を見て言っただな」

そんなやりとりを延々としていると、目的地が近付いてきたようだ

「あはは…あ、皆こなちゃんのお家が見えたよ」

そんな事していると着いたようだ。京一にとって問題はここからだろう

「京一君は準備しておいた方がいいよ？何が飛んでくるか分からないからな
いからね」

「何をどう準備すればいいのか分からないが、プレゼントは無事に渡してやるからな」

「うん…あ、一応私のお父さんだから、傷つけないでね？」

「という事はもし攻撃されても0・3・0くらいかな？」

「先輩何の数字ですかそれ？」

「後で説明しますよ。京一も良いようですし、入りますか？」

「だね。じゃあ私から入るから、皆は後をついて来て〜ただいま」

「皆さんはお先に入って下さい。自分は最後に入りますので」

玄関を開けてこなたさんが家の中へ入る。それに続いて皆も入っていき、最後につかささんが入ったのを確認して玄関を閉めた

「おかえりこなた。皆もよく来て…君達はどちらさんだい？」

「あ、俺はこなたの友人で萩原…」

「こなたを呼び捨てだと…？」

「自分は神藤と申します。今回はこなたさんの誕生日を祝おうと思
い…」

「ああ、はじめまして。でも君はいいよ。女の子のようだし」

「え？女の子の格好してるけど、あおちゃんは男の子だよ？」

「あちゃ〜…」

「男だったのか…ならここを通すわけにはいかないな」

「こなたさん達は先に部屋へ向かっていて下さい」

「後でちゃんと来てよ？待ってるからさ」

そう言ってこなたさん達は部屋に行き、自分と京一、こなたさんのお父さんが玄関に残った

「…とりあえず上がりなさい。話をしようか」

「はい、お邪魔します」

「お邪魔します…」

>こなたview<

「大丈夫かなあ…」

「あおちゃんと京ちゃんの事？大丈夫だよ、2人とも優しいから。こなちゃんのお父さんも分かってくれるよ」

「いや、私もそう思いたいけどさ。実際お父さんが何するか心配なんだよね〜男友達っただけで話聞かないで突っかかって来そうだしさ」

「先輩方なら大丈夫でしょう。強いみたいですし、そう簡単にはやられないと思いますよ？」

「まあ逆にやつついたら問題ありそうだけど…心配ね」

ジュースを飲みながら皆であおい君達の話をする。かがみも扉の方ばかり見てるし…しばらくしてから見に行こうかな

>あおいview<

「聞くが、君達はこなたの何なんだい？」

「俺達はこなたの親友です！ってか包丁振り回しながら真面目に言

わないで下さいよ!」

「また呼び捨てにした!君みたいな男が娘に寄り付かないようにしないとイケないんだ!」

「落ち着いて下さい、そんな物を振り回した所で誰も喜びませんよ?」

「五月蠅い!そう言ってあなたに近付いて、拳げ句彼氏にでもなる気なんだろう!」

「それはご心配なく。自分には彼女がいますから」

「あなたには魅力が無いとでも言いたいのか!許せん!」

最初京一を狙っていたあなたさんのお父さんであったが、後からは自分を標的にしているようだ

「...なあ、面倒だから気絶させていいか?」

「いや駄目だよ。あなたさんのお父さんなんだし、気絶させたらあなたさん心配するよ」

「お父さんだと?初対面の輩にお父さんなどと呼ばれたくないわ!悪い虫が付かないように、手塩に掛けて育ててきたというのに!」

「なんですって?」

「そうだろう!友達を作って、楽しく過ごしているかと思えば男友達まで作って!そればかりか家にまで連れてきて!」

「男友達の何がいけないんですか？」

「全部だ！娘に近付くなら！」

「てめえ、それで親かよ…」

「男友達というだけで毛嫌いするというのはどうなんですか？」

「なんだと？」

「あなたは自分の娘を信じる事は出来ないんですか？何故自分の娘が選んだ友人を外見や偏見ではなく、中身を見ようとしなないんですか？」

「来るんじゃない！私は包丁を持っているんだぞ！」

片手で振り回していた包丁を両手で持って正面に構えている。だがその手は震えていた

「それがどうかしましたか？刺したいのであればどうぞ。ただ、言わせてもらいます」

「何だ…」

「あなたは、こなたさんのお母さんの父親にとって…彼女を取り巻く人間にとって、悪い虫ではなかったと、心の底から言えますか？」

「……！」

「もし言えないのであれば、あなたはあなたの嫌う悪い虫と同じですよ?」

「…そうか、私は間違っていたのかもしれないな」

力なく座り込み、包丁を置いた。どうやら落ち着いたようだ

「一度も間違えずに進んで来たって奴の方が有り得ませんよ」

「はは、それもそうだ。そういえばまだ名前を言ってなかったね、泉そつじろつだ。よろしく」

「自分は神藤あおいと申します。よろしくお願いします」

「俺は萩原京一です。よろしくです」

手を差し出して握手する。そしてそのままそつじろつさんを立ち上げさせる

「これからは男でもちゃんと中身を見たいと思うよ。だが1つだけ…こなたを傷つけないでくれ。大事な娘なんだ」

「それは先程の様子から分かっていますよ。大丈夫です」

「俺達はいいつの親友ですから、傷つける奴は許しませんよ」

「おゝい、あおい君に京一君。生きてる?」

「こらこなた、友達に向かってそう言い方は失礼だぞ?」

「うわお父さん！あれ、怒ってない？」

様子を見に来たらしいこなたさんは、自分達の状況に驚いている。自分だってこなたさんの立場なら、同じように驚いたりするんだろ
うね

「話をしていたら分かり合ったので大丈夫ですよ」

「ちょっと前まで包丁振り回してたがな」

「あれはかなり大人気なかったと自分でも思う…」

「まあ治まったんならいいや。それよりさ、誕生会始めようよ」

「ですがそうじろつさんは…」

「私は皆が帰った後でやらせていただくよ。それまでは楽しんでい
つてくれ」

「ではお言葉に甘えさせていただきます」

お辞儀をしてこなたさんの部屋へ向かう。扉を開けると、最初に出
迎えてくれたのがみだった

「来たわね。2人とも大丈夫だった？」

「ええ大丈夫ですよ。心配して下さってありがとうございます」

「相手も無傷だし、お互い無事だ」

「そうよかった…あ、そうだ。はい2人ともこれ持ってね？」

そう言っただけか？　かがみが渡してきたのはクラッカーだった。見ると他の皆も既に持っている

「なるほど、一斉に鳴らすわけですか」

「そういうことじゃ、せえの…」

『おめでと〜！〜！』

「ってこういうのは本人以外が鳴らすんじゃないんですか？」

「いいじゃん、やっぱりこういうのは私もやりたいからさ。気にしない気にしない」

「こなちゃんらしいね。そういうばプレゼントはいつあげるの？」

「ん〜ケーキがあるし、食べ終わってからかな」

「なら早速ロウソクに火を灯して電気を消しましょ？」

「ロウソクは私にやらせて〜」

「つかさ先輩、私も手伝います」

「では電気は私が…消しますよ？」

つかさんとやまとさんがロウソクに火を灯し、みゆきさんが電気を消す。その後誕生日恒例の歌を歌い、こなたさんがロウソクを吹

き消してケーキを切った

「いただきま〜す。ん、美味し〜これってつかさが作ったの？」

「うんそうだよ〜キッチンを借りて作ったんだ〜」

「私もつかさに教えてもらいながらクリームを塗ったり、飾り付けしたりしたのよ」

「なるほどね、どつりでいびつな訳…」

「何か言ったか？」

「そういつ恐い言い方しないでよ〜今日の主役は私だよ？」

「あんたが余計な事言うからでしょうが…」

「ふむ…前回とは違うところですが、自分は上達していると思えますよ？」

「そう？そう言ってくれると嬉しいわね」

いつものように茶化し、他愛もない話をしながらケーキを平らげていく。へえ…飾り付けとクリームはかがみがしたんだ。言われるまで気が付かなかった

「ふう、次はプレゼントだね。楽しみ〜」

「そついえば先輩、こなた先輩のお宅に上がる前に言ってた数字…あれって何だったんですか？」

「後で話すと約束していましたね。あれは戦闘法を表す数字です」

「たしか目的、動作、技だった…よな？」

「え」と…」

「簡単に説明すると、0・3・0は回避を3つ以内の動作で技は使わずにこなす、という事です」

「あ…補足ありがとうございます」

数字の事をプレゼントを出すついでに思い出したようにこうさんが聞いてきた。京一の説明に困っていたが、補足して説明すると納得したようだった

「はいこなたさん、誕生日プレゼントです。改めておめでとうございます
います」

「ありがとうございます。何だろ…ブローチ？」

「ええ、こなたさんに合わせてみました。あまり大きすぎず、服や場所を選びませんよ？」

「こづいこの選んでくれたんだ…どう？似合う？」

「はい、よく似合っていますよ」

「次は俺だな。女性にプレゼントを贈るのは慣れてないんだが…おめでとつ」

「そんな固くならなくてもいいよ。選んでくれただけで嬉しいからさ…これは髪留めだね」

「ああ、いつもはストレートだからさ。たまにでも髪型変えるときに使ってくれ」

「ありがとう。そのうち使わせてもらおうからさ、その時は見せてあげるよ」

「ああ、是非ともお願いしよう」

自分、京一と順にプレゼントを渡し、皆もそれぞれの言葉で渡していく。被っている物はなく、配り終えた頃には幸せそうな笑みを湛えていた

「こなたさん喜んで下さいましたね。よかったです」

「まあこっちとしては喜んでもらわないと準備した甲斐がないってものよね」

「張り切ってましたからね、かがみ先輩」

「そりゃ大事な友人なんだから、それくらいはするわよ」

誕生日を終えた帰り道。わざわざ見送りまでしてくれた2人に手を振り、自分達は途中まで一緒に歩く

「でもあおちゃんの時が一番張り切ってたよね？」

「ふふ…そうですね、率先して動いていましたし」

「つ、つかさ！それにみゆきまで何言ってるのよ！」

「先輩の誕生日は皆さんでお祝いなさったんですか？」

「そうですね？ちょうどゲームセンターでこうさんとやまとさんに会った日、あの日が自分の誕生日だったんです」

「そうだったんですか！？誘ってくれたら一緒に祝ったのに！」

「いや、初対面の人間上がらせたら駄目でしょう」

「ピリリリリ」

「おや？父さんだ…もしもし？」

「あおいか？知らせだ、ようやく帰れそうぞ」

「そつなの？どのくらいで着くか分かる？」

「母さんや茜の体調悪くしたらいけないから…明後日の夜だな。飛ばしたらついて来れないだろうし」

「飛ばしたらって事は、まさか父さんが乗っていったのって…」

「分かったか？勿論大佐殿だ！母さんと茜はもう1台に乗ってるよ」

ここまで来て嬉しさが少々失われた。まさか痛車で出張していたなんてね

「分かった、気を付けて帰ってきてね。母さんにも言っておいて」

「分かってるさ、それじゃあな」

「先輩のお父さんですか？」

「ええ、明後日の夜帰ってくるそうです」

「急ですね……」

「そうなんだ。じゃあ明日の夜が私達の家で暮らす最後の夜なんだ……」

「そうなりますね。ですが大丈夫ですよ、会えなくなるわけではありませんから。それにまた機会があればお邪魔したいので」

「そう……そうよね。じゃあ明日はまた盛大にしないとね」

「お願いします。手伝える事は出来る限りしますので」

「分かったわ、今から楽しみにしてなさいよ？」

そう言って笑顔を向けてくるかがみ。だがその表情は、少しだけ寂しそうにしているように見えた

帰宅と夏の訪れ

「…そう、明後日には帰って来るのね」

「はい。ですが、嬉しいような寂しいような…複雑です」

「それだけ君はこの家を気に入ってくれたんだろ。嬉しいよ」

「じゃああおちゃん、明後日からはあつちの家に帰っちゃうんだね」

「そうなりますね。それでも明日いっぱいいますよ?」

「寂しくなるわね、せつかく弟が出来たと思ったのに…」

「しょうがないわよ、元々1ヶ月って話でこの家に来たんだし」

お茶を飲みながら皆と話す。今後も機会が無いわけではないけど、一家団欒の時間を邪魔するとなると考えるとあまり気が乗らないね

「でも、いなくなるわけじゃないんだからさ、いつでも来れるじゃん?」

「いえ、さすがにそこまで頻繁に訪れるわけには…」

「もう来なくなるの…?」

「そういうわけではありませんが、一家団欒の時間にお邪魔するといつのは気が引けてしまいますし…」

「あおい君らしいけど、そういう気遣いは無用よ？だってもう家族みたいなものじゃない」

「ありがとうございますみきさん。そう仰っていただけて嬉しいです」

家族みたいなものだと言ってもらえた。もう一つの家族が…

「それに今度来た時に誘ったりすれば、あおい君の事だし断ったりしないでしょ？」

「可能性はありますね。せつかく誘って下さったのにお断りするわけにはいきませんし…むしろ無理矢理にでも上がらせれそうな気もしなくはないですが…」

「姉さん達ならやりかねないわね…まあ、そうなったら私も上がってもらいたいけどね」

「私も…でもこなちゃん達と遊びに来る事もあるし、誘う機会はいっぱいありそうだよな」

「そうだね、そうなったら夕飯まで食べていってもらえれば皆が喜ぶよ…おっともうこんな時間か。そろそろ寝なさい」

「そういえば明日も学校だったわね。じゃあ、おやすみなさい」

「お先に失礼します。おやすみなさい」

「私も早く寝ないと、おやすみなさい」

ただおさんが時計を見ながらそう言うので自分も見てみると、あと数十分で日付が変わる時間だった。挨拶をした後急いで部屋に向かい、かがみと一緒に眠る。それにしても、つかさんがこんな時間に起きてるのは珍しいね

翌朝

「あ、おはようあおい君。今日も早いよね。」

「おはようございます、みきさん。毎日続けていることですからね、自然と目が覚めるので。今から朝ご飯の準備ですか？」

「ええそうよ？あおい君の言葉を借りるなら毎日続けていることだから、かしらね？」

「はは、ではお風呂から上がった後お手伝いさせてもらいますね。」

「分かったわ、お願いするわね。」

いつものように挨拶をしてお風呂場に向かう。上がって着替えてからは朝ご飯の手伝いとお弁当を、かがみが起きてからはつかさんを起こしに向かったりと、いつもと変わらない朝を過ごした

「それでは行って来ますね。」

「行って来ます。」

「行ってくるね。」

「はい、気を付けて行ってらっしゃい。」

みきさんの出迎いで玄関から出る。これも明日で一体見られなくなるのか…

「それで、昨日あお君達がくるまで話してたら…」

「そうだったね〜たしかその後…」

「はは…おや？」

話しながら京一の家に向かうと、途中で見覚えのある髪色の女子生徒が目に入った。あちらにはこちらの話し声が聞こえたようで、こちらに手を振って近付いて来た

「おはようあおい君、かがみ、つかさ」

「おはようこなた。その髪…あんた髪型変えたの？」

「これ？昨日京一君からプレゼントで貰ったからさ、着けてみたんだ〜」

「おはようございます。ポニーテールですか、似合っていますよ」

「京ちゃんもきつと喜んでくれるよ〜」

そんな話を話していると京一の家に着いた。しかし京一はまだ出て来ていないようだ

「まだ出て来てないわね…」

「起きてないのかな？」

「寝ているという事はないと思いますよ？京一は結構起きるの早いですし」

「じゃあ私が呼んでくるよ。待ってて〜」

「ピンポン」

「は〜い、どちら様〜？」

「あ、私、京一君の彼女で泉って言います。京一君はまだ出て来れそつにありませんか？」

「あら京一の彼女？京一〜！彼女さんが待ってるわよ〜！」

「こなたさんが京一の家インターホンを鳴らすと京一の母親が出て来た。こなたさんが何か話しているようだが…何を言ったのかは京一の母親の言葉から分かった」

「ああ?!ちよっ…行って来ます！」

「あ、出て来た出て来た。遅いよ〜彼女を待たせないでよね」

「ツッコミどころ満載なんだが…ん？ああ、何か違うと思ったら髪型がいつもと違うのか」

「そ、人が珍しくオシャレしたっていうのに気付くの微妙だね。それにリアクション小さっ」

「自分で珍しくなんて言ってるや世話ねえな。まあ感想としては…よく似合ってる、正直言って驚くくらいな。まさか早速プレゼント使ってもらえるとは思ってなかったからな」

「ありがと。まあこっちの方がまとまってるから、しばらくはこの髪型でいくよ」

「そうか、しかし改めて1つ聞いておこうか…」

「バチッ！」

「誰が誰の彼女だった？」

「いったあ！ちよつとした冗談じゃん！本気にしないでよ〜！」

京一が先程の事でデコピンをする。たしかにこなたさんが悪いとは思うけど…痛そうだね

「母さんが本気にしたんだぞ。俺だけ騙すならともかく、他の人も巻き込んだんだからこのくらいしとかなないと」

「おはようございます…泉さん、どうかなされたんですか？」

「京一君が私に暴力を…」

「京一先輩そんな事したんですか!？」

「そういう事はこっちの言い分を聞いてから言ってくれ…」

はあ…と溜め息を吐きながら京一が状況を説明すると2人は理解で

きたようだ

「なるほど、それはこなた先輩が悪いですね」

「泉さんも反省しているようですし…」

「分かってる。次は気を付けるようにな…痛かったか？」

「痛いなんてもんじゃなかったよ！まあ私がどれくらい悪かったかは分かったけどさ…」

「ならこの話はお終いですね。あら？泉さん、髪型お変えになられたんですか？」

「あ、本当ですね。イメチェンですか？」

「イメチェンまではいかないかな〜ていうかもうちよつと早く気付いて欲しかったな〜京一君より遅いよ？」

「何故俺が引き合いに出されるんだ…」

「やっぱり京一が気付くの遅れたからじゃない？自分達はすぐ気付いたよ？」

「残念な事にそれどころじゃなかったんでな」

そんな事を話していると学校に着いた。今日も楽しいだろうな…京一は朝から災難だけだね

「…へえ、朝そんな事があったの。京一君も大変ね〜」

「まったくよね」

「いのり、まつり取り過ぎじゃない…?」

「ちょっと姉さん達、加減して取ってよ。あおいお兄ちゃんの方がなくなっちゃうじゃない」

「この感じ、なんだかあおい君の来た初日を思い出すね」

「はい、ちゃんとお兄ちゃんの方は取っておいたよ」

「ありがとうございますつかささん。かがみも自分の事は気になさらないで食べて下さい」

皆で食卓を囲みながら食事を取る。また来られるとはいえ、帰るのが惜しくなる

翌朝

「…よし、忘れ物はないね」

「それどうするの?」

「待ち合わせは京一の家の前ですから、その際に自分の家に置いてこようかと思いましたがね」

「なるほど、それなら時間が無駄にならないわね」

「では…1ヶ月間、お世話になりました!」

玄関で正座をして頭を下げる。1人も欠けることなく自分を見送ってくれるようだ。

「次は皆で一緒に寝たいわね」

「また来てね、あおい君なら大歓迎だからさ」

「そうそう。泊まりじゃなくても気軽においでよ」

「息子が出来たみたいで嬉しかったよ。ありがとう」

「それではまた今度」

玄関を3人で出る。2人も側から離れようとはせず、そのままの状態に登校する

「私達さ、お兄ちゃんが出来たの初めてだったんだ。ほら、家の男の人ってお父さんだけだったからさ」

「お姉ちゃん達はいるんだけどね、やっぱり違って見えるよ」

「あお君が家族になったって思った時、すごく嬉しかった。だからって訳じゃないけど、また来た時お兄ちゃんって呼んでいいかな？」

「：自分は兄を辞めたつもりはありませんし、これからも出来る限り続けていくつもりです。ですから訪れたその時は、兄として扱って下さって結構ですよ？」

「ありがとう、あお君」

「またお兄ちゃんって呼んでいいんだね」

嬉しそうに笑う二人を見てみると、どれだけ自分が必要とされているのかが分かる気がする。嬉しいな

「…ん、よおはよう。今日帰って来るんだってな」

「うん、だから今日は掃除頑張らないと」

「頑張れよ。それ荷物か？」

「柊家に持って行ってたね。ちょっと置いて来るよ、待っててね」

「他の奴が来たら知らせるからな」

京一の声聞きながら3人に軽く手を振って門を開け、玄関まで行く。鍵を開けて廊下に荷物を置き、鍵を閉めた

「あおいく来たぞ」

「わかった、すぐ行くよ」

「あおいさんおはようございます。今日からこちらに戻って来られるのですよね？」

「おはようございますみゆきさん。そうですね、今日はアルバイトはないので帰って来てからは掃除ですが」

「おはようございます先輩。今京一先輩と話してたんですけど、夏

休み空いてますか？」

「おはようございますこうさん。そうですね…家族での旅行やアルバイトもあるでしょうが、それ以外は空いていますので遊べますよ」

「おはよ〜あおい君。最終日はどうだった？かがみんといちゃいちゃできたかな？」

「ちよつとこなた、あんた何言つて…」

「こなたさんおはようございます。あまりそういう事は出来ませんでしたね」

「おお君も何真面目に答えてるのよ！」

外に出ると皆が家の前で待っていて、京一達には先に挨拶したらしく自分にだけ挨拶をしてくる。歩きながらこなたさんの質問に答えるとかがみは怒ったけど、本当の事なんだし自分はいいと思っけどな〜

「ではお昼にまた〜」

「ええ、またお昼にお会いしましょう」

「…おつ神藤おはようさん。萩原や泉やらも一緒か」

「おはようございます黒井先生。いつも皆で登校しているので」

「そうなんか〜あ、そうや。いきなりで悪いんやけど、ちよつと頼

まれてくれへんか？」

「なんですか？自分に出来る事であればお受けしますが」

「そうか？実はプリントが多くてな〜手伝ってくれへん？まだウチはやる事あるさかい」

「構いませんよ。少し手伝って来ます、皆さんは先に教室へ向かって下さい」

「わかった、ほら行くぞ〜」

シューズに履き替えてこうさんと別れると先生に話しかけられた。どうやら手伝いをしてほしいらしく、返事をした後皆を先に教室に向かわせて自分は職員室に向かう

「これをウチらのクラスに頼むわ。教卓に置いといてくれたらええわ」

「わかりました。ではまた教室で」

「ありがとな、助かったわ〜」

「そう言って下さるだけで十分ですよ」

プリントを抱えながら話をして職員室を出る。教室に着くとかがみも来ていて、教卓にプリントを置いた後は皆のところへ行き会話に加わった

「よし終わった。今日も屋上か？」

「いや、外は日差し強いよ？教室の方が過ごしやすいと思うな」

「ほんとだ、暑そうだね」

「こうさんはいかがなさいますか？」

「メールで呼んでみるよ。場所はここでいいんだよね？」

「おっす…って動く気配はなさそうね。今日は教室で食べるの？」

「そうなると思います。こうさんもお呼びしますので、先に机を付けておいて待っておきましょう」

お昼休み、いつもは屋上で食べるお昼ご飯を今日は教室で食べる事にした。外の日差しが思っていたよりも強いからで、こなたさんが用件と教室の場所メールを送り、他の人で机を動かす。一通り終えてお弁当を取り出していると、教室の後ろ側の扉からこうさんが入ってきた

「にしても最近晴ればっかだからか、暑いな…」

「もうすぐ6月だからね。夏もそこまで来てるだろうし」

「そうですね。日差しも徐々に強まって来ていますから」

「まあ夏休みまではまだですけどね」

「皆でどこか行きたいな」

「その前に勉強しなさいよ？特にこなた」

「私にばかり言わないでよね〜京一君とかつかさもじゃん？」

「俺は勉強が嫌いな訳じゃないから問題ないぞ？」

「私も皆となら頑張れるよ？」

「…やっぱりこなただけじゃない」

「こなたさん、楽しむためには努力を惜しんではいけませんよ？」

「そうよ？私だって皆と遊びに行きたいんだから。そのために勉強を早めに終わらせよう」と…」

「じゃあ勉強頑張るから宿題見せてね？」

「あんたねえ…」

お弁当を食べながら外を見て夏休みの事を考える。まだ遠いけど、きっと訪れれば楽しい思い出を作る大事な休みになるだろう

> 清一 view <

「どうですか？人は集まりました？」

「まあな。今回は出来る限り集めてみた…で、次は何すりゃいい？」

「次はその中から2…いや3人ほど、外見が普通で常に動ける人を呼んで下さい。来たら俺の電話番号も教えて下さい、いつでも呼べ

るようにね」

「ああわかった。で？俺は他にやることないのか？」

「今はまだです。あと何日かしたらやる事はありますから、それまでは大人しくして下さい」

「性分じゃねえな、そういうのは…」

少し目を空けて訪ねてみると人数は集まったようだが、どちらかというとこの男の性格の方が問題か…下手に動いたりしないか不安だな

帰って来た人達

「ほな、また明日な〜ちゃんと宿題やるんやで〜」

「終わったな。あおいはまっすぐ家か？」

「皆と一緒に帰るけどな。散らかってるってわけじゃないからその時間はかからないと思うけど、今日は遊んだりは出来ないかな」

「まあ、そうだろうね〜せっかく帰って来るんだし、もし早めに帰って来た時とか困るしね〜」

「私だったら家にいて欲しいな〜おかえりって言ってもらえるだけで嬉しいもん」

「そうですね。たしかにつかささんの言う通りかもしれません」

「もう帰る準備出来た？それじゃ帰りましょっか」

1日の授業も終わり、皆と家の前まで一緒に帰る。遊ぶ事は出来ないから、皆の顔を見るのは今日はこれで最後になるだろうね

「…あおいさんは、全てお一人でなされるのですか？」

「ええ、勿論そのつもりですよ」

「やっぱり手伝おうか？俺達予定は入ってないからさ」

「いや、悪いから…」

「「じついつ時は断るものじゃないと思っけど？」

「ですが…」

「遠慮しないの。私達が手伝いたがってるんだし、指示出して動かしてくればそれでいいんだから。だから手伝わせて？」

「…ここまで言われると断るのも悪いですね。分かりました、皆さんに手伝ってもらいましょう」

「うん、皆で頑張ろうよ」

話しかけてきたみゆきさんの問いに答えると、皆が声を掛けてくる。まさか手伝ってくれるとはね、1人でやるものだと思っていたから正直驚いている。でも同じくらい嬉しさが込み上げてくる

「皆さんありがとうございます。しかし服装はそのままでもよろしいのですか？」

「いいわよ、埃まみれになるわけじゃないんだし」

「そうだと、あんまり気にすんな…お、着いたみたいだな」

「まずは何処から取りかかればよろしいんですか？」

「そうですね…最初に部屋から、次にキッチンと廊下全体、玄関の順ですかね。換気は出来るかぎりしましょうか」

「了解」

家に着いて鍵を開け、玄関を開けると今朝と同じ状態だった。まあそうじゃないと困るんだけどね

「さて…自分は荷物を部屋に運んで、掃除用具を用意して来ますね」

「なら私達は迷わない程度に窓とか扉とか開けてくるよ。その方が楽でしょ？換気もできるし」

「わかりました。自分も用意が終わり次第開けに行きますので、見つけた場合声をお掛けしますね」

「そうしてくれると助かるわ。じゃあまた後でね」

こちらに向かつて軽く手を振りながらかがみ達は先に向かったようだ。また迷ったなんて電話がかかってきたりしないよね

>京一view<

「そりゃ〜」

「あんまり乱暴に開けるなよ？」

「なんだか楽しいね〜」

「ですがこれだけのお部屋をお掃除するとなると流石に大変そうですね…」

「確かに、本格的にやらないとしてもかなり広いわよね。これを一人でやるうだなんて…まったく」

手当たり次第に襖や扉、窓を開けて回る。それを楽しむこなたとつかさだが、みゆきは後の事で悩み、かがみはあおいの事を溜め息混じりに話している

「一人でやるのはあいつなりに考えての事だろうよ」

「考え？」

「家族が帰って来る家を開けてたのはあいつなんだし、お前達に頼るわけにもいかないだろ？」

「まあそう言われると確かに……」

「自分の家を他の人に掃除させるといふのはあまり聞きませんね……」

「だから頼りにされてないとか思うんじゃないぞ？お前達は十分過ぎるほど信頼されてる。あいつにも、俺にもな……さてと再開するぞ」
立ったまま話を聞いている皆の前にあつた扉を開ける。それを再開の合図にまた進んでいくと、ちょうど廊下を歩いているあおいに出くわした

> あおい view <

「あ、皆さん。よかった、探していたところです。他の扉は開けて来ましたから……はい、掃除用具です」

「これで掃除に移れるか。部屋からやるんだったよな」

「そつだよ。掃除の仕方はちゃんと教えるからさ」

「よろしくお願いしますね」

「では始めましょうか。まずは…」

1時間後

「これで部屋は全部終わりか…」

「次はキッチンを拭いてそれから廊下を拭かなきゃね」

「まじかよ…なあモップとかないのか？」

「廊下は雑巾がけが基本だよ？その後はワックス掛けるけどね」

「じゃあ玄関とキッチンは私達がやっとかよ」

「あおちゃん、京ちゃん、頑張つてね」

「ワックスで滑ったりしないでね？」

「わかりました。そちらも頑張つて下さいね？」

そう言う手を振りながらかがみ達はキッチンの方に向かって行った。ちゃんと覚えたみたいだね

「…まあ普通に考えてこれは俺達がやるよな」

「まあやりたがらないと思うよ？なかなか疲れるし」

「そんじゃま、その疲れるやつを一気に済ませるとするかな」

「そうだね。それじゃ…」

「タタタタ…」

「長いな…」

「これは流石に歩くのとはまた違う長さがあるね…」

いつもなら何気なく歩いている廊下が、今日はやけに長く感じる。でもかがみ達も頑張ってくれてるだろうし、頑張らないとね

「…ふう、これでこっちは全部ワックス掛け終わったぞ」

「こっちも終わったよ。意外と早めに終わったね」

「廊下すごいわね、お疲れ様」

「おやかがみ。そちらはどうですか？」

「こっちもなんとかね。そこまで汚れてなかったから結構楽だったわよ？」

微笑んで用具を渡してくる。自分達が廊下を拭いている間に両方を終わらせるなんてね、掃除得意なんだろうか

「ねね、私達頑張ったよ？褒めて褒めて」

「皆さんありがとうございます。お疲れになられたでしょうから、何かお出ししますよ」

「ありがとう」

「ありがたいのですが…大丈夫なんでしょうか、あおいさんのご両親は私達の事をご存知ではないでしょうし…」

「気にしないで下さい、もし帰ってきた際には皆さんの事は自分が説明しますから」

席を立ち用具を片付ける。その後お茶の用意をしていると車の音がした。どうやら噂をすれば、といった感じかな

「皆さんお茶が入りました。流石に熱いのはこの時期飲むには向いていないでしょうから、冷や麦にしてみました」

「冷えてておいし」

「いや〜疲れた体には冷たいお茶が染みるね」

「ま、確かにこなたにしては珍しく頑張ってたわよね」

「麦茶ですか。」ご配慮ありがとうございます

「そういえば外で車の音がしたが、帰って来たのか？」

「あの音はそうみたいだね。意外と早く帰って来たね」

「ただいまあおい…と、え〜…京一君は分かるが、そちらさんは友

「達か？」

「ただいま〜あおい…あらあら、女の子がいっぱいいるわね〜」

「お兄ちゃんただいま〜」

居間でお茶を飲んでいると、両親と茜が居間に来た。電話越しに声は聞けたけどちゃんと元気そうだな。茜も今は大丈夫そうだな

「お帰りなさい父さん、母さん、茜。紹介するよ、自分の親友達だよ」

「泉こなたです。あおい君とは同じ学校の同級生で、お世話になってます」

「柊かがみです。あお君にはいつも色々とお世話になってます」

「柊つかさです。あおちゃんにはいつも助けてもらったりしています」

「高良みゆきといいます。あおいさんとは仲良くさせていただけます」

「わざわざ有難う。私は神藤睦月、あおいの父親だ。宜しく」

「私は神藤沙雪。あおいの母親よ、宜しくね？あおいがお世話になってるみたいね」

「私は神藤茜。お兄ちゃんの妹なの、よろしくね？」

それぞれが自らを紹介しあつ。それにしても、父さんと母さんのフルネームは久しぶりに聞いたな。

「あ、そうだ。あおいにはお土産があるぞ…ほら、水饅頭だ」

「うわあ、ありがとう！とっておいて後で食べようかな」

「…なに？凄く嬉しそうだけど、あお君あれ好きなの？」

「好きなんでもんじゃないぞ。あれさえあれば、しばらくは他は食べられなくても平気なくらい大好物だ」

「へえ、好きな食べ物があればなんて意外だね」

「そうそう、あおい。彼女が出来たつてお父さんに言ったらしいわね。誰？この中にいる？」

「わ、私…です」

「お姉ちゃん、お名前はたしか柊かがみつて言ったよね？お兄ちゃんのどこを好きになったの？」

「難しいわね…どこかとかそういうのじゃなくて、全部が好きになった…つて言ったらわかる？」

「ん？ん？…よく分かんないけど、つまりさ…ちょっとお兄ちゃんしゃがんで？」

「はいはい」

かがみの言うことを理解出来ずに頭を抱える茜に頼まれて、同じ視線くらいの高さまでしゃがむ。すると頭を触られた

「ここから…ここまでってこと？」

「頭先从爪の先…確かに全部だよね」

「まあそんな感じね。分かった？」

「うん！お兄ちゃんのこと、大好きなんだってわかった！」

「かがみにしては頑張った方だよ〜いつもならもうちょっとキツく言うか濁すかなのにね」

「あんたが茶化すからいつもそうなるんだろうが！」

「ふふ、元気な女の子ね。あなたみたいな子があおいと一緒になっ
てくれて嬉しいわ〜」

茜やこなたさんと話しているかがみを見て母さんが笑いながら話す。
そんな母さんの発言にかがみは赤くなりながらも嬉しいそうに微笑
んでいた

「皆さん、これからもあおいの事を宜しく頼むよ」

「分かりました。それでは私達はそろそろ失礼させていただきます
ね」

「もう時間が時間だしさ。みゆきさんも家までは結構あるから」

「なるほど、ではまた明日の朝にお会いしましょう」

「うん。また明日ね、あおちゃん」

「また遊びにいらっしやってね？」

「いつでも歓迎するよ」

「また来てね」

玄関から出て、門の前まで行き見送る。ありがとごと、お疲れ様を込めて手を振った

>京一view<

「さてと…皆で帰るか」

「帰るかって、京一君の家はすぐそこじゃない」

「送るから言ってたんだよ。ほら行くぞ」

「何？フラグでも立てるの？ご苦労さま」

「…いつそのこと、無視して紅茶でも買いに行くかな…」

「もう、なんでそんな事言うかな～冗談だって。ほら帰ろうよ」

「ですが京一さんの方からお誘いするなんて、珍しいですね」

「ああまあ。あおいは出られないし、女だけで帰すわけにもいか

ないだろ」

あおい達に見送られて帰る。しかし女の子を4人で帰すのは危ないので、送って行くことにした。最近は何騒だからな

「それじゃまたね。みゆきとこなたもちゃんと送ってあげるのよ？」

「それじゃあ気を付けてね、また明日」

「ああ分かってる、また明日な」

「次は私達だね。よろしく」

「いや、よろしくと言われてもな…」

「だって送ってくれるって事は守ってくれるんでしょ？」

「何かあったらな。それに守る気ないのに送って行ったりはしないだろ」

「男性がいらっしやるだけでも安心出来ますからね。ありがたいです」

かがみとつかさを家に送り、次は距離的に近いこなたを送る事になる。正直照れるから、あまりそういう事言わないでくれみゆき…

「んじゃね」

「徹夜とかするなよ？また明日な」

「最後は私ですね。遠いですが、大丈夫ですか？」

「ああ、ここまで来て1人だけ送らないわけにもいかないだろう？それにあおいに知れたら大変な事になっちまうしな」

「ふふ、そうですね。それでもありがとうございます」

「どういたしまして。そんなに大層な事をしたつもりはないんだがな」

「それでも、いつも本当にお世話になっています」

みゆきが頭を下げて礼を言ってくる。そこまでの事はしてないんだが…謙虚すぎるな

「ありがとうございます。それではまた明日…」

「なあ、みゆき…俺がこう言うのも何か変な感じがするんだが…」

「な、何でしょうか？」

「もう少しわがまま言ってもいいんだぞ？いつも遠慮がちっていうか謙虚すぎるっていうか…とにかく、無理はするなよ？」

「あおいさんの仰るとおり、京一さんはお優しい方ですね。大丈夫ですよ？私は皆さんに良くしていただいていますから」

「ならいいんだ。いきなり変な事言っただけ悪かったな、じゃ明日な」

「はい、それでは」

みゆきに手を振りその場を後にして、しばらく歩いた所にある曲がり角を曲がる。そして塀に飛び乗り少し待つ

「いない？確かにここを曲がったのに…」

「…チツ、撒かれたか」

「撒いた訳じゃねえよ、どっちかって言えば待ち伏せたんだ」

「てめ…ぐっ！」

「まったく、物騒な世の中だな…」

姿を現した尾行してきた奴らを手刀で気絶させ、違う路地で塀に寄り掛かるように座らせてその場を去る。風邪ひくなよな

>清一view<

「…おかしい」

彼に頼んで紹介してもらった3人のうち2人を偵察に向かわせたのだが、連絡は来ない上にこちらから連絡しても出る気配がない

「まさかやられた…？」

神藤が今日出られないとは聞いたが、それが嘘だったのか。それも別の誰かに…

「一番可能性が高いのは…萩原か」

こいつの存在をすっかり忘れていた。これからはこちらも気を付けないとな…

隣の出会い

「…ふう」

素振りと練習を終えて、道具を片付け始める。今日は雨がもう梅雨の時期だね

「コンコン…」

「ん？誰かな…って京一？どうしたのこんな時間に」

「おはようさん。ちょっと話があったな、上がっていいか？」

「いいよ…はいどうぞ」

雨音に混じって窓を叩く音が聞こえた。外を見ると、傘を差した京一が立っていた。何やら話があるらしく、窓を開けて入れてあげる

「すまねえな、お邪魔します」

「それで話って？」

「ああ、それがな…てな事が送って行く時にあってな」

「つけられてた…か」

「気配はここ出てからすぐに感じたから、おそろく出て来るのを待ってたんだろ」

「京一達に何かするため…いや出て来る前から自分家も…」

「見られてたと考えていいな…しかし、誰が何の目的で…」

「考えたって仕方ないよ。それより警戒しないとね…アルバイトは自分と京一のシフトを交互にして、こなたさんの終わる時間と一緒にしようか」

確実に皆を家に送れるようにシフトを変える提案をする。これなら片方は皆を学校から送れるし、片方はバイトが終わったこなたさんを待たせることなく送ることが出来る

「だな。さてと…俺はそろそろ帰るとするかな。準備しないとけないし」

「わかったよ。じゃあまた後でね」

「あら、やっぱりここにいたのね。おはようあおい」

「おはよう母さん。父さんと茜は？」

「もう少ししたら起きてくると思うわ。だからその前に朝ご飯作っちゃおうわね」

「ならお風呂に入って来るから、上がったら手伝うよ」

「そうしてくれると助かるわ。お願いね」

京一が帰った直後に母さんに声を掛けられる。どうやらまだ2人は起きていないようで、今から朝ご飯を作るようだ

「…さて、上がったし手伝うよ」

「じゃあこれ切って？そういえば、今日学校だからお弁当もいるわよね？」

「ありがたいけどお弁当は作らなくていいよ？今日はかがみがつて来てくれる日だから。それにお弁当くらいは自分で作りたいからな」

「そう？それにしても、かがみちゃんって言ったかしら。お弁当を作り合うなんて、あの子とはラブラブなのね」

「どうなのかな、自分達としては普通にしてるつもりなんだけど…調理しながら話をする。この会話をかがみが聞いたら何て言うかな…」

「まあ詳しい話はまた今度聞かせてもらおうわね？さてと、ちょっと起こして来るから後は任せていいかしら？」

「わかったよ、行ってらっしゃい」

母さんがキッチンから出て2人を起こしに向かった。起きてくる前にこつちも作り終えておこつかな

「おはようお兄ちゃん、やっぱり起きるの早いね。私はあっちじゃゆっくりしてたからちょっと…」

「無理に起きなくてもいいよ？少しずつ前の習慣に戻していけばいいんだからな」

「ありがと、でも最近そんなに体調悪くないから、あんまり心配しなくていいよ?」

「そういうわけにもいかないさ。大切な妹だし、お父さんにとっては大事な娘なんだからな」

「あ、おはよう父さん」

「お父さんおはよう。お父さんもありがとっただけど、今は大丈夫だからね?」

居間のテーブルの上を片付けて、キッチンから朝ご飯を持って来ようと廊下に出る。すると2人がちょうど起きてきたようで、自分を見つけると話しかけてきた

「そうか…そうだ、今日は帰りにちょっと友人の所に寄って来るから、帰りは遅くなるよ」

「自分も、アルバイトを始めたから帰りが遅くなりそうだよ」

「2人とも普段より遅くなるのね?わかったわ。アルバイトって、メールに書いてあったあれよね?」

「あれか、コスプレ喫茶ってやつか。父さんがコスプレさせようとしても断るのにどうしてそういう所には…」

「父さんのは無理やりでしょ。アルバイトのは自分の意思だからいいの」

「ふふ…あら？あおい、そろそろ時間じゃない？」

「本当だ。それじゃ…行って来ます」

「頑張つてこいよ」

「気を付けてね？」

「行ってらっしゃい」

自分の分のお皿を片付け、挨拶をして玄関に向かい、靴を履いて外へと出る。京一はいるが、他には誰もいないようだ

「よ、今朝ぶりだな」

「はは、まあ今も朝なんだけどね」

「細かい事は気にするなよ。それより話したことはあいつらには内緒にな」

「勿論だよ。皆を不安にはさせたくないからね」

「ねえ何の話？」

「うお…っとなんだこなたか、おはようさん」

「おはようございますこなたさん」

「2人ともおはよう。まああおい君はいいとして、なんだはないでしょ京一君」

「すまん、知らない奴に話し掛けられたと思ったんでな」

今日はこなたさんが先に来たようだ。数分後には他の皆も揃い、いつものように歩き出す

「そついえばさっきも聞いたと思うけど、何の話してたの？」

「ああ君達何か話してたの？」

「それはそれは怪しい話を…」

「男同士の内緒話ですか〜一部の人にとっては萌えるシチュユですね」

「勝手に盛り上がるな。とりあえずそこまで秘密にするような話じゃねえから」

「空気を壊すよつで悪いのですが、シフトの事で話をしていただけですよ」

「シフト？それってバイトのだよね？」

「ああそつだ。日をずらそつと思ってな」

「それであおいさんとお話をされていたのですね」

自分が話したのをきっかけに、京一が内容を簡単に話す数人は納得したようだ。でも皆に嘘ついてるわけだし、何だか嫌だな

「でもどうして？もしかしてあおちゃんとかあったの？」

「確かに、2人がシフトをずらすのにメリットないわよね」

「まあ深くは聞きませんが…何か隠しても無駄ですからね？」

「そうそう、女の勘を嘗めないでよ？」

「むしろ隠すくらいなら相談してくれてもいいと思うんだけどね。

私、あお君の彼女なんだからさ」

「すみません…」

「すまん、以後気を付ける…」

皆の視線を感じながら、とりあえず謝る事にした。ごまかしきれたのだろうか

「じゃあこの話題は終わりだね。ささ、学校着いたし教室にレッツ
ゴー！」

「着いた途端にテンション高くなったな。何かあったのか？」

「いや、宿題が…ね？だから早く教室に行きたいわけだよ」

「あんたまた忘れたの？」

「いや、宿題やるのを忘れたんじゃないよ？ただ宿題を出されたことを忘れてただけで…だから見せて」

「結局忘れてんじゃないかねえかよ。言い訳するならもつちよつと考えて言い訳しろよな」

「まったくあなたは…見せてもいいけど、そつちとこつちじゃ違うと思うわよ?」

「え〜?じゃああおい君に見せてもらおうと。ああい君、宿題見せて〜」

どうやらこなたさんが宿題を忘れたようで見せて欲しいと自分に駆け寄って来た。いつもの空気に戻ったみたいだね

「構いませんよ。その間自分がかみのノートを拝見させていただきますから」

「はあ?私のノートを?何で?」

「彼氏として、同級生として、どのように纏めているのか非常に興味がありますからね。そちらも宿題を出されたようですし、今後の参考になるかもしれませんから」

「あ、そつちう事。ちょ…ちよつとだけだからね?」

「勿論分かっていますよ」

「勉強熱心ですね〜私はてつきり危ない意味でか?…」

「あおちゃんが危ないの?」

「まあ性格的にですけどね。私的には彼女の字や所有物で満足する

類の人だと思っちゃいましたが、どうなんですか？」

「どうなんでしょうかね…断言は出来ませんが、ないと思いますよ？」

上履きに履き替えながら話をして、その後こうさんと別れる。しまるで自分が変な人みたいない方だね…

「はいこなたさん、宿題です」

「お〜ありがと〜」

「あんまり甘やかしちゃ駄目よ？あお君はいこれ、私のノート」

「ありがとうございます。さて、拝見させていただきましたね」

「言っとくけど、そこまで面白いものじゃないわよ？」

「まずノートに面白さを求めたりはしないだろうよ」

「キーンコーンカーンコーン…」

「おや、もう時間ですか。かがみ、ノートを…」

「まだ見てていいわよ？次の休み時間に持ってきてくれれば大丈夫だから」

「そうですね。では後ほどそちらにお伺いしますね」

こなたさんに宿題をみせ、かがみからノートを借りる。しばらく話

をしながら見ているとチャイムが鳴り始め、それを聞いてかがみが教室に戻る。さて、早く見終わろうかな

「あおい君ありがとう〜なんとか提出に間に合ったよ〜」

「どういたしまして。さて、自分がかがみにノートを返してきますね」

「おう、行ってらっしゃい」

「私も付き添うよ。暇だし」

「じゃあ私とゆきちゃんは京ちゃんと一緒に待ってるね」

こなたさんと共にかがみのノートを持って隣のクラスに行く。用事としてはそれだけだからなのか、京一達は来ないようだ

「かがみ、ノートを返しに来ました。なかなか参考になりましたよ、ありがとうございました」

「どういたしまして。役に立ったんなら貸した意味が…」

「何だ柊、知り合いか？」

「あ、どうも。うちのかがみがお世話になって…」

「こちらこそ、うちの柊が…」

「あなたも柊ちゃんのお友達？」

「ああ、あお君は友達じゃなくて…」

「話は後にしませんか？2人を止めてきますから」

カチューシヤを着けた女子に話し掛けられたが、こちらと違いあちらは揉めているようだ…まあお互いかがみの所有権を主張しあうのだから、こうなるのも無理はない

「柊はうちんだー！」

「かがみは渡さないよ？っていつかそういつのはあおい君通してからにしてよね」

「まったくですね。かがみを大切に思ってくれているのは嬉しいですが、譲る気はありませんよ？」

「さつき一緒に来た奴だな。偉そうに言ってるけど、お前は柊の何なんだ？」

「自分がかがみの彼氏ですよ」

「…は？お前何言ってるんだ？」

「本当よ。この人は私の彼氏…ってか人を物みたいに扱うんじゃないわよ」

自分が間に入った事でこなたさんが静かになり、かがみの言葉にこなたさんと揉めていた女子は固まってしまったようだ。とりあえずこの時間は教室に戻り、お昼休みにお弁当を食べながら話すことにした

「自己紹介するね。私は泉こなた、よろしく」

「柊つかさです。かがみお姉ちゃんとは双子です」

「高良みゆきといいます。よろしくお願いします」

「神藤あおいと申します。宜しくお願いしますね」

「萩原京一だ。よろしくな」

「私は峰岸あやのよ、よろしくね?」

「私は日下部みさおだ、仲良くやろうな」

「少し前に揉め事起こしてた奴の態度じゃないな」

「あやの、柊がいじめる〜!」

「よしよし」

かがみの言葉を受け、峰岸さんに泣きつく日下部さん。よほど仲がいいんだろっね、この2人は

「そういえば柊ちゃん、神藤君の事友達じゃないって言ってたけど…彼氏って意味だったのね」

「そんなこと話してたのか、神藤、悔しいけどさ、柊のこと大事にしてやれよ?ちょっと凶暴だけど」

「日下部…ありがたいけど最後の言葉はかなり余計ね」

「気にすんなって。それより神藤、ちょっと聞きたいんだけどさ」

「自分にですか？なんででしょうか」

「柊ってお前と2人きりの時でもこんな感じなのか？」

「違いますよ？そのような時には…」

「あ、あお君！そういうのはそいつに話さなくていいから！」

日下部さんに聞かれたことに答えようとすると、かがみに言葉で阻まれてしまった。恥ずかしいのだろうか、まだ話していないのに顔は少し赤くなっている。日下部さんと峰岸さんか…仲良く出来そうだね

> 睦月 view <

仕事を終えて、帰りに少し病院へ寄り道をする。テッサを駐車場に停めて受付に向かう。とりあえず許可取っておかないとな

「あのすみません、院長は今何処にいますかね？」

「院長でしたら院長室にいらっしゃると思いますが、何かご用ですか？」

「会いに来たんですが、大丈夫ですか？」

「失礼ですがお名前を…」

「神藤睦月といます」

「少々お待ち下さい…はい…はい…分かりました。お通しするよう
にどの事でしたので、院長室までご案内…」

「大丈夫です、場所は分かっていますから」

許可が出たのを確認して、院長室へと向かう。ノックをして返事を
確認して入るとあいつがいた

「よお、来たぞ」

「おお睦月、仕事帰りか？こんな所までご苦労さん」

「そんな話は後にしてくれ。それよりどうなんだ？」

「お前に言われた通り、調べてみたらうちにあったよ。数例な…ほ
れ」

「やっぱりあったか。だが…」

「ああ、完治は難しいだろうな。今よりも確実に動けるようにはな
るだろうが、健全な常人並みとまではいかないだろうよ」

「免疫力の低下は免れんか…だがあいつが望むのであれば…やむを
得んか。じゃあそろそろ帰るとするよ、すまんわざわざ調べてもら
って」

「いいさ、他でもないお前の頼みだ。断る方がおかしいよ。また来

いよな？」

「ああ、近いうちにな」

用事を終えたので部屋を後にする。いつか笑顔で走り回れる日があいつに訪れるのなら、その方が良いに決まってる。あとはあおいや沙雪に話してみるか…

焦り

「それではまた明日、わざわざありがとうございます」

「どうぞ致しまして。ではまた明日」

みゆきさんを家まで送り、家に帰るため来た道を戻る。本当は日下部さんと峰岸さんも送りたいのだが、2人とも部活動（日下部さんは陸上部、峰岸さんは茶道部らしい）で遅くなるからという事で断られてしまった…誘ってもらえたら参加したのにな…

「ただいま」

「あら、お帰りなさい。思ってたより早かったわね？」

「今日はアルバイトはないからね。友達を送ってからそのまま帰ってきたんだ」

「そうだったの～お疲れ様、麦茶出しておくわね」

「ありがとう。そういえば茜は？」

「居間にいると思うわよ？あおいが帰って来るまで一緒にテレビ見てたから」

「わかった。なら自分も着替えて居間にいようかな」

「そうしなさい。晚ご飯のお手伝いの時とか何かある時には呼ぶから、それまではゆっくりしてなさい」

「じゃあちよつと着替えて来るね」

母さんと話をして、着替え部屋に向かい部屋の中で着替える。さてと居間に行こうかな

「ただいま茜。体の方は大丈夫？」

「あ、お兄ちゃんお帰り〜私なら大丈夫だよ？」

「ならいいんだけどさ。でもあんまりテレビばかり見てないで、ちゃんと勉強もしないと駄目だよ？」

「分かってるよ〜後でやるからさ。分かんないところがあったら教えてね？」

「ちゃんとするなら勿論そのつもりだよ。晩ご飯の後にでもやるわか？」

「そうだね。あ〜でもその時間は見たいテレビが…」

「そんな事言ってテレビ見てたらずっとしないだろうし、早く終わらせれば見られるでしょ？」

「あうう…」

「あら楽しそうね〜はい、麦茶」

「ありがと。先に伝えておくけど晩ご飯を食べた後から、茜と一緒に茜の部屋で勉強する事にしたから」

「分かったわ。じゃあそろそろ準備しましょっか」

麦茶を持ってきた母さんと話し、晚ご飯の準備を始める。茜は勉強をしていなかったようだ、頑張つてちゃんとやっついていれば早く終わってただろうにね

「これであとは煮込めば終わりかしらね？」

「それじゃあ今のうちにお風呂の準備してくるよ」

「お願いね。戻ってきたらお皿出すの手伝つてね？」

「分かつてるよ。お湯張つてる間にやるからさ」

母さんと晚ご飯の準備をしてお風呂の準備に向かう。掃除を終えてお風呂のお湯を張っていると車の音が聞こえたので、おそらく父さんが帰って来たのだろう

「ん…やっぱり帰って来たんだね。お帰り父さん」

「お、あおい、ただいま…なあ母さん、あおい。ちょっと話があるんだが…」

「どうしたの？お父さんがそついう事言つたの珍しいわね」

「ああ、ちょっと茜の病気の事でな。ちょっとした進展があったんだ」

「その話、茜にはするの？」

「出来れば聞いて欲しいんだが…無理強いはしないさ」

「とりあえず茜は居間にいるだろうから、話すタイミングは父さんに任せるよ」

「そうさせてもらおう。晩ご飯はもう出来てるのかな？出来れば食べた後に話せばいいかと思うんだが」

「出来てるわよ？あとは並べるだけだからあおいと一緒によろしくね？」

「そうだな、じゃあ持って行くかな」

父さんと晩ご飯を居間に運ぶ。居間にいた茜も父さんに気付いて話をしていたが、父さんの表情から察するに、話というのは茜を悲しませるような内容ではないのだろうか

「さて茜、病気の事で少し話がある。聞きたくないのなら、聞かなくてもいいが…どうする？」

「病気の話？なら聞きたい。私の体のことだもん」

「そうか、なら話そう…実は茜の病気が治るかもしれない」

「父さんそれ、本当なの！？」

「ああ。友人の所に行って調べてもらったら、何件か茜と同じ病気の治療をやった事があるらしくてな。診察の結果次第では手術もあり得るだろうが…」

「手術…茜が…」

「もし受けたとして、茜は治るの?」

「もう薬を飲んだりする必要はなくなるだろうが、免疫力が下がる…簡単に言つと風邪とかに掛かりやすくなるな」

しばらく沈黙が続いた。父さんの目には迷いが、母さんからは不安が感じられた…勿論自分だって不安だ

「それで…学校には行けるようになる?」

「ああ行けるぞ?ちゃんと授業だって受けられるだろうな」

「じゃあ私、それしたい。そうしたら学校に行けるんなら、皆と一緒に勉強出来るなら…お願い」

「分かった。病院には父さんから言っておくから、日が決まったら教えるよ」

「ありがと。じゃあ私、お兄ちゃんとお部屋で勉強しなきゃいけないから」

「そういえばさっき言ってたわね。行ってらっしゃい」

「終わつたらまた居間に戻って来るから。それじゃあね」

茜に手を引かれて茜の部屋に向かう。部屋に入ると、茜はノートと参考書を机に広げて勉強を始めた。自分は携帯を開き、かがみから

来ていたメールの返事を打ちながら勉強を教える

「…ねえ茜」

「ん〜？なあに？」

「父さんが言ってた事、本当に受けるの？下手すると手術する事になるかもしれないんだよ？」

「よくテレビとかでやってるあれだよな？痛そうだけど…大丈夫、私頑張るから」

「でも自分は…茜が心配なんだよ。確かに今よりは楽になるだろうし、友達も出来ると思う。それでも手術が確実に成功するわけじゃないし、もし失敗でもしたらと思うと…素直に喜べなくてね」

「お兄ちゃんも私の事ちゃんと考えてくれてるんだね。でもさ、私は自分で決めただよ？もうお兄ちゃんに心配かけたくないから、お父さんとお母さんに私のランドセル姿見せたいから」

「そう…ならもうこの話には何も言わないよ。ただ、何かあったらちゃんと話す事。いいね？」

「もちろんだよ。ほら、勉強に戻る？」

つい弱音を吐いてしまった自分に対し、茜は自分が思っていたより成長していたようだ。嬉しい反面、なんだか寂しいな…

「ふむ…これで今日の分は終わりみたいだね。良く出来ました」

「やった！じゃあ早くテレビ見ないと…」

「ほらあんまり急がないで。悪化したらどつどつするのを」

「でもテレビが…」

「ほら、背負ってあげるから。これなら大丈夫でしょ？」

「ありがとうお兄ちゃん…んしょと。それじゃ居間に出発」

「はいはい」

茜を背負って居間に向かう。見たがっていた番組には間に合ったが終わった後はそのまま寝てしまい、結局背負って茜の部屋まで送ることになった

数日後、朝

「……………」

「お、おはようさん。あお…い」

「ん？ああ、京一おはよう」

「どうした？なんだかピリピリしてるみたいだが」

「今日は茜が病院に行く日なんだ。だからちょっとね」

「また様態が悪くなったのか？」

「いや、今日は病気を治しに行くんだ。もしかしたら手術するかもしれない」

「へえ、それでピリピリしてたのか。それにしても手術か…上手くいくといいな」

「ありがとう…あ、皆が来たみたいだね」

京一と話をしていると皆が来た。それぞれに挨拶をして学校に向かう…自分そんなにピリピリしてるのかな

「あお君昨日はごめんね？メールの返事遅れちゃって」

「自分は気にしていませんよ。それにちゃんと返事を送って下さったのですから、謝らないで下さい」

「ありがとう…でもその感じ、怒ってるわよね？」

「あゝいえ、これはですね…」

「こいつの妹が…という事でな、さっきからピリピリしてるわけだ」

京一が皆に説明すると皆の顔が一瞬だけ曇った。心配してくれているのだろうか

「そっか…あおちゃん心配なんだね」

「今いるたった一人の妹だもんね。気にする事ないって！絶対成功するからな」

「気になると思うから学校終わったら行ってみましょつか。それなら不安じゃないでしょ？」

「妹さんというのは茜さんの事ですね？以前あおいさんのお宅のお掃除をした際に紹介していただいた…私も及ばずながら成功を祈らせていただきます」

「私とやまとはまだ会ったことはありませんね。今度紹介して下さいよ？」

「ええ分かりました。紹介をする頃には治っていると思いますので、是非相手をしてあげて下さいね？」

気が付くと自分は笑っていた。皆が妹を心配してくれたから、気が楽になったのかもしれない。ありがとう皆

「ということはだ、俺はどうすりゃいいんだ？今日バイト入ってるが、病院行ったら間に合わねえんじや…」「あれ？京一君知らないの？」

「知らないって何をだよ」

「お店、定休日が出来たんだよ。ちょうど今日がその日ってわけ」

「んな話聞いてねえぞ！」

「京一君が知らなかったのも無理ないよ、昨日決まっただし」

「あおい！お前知ってたなら教えてくれてもよかつただろ！」

「こなたさんから『お願い！面白そうだからさ、京一君には一緒に

黙ってようよ』とかいう感じのメールが来てさ」

「んなお願い聞くなよー!」

「京一先輩どうどう。もうすぐ学校ですから、あんまり暴れないで下さい」

「俺は馬じゃねえっての…!」

溜め息混じりに突っ込みを入れ、こなたさんを睨む京一。でも本気で睨んでいるわけじゃなくて、あくまで京一なりの仕返しみたいなものだろう

「それでは私はここで。私も病院行きますから勝手に行かないで下さいよ?あと、やまとも呼んでおきますから」

「分かりました、それでは待ち合わせは校門で。ではまた放課後」

「やまとか…来るのかね」

「なになに?京一君的には気になっちゃう感じ?」

「ちげえよ。あいつにはあっちの学校に仲良い奴いるだろうし、いくらこの誘いだからって来るかどうか気になってな」

「違っつて言ってる割にちゃんと気にしてるあたり…いいね!」

「まああなたは放つといて…確かに京一君の話にも一理あるわね。でも何も用事がなかったら来るんじゃない?」

「部活動等をやっているのであれば、来られなくなるかもしれませんが…誰か何か聞いていますか？」

「私は聞いたことないかな」

「私もですね」

「…まあ放課後に聞けばいいか」

「いいのか？そんなので」

放課後

「すみません、ちょっと遅れました」

待ち合わせに指定した校門で雑談をしながら待っていると、こうさんが走り寄って来た。遅れたと言っても2、3分くらいしか自分達も待ってないんだけどね

「構いませんよ。やまとさんもまだ来ていないようですし、自分達も来たばかりですから」

「あおい、またピリピリしてないか？」

「そう？いやさ、父さんから母さんから連絡がないからさ。どうなったのか気になってね」

「いや、こんな妹思いのお兄ちゃんを持って、妹さんは幸せですね」

「ほんとだよ。ね〜かがみん？」

「何で私に振るわけ？」

「かがみだつて妹だったわけじゃん？心境はどうかな〜って」

「わ、私は妹だったけど、あお君の恋人なんだしそんな事いきなり言われても…」

そこまで言っただけでかがみは話すのをやめた。こなたさんとこうさんがニヤニヤしているのに気が付いたのだろう。2人ともやけに楽しそうだね〜

「先輩の赤くなりながら困る姿…反則クラスですな〜」

「ほんとだよね〜ポイント上がりまくりだよ〜？」

「私をはめたのか、あんたらは〜！」

「どうも、皆さん遅れてすみません…何をしていますか？」

「こんにちはやまとさん。状況としてはかがみを2人がからかって、怒られているわけです」

「またこうが余計なことをしたみたいですね。ちょっと待っていて下さい」

溜め息混じりにそう言つと、こうさんの所に行きかがみと共にお説教を始めた。しかし意外にも早く終わり、終わった後はすぐに歩き始めた。自分が早く病院に行きたいのが伝わったのかな

「うっ…ちょっとふざけただけなのに」

「でもこれをツンだと考えれば…」

「まだ懲りてないみたいね…まあ次やった時に注意するからいいけど。それよりあお君、病院って遠いの？」

「ええ、それなりに。電車で行くのが早くていいと思います。代金は自分が負担しますから、自分の用事に付き合わせるわけです」

「じゃあ、ありがたくそうさせてもらっわね？」

「ありがと〜あおい君。そういえばやまとさん、京一君が心配してたよ〜」

「お前はまた余計な事を…」

「し、心配…ですか？」

「ああ。部活やってるのかとか、俺達だけじゃなくて、そっちの学校の友人とは遊ばなくてもいいのかな」

「ああ、そういう心配ですか。部活は水泳部に入っていますよ、今日は休みですが。友人の方は時々遊んでますし、大丈夫だと思います」

「そうか、なら良かった」

「わざわざ心配していただいて、その…ありがとございます」

「気にするな。あおいから伝染したみたいなものだし、心配してたのは皆も同じだからよ」

「伝染って…まるで人を病気みたいに言ってくれるね」

「気にするな、例えだ例え。本気にするなよ？」

「分かってるよ…あ、着いたね」

話しながら電車を降りてしばらく歩くと病院に着いた。ここに茜はいるんだね

「うわ、大きい病院ですね」

「皆さん入りましょうか」

「そうだな。そついや妹のいる場所分かるのか？」

「いや、そこまでは。ちょっと受付で聞いてくるよ」

「行ってらっしゃい」

「すみません、神藤茜は今どこにいるのかわかりますかね？」

「神藤さんですか？お待ち下さい…神藤茜さんは…号室にいらっしやいますね」

「分かりました。ありがとうございます」

「あお君、どうだった？」

「部屋にいるそうです。行きましようか」

言われた部屋を探しながら病院内を歩いていると、3階の端に神藤と書かれたプレートの付いた部屋を見つけた。部屋の番号も合ってるし、どうやらここらしい

「皆さんすみませんが…」

「少し待ってもらえませんが、でしょ？分かってるわよ、行っくらっじゃい」

「あんまり負担かけるなよ？疲れてるだろうからな」

「後でどうだったか聞かせてね」

「私もその話に興味あるかも」

「あおいさん、頑張ってくださいね？」

「先輩の妹さん、きっと治ってますよ」

「治ってるって信じてますから」

「ええ、ではまた後ほど」

扉を開けて中に入る。そこに父さんと母さんの姿はなかったが茜はベッドにいた。疲れたのだろうか、寝息を立てている…よかった

「ん…お兄ちゃん？」

「ごめん、起こしちゃった？」

「そんな事ないけど、来てくれたんだ…」

「当たり前だよ、茜の兄さんなんだしさ。それより父さんと母さんは？」

「寝る前はいたんだけど…帰っちゃったのかな」

「そう、入れ違いか…ねえ茜、手術どうだった？」

「あんまり覚えてないけど、先生が頑張ったねって言うてくれたの。それはちゃんと覚えてるよ？」

「そっか、頑張ったんだね。偉いよ」

手を伸ばして頭を撫でてやると、嬉しそうに微笑む。かがみもそうだけど、撫でられるの好きなんだね

「お兄ちゃんは1人で来たの？」

「友達とだけど、それがどうかしたの？」

「部屋に入れないの？友達待たせちゃ駄目だよ」

「はは、了解…皆さん、入っても構いませんよ」

「その感じだと大丈夫みたいだな」

「よかった…そうだ、日下部と峰岸にも知らせとかないと」

「話に聞いた、かがみ先輩と同じクラスのお2人にですか？」

「そうよ？教えたなら結構心配してたみたいだから、ちゃんと知らせておかないと悪いじゃない？」

「部活動が休みであればお誘いしたのですが…」

「忙しそうだったもんね」

「部活の終わる時間帯なら一緒に来られたでしょうけどね。でも今度先輩のお宅にお邪魔した時にでも、妹さんを見せてあげれば大丈夫でしょう」

「そうですね。そろそろテストも近付いてきましたし、勉強ついでにいいかもしれませんね」

テストの話題を出すとこなたさんとつかささんが溜め息を吐く。それでも茜とは話すようで、皆と一緒に話をして笑わせていた。でもテストの自信がないみたいだし、また泊まらせて勉強するしかないのかな…

仕掛ける者と勉強会

「それじゃまた来るから。あまりわがママを言わないようにね」

「うん。ちゃんと言う事聞いて、早く帰れるように頑張るから。またね」

茜がそう言つと、皆も軽く手を振りながら挨拶をして病室を出る。元気そうでなによりだ

「妹さん、元気そうでしたね」

「ええ。この調子で退院してもらいたいですね」

「あおい君ももう心配しなくていいね」

「そうですね、最後まで気は抜けませんけれど…それでもありがとうございます。自分の用事に付き合っていたでいて、そして茜を労っていたでいて」

「気にしなくてもいいわよ、当然の事じゃない。私達はあお君が大切なんだから」

「そうそう。まあかがみん的には私は…って感じなんだろうけどね」

「うるさいな、ほっとけ！」

「まあまあかがみ、落ち着いて下さい」

「ふふ、皆さん来る時よりも賑やかになりましたね」

「この調子でテスト勉強もしてもらいたいかな…」

かがみをなだめているとみゆきさんと京一が話をしているのが聞こえた。たしかに楽しく勉強が出来れば楽だろうけどね

「テストか〜さっきあおい君が話にも出したけど、またそんな時期なんだね〜」

「私この間みたいに良い点取れるかな〜」

「また頑張れば取れると思うぞ？皆でやれば大丈夫だ、心配するな」

「そうですね。またあおい先輩のお宅で勉強すれば問題ありませんよ」

「あおい、また勉強しに来るが大丈夫そうか？」

「自分の方から父さんと母さんにはちゃんと説明するから大丈夫だよ。念のために泊まりの許可は取っておくから」

「ありがと。あと日下部と峰岸も誘ってみたいんだけど、いい？」

「勿論ですよ。皆さん夏休みを楽しいものにするためにも、テストで後悔のないように頑張らしましょうね？」

自分がそう言うと、皆は返事の代わりに笑顔を向けてくれた。また家が賑やかになりそうだね

翌日、放課後

「おっす、帰ろっか。って言っても目的地はあお君の家だけどね」

「かがみ、日下部さんと峰岸さんはどうでしたか？」

「大丈夫こっち教室に来るわ。あとはこうさんとやまとさんね」

「残念ながら今日の勉強会には参加出来ないそうです。ですが可能な限り参加すると仰って下さいました」

「そう分かったわ。皆で勉強会出来るといいわね」

「神藤く勉強教えてくれるんだろ？柊から聞いたぜ」

「神藤君、部活のない日はそっちのお宅にお邪魔させてもらう事になったわ。よろしくね？」

「分かりました。こちらこそよろしくお願いしますね」

「部活はテスト期間にはないだろうし、そうなったら皆で揃って毎日やるわよ」

「毎日！？きつくね？もうちょっとくらい間隔開けてさ」

「あんだ何のために部活が休みになると思ってるんだ？」

「大丈夫ですよ。分からない所があればありましたら、こちらできちんとお教えしますから」

「なら安心だな。私は今日は休みだから勉強に参加させてもらっ
せ」

「俺とこなたはバイトがあるから、終わってから合流するよ」

「分かりました。京一さん、アルバイト頑張つて下さいね」

「いつてらっしょい」

峰岸さんは部活動で来られないようだが、日下部さんは大丈夫なよ
うだ。出来るだけ早く皆と勉強したいな」

「へえ、ここが神藤の家か。なんか和風でいい感じだな」

「ありがとうございます。自分は着替えをして飲み物を用意します
ので、皆さんはお先に居間で勉強を始める準備をお願いします。か
がみ達はすみませんが、日下部さんを案内して差し上げて下さい」

「分かったわ。それじゃ行きましょ？日下部こつちよ」

> かがみview <

あお君から日下部の案内を頼まれて居間に向かう。居間に着いて座
り、勉強の準備をしながら話をする。あお君はまだかな

「柊達は神藤の家によく来るのか？」

「そうね。泊まったりもするし、結構来るわよ」

「朝も待ち合わせはすぐ隣だから、ほとんど毎日見てるよね」

「待ち合わせ？ 椋達って皆で学校に来るのか？」

「そうですね。日下部さん達も一緒に登校しませんか？」

「お、いいのか？ じゃあ明日からそうさせてもらっせよあやのにも言っとくから、明日からよろしくな」

「あお君が来たら伝えないとね。ほらほら勉強するわよ？」

> あおい view <

「よし、あとは飲み物かな」

勉強道具を片手にキッチンに向かう。麦茶が入ってるからこれでいいかな

「あら、あおいお帰りなさい。メール見たわよお母さんは大歓迎よ？」

「ただいま。そう言ってもらえると嬉しいよ、ありがとう。早速なんだけど今日居間で皆と勉強するからね」

「そう、分かったわ。私は部屋かお庭にいるから何か用があったら呼んでね？」

「分かったよ。それじゃ」

母さんと話をした後、麦茶をお盆に乗せて居間に向かう。あとは父さんにも直接言わなきゃね

「お待たせしました皆さん、麦茶です。さて、勉強を始めましょうか」

「あ、あお君お帰り。先に勉強始めちゃってるわよ？」

「構いませんよ、遅れた分は取り返しますから」

「じゃあ早速なただけどさ、ここはどうするんだ？意味分かんないんだ」

「ここはですね…この公式をこちらで使えば答えを求められます」

「なるほど、サンキュー！」

「あおちゃん、こことこここのやり方が分からないの。教えてくれないかな？」

「まずはこちらからです。この問題は…このやり方を当てはめれば解けます。こちらの方の問題は、意味を覚えてしまえばすぐに解けると思いますよ」

「忙しいのにごめんね？ありがとうございます」

「あお君これは？何か答えが変になるんだけど」

「この問題は文章に注意しながら解くと良いでしょうね。違う方法で解いてしまっていますから」

「あれ？…あゝ本当だ。教えてくれてありがとう！」

「あおいさん、ここはどのようじ…」

「ここですか？ここはこのようにすれば…これで分かりやすくなると思いますよ？」

「これなら解けます。ありがとうございます」

勉強しながら皆の質問に答えていく。あまり皆にはかり気を取られると自分の分を放置しかねないね、これは…

>こなたview<

「ふう〜終わった終わった〜あ、京一君お疲れ〜」

「そつちもお疲れさん。さてと、それじゃぼちぼちあおいの家に向かうか」

「ラジャ〜」

バイトを終えて外に出ると、同じようにバイトを終えた後私を待っていてくれた京一君が、自動販売機で買ったと思われる紅茶を飲みながら壁に寄り添っていた。ホント見掛けによらず優しいよね〜

「ほれ。何が好きか分からなかったからスポーツドリンクだが…」

「ありがとう…なんかこうしてるとき」

「なんだ？」

「彼氏と彼女みたいじゃない？」

「何を言い出すかと思えば…またお前は変な事言つんだな」

「そうかな？まああおい君が空いてたんなら、そっちに行ったんだろうけどね」

「あいつよくモテるよな」俺的にはそれがかがみやらあいつ自身を傷付けないかが心配なんだが…と」

暗くなつた空を見ながら話していた京一君が不意に口をつぐみ足を止めたので、何かあったのかなと思つたけど口に出すのはやめた。明らかに道の先に立っている人達を睨んでいるのが分かったから

「よお、こないだは世話になつたな」

「こつちとしては世話したつもりは全くないんだがな。つうか何で俺ばっかり…しかも人数増えてねえか？しかも今回隠れてねえし」

「2人じゃまたやられそうだからな、今度は4人でいかせてもらおうか。これなら隠れる必要性はないだろ」

「面倒くせえな。実力を評価してくれるのは嬉しいんだが…こないだのは不意打ちだったから…」

「うるせえ！」

「おつと…武器は卑怯じゃないのか？」

「はっ！リーダーから許可はもらった！だから好きにやらせてもらふぞ！」

「あんまり傷付けるのは好きじゃないんだがな…こなた、お前は離れてるよ」

「う、うん…」

京一君に言われて少し離れる。相手はバットにナイフ、警棒のような物を持って京一君に向かって行く。それでも京一君はそれを紙一重で避けていく

「おらあー！」

「よっ…」

「ちい…何で反撃しねえ！」

「さつきも言ったる？面倒くせえ、それに傷付けるのは好きじゃねえって」

「なら潰すだけだ！」

「本当に面倒くさいな…仕方ない」

そう言うと京一君は動きを止めて先ほどまで飲んでいた紅茶の缶を右手に持ち直し、正拳突きのように構えた

「ちょー！京一君何やってんの！」

「やっと諦めたか？てめえの次はあいつの番だぜ！？」

「神藤流体術三式…拔牙」

「が…」

「…へ？」

鋭い金属音の直後に鈍い音が聞こえた。つい間の抜けた声をあげちやっただけと瞬きをしたつもりはなかったし、私的にはしてないと思う。でも京一君の周りには倒れた4人が、塀にはさつきまで握られていた武器が原型を留めずに刺さっていた。何したんだろ

「…これでよし。ほら行くぞ」

「さっきのあれ、何したの？」

「あ？武器を塀から抜いて、倒れた奴を脇に…」

「いやいやそうじゃなくて、なんか技っぽいの方」

「技っぽい…ああ、あれか。あおいに習ったやつだ。相手の武器を破壊する技でな、俺のは完成型じゃないんだ。だから拳じゃなくて缶でやったんだ。ついだったからその後左手で腹殴った」

「ついだって…」

「あんまりしつこいんでな。それに…お前にも手出そうとしてたからよ、ほっとくわけにもいかねえだろ」

「京一君…」

若干形の悪くなった紅茶の缶から、キャンペーンのシールを剥がしながら話をする京一君。その中に確かに優しさを感じて胸のあたりが暖かくなった。私は本当に…

「…時間だいぶロスしちゃったね。ちよつと急ごつか？」

「だな。あおいん家着いたらこの缶捨ててもらつかな」

「そうしなよ。ほら行くよ」

>あおいview<

「ここでこちらがこうなります。解けそうですか？」

「何とかしてみるぜ…」

「それにしても遅いですね…」

「こなた達何やってるのかしらね〜まさか逃げたとか？」

「その可能性はないと思いますよ？京一も一緒ですから」

「ピンポン」

「ん…噂をすればですかね。少し見てきますね」

「行ってらっしゃい。分からないところがあったら、飛ばして他のところをやっておくから」

「分かりました。では行って来ます」

「やつほゝ来たよゝ」

「よ、遅くなつて悪いな。これやるよ」

「これは…」

「缶だ。捨ててくれ」

「凄かつたよゝそれで私助けられたんだから」

玄關に向かうとやはり2人がいた。上がらせて廊下を進みながら話をしてしていると京一君が缶を渡してきた。明らかに不自然な形の缶に、こなたさんの言葉…大体の想像はつく

「へえ京一、技使つたんだね？」

「バレてんのかよ。確かに使つた…が、技は武器に使つたんだ。人は殴つて気絶させただけだ」

「さつきも京一君から聞いたから嘘は付いてないと思うよ？」

「そうみたいですな…京一気を付けなよ？まだ完成してないんだから」

「了解。それより勉強しようぜ？」

「そうだよゝちゃんと教えてね？」

「分かっていますよ。居間で待っていて下さい、飲み物を持ってき

ますので」

そう言うところなたさんは京一の案内で居間に向かっていた。さて、いつかはこれに峰岸さん、こうさん、やまとさんを加えて泊まり込みの勉強会か、部屋また掃除しないとね

> 清一 view <

「何で勝手な事をした！」

「俺の仲間だ、俺がどうしようとして勝手だろうがよお！」

「部下思いなのは結構。だがまだ暴れる時期じゃないんだよ」

「…ちっ」

「…たしかにやられたのなら腹が立って当然だ。だが正面から行って勝ち目があるとは思えない。現に送った奴らの連絡はないんだろ？それに警戒されると面倒だ」

「く……だったらどうしろって言うんだあ？お前には考えがあるのか？」

「そうだな……例えるなら神藤は皆だ、外から攻撃してもそう簡単には崩れはしない。なら内側から兵に皆を攻撃させればいい……これなら簡単だ」

「なるほど……だから俺がこうなったわけだな？納得出来る言い分だな」

「色々な意味で切り札になりえるからな。最後の方に使わないとな、意味がない」

「ありがたいねえ。それじゃ許可出た折には派手にいかないとな」

「落ち着いたならまだ考えるぞ。色々と今の状態を利用しないとな…」

「あいつに何か大切な物とか無いのか？」

「たしか彼女がいるが…近寄れんな。即刻気付かれて終わりだろうな。妹もいた気がしなくもないんだが…分からんな」

「何だよ随分と曖昧だなあ。本当にあいつの事分かってんのか？」

「親交は無かったからな。兄弟についても曖昧だが…問題ない。使わないからな」

だがここまでやったからには、神藤にはやられてもらわないとな。あと半年程で出来上がる…その時は神藤には覚悟してもらわないと

仕掛ける者と勉強会（後書き）

「用語解説」

拔牙

神藤流体術の三式。間合い内の相手の武器を破壊し、弾き飛ばす技。加減次第では破壊せずに手の届かない所へ飛ばす事も可能である。京一はまだ完全に修得しているわけではないため拳で直接行う事が出来ず、物質を挟んで間接的に行うのが基本となっている。今回の場合はスチール缶を用いた

教えた張本人であるため、あおいは当然使用することが可能である

宿泊

「そうしますとこちらの値が…」

「なるほど、じゃあ…」

「ほら間違いな。こことここ、あとここもだな。教えてやるからやり直しだ」

「ぐ…結構自信あつたのにな」

テストまで残り1週間を切り、用事のなくなったこうさん、部活動の休みになった峰岸さん、日下部さん、やまとさんも加わって勉強会は賑やかになった。京一が言うにはこのあいだのような事は起きてはいないらしいけど…また何かあつたら隠し通せなくなるよね

「…おや、もうこんな時間ですか。今日はこのあたりで終わりにしましょうか。明日は金曜日ですが…全員泊まりに来るんですか？」

「その辺は抜かりないよ」メールで聞いたら全員OKらしいから

「そうなんですか。では明日は皆さん大丈夫なんですね」

「楽しみだな。そうだあおい、明日…まあ勉強が終わって暇な時にでもいいんだが、稽古つけてくれないか？」

「自分は別にいいよ。まあ理由は分かるけどね」

「察しが良くて助かる。流石に鈍ったままで行動するなんて嫌なん

でな。付き合ってもらおうぜ?」

京一はこのあいだの事が気になっているようで、明日勉強の後京一に付き合う事となった。前は手合わせだったから、今回はまた違って楽しめそうだね

「楽しそうだね。私も見たいんだけどいいか?」

「みさちゃんがそうするなら私も見学しようかな。2人の事もっと知る事が出来そうだしね」

「かがみも見ておいた方がいいんじゃない? あおい君のかわいい姿見られるかもよ?」

「そ、そうね。話には聞くけど実際に見たことはないから、いい機会かもね。私も見学させてもらおうわ」

「お姉ちゃんが行くなら私も行く」

「私も行きます。先輩方の稽古姿、見たいですから」

「じゃあ私もこうに付き合って行きます。まあ興味がないわけでもないのよ」

「私もお邪魔でなければ見学したいです」

「はは、全員ですか。構いませんよ、ですが出来る限り離れて見て下さいね? 当然注意しながらやらせていただきますが、万が一の事があつてはいけないので」

自分がそう言つと皆は了承してくれた。その話の後皆を家まで送つて帰宅し、明日の事を父さん達に話すと楽しそうに聞いていた

翌日

>京一view<

「ピンポン…」

「…いないよな。家の中で電源切つてるわけないしな」

「あれ？京一先輩、どうかしたんですか？」

「ん？やまとか。あおいが家にいないみたいなんだ、あいつだけじゃなくてあいつの母親もな。あいつに電話しても電源切つてるみたいだし」

「ちよつと電話してみます…本当ですね。お買い物にでも出掛けたんじゃないですか？ほら先輩料理好きですし」

「かもな…仕方ない、待つかな」

呼び鈴を鳴らしても電話を掛けても返事がない。そんな俺の姿を見つけたのか、やまとが話し掛けてきた。どうせ闇雲に動いても無駄だと考えて門を閉じ、門の前であおいを待ちながら話し込む

「京一先輩？それにやまともいる。流石に早いね〜」

「あれ？あおい君は？」

「あおいはいないみたいだ。だからここで待つ事にした」

「ふ〜ん、なら私達もそうしましょっか。電話は繋がらないし、どうしたのかと思ったけど…ここでこうしてればあお君じゃなくても誰かしら帰ってくるでしょうし」

「これだけの人数ですからね。準備もあるのでしよう」

「そうだよな〜神藤も大変だな〜」

「みさちゃんそんな人事みたいに…」

集合した皆に事情を話して、塀にもたれ掛かりながら話しをする。峰岸が話し始めた時、見覚えのある人が道の向こうから近付いてきた。まあ俺を含めても覚えがあるのは半数くらいか

「あら？京一君に皆さん。どうしたの？」

「あおいがいないんですけど、どこに行ったのか知りませんか？」

「あおいなら茜に会いに行くって言ってたわよ？」

「ありがとうございます…まったく、あいつ電話に出ないと思ったら病院だから電源切ってたのかよ」

「ふふ…じゃあ今からあおいのところに行くの？気を付けてね？」

「結果的にそうなりますね。それじゃちょっと行って来ます」

エコバッグを片手に笑顔で手を振る相手にお辞儀をして、皆に目配

せをして立ち去ろうとする。しかしこう達に止められてしまった

「今の女の人…あおい先輩に似てましたけど」

「それにあおい先輩の事呼び捨て…京一先輩も敬語使ってたし…まさか」

「察しの通りあおいの母親だ。そうかお前ら会うの初めてだったな」

「あおい先輩のですか？ちょっと挨拶してきます」

「もう少し早く教えてくださいよ！」

「私達もちよつと挨拶して来るぜ」

「そうね、ちよつと待っててね？」

そう言うと4人は早速挨拶に向かった。あおいの母親もにこやかにそれに答えているようで、しばらくすると門を開けて家の中へと入っていった。終わったかな？

「もういいか？ほら行くぞ…っってお前ら荷物は？」

「いや、あおい先輩のお母さん、優しそうでしたね、私達の荷物は家の中に運んでおいてくれました」

「ああ見えて神藤家先代頭首だからな。驚かされるよな」

「…頭首？」

「何だ知らなかったのか？てつきりあいつから聞いて知ってるかと…」

「いや、それはないけど…本当なの？」

「気になるか？まあ詳しい話はまた今度あおいに聞くといいさ」
振り返りながら皆を歩かせる。入れ違いになったら大変だよな

>あおいview<

「え〜？お泊まりに来るんなら私も一緒に遊びたい〜！」

「こらこら、まだ茜は入院中でしょ？」

「もう大丈夫だもん！」

「それでもまだ駄目なのさ。無理に退院させたらこっちが睦月に怒られちゃうんだからね」

「こんにちは院長先生。茜はあとの程度で退院できるのでしょうか？」

「そうだな〜1週間くらいかな？体調も安定してきたし、検査も重要なものは終わらせてあるからね。まあ様子見程度だと思ってくれて構わないよ」

「そうですか、分かりました。茜、退院したら夏だからさ、自分達が休みに入ったら皆で海に行こうよ。だからそれまで我慢してね？」

「本当？ならもうちょっと頑張る！約束だからね？」

「うん、約束。それじゃまた来るからね」

院長先生にお辞儀した後、茜に軽く手を振り病室を出る。皆はそれぞれ準備があるようなので、自分の家の前に集合する事になっている。自分は昨日の間に部屋を綺麗にして時間を作ったうえで1人で茜に会いに来たのだが…

「あ、出てきたわ。今日はよろしくね？」

「かがみ、京一？それに皆さんまで。どうしてここに…」

「あおいの母親に聞いたんだ。茜に会いに行くって言ってたって教えてくれたのさ」

「それで来てみたわけだよ。グッドタイミングだね」

「えへへ…途中で降りる所間違えそうになっちゃったけどね」

「無事に来られたんですから気にしちゃ駄目ですよ。でも水くさいじゃないですかあおい先輩。言ってくれたら一緒に行きましたのに」

「今回ばかりはこの意見に賛成ね。妹さんの事が気になる先輩の気持ちは分かりますが、私達だってそうなんですから」

「いえ、お気持ちは嬉しいのですが、皆さん準備があるとの事でしたので…」

「それでもさ〜泊まらせてもらうんだから挨拶くらいしておきたい

じゃん？しかも私とあやのは初めてなんだから、なおさらそうしないとか」

「そうよね。でも私達が勝手に来たんだから、神藤君はあんまり気にしなくてもいいわよ？」

「ありがとうございます峰岸さん。それではそろそろ自分の家に移動しましょうか」

病院を出て電車に乗り自分の家に向かう。移動を始めた際に荷物が無い事に気付いたが、病院に来る前に許可を得て自分の家に置いてきたのだと言った。流石に全員忘れた、なんて事はないとは思ってたけどね

「お帰りなさい。茜の様子が変わった事はなかった？」

「ただいま母さん。そういうのはなかったけど、院長先生に聞いたら茜はあと1週間程度で退院できるらしいよ」

「あらそうなの？よかったわー皆さんもお帰りなさい。荷物はあおいの部屋に置いてあるから、どうぞ上がって？」

「おじやまします」

「大人数で押し掛けてきてすみません。少しの間お世話になります」

「峰岸さんだったわよね？いいのよ、あおいのお友達なんだから。このあいだはあんまりもてなせなかったけど、今回は泊まりなんだから時間もたっぷりあるしね」

「あお君の母親楽しそうね」

「今の自分の家に女性は母さんと茜だけですからね。自分と同年代の女性が訪れるのが嬉しいんでしょうね」

皆が挨拶しながら上がると、いつも以上にニコニコして話をする母さん。よほど嬉しいんだろうね

「それじゃ改めて神藤君、よろしくね？」

「私もよろしくたのむな」流石に夏休みに補習なんて嫌だからさ

「私達の場合またになるのかな。皆を代表してお願いするね」

「なんであなたが仕切るのよ。まあともかく、色々よろしくね？」

「いえいえ、こちらこそよろしくお願いしますね」

「そういえば、先輩のお母さんを見るのは今日が初めてでしたけど、やっぱり似てますね」

「どちらかといえば…と言ってもまだお母さんしか見ていませんけど、先輩はお母さん似なんですかね？」

「確かにそういう風に言われる事も多くありますが、それでも髪の色と目の方は父さんに似ていると言われますね」

「あゝそう言われるとそうかもね。そういえば明日は京一君と稽古するんでしょ？なら今日はこれからどうするの」

「ええそうですね。やるとするなら時間帯は朝でしょうね、その後は勉強しますし。今日は…まだ晩ご飯まで時間がありますからその前まで勉強しましょうか」

自分が答えると皆は早速勉強道具を広げて勉強を始めた…まあ3名ほど渋る人もいたけどね

「疲れた…なあ休憩しねえ？」

「さきほどした休憩ばかりですから、次はもう少し後になりますね。ペースを落としても構いませんので、頑張ってください」

「う…分かった、もうちょっと頑張ってみる。サンキューな神藤」

「いえいえ。次の休憩の際にはデザートをお出ししましょうか、食べ終わるまで休憩という事で」

「おおデザート？マジでか！？よろしやる気出て来たぜ、楽しみにしてっかな」

「気になったんだけどさ、デザートって何にするの？」

「プリンでもお出ししようと思っっていますが、リクエストがありましたらそちらに応えますよ？」

「私はそれでいいわよ。ああ君のすごく美味しいし」

「ありがとうございます。ではその言葉に応えられるように頑張りますね」

「へ〜神藤君そついうの作れるんだ。私も作ったりするから、手伝えると思つわ」

「私も手伝う。いつもあおちゃんには食べさせてもらってるから、たまにはおかえししないと」

「ありがとうございます」

手伝ってくれると言ってくれた2人にお礼を述べて勉強を続ける。しばらくして3人でプリンを作り、休憩を兼ねて食べる。うん、上手く出来た

「美味かった〜また機会があつたら食わせてくれよな」

「次はどうなるかは分かりませんが、善処しましょう。今回は峰岸さんとかささんが手伝って下さったおかげでこの味が出せたわけですし」

「そこまで大きな手伝いはしてないんだけど、そう言ってくれると嬉しいわ」

「何だか照れちゃうな。でも私達は手伝っただけだし、ほとんどあおちゃんが頑張ったんだから、もっと自信持つてもいいんじゃないかな」

「確かに前に出されたデザートだって、とっても美味しかったわけだしね。つかさの言う通り自信持つてもいいと思っけど」

「お前は謙虚過ぎんだよ。こんなに美味しいもの作っただ、胸張ってる」

他の皆も味を褒めてくれる。それ自体は嬉しいのだけど、やっぱり2人のおかげだと思っうな。その後全員が食べ終わると、途中に休憩を取りながら勉強を続けた

「あ…そろそろ晩ご飯の時間ですね。今日はここまでにしましょっか」

「食べた後にまた勉強したりはしないんですか？」

「土曜日、日曜日も勉強ですから、あまり詰めてやりすぎると保ちませんからね。それに明日は皆さん早起きするようですよ」

「なるほど、と言うことは今日はもう勉強しなくてもいいんだね！」

「つつても夜中ゲームしたりすれば意味ないんだけどな」

「酷いな、そんな事しないよ？多分」

「もうちょっと自信持ってから言えよ」

勉強道具をしまいながら皆と話をして笑いあっ。そんな時部屋のドアをノックする音がした。多分、というより確実に母さんだろっね

「あおい、晩ご飯手伝って欲しいんだけど今手は空いてるかしら？」

「大丈夫だよ、すぐ行くから」

「私達も手伝っわ。さっきは手伝えなかつたけど、これなら力になれるから」

「頼もしいわ〜じゃあ皆さんと一緒にキッチンに来てね？お父さんもそろそろ帰って来ると思うから」

「そうするよ。では行きましようか、しまい終えていない勉強道具の方は後ほど自分がしまっておきますので」

「そう？なら悪いけどお願いするわね。誰の分かるようにしてくれば、あとは私達で運ぶからいいわよ？」

「お気遣いありがとうございます。ではお手数でしょうがそうしてもらいましょう」

お礼を言うと皆は微笑んでくれた。その後キッチンに向かい晩ご飯の手伝いをする。料理を手伝う側も食器を用意する側も人数が十分いたために、父さんが帰ってくる頃には食べるだけという状態になっていた。

「ただいま〜おや、こんばんは。昨日言っていた泊まりのお友達かな？このあいだよりも人数増えてるね」

「初めましてこんばんは、八坂こうと言います。今日から数日のあいだお世話になります」

「こんばんは、お邪魔しています。初めまして、私は永森やまとと言います。数日間お世話になります」

「こんばんは、初めまして。私は日下部みさおって言います。今日から数日よろしくお願いします」

「こんばんは、初めまして。峰岸あやのと言います。数日間ここで
お世話になることになりました」

「こんばんは。私は神藤睦月、あおいと茜の父親で神藤家の現頭首
だ。いつもあおいがお世話になってるね」

帰って来た父さんと初対面の4人はお互いに挨拶をして、一通り話
しをした後皆で晩ご飯を食べ始める。ちょうどいいタイミングで帰
って来るね

「へ〜後輩なんだ。あおいも色んな人と知り合ってるんだな〜同学
年だけじゃなくて後輩とも仲良くなるなんてな」

「まあね。ところで明日道場使うけど問題ない？」

「ホントか？別に構わないが…父さん的には一緒にドライブ行きた
かったんだよね」

「友人置いてそんな事してたらマズいでしょ。それにテストも近い
んだから、皆がいなくても行かないよ」

「冷たいな〜仕方ない、茜のところに行ってみようかな」

「じゃあ私が付き合っわ。家はあおいと皆さんに任せてもいいわよ
ね？」

「自分はそれで構わないよ。帰って来たら茜の様子教えてね」

「そのつもりだ、じゃあ明日は頼むな。御馳走様、さてと…あおい
達から先に風呂に入るか？」

「父さんがそれでいいならそうさせてもらおうかな。では皆さん、自分達はお風呂に入ってきますので」

皆と両親にお辞儀して京一を誘ってまずは互いに着替えを取りに行く。着替えを持ってお風呂場に行き、この後お風呂に入るのだがここで細工をする

「ん？…何やってんだあおい？」

「こうしておけば、ゆっくり入れるかなってね」

「ふん…まああいつら待たせるわけにもいかないから、そこまでゆっくりは出来ないだろうがな」

「まあそれはそうなんだけどね」

戸のレール上に棒を置いてから体と髪を洗って湯船に浸かると、少し熱めのお湯が疲れを取ってくれる。良い湯だね

>こなたview<

「さてさて、私達も準備しないとね」

「まだあおい達は上がってきてないが、次は皆さんが入るのかな？」

「え、ええまあ…」

「先に準備をしてお風呂に向かっておけば確実だと思うので。では」

みゆきさんが口早に説明し、用意をしてお風呂場に向かう。勿論毎回恒例のイベントをやるためにね

「お背中お流し致しますご主人さ…あれ？開かない？」

「ホントだ、あおちゃん達いないのかな？」

「そんなわけないわよ…多分」

「もしかして、先輩方は私達が来る事を予想してこんな事を…」

「まあ私達がやってる事の方が変なんだと思うんだけど」

更衣室を過ぎてお風呂場に入ろうとしたのだけど、何故か開かない。やまとさんのツッコミはスルーして、とりあえず戸を叩いてみる

>あおいview<

「やっぱり来たね」

「なるほど、さっきやってたのはこうするためか」

「入〜れ〜て〜よ〜！」

「何で拒絶するんですか〜！男ならもうちょっと喜んでもいいじゃないですか〜！」

「女性の言う台詞じゃないと思うけど？」

「…何か言ってるぞ」

「たまにはゆつたりお風呂に浸かりたいな…うう」

結局戸を開放して皆をお風呂場に入れてあげる。流石に日下部さんと峰岸さんはいないようだ

「よ、どうだった？女の子とのお風呂は。楽しかったか？」

「あれ？何で父さんがそれ知ってるの？」

「皆の様子が違ったのが気になってね。まあ予想はしてたんでな」

「父さんらしいね。とりあえず自分は日下部さんと峰岸さんをお風呂場に案内して、皆と自分の部屋で部屋割の話し合いかな」

「よろしく頼むな」さっき貰った地図、なるべく早く覚えるからさ」

「戻って来る道は私が覚えるから、神藤君は部屋で待ってても大丈夫よ？」

「そうですか？でしたら自分の電話番号とアドレスを覚えておきますので、何かあった際にはそちらの方にお問い合わせします」

日下部さんが笑顔で片手に持った地図をヒラヒラと振る。その姿に少し笑ってしまいながら日下部さんと峰岸さんに赤外線電話番号とアドレスを送る。これで少しは2人との距離が縮まったかな

「さて、部屋割ですがどうしますか？荷物もありますから、先に決めてしまわないと後々面倒ですし」

「ん〜とりあえず、かがみんの部屋はあおい君の部屋の隣で確定として…つかさはその隣かな？私はその隣でいいよ」

「そうだね、出来るだけ近くがいいかな」

「確かに隣がいいけど、こいつの意見に反論出来ないのが腹立たしいわ…」

「私は特に希望するお部屋はありませんので、残ったお部屋でお願いします」

「私はあやのの部屋の近くで頼むぜ〜」

「じゃあ私は…ここかしら？」

「俺は別にどこでもいいぞ？」

「私は…じゃあこのあたりで。やまとは隣ね？」

「何で私がここの隣に決まってるのよ」

「いや、話し込んだりしても移動が楽になるようにね？それにそのまま寝ちゃってもちゃんと毛布掛けてくれそうだし」

「…まあいいわ。けど毛布は掛けてあげないわよ」

日下部さんと峰岸さんがお風呂から上がったから部屋で部屋割の話をする。とりあえず希望の部屋は決まったようで、京一とみゆきさんは余った端の部屋で隣同士のような。こなたさんが残念そうにしていたのは何でだろう

稽古と心配

> かがみ view <

「…眠れないわね」

眠気がないわけじゃないんだけど目を閉じてみても眠れない。部屋が決まった後も、皆とおお君の部屋で結構遊んだんだけどな。まあ部屋を出るのは最後だったけど

「ラノベでも読もうかな。ん…先に読むならこっちかしら」

勉強が終わって暇になった時の為に、持って来ておいたラノベを机に置いたバッグから取り出す。ついでに窓も少し開けておこうかな

「あれ？…明かり？」

窓を開けてみると隣の部屋の明かりが外に少し洩れていて、まだ灯ったままだと分かった。こっちは…おお君の部屋よね

「明かり消さないで寝ちゃってるとか？まさかね」

たしかに暗いと眠れない人もいるんだろうけど、おお君はその類じゃない。そこまで心配する事はないんだろうけど、見て来ないと気になるし…まあ、単におお君の側にいたいのもあるんだけど

「コンコン…」

なるべく小さく、且つ中に聞こえる程度に叩く。これで起きて気付

いてくれたのなら幸いなのだが、意外にもすぐにドアは開かれた

「…かがみ？このような時間にどうしたんですか？」

「いや、電気点けっぱなしだなんて思ってたね。あとは…ちょっと眠れなくて」

「そうでしたか。心配していただいてありがとうございます。よろしかったら入って行って下さい」

「じゃあお言葉に甘えて…」

どうやら寝ていたわけではなく何かしていたようで、机の周りは本で結構散らかっているし、普段あまり使っていないパソコンの電源も入っている。部屋に入ってベッドに腰掛けると、やっていた事そっちのけで私に構ってくれる。それはそれで嬉しいし、あお君が近くにいるだけで心地が良い…けど

「…ねえ、やってた事終わらせたなら？私は見てるだけでもいいからさ」

「気付かれてしまいましたか。ですがよろしいのですか？」

「いいのよ。私が声掛ける前からやってたんでしょ？ほら作業に戻って戻って」

「そうですね…でしたら早く終わらせますので、終わりましたらまたお話ししましょうか」

あお君の言葉に軽く肩を叩いて机に向かわせる。構ってくれるのは

嬉しいのだが、それで作業が遅れるのは足を引つ張っているような気がしてならない。なら私に今出来るのは作業に戻す事だと思っ…若干眠たくなってきたけど待つてあげなきゃ

>あおいview<

「他に訂正箇所は…ありませんね。よし、終わりましたよ…っと、おやおや」

机の上を片付けてベッドの方を見ると、かがみが横になって小さく寝息を立てていた

「少し時間がかかりすぎたかな…すみません、せつかく待っていて下さったのに」

横に座って頭を撫でながら謝る。よく眠っているようだが、さてどうしたものか…

「このまま自分のベッドで寝かせ…いややめておこつ」

以前こうさんとかがみを眠らせた時は見事に叩かれたから、今回もまたそうなるかもしれない…まあ自分が悪かったようなのだけど

「…かがみの部屋で寝かせようかな、その方が朝準備する時に楽だろっしね」

自分の部屋とかがみの部屋の扉を開けてから、かがみを抱きかかえて部屋まで連れて行く。作業を終えたのが遅かった事もあってか、布団の中に寝かせて自分の部屋に戻って来た時には3時前だった

「はは、結局徹夜になっちゃった…」

自嘲気味に笑って着替え部屋で着替え、走りに行く。徹夜なんていつ以来だろう

>京一view<

「んあ…もう時間か」

目覚ましに叩き起こされて、あくびをかみ殺しながら布団から出る。布団を綺麗にした後、顔を洗って着替えを済ませる

「時間からしてそろそろ戻って来るな」

今の時間は午前4時少し前、昨日早めに寝た事もあったか眠気はすぐに飛んだ。戻って来る前に道場に向かっとくかな

「あれ？京一また早起きしたの？」

「ああ、早めに体動かしたかないとな。だからお前のが終わった後でもいいから付き合えよ。朝飯は…起こすような時間になってからでいいだろ」

そう言うとおおいも少し悩んだ後に納得して、俺の朝練に付き合う事になった。悩んだのは朝飯の事なんだろうかな

「…どう？なんとかなりそう？」

「まあコツは分かったが…お前の技を真似た方が早くないか？」

「まあ京一なら別にいいと思うけど…」

あおいが言うには神藤流の技に決まった完成型は無いらしい。そのため使用する人が自らの長所や短所、癖に合わせて各々の完成型を作っていくのだそうだが…

「俺は神藤家の人間じゃねえからな。お前のを参考にやってみるさ」

「じゃあちよつと見ててね？」

そう言うと分かりやすいようにゆっくりと動き、構えて放つふりをする。へえ…俺のとは違うな

「なるほど、参考になった。じゃあ早速使って…」

「今は止めて、後でやろうよ。とりあえず朝ご飯作らないと…ほら」

「もうそんな時間かよ、じゃあ付き合ってもらった礼に手伝うかな。起こすのは頼んだ」

あおいの指差す方を見ると時計は既に6時を回っていた。急ぎ足でキッチンへ向かい作られた料理をテーブルに並べていく。朝飯の準備が終わった頃、あおいは皆を起こしに向かった

> あおい view <

「みゆきさん、おはようございます。朝ご飯の準備が出来ましたよ」

「はい…あ、おはようございますあおいさん。朝食ですね、分かりました。わざわざありがとうございます、準備を済ませ次第向かい

ますので」

扉をノックすると今起きたらしいみゆきさんが顔を出し、用件を了解すると一礼して扉を閉めた。その後各部屋を回り皆を起こしていくのだが…

「やっぱりまだ起きないか…」

目の前にはかがみが眠っている。眠った時間を考慮して一番最後に部屋を訪れたのだが、肩を揺らしても、微かに反応するだけで起きる気配はない

「起こすのはもう少し先にしよう。かがみの分は起きてから作り直しかな？」

今7時だから眠ってから4時間くらいかな。部屋を出てそんな事を呟きながら皆の所に向かう

「あれ？かがみ先輩を起こしに行ったんじゃないんですか？」

「かがみは昨晚眠るのが遅かったので、まだ起こさない事にしました。10時までには起きないようであれば再び起こしに行きますよ」

「ならどうする？食べ終わって時間空けてから起きてこないようだったら、勉強でもするか？」

「それでもいいね。でも起きてくるまでは自由にくつろいでくれる方がいいよ。勉強したい人は勉強をすればいいしね」

「だったら私は勉強を教えてくださいませんか。付き合ってくださいね、

先輩？」

「私もお願い出来るかしら？みさちゃんは皆とテレビ見てるみたいだから」

「ええ構いませんよ？でしたら少し待っていて下さい。持ってくる物がありますので部屋へ行つて来ます」

「分かったわ。じゃあ私達は準備しておくから」

やまとさんと峰岸さんに手を振つて一度部屋に戻り、勉強道具と徹夜した原因を居間まで運ぶ

「お帰りなさい…って何ですかそれ？」

「これは皆さんそれぞれの苦手対策用プリントです。テストのある教科分だけですけど問題の種類に幅を持たせていますから、やりこたえはあると思いますよ？」

「わざわざ作ってくれたの？ありがとう…これが私の分ね？」

「本当に1人1人の問題が違うんですね。いつの間にこんな量を…大変だったでしょうね」

峰岸さんは自分の分を取り、中身を確認している。やまとさんは自分の問題と他の皆の問題を見比べている

「空いていた時間に少しずつ進めていたんですよ。自分が勝手にやった事ですので、あまりお気になさらずに…」

「皆おはよう」

「かがみ？おはようございます。もう起きて大丈夫なんですか？」

「なんとかね。あんまり寝過ぎると迷惑になっちゃうかもしれないからさ」

「そうですか、気を使わせてしまってすみません」

「かがみも起きたみたいだし、先に稽古するか？やまと達の勉強を後から中断するのも悪いだろうし」

京一の言葉にやまとさん達も手を止めて道場まで付いて来る。かがみはいったん別れて、顔を洗ってから合流した

「さてと、まずは軽く流そうか？」

「朝は結局技教えてもらったただけだったからな。まあウォーミングアップを兼ねて…と！」

小走り気味に京一が近付き、右手で正拳を放ってくる。それを避けて突き出された右腕を掴み、後方に投げる

「うお…っ！」

上手く着地した京一はこちらに低姿勢で突っ込んでくる。それにタイミングを合わせて足払いする

「甘いぜ？お返しだ！」

足払いを左手で受け、右手で掴まれる。左手も足を掴み、上方に向かって投げられる

「ウォーミングアップなのに…なかなかやってくれるね」

落ちてくるタイミングに合わせて京一が拳を突き上げてくる。これを払い、両手で掴んで着地の反動を利用し、背負い投げの要領で床に叩き付ける

「いつ…て〜」

「ふう…これでウォーミングアップは終わりかな？」

「それじゃ本気で行くぞ？油断していると蹴っ飛ばすからな！」

「教えた事ちゃんと出来てるか見るからそのつもりでね！」

言った途端に上段蹴りを放ってくる。脚の動きに沿って後ろに回ると、背後を取られた事を察したのか振り向きながら離れる。いいスピードだ

「ちいつ…抜牙！」

「甘い！」

京一の抜牙のタイミングに合わせてこちらも抜牙を放つ。破裂音に似た音が響くが、弾きあっただけである

「んなつ…」

「自分の肩を狙って弾こうとするなんて…良い使い方だね」

コツは教えたがそんな使い方を教えたつもりもない。それなのにこんな風に使ってくるとは…驚いた

「まさか自分で違う使い方を見つけるなんてね。ならこつちも技を見せようかな」

自分が構えてそう言うと、京一は警戒して距離を取り始めるがもう遅い。構えたまま間合いに入り、技を放つ

「はあっ…鎚波！」

「うおお！？」

技を受けた京一が吹き飛ぶ。今度は体勢を立て直せなかったようで倒れてしばらくして悔しそうに立ち上がった

「今回はもう少しいけると思ったんだが…つか弾くとかあんなの聞いてねえぞ！」

「いやちょっとびっくりしてさ。それに京一だって関節狙って来たじゃん」

「あれは単なる思い付きなんだがな。ともあれお前を驚かせたならそれでいいか。ははは」

自分が驚いていた事を知ると京一が笑い出す。よほど嬉しいようだ

が、こちらとしてはなかなか複雑な気分だ

「お疲れ様。 凄いわね2人とモ」

「ホントだよね〜京一君、こないだのは手加減してたんだね」

「まあな。 相手は一般人みたいだったし、本気出すわけにもいかな
いだろう？」

「でもそんな京一先輩は、あおい先輩に手加減されてるんですね」

「言うな…分かってても悲しくなる」

溜め息を吐きながらこうさんに言い返す京一。 とりあえずそんな京一を連れて、掻いた汗を洗い流すために自分達はお風呂場へ、
かがみ達は居間へ向かった

「これが私のか〜ほらこれ終の分みたいだぜ？」

「ありがと日下部。 へえ…作業してたのはこれだったのね」

「さすが几帳面ですよね〜ちゃんと1人1人見てるんですね」

「そうかもね〜それにしてもこのプリント…なんか人の弱点ばかり突いてくるね。 解説とか載ってるから嫌じゃないけど」

お風呂から上がって居間に向かうと皆がプリントを見ていたので、
そのまま全員で勉強する事にした。 私語こそ多いが、口だけでなく
ちゃんと手も動いているので問題はない

「これ結構時間かかったんじゃない？全員分だとかかなりの量あるし」

「終わった時にはかがみは既に眠っていましたからね。申し訳ありません、せつかく待っていて下さったのに」

「いいのよ、来たのも待つてたのも私が勝手にやった事なんだしさ。それに私の部屋まで運んでくれたのよね、それでおあいこにしましよ？」

「ありがとうございます…あ、もうお昼ですね。何か作りましょう」

「よろしく〜楽しみにして待つてるよ〜」

ふと時計に視線を移すと食事をするのにはちょうど良い時間だった。皆に一言言った後居間から離れ、キッチンに向かいながらメニューを考える

>京一view<

「あいつ…」

「京一君どうかした？…あ〜分からない所でもあった？どれどれ、お姉さんに見せてもらん」

「ちげえよ、さっきの会話が気になったんだ。ほらこれ作ったって言うってただろ？」

「あおい先輩は空いた時間に作ったと言っていましたけど…先ほどの会話から考えると、かがみ先輩が眠った後に終わったみたいですね」

「お姉ちゃんは何時くらいに寝たの？」

「そう言われても、いつの間にか寝ちゃってたのよね。最後に時計見たのはたしか…1時頃かな」

あおいがキッチンに向かってからこの無駄に分厚いプリントがどうやって出来たのか聞いてみたが…1時か、すぐ終わって寝たとしても2時間しか寝れねえじゃねえか

「かがみの部屋は隣だから運ぶのに時間は掛かんないだろうが…終わった時間によっちゃ、あいつ徹夜したかもな」

「徹夜つて…神藤のやつ、あんなに元気そうにしてるのにか？」

「確かに先輩、普段から皆さんに甘いですよ。電車代とかも全員分出したりしてましたし…もしかすると私達に心配を掛けないように、そう振る舞っているのかもしれないね」

「かがみを起こしに行くって言うてた時間も、逆算するとちょうどいい時間になってたしな…たくしょうがねえやつだな」

「出来ましたよ…あれ？」

あおいの事で話していると張本人がやって来た。どうやら昼飯は素麺らしいが、そんな事はいい。あちらもこちらの空気を感じてくれたようで、真面目な顔になった

>あおいview<

「ああ君、お昼終わったらちょっと話があるんだけど」

「どのようなお話かは存じませんが、分かりました。場所はどこで…」

「ここでもいいわよ?」

かがみがにこやかに言うが、明らかに空気が違う。何か気を悪くするようなことを言った覚えはないのだけれど…

「それで話というのは…」

「まず聞くけど何時に寝たの?」

「何時と言われても、あの後からは寝ていませんので…」

「まあやっぱり、か」

食事を終えて片付けた後、互いに正座で話をすると、京一が自分の言葉に溜め息を吐く。徹夜ってそんなに悪いことなのかな

「あのさ、私達のために頑張ってくれるのは嬉しいよ?もの凄くね」

「でもああおちゃん時々無理するから…このプリントだって私達何も知らなかったし」

「私達だってそうだけど、皆は神藤君のことが心配なのよ?」

「そうだぜ?色々良くしてくれるのはいいいけどよ、もうちょっと自分を見るよな」

「日下部の言うとおりね。自分の事をほっというまで私達に構わなくてもいいのよ」

「先輩は皆さんのやる事を頑張りすぎなんです。たまには自分の事の方に集中して下さいよ」

「確かに先輩は私達に構い過ぎのように思えます、私達もそうですけど。ちゃんと自分の事はやっているんですけど、私達もちゃんと出来ますから大丈夫ですよ」

「しかし…」

「それにもしも…もしもあお君に何かあったら、その時は私達悲しいから…」

かがみが俯きながら言ったその言葉が、この会話の中で一番辛かった。皆の為にとやっていた事が、結局は心配を掛けてしまったようだ

「すみません、自分のせいでご心配をお掛けしてしまっ…」

「いいのよ。私達のためにやってくれたんだし、私達の想いを知ってくれたらそれでいいの」

「それでも…自分はまたこうした事をしてしまうかもしれません」

「それだけあお君が私達の事を大事に思ってくれてるって事でしょ？それに止めて欲しいわけじゃなくて、1人で無理しないで欲しいって言ってるのよ」

「ありがとございます、そう仰って下さると助かります。もし必要な時が来ましたら力を貸して下さいね？」

「勿論です。ではそろそろこちらに集中しましょうか。あおいさんが丹誠を込めて作って下さったこのプリントは、きっと結果に繋がると思いますから」

微笑みながらみゆきさんが言うと、全員がプリントを再開させる。そうか：自分が皆を大事にしたいように、皆も自分の事を大事にしたいんだ。はは、嬉しいな

> 睦月view <

「それでね、看護師さんが聞いてきたの。夏はどこに行くの？って」「そついや夏だな、今年は茜も大丈夫そうだし、海とか祭りとか行ってみるか」

「本当？お祭り楽しそう！」

「こらこら、大声出すんじゃない」

本当に楽しそうだ。今年あおいは友人と出掛けるだろうが、茜から聞いた話だとあおいは茜と約束したらしいからな。1、2日くらいなら家族旅行も行けるだろう

「あとは…そうだな、墓に水でもぶちまけに行くかな」

「お墓？誰の？」

「ん？茜のお母さんのお父さん…ま、お爺ちゃんだな。お母さんの前の頭首で、家だって元々はあの人のもんだ」

「へ〜お爺ちゃんか〜ねえ、もっとお話聞かせてよ！」

「元気に退院したらな」

沙雪の父親…神藤銀司。確か誕生日は夏だったはずだし、旅行がてら花でも手向けに行くか

稽古と心配（後書き）

「用語解説」

神藤流

あおい達の属している流派。高い技術と相応の威力を持ち、気を用いる事の出来ない者でもある程度の技までならば、鍛錬次第で使用することが可能である

技に気を組み込む事によって、従来のままでも高い性能を飛躍的に強化する事も出来る

特徴としては技に決まった完成型が存在しない事が挙げられる。これは対戦者に以前見た技を見せない為にこうなったと推測される

修得するには自らの癖や考え等を取り入れた完成型を作り上げる事が、流派の自然の流れになっている

鎚波ついなみ

神藤流体術の一式。等間隔に複数の打撃を同時、且つ高速で加える技。使い手の力量によるが、加減しなければ命に危険が及ぶ可能性があるため、心臓や肺を狙うことは禁止されている

あおいはこの技を京一に教えておらず、初めて見た京一は防ぐ事が出来ずに吹き飛ばされた

彼女に祝いを、笹に願いを

「ねえこっつてこれでいいの？ちょっと自信ないんだけど」

「へ？…え、ええ合ってますよ」

「どうしたのあお君、何か考え事？」

「ええまあ。本人の前でこっついう風に言うのはどうかと思いますが、かがみとつかささんの誕生日の事で少し」

「あゝそっつえばかがみ達の誕生日、見事に勉強会と被ってるよね」

かがみとつかささんの誕生日は明日だ。当日だと色々忙しいと思うから、今日の間はどうするかを考えておかないと…」

「そっつなんですよね。ですからかがみとつかささんを、一時的に家に帰した方が良くどうか考えていたわけです」

「なるほどねゝ確かにその方がいいかもしれないわね。お母さんやお父さん、姉さん達とも一緒に過ごしたいし」

「そっつだよねゝあおちゃん達も来てくれるよね？」

「お誘いしていただけるのであれば、喜んでお伺いしますよ？」

「当然来てもらっつわよ？皆も大丈夫？」

かがみがそっつ尋ねると皆は大丈夫だという旨を伝えた。そっつえば

もうお昼過ぎか…あんまり時間はないね

「…さて、自分は少し出て来ますね」

「じゃあ私も付き合おうわ。いい？」

「いえ、すみませんが今回は…」

「そ、そう。じゃあ早く帰って来てね？」

「どこか行くんですか？もしよければ私も行きますが」

「ありがとうございます、それではお付き合いをお願いしますやまどさん。それでは少し出掛けてきます」

「私は駄目でやまとさんはいいのね。ふうん…まあいいわ、行ってらっしゃい」

「気を付けて行ってらっしゃい」

勉強道具を片付け、準備をして母さんに話をする。その後やまとさんと一緒に玄関から外へと出る…何だろうか、かがみが怖い

「…それで、どこに行くんですか？柊先輩達の誕生日プレゼントのお買い物へは」

「おや、気付かれましたか。やはり顔に出してしまうんでしょうかね」

歩きながら話していると、どうやらやまとさんにはバレているよう

だ。自分嘔吐くの下手なのかな

「いえそういう訳では…あのタイミングで出掛けると言われれば想像出来ますよ、柘先輩の同行を拒否したわけですし。柘先輩も誕生日を楽しみにしているみたいでしたから、その楽しみを壊したくなかったんですよ?」

「なるほど、見透かされていましたか。では喜んで頂けるように頑張りましょうかね…まずは銀行へ、その後プレゼントを買いに行きましようか。その後は…」

「まだ他に行く所はあるんですか?」

「ええ、食材の調達をしたいので。そういえば先ほどから気になっていたのですが、何故やまさんは自分に付いて来ようと思われたのですか?」

「何故って聞かれても、先輩がどんなプレゼントを買いのか気になったから…じゃ駄目ですか?」

「いえいえ十分な理由だと思いますよ?」

たわいもない話をしながら歩みを進める。お店はあらかじめ決めていたので、そこへ向かうのは比較的楽である。そのため向かう途中に銀行へ寄り、お金を下ろしてから再び目的地を目指す

「…ここですか?なかなか高そうな物が置いてありますが」

「前々からプレゼントしたいと考えていた物がこのお店にあるんですよ」

「そうなんですか。先輩のセンスが柘先輩達に通じるといいですね」

「ははは、そうですね。あ…ありました、これです」

目当ての物を飾っているガラスケースをコンコンと指で軽めに叩く。やまとさんは値段を見ているようだけど、このくらいの値段なら特に問題はないかな

「すみません、こちらと…こちらを頂けますか。こちらの方は2つお願いします」

「かしこまりました。サイズの方はお分かりですか？」

「確か…」

> やまとview <

先輩のプレゼントの買い物に付いて来たのはよかつたけど、まさかこんなに値が張る物を買うなんてね。まあ彼女さんだから分らないくもないけど…私にも先輩みたいな人ができたら、こういうのを誕生日に貰えるのだろうか

「ありがとうございます。またお越し下さい」

「さて次は買い物ですね。この時間にスーパーへ行って帰るとなると…3時くらいですか。ちょうどいいですね、おやつを買って帰りましょうか。何を買うのかはやまとさんにお任せします。よろしいですか？」

「わ、私ですか？そうですね…水羊羹でもいいですか？」

「勿論構いませんが、好きなんですか？水羊羹」

「え、ええまあ…もしかして先輩、水羊羹嫌いでしたか？」

「いえいえ、むしろ好きな方ですよ？ただやまとさんの好きなものを知ることが出来たので、少し嬉しくなっただんです」

「そんな事言われても、どうリアクションしたら良いのが非常に困るんですけど…」

「はは、では困っている今の内にお茶の準備をお願いしましょうかね…」

そう言うと先輩は携帯を取り出して誰かに電話しているようだった。話しは1分足らずで終わったらしく、携帯をしまつとまた歩き出した。あ…着いたみたいね

「…さてと、足りない物はもうありませんかね」

「私も他には思い付きませんね…大丈夫だと思いますよ」

「そうですね？では帰りましょうか。今日は付き合っていたいただいてありがとうございます」

「それを言うのは私の方ですよ。どうもありがとうございます」

「いえいえ、やまとさんの困った姿も見られましたし、非常に有意

義でしたよ」

まるで女の子のような微笑みを向けてくる先輩。うつ…柘先輩がかわられる気持ち分かる気がする…

「ただいま帰りました」

「今戻りました。お邪魔します」

「あらお帰りなさい。お茶の用意は出来てるわよ？中にいる皆さんにはお出ししてあるから」

「ありがとうございます。なら自分を取りに行くよ」

「いいわよ私が持つて来るから。あとお茶菓子もあるんでしょ？それと一緒に持つて来るから居間で待つて？」

「いいの？ならそうさせてもらおうかな。よろしくね」

「よ、よろしくお願いします」

「ふふ…そういえば、彼女さんとはお出掛けしなかったのね。女の子とお出掛けしちゃって…今頃妬いてるんじゃない？それじゃあね」

「そういつつもりはないから大丈夫…だと思っけど」

「柘先輩なら可能性はありますね。まあ彼氏が女の子と出掛けて、気を悪くしない彼女なんてそうはないと思いますけど」

「そうですよね…かがみに謝ります。彼氏である以上、こういった

行動は慎むべきでしょうし」

普段笑顔を絶やさない先輩が、柘先輩を傷付けたと感じた途端に真顔になる。それほど先輩にとっては大事な人だという事なのだろう

「ちょっとだけ柘先輩が羨ましいです。こんなに好きになつてくれる人がいるなんて…本当にちょっとだけですけどね」

「ありがとうございます。ですがいつかきつと、やまとさんにもそのような人が現れますよ」

「ありがとうございます。そろそろ居間に着きますから、そういう発言は控えた方がいいんじゃないですか？柘先輩に聞こえたら…」

「聞こえてるわよ？別にどうこうするってわけじゃないけど、今日何しに出掛けたのか、どこに行ったのかとか話してもらおうわよ？」

「そのつもりですよ。まず…」

居間に入って座り、先輩が今日の事を話し始める。流石に何を買ったのかまでは伏せていたけど、プレゼントの話が出ると表情が変わった。気付いてなかったのかしら

「なるほど。ま、まあプレゼントを買いに行つてたならしょうがないわよね。許してあげるわ」

「ありがとうございます。明日、楽しみにしてて下さい」

「じゃあそつとさせてもらおうわ…まあ気になるけど、明日になれば分かるからね」

「お茶が入ったわよ。それとお茶菓子も。まだ飲み足りない人はいるかしら？」

「じゃあ私いただきます。あお君のお母さんの入れてくれたお茶、凄く美味しかったです」

「私もいただけますか？苦すぎず、熱すぎず、とても飲みやすかったです」

「嬉しい事言ってくれるわね。はいこれ、あおいの分とやまとさんの分ね？」

「ありがと。母さんのお茶はこだわってますからね。お二人が仰るのも分かります」

名前を呼ばれた事に少し驚いたが、お茶が来た後は水羊羹を頼張りながら、こつや先輩方との会話を弾ませた。やっぱり水羊羹は美味しいわね、先輩には感謝しないと

翌日

> あおい view <

「それじゃ、また後でね？」

「おいしいお菓子作って待ってるね」

「いやつかさ、お前が動いちゃ駄目だろ。今日の主役の1人なんだからよ」

「柊ちゃんも妹ちゃんも、お菓子とかその辺りは私達の方で用意するからゆっくりしてて?」

「そうですね。自分の誕生日の時も出来るだけ動かないように言われましたし、準備も自分達でやりますので楽にしていして下さい」

「それをあお君が言うかな…まあお言葉に甘えさせてもらうわ。準備の事だけど、家の中の方は姉さん達がやると思うから。じゃあ私達はこれで」

「了解しました。では行きましようか」

玄関で話をしてから荷物を纏めた2人と共に皆で家を出る。自分と京一で荷物を運ぶという案も出したのだが、京一はまだプレゼントを選んでおらず、皆と決めに行くという。そのため自分が2人の荷物を運ぶ事になった

「あお君ごめんね?頼らせてもらうけど、あんまり無理しないでね」

「ありがと〜でも重くない?」

「いえいえ、お気になさらないで下さい。女性に荷物を持たせるわけにはいきませんので」

「そう?でもそういう風に言ってくれるとこっちも嬉しいかな。結構多いから大変なんだ〜」

「たしかに多いですよね〜前回もこの入れ物でしたけど、女性はこの位が普通なんですか?」

「よく覚えてたわね、まあ多分これからも使うと思うけど…って逸れたわね。普通なのかだっけ？こなたとか、みゆきも同じ位の荷物だったから普通なんじゃない？」

「そうなんですか。因みに何が入っているんですか？」

「見ちゃ駄目よ？まあ言っちゃうとほとんどは着替えね。あとは勉強道具と私にはラノベも入ってるわ。こなたにはゲームが入ってたし、みゆきには枕かな？枕変わると寝れないみたいだし」

「私のお姉ちゃんに似たような感じかな？でも本とかじゃなくて、ぬいぐるみだけだね」

そんな話をしているともう柊家に着いてしまった。自分としてはもう少し話していたかったのだけど、まあ後でまた話をすればいいかな

「じゃあ一旦ここでお別れね。京一君達とこっちに来る時にはちゃんと連絡しなさいよ？」

「多分京ちゃんに言われたみたいに私達何もさせてもらえないと思うし、お姉ちゃんも寂しがるから早く来てね？」

「べ、別にそんな事ない…わけじゃないけど…」

「そうですね、まあ京一達の動き方次第で戻って来る時間は変わると思いますが、出来るだけ早く戻って来ますよ」

「だって、よかったわねお姉ちゃん、じゃあ先に家の中に入ってるね。あおちゃんばいばい」

「こらつかさ待ちなさい！ええつと…早く戻って来なさいよ？つかさが言ってたことも間違いないから…じゃあね！」

そう言うとかがみもつかさを追って家に入ってしまった。さてと、かがみが寂しがる前に早く京一達と合流して戻って来ないとね

>京一view<

「お…来たか、あおいこつちだ。電話で言つてが、かがみ達は帰つたらしいな」

「うん、出来るだけ早く戻って来てねつてさ。京一のプレゼントも決まったみたいだけど、次はどうするの？」

京一と電話でやり取りをして決めた待ち合わせ場所に着くと、京一達は先に着いていたらしい。皆と話しながら歩みを進める

「皆で一緒に準備をするらしい。かがみ達の家の中の方は家族に任せるつて言つてたから、俺達は晩飯の準備だ」

「先ほど泉さんにつかささんの方からお電話がありました、夕食の用意と食材の調達を是非お願いしたいとの事です」

「料理とかあんまし得意じゃないから作るのは勘弁だけど、柊を祝つてやらないとな」

「料理するだけじゃなくてお皿も用意しないとイケないだろうから、みさちゃんとは私はそのちの方に回るわね？」

「私達も人に振る舞うほど上手ではないので、手伝いの方に徹しますね」

「となると作るのはあおい君と私とみゆきさん、あとはかがみのお母さんもかな？」

皆の話した事を軽く整理する。つかささんから電話があり、向かう途中に食材の調達と、みきさん1人では大変なので晩ご飯の準備を手伝って欲しいと言われたらしい。しかし自分としては一つ気になる事がある

「そちらは了解しました。ですがケーキの方はどうなされるんですか？既に用意されているのでしたらそれで構いませんが…」

「うーん…そんな事さっきの電話じゃ聞いてないかな」

「なら電話してみますね。つかささんに掛ければいいんですかね？」

「別にかがみに掛けてもいいよ？そっちの方があおい君もいいですよ？」

「そうですね、ではかがみに電話します…あ、もしもかがみですか？あおいです、唐突ですみませんがケーキはそちらで用意されているんですか？されていないのであれば、こちらで用意しますが」

「あ、あお君？ケーキね？ちょっと待って…お母さんがあとで買いに行くみたい」

「そうなんですか？では自分達が買って来ますよ。どのようなものが好きですか？」

「どんなのって…チョコレートのが良いかな。皆食べれるし、あお君の時もこなたの時もクリームだったから」

「分かりました、みきさんには自分達が購入する事をお知らせ下さい。もうしばらくした後そちらに向かいますので」

「わかったわ。じゃあまたあとでね？」

「はい、それではまた」

電話を終えて皆に話すと、売り切れる可能性のあるケーキ屋に先に向かう事で意見は一致した。その後ケーキを買いによくお世話になるケーキ屋に行き、同じものを2つ購入してから（流石に1つを14等分は厳しいだろうからね）次はスーパーに向かう。

「…さて着きましたが、何を買えばいいんですかね？」

「これがリストになります。つかさんから仰られたものをメモさせて頂きました」

「携帯のメモ帳を使うなんて流石みゆき先輩。どれどれ…なかなか多いですね」

「皆で分担して探せばすぐだろ。これを赤外線で…よし、んじゃ俺は肉持って来るからよ」

「では自分は野菜を見て来ましょう。皆さんも他のを頼みます」

「分かったよ〜こっちはこっちで集めてくるから」

みゆきさんの携帯から赤外線でリストを受け取り、皆で分担して食材を集める。レジを通すときにはカゴが一杯になっていた。まあ自分達が持つからいいんだけどね

「お邪魔します」

「いらっしやうい。お母さんがキッチンで待ってるから、手伝ってあげてね？」

「分かりました。では自分達はキッチンにいますので、かがみ達に宜しく言っておいて下さい」

「うん分かったよ」

「こんばんはみきさん、お邪魔させていただきます」

「いらっしやい、1人じゃ大変だったから嬉しいわうじゃあ早速で悪いんだけど…」

つかささんに出迎えられて柵家にお邪魔する。軽く話をしてつかささんが立ち去った後、キッチンに向かいみきさんに挨拶をする。すると早速指示を出され、準備をして調理が始まった。結構忙しいけど同じくらい楽しいね

「ごちそうさまでした！いやうやっぱり母さんの料理は美味しいわ」

「嬉しいけど今日はあおい君とこなたちゃんとみゆきちゃんが料理を、他の皆が食器とかを用意したりしてくれただから、ちゃんと皆も褒めてあげてね？」

「いえいえ、自分は少しお手伝いをさせてもらっただけですよ」

「相変わらず謙遜しちゃうって、変わってないな〜でもかがみとは相変わらずラブラブなんですよ？そういう所は積極的よね」

「うつさい！余計なお世話よ！」

片付けながら話をする。積極的…かな。まあ自分としてはかがみの事は好きだし…もしかしたら好きだけじゃ駄目なのかな。いや勿論そうなんだろうけど、何も考えてない訳じゃないし…

「……い君、あおい君！」

「え？はい、どうかしましたか？」

「そのお皿ずっと洗ってるけど、もう水で洗い流しても大丈夫だと思っよ？他の片付けも洗い物も済んだし、今からケーキ食べるみたいだよ？」

「すみません、考え事をしていました。もう大丈夫ですので行きましようか」

「そうしよっか。じゃああおい君は待たせた罰として選ぶの最後ね」

「分かりました。その罰受けさせて頂きます」

居間に戻ると皆にも少し怒られた。テーブルにある切られたケーキは1つ7等分。勿論ちゃんと人数分あるのだが、大きさはあまり変

わらないようだ。それでも女性陣は少しでも大きい方を狙っているあたり、甘いものが好きなんだという事を再認識させられる

「ごちそうさま。想像以上に美味しかったわ」

「お気に召されたようですね。選んだ身としては嬉しい限りです」

「かがみ、結構食べてたみたいだけどマズいんじゃない？」

「あんたに言われなくてもちゃんと分かっているわよ。今日だけなんだから、明日からダイエットするからいいの！そんな事より部屋に行くわよ。プレゼント用意してくれたんだし、受け取らないとね」

「そうですね。では自分達は部屋にいますので。お先にプレゼントを渡させて頂きますね」

「分かった、私達は何時でも渡せるからそうしなさい。だが出来れば日付が変わる前には渡しておきたいから、そのつもりでいてくれ」

「わかりました、気を付けます」

ただおさんの話を聞いた後、かがみの部屋へと向かう。せっかくの家族の時間を邪魔する気はないが、そのあたりはかがみ達次第だろう

「じゃあまず私からの誕生日プレゼントはこれだよ」

「団長腕章…まあ貰っとくわ、ありがとう」

「ありがとう、これうちの学校の制服と似てるね」

「あれは〇ウー八の…まあつかさ先輩には似合いそうですけど。私のはこれです、受け取って下さい」

「あ、これ前から気になってた本だ。ありがとう、テスト終わったら読ませてもらうわ」

「わ〜エプロンだ。ありがとう、大切にに使わせてもらうね」

「よかったわねこつ。私のはこれになります」

「へ〜バッグか〜ありがとう、次皆で出掛ける時にでも使うわ」

「私のお財布だ〜今使ってるのをもうちょっと使ってから使うね。ありがとうやまとさん」

その後も次々とプレゼントを渡す。京一は2人にお揃いの置き時計を、峰岸さんと日下部さんは共同でかがみにはブックカバーを、つかささんにはぬいぐるみをあげていた。みゆきさんはイヤリングを贈っていたけど、あれって耳に穴空けるんだよね…痛そう

「皆渡し終わったよね、じゃあ最後にあおい君!」

「緊張しますね…かがみはこちら、つかささんはこちらになります」

「わざわざ包装しちゃって。勿論開けていいのよね?ってこれ…指輪?」

「はい、シルバーリングです。つかささんにはブレスレットを贈らせていただきました」

「ぴったりってほどじゃないけど、ちゃんと入るよ」

「嬉しいけど入らなかったらって思うと…怖いわね」

「大丈夫ですよ。ほぼ毎日触れている指です、分からない訳ないじゃないですか。お手を貸して頂けますか？」

自分の言葉に真っ赤になりながら左手を差し出してくる。別に結婚指輪じゃないんだから左手じゃなくてもいいんだけど…まあいいかな。箱からシンプルなデザインのシルバーリングを取り上げ、薬指…はマズいから人差し指に通す

「はい、はまりましたよ」

「あ、ありがとう。これ大事にするからね」

「ありがとうあおちゃん…あ、そうだ。今日七夕なんだよ？お願い事書かなきゃ」

「そついえばそつだったわね、すっかり忘れてたわ…ちよつとついで来て？」

「…？あら皆さん、帰るの？」

「うっん、もうちょっと。今から短冊にお願い事をね」

「そつ、わかったわ。暗いから気を付けてね」

かがみに案内されて外に出る。少しの間歩くと立ち止まり、こちらを向いた

「着いたわよ。ほら七夕用の笹と、あと短冊ね。書いたらちゃんと吊すのよ?」

「まさか誕生日祝いのついでにこんな事までやることになるとはな。ん?…紅茶セット当たりますように、でいいか。あおいは何にするんだ?」

「じゃあ自分は今年の間は占いで最下位になりませんように…」と
「あんたら七夕を何だと思ってるんだ?やり直してね、はい新しいの」

「真面目に書いたんですけどね…なら世界平和?」

「なら俺はあおいにテストで勝てますように。これでどうだ?」

「……やり直し」

結局皆が書き終えた後も暫くやり直していた。ようやくかがみにOKを貰えた自分の願いは皆とずっと一緒にいられますように、京一の願いは全員無病息災だった。それにしても占いが駄目なんて…

>かがみview<

「…これでいいわ。それで?もう帰るの?」

「そうするかな。んじゃ家族の方に挨拶してくる」

「あおいさんとかがみさんは、こちらでゆっくりしていらして下さいませ

い。つかささんも参りましょうか」

「私も？分かったくじゃあお姉ちゃん、先に戻ってるね」

いきなり名前を呼ばれたつかさが戸惑いながらもみゆき達に付いて行く。みゆきったらわざわざ気を使ってくれたのね…あとでメールでお礼言わないと

「…それにしても、まさか誕生日に指輪貰うなんてね」

「かがみと恋人だという証を形にしたかったんです。それでいつも身に着けられる物と思ひまして」

「それで指輪？」

「いけませんでしたか？一応首からかけられるように紐もあります
が…」

「いやそうじゃなくて…ずるいのよ、あお君は毎度毎度」

「ずるいですか？」

「私にあんたに何もしてあげられてないのに、あんたは私を喜ばしてくれ…十分ずるいじゃない」

「かがみが自分に何もしないという事はありませんよ。かがみが隣にいてくれる…それだけで自分は嬉しいんですよ？」

「でも私にあんたに…！」

「そのように自分の事を思っただけで、自分は幸せなんです。そうだ…これを見て下さい」

そう言っただけで私の頭を撫でながら、あお君はポケットから指輪を取り出した。多分私と同じ物だと思う。それを私の着けている指と同じ指に通す

「ペアリングです。プレゼントを用意する際に購入しました、これでかみとお揃いですね」

「なるほど、じゃあいつも持ち歩くようにしないと。私とあんたがずっと幸せでいられるようにね」

「そうですね。勿論自分もそうするつもりですけど、似たような願いは既に先ほど自分が願いましたから」

「さっきってまさか…」

あお君の言葉にさつき吊した短冊をしてみる。表は書き直させた通りのものだったが、裏にも何か書かれていた

「え〜と？かみと一緒に幸せでいられますように、か…こんな所にわざわざ書かなくてもいいのに」

「願い事は1つまでとは言われていませんからね。内緒で書かせていただきました」

「…直接は言ってくれないの？」

「かみがそちらの方が良いと仰るのであればそうしますが？」

「なら言っただけいいな。ちゃんと言葉で聞きたい…大切なあなたから」

「そうですね。わかりました」

そう言うとおお君は私を少し強く抱きしめてきて、おお君の鼓動が私にも伝わってくる。こんなのは予想外だけど、おお君にも私の鼓動が伝わっているんだろうか

「一緒に幸せになりましたよね。今までのように、これからもずっと」と

「うん…」

「愛してますよ、かがみ」

「うん、知ってる。私もおんなじ気持ちだから…おお君の愛してるから」

風に揺れる笹の音を消すように、お互いに耳元で話す。話し終わると自然に唇を重ねていた。今日一番嬉しかったこの時間は、きっと七夕がくれたのね

> 睦月 view <

「ここか…」

「ピンポン」

「はい…どちら様ですか？」

「こんな時間にすみません、池山君かな？初めまして」

「そうですね…何か俺に用ですか？」

「まあ雑に言えばそうなるかな。まずは最初の疑問に答えて自己紹介からだ。私は神藤睦月…君の知っている神藤あおいの父親だ」

「…神藤の父親が俺に何の用だ」

「そう睨まないでくれ。立ち話もなんだし近くの公園で少し話さないかい？」

「断る、帰ってくれ」

そう言っただけで彼は家の中へと帰っていった。こちらとしてもこここれ以上いるのは無意味なので、早々に帰らせてもらう

（だが会えただけでも良しとするか。しかし中学の頃のあおいと似てるな。決定的に違う所が何点かあるが、荒れてるのは同じだな）

あおいの父だと分かった途端に口調も目つきも変わった。明らかに敵意剥き出しだな

（あおいには一応伝えておくか。何かあってからじゃ遅いしな）

沙雪には黙っておくつもりだ。あいつにはもうそういう事に関わって欲しくないと思うから。それにあいつに万が一の事があつたら、あおいが彼を許せなくなるだろうからな

訪れる休み

> 清一 view <

(何だ…結局何しに来たんだ…)

相手の行動の意図が掴めなかった。神藤の名前を出したり、話そうとか…意味が分からない

(あいつ…全部見透かしてるみたいなきがして気に食わないな。くそ…我慢して少しは話聞いておけば良かったか。そうすれば…)

でてくるのは選ばなかった選択肢。後悔してるってか…俺が

(…まあいいか。今確実に言えるのは、のんびりしちゃられない事だな)

家を知られた…つまりは仕掛けようと思えば仕掛けられる状態。まあお互いそうなんだがな

> あおい view <

「池山君の家に行った…って何で？」

「いや何でって聞かれてもな…まあどんな子なのかな〜と。軽く話はしてきた」

母さんがお風呂に入っている間に父さんが話し出した。そう考えると、そこまで長くない話みたいだね

「へえ、どんな事話したの？」

「玄関口で挨拶したら帰ってくれって言われて、玄関閉められた」

「…本当に軽く話しただけみたいだね」

「まあ真面目に言うと、お前の事を相当憎んでるように感じたんだが…彼に何かしたのか？」

「いや、覚えてる限りはそんな風に思われる事はしてないけど？」

「ならいいんだが…父さんは首を突っ込まないから、自分で何とかしろよ？」

「勿論そのつもりだよ。父さん達まで巻き込んだら、それこそ親不孝でしょ？」

「ほう…言ってくれるじゃねえか。ま、頑張れよ。それじゃ先に寝るからな」

そう言うと父さんは立ち上がり、若干乱暴に頭を撫でて部屋へと向かっていった。心配してくれているのだろうか

数日後

> 京一 view <

「なんで校長つてあんなに長い話をするんだろうな。途中から関係ない話になってたしよ」

「へーちゃんと聞いてたんだ。私眠たくなったから寝ちゃった」

「ちびっ子もか？私も寝てたぞ。そっぴやテスト面倒だったけど、やっと学校も終わりなんだよな。もうしばらくは勉強しなくていいんだな」

「いや、夏休み用に色々出されたでしょ。ちゃんとやらないと、休み明けに痛い目見るわよ？」

「そつよ？今回は点数が取れたから補習は無かったけど、またテストはあるんだからちゃんとしないと。ね？」

「やらないなんて言っただけ？ただ休みを楽しみたいな。なんて思っただけ。それに勉強なら神藤が教えてくれるよな。ってあれ神藤は？」

「おお君ならうちの学校の男子に引張られていったわよ？また助っ人頼まれたんじゃない？」

「よく見てるな。流石彼女、まあずつとあおい見てたしな。用事はかがみの言っどおりだろうな。てかお前達は気付かなかったのかよ」
かがみの照れ隠しを聞きながら、引張られていった方を見るとあいつの姿は見えなくなっていた。まあしばらくしたら帰ってくるだろうかな

> あおい view <

終業式後の下校中にいきなり腕を掴まれ引っぱられる。敵意は感じ

られないのでしばらくそうしていると止まったが、皆の姿が見えないあたり、結構距離が開いてしまったようだ

「いきなりでスマン！え〜っと…お前神藤だよな？」

「ええ、そうですけど…確認は事前に行くべきではないでしょうか」

「む…確かに、それについては謝る。実は助っ人を頼みたいのだが…」

「そうだったんですか。でしたらあの場でそのように仰って頂ければ、このような事をなさらなくてもよろしかったのでは？」

「いや、剣道部が頼むのは初めてでな。どう頼めば良いものかわからず、ああなってしまったわけだ。引き受けてくれるか？」

「…分かりました、今日の予定は無かったはずですから。何時からですか？」

「そうだな…出来ればすぐがいいが、まあ気長に待ってるさ。体育館にいるから、部活自体は夕方までやってる。最後まで付き合わなくてもいいからさ」

「ありがとうございます。では準備をしてそちらに向いますので」

「礼を言うのはこっちだ、ありがとうな。それじゃ」

そう言うと彼は小走り気味に学校の方へ向かっていった。さて、こつちも皆と合流しないかね

「ただいま戻りました」

「お、帰ってきたか」

「結局何の用だったの？」

「剣道部からの助っ人依頼でした。ですので今日自分は……」

「ああそういう事。大丈夫よ、今日は皆で何かする予定はないから。好きなだけ付き合っただけよ？」

「分かりました、ありがとうございます。結果等はメールでお知らせしますので」

「大変そうだな、神藤。なあ悪いけど暇な時でいいからさ、今度また勉強教えてくれね？」

日下部さんに話を振られる。こなたさんやつかささんも、日下部さんに便乗するように似たような事を言い始める姿を見ると、大体の察しがついてしまう

「お気遣いありがとうございます。勉強のお話ですが、教えるのは構いませんけど写すのは駄目ですよ？」

「え、何で？」

「何でって…あんたらやる気あるのか？」

「勿論だよ！だから全部じゃなくていいから7割…いや半分写させて？」

「何か方向性間違えた根性だな…俺だって教えてもらったりはするだろうが、基本的には自力でやるようにしてる。だからって訳じゃないが勉強の時と同じ要領でお前も自力でやってみるよ、日下部とつかさもそうだ。分かったか？」

「む…京一君キツツいな…そこまで言うなら分かったよ。あおい君にあんまり頼ると迷惑だろうし」

「そうだよな…神藤に迷惑なんて掛けらんないからな。分かった、自力で頑張るよ」

「そうだね。自分で頑張らないと意味ないもん。私も教えてもらいながらも自分で頑張る」

「…とまあ、こんな感じに纏めちゃったがこれでよかったか？」

3人に注意した後、京一が自分に尋ねてくる。こなたさんをおつさり黙らせるなんて凄いな」

「まあ本人の為を思うとその方がいいんだよね。分からない部分があれば出来る限り力になりますよ？」

「しょうがないわね…でもちゃんと自力でやるうとしてるし、私も見てあげるわ」

「それでしたら私も。計画的に終わらせていく事で、自然と時間に余裕が来ていきますからね」

「皆ありがと。さっさと終わらせてパーっと遊ぼうね」

「だな。待ちに待った長い休みだし、色々と思い出作らねえとな」

「そうですね、私も皆さんと一緒に楽しみたいです」

ようやく訪れた夏休みに胸を躍らせながら歩いていると、自分の家に着く。とりあえず今日は皆解散という事だから、メールを送ってきたりはするだろう

「ただいま」

「あ、お兄ちゃんだ。お帰りなさい」

「茜？退院したの？」

「お帰りなさいあおい。茜はついさっき帰って来たのよ？」

「なら茜にはお帰りの方がいいかな？」

「うん、ただいま！」

玄関を開けながら帰って来た事を告げる。すると母さんではなく、退院した茜に返事をされる。話をしながら家に上がるなりしがみついてくる

「ね〜お兄ちゃん遊ぼうよ！」

「そうしたいけど、ちょっと夕方までやることがあるからさ。遊ぶならその後になるけどいい？」

「分かった、じゃあその時間になったら遊ぼうね?」

「やる事って宿題かしら?」

「ううん、ちょっと部の方に呼ばれてるからさ。部活動の手伝いしに行くってくる」

「そう、なら気を付けてね?」

茜と約束をし、準備を済ませて母さんに見送られながら再び学校に向かう。暑いね…まあ夏だし仕方ないかな

「ん…おお神藤!何だ、バスケ部の助っ人に来てくれたのか?」

「いえ、そういう訳では…今回はあちらに呼ばれていますので。また今度誘って下さい」

「あゝ剣道部の方が。そうか分かった、頑張れよ。次頼むとしたらインターハイ終わった後だろうからよ、その時は付き合ってくれよな?」

「分かりました。えっと…名前は…」

「おっと…そういやまだ名前言ってなかったな。篠崎だ、シノザキ篠崎綾。リョウあと敬語は無しな、ダチだろ?」

「分かりま…分かったよ。それにしてもいつの間にも友人になったの?」

「違うのか?こっちとしてはそのつもりだったんだがな」

バスケ部の自主練を一旦止めてこちらに話しかけてきた篠崎君。剣道部の方もこちらには気付いているようだが、既に体育館内にいる事もあつてか別段急かすようには言つてこなかった

「いや、自分としては友人でも構わないけど…というよりむしろなつてくれるなら嬉しいけど」

「なら今日からダチな。ま、俺の事は綾でいいからよ。こっちは呼び捨てで呼んでるわけだしな」

「分かったよ綾。じゃあ自分は剣道部の方に行つて来るから」

「おう頑張れよ！こっちも頑張るから！」

手を振られたので振り返つて振り返す。体育館を半分歩いて剣道部の方に近付く

「すみません、話していたら遅くなりました」

「素直だな、まあ遅れた訳じゃないから別にいいんだけどな。ほらこれ神藤の分、おおよそでサイズ選んだから違つたら言つてくれよ？違和感無かつたらそれで練習するから」

「少し待つていて下さい…お待たせしました、大丈夫みたいです」

以前使用した更衣室に渡された一式を持ち込み着替えて戻つて来る。動くのに支障はないようなので、サイズは合っているのだろう

「ならそれでいいか。素振りとかやったことはあるか？」

「素振りでしたら一応毎日やっていますので、その点に關しましては大丈夫かと」

「毎日つて…まさか神藤つて有段者だったりするの？」

「いえいえ。振っているのは刀ですし、段は所持していませんよ」
「刀振つてるつて凄いな…まあ感覚的にはかなり近いだろうけど。
じゃあまずは基本的な所から軽く教えるから、その後実際に試合してみようか」

そう言うと部員の中から1人選ばれ、自分の指導に就く。その彼から竹刀の説明から作法やルール等を教えられ、その後部員と同じように自分も練習した。因みにその部員に聞いた話ではあの彼は部長らしい

「止め！さて次は試合をしてもらおう。これから神藤に対して総当たり的な事をやってもらおう。勿論俺も含めて全員にだ」

「自分にですか？」

「そうだ、構えから練習まで見させてもらったが明らかに素人じゃないんでな。インターハイも近いし、モチベーションの向上も兼ねての試合をと思つてな」

「たしかに部員同士の試合にも限界はありますからね…分かりました。夕方まではここにいますつもりですから、それまでお付き合いさせていただきます」

「じゃあ早速やるか。まずは自信のあるやつから行ってみる、他の

やつもいい経験になるだろうから一度手合わせしてみるといいだろう」

部長が部員を見ながら優しげにそう言うと数人が立ち上がる。剣道部内では実力がある方らしく、他の部員はさほど心配してはいないようだ。そしてその中の1人と試合が始まる

「胴!」

「っと…」

間合いを詰めて繰り出されたそれを防いで互いに姿勢を整える。相手の力量は分かった、問題は傷付けない程度に一本を取れるかだ。下手に加減を間違えれば、刀のように斬れる…とまではいかないにしても骨に響くかもしれないからね

「小…」

「面!」

「一本!」

相手が小手を取ろうと構えて打ち出す動きに移る。そのタイミングに合わせてこちらから間合いを詰め、面を打ち込む。どうやら相手に怪我は無いようなので、加減具合はこのくらいでよさそうだ

>京一view<

「」

「ん…メール？あおいじゃないな」

部屋で紅茶を飲みながら音楽を聴いていると、この空気を壊すように別の場所から音楽が聴こえてくる。枕の上の携帯がメールを知らせているようだ、差出人は…なんだこなたか

『今暇かな？ちょっと遊ばない？』

「はあ…またこいつは…」

『なんだ？宿題教えてもらおうってか？』

『まあね〜でも写したりなんかしないから大丈夫だよ、京一君の注意はちゃんと肝に銘じたからさ』

「へえ…ちゃんと分かってくれたか」

『なら待ち合わせは俺の家でいいか？あおいは部活で無理みたいだから』

『おk、じゃあぼちぼち向かうよ〜PS・皆も来るからね』

『了解した』

紅茶を飲みながら返信する。さて…少し片付けておくかな

「ピンポン」

「ん…来たか？は〜い」

「やほゝ上がつても大丈夫かな？お邪魔しまゝす」

「今俺以外誰もいないから居間見つけて座ってる。皆も上がつてくれよ」

「ラジャー！」

そう言うと皆も上がり始める。こなたが早速走って行ったが…まああおいの家ほど広くはないから、迷ったりはしないだろう

「はい京ちゃん、これ焼いて来たんだ」

「へえクッキーか？サンキュ。ならあとで紅茶と一緒に出すとするか」

「ではお願いしますね、以前から一度飲んでみたいと思ってましたので」

「ああ君は部活なのよね。何時くらいに帰って来るか分かったりする？」

「その辺は家に電話すれば誰かしらが出るだろうさ。あいつが何も言わないで出掛けるって事はないだろうから、聞いてみれば分かると思うぞ？」

「やっぱりあおい先輩の事、よく分かってますね」

「まあ、これだけ付き合いが長いと自然にこうなるもんだ。あつちも似たようなもんなんだろうっけどな」

かがみは早速電話してるようだ。電話の邪魔にならない程度に話を

しながら居間まで連れて行く…まあ流石に俺の部屋じゃ全員でくつろぐのは無理だからな

「お…ちゃんというな」

「たまにはちゃんとしないとね。後でつかさのクッキーと京一君の紅茶が出るみたいだしさ」

「その為に来たわけじゃないでしょ、私達は勉強の為に…」

「とか言ってるかがみも残念そうだな、あおいがいなくてさ…まあぼちぼち勉強始めた方がいいってのは分かっているけどよ」

「…まあ夕方頃には家に戻って来るって妹さんが言ってたから、その頃来るんじゃない？」

「妹さん…ですか？電話に出たという事は退院したんですかね」

「かもな。でもそういう詳しい話はあおいに聞けばいいだろ？今やるのは勉強を兼ねた宿題を終わらせる事だ」

自分の分を居間に持ってきたが、悲しくなる量だなこれは…黒井先生にしろ桜庭先生にしろ、もう少し量を遠慮出来なかったのか？資源の無駄…とか言ったら確実に放課後呼び出されるんだろうな

夕方

「…そろそろ先輩が帰って来る頃じゃないですかね？」

「とりあえず一段落したし、あおい君の家に行ってみる？」

「そうね…じゃあ私が行くわ。皆で行っていなかったら意味ないし、妹さんの事も聞きたいから。いたらこっちに誘って、もう少し勉強したいわね」

「お越しになられるのでしたら、その際には今後の予定も立てておきたいですね」

休憩中にこつが時計を見て一言放つ。その言葉にかがみが反応して話しながら外へ出る準備を進める

>かがみview<

「じゃあちよつと行って来るわね」

「ああ、無理には引つ張つてくるなよ？」

「そんな事するわけないでしょ」

居間で皆と別れ玄関から家を出る。目的地は隣なのだが、あの大きな家の門に数歩で辿り着く訳もない。歩きながら内容を考えつつあお君にメールを打ち、送信してようやく辿り着いた。結構距離あるわね…

「あ、来た来た…」

すぐ返事が来ると思い、開いたままにしておいた携帯が震える…あお君からだ。内容を掻い摘むと今帰っている途中らしい

「じゃあここで待ってようかな」

メールの返事を送り、門に出来た影で帰りを待つ。若干翳ってきてはいるが、それでも日差しが強い事に変わりはない

「かがみ。ただいま帰りました、ここで待っていてくださっただんですね」

「うんお帰り。で…その人誰？」

「一応俺も柊と同じD組なんだがな。まあいや…篠崎綾だ、よろしく頼む」

「知ってるみたいだけど、一応自己紹介するわね。柊かがみよ、よろしく」

苦笑いしながら私と同じクラスだと言う彼が握手を求めてくる。それに応えると彼の表情が緩む。なんだかまた友人が増えそうだけど、類友は勘弁して欲しいわね…

夜と災難の朝

「よお、今帰って来たんだな。かがみからメールか何かで聞いてるだろうが、今皆揃ってうちで勉強してるんだが…」

「あお君今から大丈夫？出来ればあお君の家でいたいんだけど」

「今からですか？ふむ…今からすぐに、というのは無理ですが夜からなら大丈夫ですよ？勿論皆さんの都合がよければですが」

「んじゃ俺が戻るついでに聞いてくる。ところで気になってたんだが…誰だ？お前」

「お、俺は篠崎だ！」

「紹介するよ、バスケ部の篠崎綾。部活動が終わった後バスケ部も終わってたから一緒に帰る事にしたんだよ。前に知り合ったんだけど、友達になっただ」

「ほづ…」

こちらの様子を見に来た京一が、綾を見て声を掛ける。綾は京一の姿に怯えているようだ…まあ確かにまともに話した事のない人にとっては、それなりに恐いだろうけど

「じ、じゃ俺帰るからな！またな！」

「逃げるように帰って行ったわね…」

「なんだ、疲れてるなら紅茶の一杯でも淹れようかと思ったんだがな。さてと…俺は戻って皆に夜は大丈夫かどうか聞いてくるから、かがみも親に聞いてみてくれ」

「それなら後でするわ。あお君家にいるって言えば多分了解してくれると思うから」

「そうなのか？んじゃ戻って来るまでそこでイチャついてる」

「そんな事するか！！」

家の方に歩いて行った京一がそんな事を言い出す。かがみが突っ込むと、こちらを振り返ることなく片手を振ってあしらった

「気を使ってくれたんでしょかね？」

「さあね〜まあでも、からかわれたのは確実ね」

「そうですか。それにしても…」

「どうかした？」

「そんな事はしない、ですか。はっきり言われると多少傷付きますね〜」

「あ、いやここ道端だし、京一君とかこなたとかに見つかってからかわれたら面倒なだけで、別にしたくないとかそういう訳じゃなくて…」

自分がそう言つと、かがみが慌てて弁明し始める。まさかここまで慌てふためくとは思ひもしなかった

「ふふ…必死になって可愛らしいですね」

「な?!まさかあお君嘔吐いたんじゃ…」

「いえいえ、傷付いたのは事実ですよ?少しですけど。ですがかかみの可愛らしい姿を見る事が出来たので、寧ろプラスになりましたね」

「ちょ、ちよつと電話してくる!」

「分かりました、行ってらっしゃい」

真つ赤になって慌てて電話を掛けに離れるかがみ。結論から言つてしまえば皆は夜まで居る事は無理で、勉強はまた日を改めてする事になった。当然ながら自分は予定通り茜に振り回され、いつもより早めに部屋に戻りベッドに倒れ込む。すると疲れからかすぐに意識が遠退いた

>睦月view<

「…という事で、帰るのが遅れるよ」

「あらそうなの?分かったわ。粗方予想出来るけど…無理はやめてね?」

「分かってるよ、あと心配してくれて有難う。それじゃ」

沙雪に電話で事情を話して通話を終える。事情というのは残業でも飲みに行く訳でもない。ちょっとした集まりだ

「お待ちしておりました。どうぞお入りになられて下さい…こちらです」

「ああ、済まないね。お邪魔させていただくよ」

訪ねた屋敷の中を案内され、大広間に辿り着く。そこには既に相当数の人間が座っていた

「そちらから呼び出した割には少し遅刻のようですが？」

「まあそちらさんみたく、ここをそんなに利用しないもんでね…つて柚木と岩切がない気がするんだが」

「あのお二人でしたら昨日柚木宅にて晩酌を交わした後、居間で寝ていた結果風邪を拗らせたらしく…」

「あ〜とりあえず分かった」

話し掛けて来た相手を見つつ、敷かれていた座布団に座りながら話す。こちらが座り終えたのを見計らって他の皆からも話かけられる

「…それで？我々が呼ばれたのにはそれ相応の理由があるのでしような。でなければ皆は集めますまい」

「まあね…呼び出したのは他でもない、次期頭首の事だ。私は息子であるあおいに継がせようと考えている」

あおいの名を出した途端にざわめきだす。まあ気持ちも分からなくはない

「継がせる…確かまだ17でしょうに。成人もしていないというのにですか？早すぎると思うのは私だけでは無いと思いますが」

「親馬鹿が高じたのか？幾ら息子だからといって、特別扱いのし過ぎでは…」

「勘違いしないでいただきたい。これは親としてではなく、現頭首としての見解だ。それに今すぐに継がせるわけではない、あくまでもあおいは次期頭首の候補として扱う」

「何故今なんです？確かにあなた方宗家の息子と考えるなら話は分かりますが…それだけが理由であれば、明らかにタイミングを間違っていますよ」

「だからこそもう一つ皆に伝えなければならぬ…あおいが鬼を継いだ。らしい」

途端にしん、と静まり返る。張り詰めた空気が流れる中、1人が口を開いた

「らしい、ですか。まだ確定事項ではないんですね」

「だがそれでも可能性が高いのに変わりはないだろうな」

「確かに鬼を継ぐ人間は、神藤家初代の血を濃く継いでいる事になるわけですけど。ですがまだ多感であろうこの時期に、その身に危険が迫れば…彼が過去に起こした事のように、万が一という事も考

えられますよ？」

「だからこのタイミングで告げた、それにあれはあつちのせいだろ。京一君：あおいの友人なんだが、彼を連れ去って殴ったりしたらしいからな」

「友人：まさかその子を助ける為にあんな事を？」

「そういうことだ。たしかにあおいがやった、だが自分の為にじゃない。あいつに危険が迫ってもあいつは鬼にならないさ：周りの人に危害が加わらない限りはな。あんたらもそのあたり気を付けることだ。それじゃもう帰るんで、お開きにしますか」

話しながら立ち上がり、軽く手を振りながら大広間を後にする。すると後ろから慌ただしい足音が聞こえてきた

「睦月さん、この事は彼にちゃんと話した上で来ているんですか？」

「彼ってあおいの事か？いや、まだ話していないが」

「まったく：本人に話さないでどうするんですか」

溜め息を吐きながら横に並んで来る。あおいの事を気に掛けてくれるのは有り難い事だ

「はは、帰ってお互い暇だったら話すさ」

「睦月さんの予定は知りませんが、彼は今夏休みでしょう？時間ならあるんじゃないですか？」

「はは、そうだな。ああそれとだな…」

話しながら車まで歩き、キーを差して向き直る。

「なんですか？」

「前にも言ったが、出来るだけ宗家とかって言うのは止めてくれるか？こつちとしてはあんたらの事、家族同然に思ってるんだからさ」

「あなたがいくらそのように仰つても、私達は分家の人間ですから。宗家の方と対等に話すというのは難しい事なのですよ…気持ちはどうでも嬉しいですけどね」

微笑みながらそう言うものの、その言葉からは寂しさを感じた。立場なんて気にしないんだがな…

「まあ近いうちにまた来させてもらつよ、墓参りも兼ねてな」

「銀司さんのですか。分かりました、それではまたその機会にお会いしましょう」

軽く別れを告げて帰路に着く。結構遅くなつたが、それ相応の価値はあつただろう

> あおい view <

「……兄…あお兄…痛いよ、怖いよ…助けて…」

「桜花？雪花も一緒か、今助ける…手を！」

雪花の傍らで頭から血を流し、目に涙を湛えながら自分に助けを求めてくる桜花。限界まで手を伸ばすが、伸ばした先にあったのは桜花の手ではなく自分の部屋の天井だった

「ああ…夢、か…」

伸ばした手で空を掴み、溜め息混じりに手をベッドに落とす

「結局助けられないのか…」

自分でも驚くほど冷静に言葉が出る。これが途中で終わった夢に対してではなく、自分に対しての言葉だと理解出来るまでに頭は覚めていた

「今なら助けられるか…？」

背も伸びた。手はあまり大きくなってはいないけど、腕は伸びた。筋力も上がっている。知識も当時よりは…

「馬鹿みたい…いや、馬鹿だな」

2人は今苦しんでいるわけではない、もう過ぎてしまった事だ。今さら考えたところで帰ってくるわけでもない。そんな事は分かっている。だが頭で分かっただけではいても涙が止まらない

「あ…時間だ」

鳴り始めた目覚ましを止めて、いつものように走りに行く。結局顔を洗いに行くまで目の前は滲んだままだった。外に出て、夏の朝の空気を肌で感じながら先程までの事を頭の端に留めると、ようやく少しは周りを見る余裕が出来た

「あれ、……ど……ど……」

そんな事をしながら走り続けた結果、いつものコースから外れて、結構遠くまで来てしまったようだ

「ふむ……今ここだから、こっちに行けばいいのか」

携帯を開いてナビを出し、現在地を確認する。幸いに戻れないような距離でも、複雑な道でもないようだ

数時間後

>京一view<

「……へきしっ！うお！？寒！！」

「やほ～起きた？」

予想外の寒さに眠りを妨げられて目が覚める。すると何故か声が聴こえたので上半身を起こし、主を探そうとしたが……目の前にいた。エアコンと扇風機のリモコンを持って笑みを浮かべている

「どつりで寒いわけだ。設定変えただろ、扇風機が強になってるし……」

「いや～手っ取り早く起こすにはこの時季はこれが一番かなと」

「はあ……とりあえずリモコンは返して貰うぞ。寒い寒すぎる」

「京一君で意外と寒さに弱いんだね」

軽く溜め息を吐きながらこなたからリモコンを奪い取り、電源を切る。ついでコンセントも抜く

「で？何やってんだ？人の部屋：つつか家で、こんな朝っぱらから

「起こしに来たのだよ！感謝したまへ」

時計を見なくても朝だと言い切れる自信はあった。部屋にはようやく日が入り始めたようだし、何よりそこまで遅くは寝ない。むしろ、こんな時間にこいつが行動していることが異常…

「…何？」

「なんでもねえよ。ってかどうやって入って来たんだ？」

「壁を伝って窓から…いや冗談だよ？本当は玄関からちゃんと入って来たから」

「当たり前だろ。しかし来たんなら、母さんあたりが起こしに来てくれそうなものなんだがな」

「あゝそれなら私が起こして来るって言ったから多分そのせいかな？」

「ああそついう事が…んで？何の用だ？」

「え？んゝ…アニ〇イトでも行く？」

何も考えていなかったのがよく分かる情けない声を上げた。マジで

何しに来たんだ？

「なら準備するから部屋から出てくれ」

「手伝ってあげよっか？」

「全力で勘弁してくれ」

「はいはい。じゃあ下で待ってるよ」

こなたが階段を下りたのを確認して服を着替え、顔を洗ったりして準備する。勉強は…まあ帰ってからやればいいかな。せっかく来てくれたんだし、とりあえず今はコイツに付き合っただけやるか

繰り出す者、訪れる者

「そっぴやアニメイトだったっけか？行くところ。何で俺なんだ？あおいの方がポイント持つてるはずだが…」

駅にあった自販機で買ったミルクティーを振って席に座るついでに隣で同じようにして買ったジュースを飲むあなたに尋ねる。ちなみに今回は本店と呼ばれる所に行くらしい

「たまにはあおい君抜きで行動したいな〜ってね。ほら茜ちゃんも帰って来たわけだし、それに色々気を使わせちゃうからさ」

「なるほどな。ま、あいつはそういう奴だからな。何度注意したってそこは変わらないし」

意外にまともな答えで少し驚く。いつもの調子ならなんとなく誘ってみた、とか暇だろうし、とかなんかで返されそんな質問なんだが…こいつなりに気を使ってるんだな

「着いた…ってまだ開いてねえじゃねえかよ。コンビニでも行って暇潰すか？」

「それなら大丈夫だよ。開店まであと2、3分だし」

ほら、と携帯の待ち受けを見せてくる。なるほど、確かに店に書かれている開店時間の少し前だ。心なしか人も増えて来た気がする

「ならここで待つとするか。で、今回何か欲しい物でもあるのか？だとするとよっぽど手に入れたいんだな。開店前に来るくらいだし」

「ん〜まあそんな感じかな？」

そんなたわいもない会話を店の前でしていると、シャッターが上がっていく。どうやら開店時間になったらしく、人の流れに合わせて中に入る

「いらっしやいませ！…む？その姿、もしかや少女Aか！？」

「ん？誰だあんた」

「俺か？俺は兄沢命斗！アニメ店長だ！！」

「アニメ店長はその名前の通り、このお店の店長なんだよ」

「その通り！この店で分からない事があつたならば、何でも聞いてくれ！！」

「へえ…いつも行くところにはこういう人いないよな」

ツッコミ所が多い面倒な人が、シャッターの向こうに腕組みをして立っていた。一言一言が近所迷惑級にうるさいな…

「ところで君、君はこの店に来たことがあるのかな？」

「俺？まあ、確かにこの店は初めてだな。この間もあおいや皆とア二〇イトには行ったし、完全に初めてつてわけじゃないが」

「そうか。ならばわざわざ商品を勧めなくても問題ないようだな…いや、初めてといった風には見えないのだが、やけに見回していた

からつい気になってしまったな」

「ふうん…暑苦しいだけじゃなくてちゃんと客の事見てんだな」

「当然だ！アニメ店長たるもの、お客様に合った商品を勧められるように常に目を配り日々鍛錬を…いらっしやいませええ！」

俺の言葉にニヤリと笑い、熱心に語り始めたが、俺達の後に入ってきた客が初めてだったらしく、熱心に商品を勧めている。こういう商売柄だからなのか、そういう所はしっかりしているようだ。まあ店長だしな

「ほら京一君、こっちこっち」

「何だ？どうした」

「君にコレを勧めたくてね、はい」

店長を観察していると、こなたに手招きされ一冊の本を渡される。どこかで聞いた事のある響きではあるんだが…

「FaOe…ああ、前にコスプレしたやつだな」

「そそ。コスプレするなら、ちゃんと作品知つとかないと駄目だよ？」

「いや、別に好きでするわけじゃないんだが…まあぼちぼち読んでみる、サンキュ…っていねえし」

表紙から視線を外して礼を言う。しかし既にこなたは視界におらず、

振り返ると別のコーナーに吸い込まれるように消えていった。とりあえず突っ立ってるのもなんだから、追いかけて軽く礼くらい言っかな

「ああいたいた…これ、ありがたく資料に使わせてもらっからな」

「そうしてくれたまへ〜まあ本当はPC版を勧めたかったんだけど、パソコン持ってないみたいだったし。それに長いからね〜」

「長い、ねえ…」

こいつがゲーマーだという事はよく知っている。おそらくこういう類いのゲームを相当数やってきたのだろう。そのこいつが長いと言っうという事は、俺にとっては挫折しかねない長さなんだろうな…

「それで相談なんだけどさ〜それ買う時のポイントを…」

「わかったわかった、好きにしる。どうせ使わないしな」

「ありがと〜これでまた一歩、目標の物に近付いたよ」

「そうか、そりゃ良かったな」

こいつが未だに手の届かない目標の物がどんな物か気にはなったが…止めておこう。ロクな物じゃない気がしてきた

「お買い上げ、誠にありがとございまあす！」

「夏場にこのテンション…流石に付き合いきれんな」

「基本的には良い人なんだよ、まあ暑苦しいのは激しく同意見だけどね。それより次行こうよ次！」

腕を引つ張られながら店を後にする。他に目的地があるみたいなので、とりあえず手を離してもらって並んで歩く。あんな暑苦しい店長が次もいる…わけないよな

>あおいview<

まだ朝だからなのか、誰からも一切の連絡が来ない。まあ皆それぞれに用事があるのだろうし、こういう日があってもおかしくはないのだけれど。こういう時に課題を進めておかないとね

「あおい、ちよつといいか？」

「ん…大丈夫だけど、どうかした？」

「いや、お前の予定が無いなら皆で爺さんの墓参りに行こうかと思つてな」

ノックの音の後に父さんの声がドア越しに聞こえる。返事をするとならドアが開かれ、部屋に入って来た父さんから用件を告げられた

「そうなんだ。今日は特に予定とかは無いから自分は行けるよ？」

「そうか、じゃあ出掛けられるように準備しておいてくれ。こつちも準備ついでに母さんと茜に知らせてくる」

自分が返事をする前に部屋から出て行かれたが、あまり気にしない事にした。準備と言われても着替えは既に済んでいるので、後は軽

く机の上を綺麗にして完了だ。課題は帰ってきてからやれば特に問題ないだろう

「準備終わったけど、線香とかはどうするの？」

「お、準備終わったのか。線香はライターと一緒に持って行く…まああっちにもありそうなんだが一応な。もうやること無いなら戸締まりを頼む」

「そう言うと思って先に閉めてきた。あとは玄関だけだよ」

「そうか、あとは…特に無いな。なら先に車の所に行ってくれ」

「じゃあ私もお兄ちゃんと一緒に行こうかな」

「準備が出来てるなら、先に一緒に行ってもいいわよ？あおい、はいこれ」

父さんが話し終わると、茜が寄って来た。母さんの言葉に笑顔で返しているという事は、もう準備は出来ているのだろう。そんな茜を見ながら、母さんが自分の手に優しく車の鍵を置いた。その鍵を握って茜と一緒に車庫に向かう

「どの車で行くのかな？」

「この鍵からして母さんのじゃないかな？それに父さんののは大体2人乗りだし」

「私、出来れば前の席の方がいいな」

「そう？ならいいよ、前座つても」

車庫に行きシャッターを開ける。中は結構広く、父さんと母さんそれぞれの車が数台並んでいる。奥にはまだあるらしい

「これかな？あ…開いた」

「車ってこんなに必要なのかな？」

「さあどうだろうね、まあ趣味だと思っけど」

鍵を開けると茜が助手席を陣取る。そんな姿に笑みを零しながら後部座席に座ると隣にテッサが見えた。前に教えてもらったがイタリアかどこかの車らしい…ああ、だから左ハンドルなのか

「イタ車を痛車になんて、ダジャレなのかな…」

「お兄ちゃんどうかしたの？」

「いや何でもないよ。あ…来たよ」

「ごめんごめん、遅くなったわね。行こうかしら」

鍵を渡すと少ししてエンジンがかかる。距離的に結構なものだが、車内ではトランプ等は出来ない。というよりしない。茜は酔ってしまっし、父さんは無駄に強い。だから外の景色を見る、眠る、携帯電話をいじる等の行動に自然と走ってしまう

「私、眠くなってきたかった…お休み」

「あらあら、じゃああおい、着いたら起こしてあげてね？」

「別にいいけど…」

よほど眠かったのだろう。茜は後ろに自分がいる事を気にもせず、背もたれを倒し丸くなって眠ってしまった

数時間後

「茜、ほら着いたよ？」

「んう…あ、おはよ〜お兄ちゃん」

「はいおはよう。それより早く降りよ？」

自分の呼びかけに目を覚ました茜が車から降りる。それを確認してから自分も降りてドアを閉める。着いた場所は小さな山の中腹の少し開けた場所にあるらしく、車の近くにあつた石段からは結構綺麗な景色が見られた

「お久しぶり。お元気そうね〜相変わらずで安心したわ」

「よお、昨日ぶりだな。言った通り爺さんの墓参りに来たぞ？」

「昨日今度お越しになられるとは伺いましたが、本当に早いですね…どうぞお入り下さい」

先に挨拶に向かっていた父さんと母さんがこの人と話しているのが見えた。近付くにつこりと微笑んでお辞儀をされて、家の中へ入るように促された

「お邪魔します。ここ、なんとなくだけでも自分達の家に似てる感じがする。雰囲気がそうなのかな」

「こつちの家もあつちの家と同じくらい古かったわよね。たしか同じ時期に同じ人が建てたんだっただかしら？」

「ええ、そのように伺っています。流石に詳しいですね」

「ふふ、ありがと。でも自分の家の事だもの、それくらいは知っているわよ」

ここに来る途中に車の中で聞いたのだが、この家は元々母さんと、その父である銀司という自分からしてみれば祖父に当たる人物が暮らしていたらしい。言うなれば母さんの実家だ

「さて、2人ほどまだ私のことをご存知無い方がいらつしやるようなので、自己紹介をさせていただきますでしょうか。槻城つきしろ優希ゆうき、分家の者です。今はこちらで生活させていただいております」

「初めまして、息子のあおいです。よろしく願います」

「あなたが…お噂は睦月さんの方から伺っていますよ。よろしく願います」

あちらが自己紹介を終えた後、こちらも軽く挨拶をする。それが終わると握手を求められたので応えると、その顔に笑みを浮かべてはいたが一瞬眉が動いた気がした

「私、茜って言います。お兄ちゃんとは兄妹で…あの、えっと…よ、よろしく願います!」

「それほど緊張なさらなくてもよろしいですよ。よろしく願いますね」

「さて、それじゃ行くとするか。ああい、茜、とりあえず玄関に戻るぞ。その後はちゃんとして来いよ」

「おや、お二人は初めてなのですか？」

「まあな…ってかお前と初対面なのに、初めてじゃなかったらおかしいだろ」

「ああ、それもそうですね」

茜との握手を終えたのを確認して父さんが呼び掛けると、優希さんは軽く話をして玄関から出て行った。それに着いてしばらく行くと小さな墓地に着いた（余談になるが、茜が階段は疲れるとの事で自分が背負って降りる事になった）

「ここなの？」

「そうよ…あら？花が供えてあるわね」

「ええ、今朝訪れたばかりですからね。睦月さんが先に連絡していただければ、1日に何度も訪れなくてもよかったですけれどね」

「ああ、連絡する気にならなかつたんだ。すまん。ところで結構汚れてるが…綺麗にしないのか？」

「独断でそのような事はしませんよ、そちらの意思を出来る限り尊

重したいので。連絡が無い以上、こちらから連絡しても出て下さるとは限りませんし」

「そうだったのか。んじゃ掃除するのでしょうか」

優希さんの溜め息混じりの言葉に父さんは苦笑しながらも、掃除をするために一旦手を合わせた後に、墓前にあるものを退けていった。花以外は殆どがお酒なので、お酒が好きだったのだろう

「じゃあこの間に水汲みに行つて来るね。行こう茜」

「ええ、お願いね」

掃除には水が必要なので、自分達はとりあえずバケツに水を汲むことにした。たしか入り口の水道の近くにあったね

>睦月view<

「水ねえ…どうせならホースでバーツとやりたいんだがなあ」

「そう仰られると、どこか手抜きのように聞こえますね…」

「それにそんな事したら、お父さんに怒られちゃうわよ？」

「その点は大丈夫だ。叱られるのは馴れたからな」

事ある毎に口喧嘩してばかりだったが、今は墓を訪れる度に寂しさを感じる。いつまでも生きているものだと、どこかでそう思っていたのかもしれない

「水汲んで来たよ〜」

「ご苦労さん、ありがとな。ほら爺さん、涼しいか？今年も夏が来たんだぞ…」

タワシを片手に墓石に近付き、労るように水を掛けつつ磨いていく。傍から見ても綺麗になったのは、正午を告げるサイレンが鳴った少し後だった

> あおい view <

「…よし、これだけでいぶ綺麗になったね」

「見違えたわね〜これだけやれば、もういいんじゃない？」

「そうだな、まあこれではらくは綺麗だろうさ。はい線香」

退けた物を綺麗にして元の場所に戻し、父さんが線香を配る。まずは父さんが添え、その後が続いて自分達も線香を添えて目を閉じ、手を合わせる

「…さて、そんじゃそろそろ戻るか」

「お帰りになられるのですか？こちらとしては、もう少しゆっくりなされていっても構わないのですが…」

「今日は墓参りに来ただけだからな。まあまた近いうちに来るからさ」

「…そのような事を仰って、明日来られないで下さいよ？」

「わ、わかってるって。それじゃあな」

話しながら車を止めていた場所まで戻り、見送られて帰路に着く。
お祖父ちゃんか…今度母さん達にどんな人だったのか聞いてみよう
かな

>京一view<

「なあ、一つ聞いていいか？」

「ん〜？どうかした？」

「何で俺が奢らなきゃならないんだ？」

俺達はアニメイトから出てからしばらくは色々な店を周り、今はフ
アミレスにいる。そこで俺は何故か奢る事になってしまったわけだ

「だって予想以上に出費がかさんじゃってさ〜それにこういうのは
男の人が払った方がポイント高いよ？」

「そんなポイントよりも、もう少し実用的なポイントが欲しいもん
だ…ったく、金が無いなら無いって入った時に言えよな」

俺が呆れながらそう言うと、こなたはばつの悪そうな顔をしながら
謝ってくる。まあそこまで金は使っていないから、十分足りるだけの
金額は残っているので問題はない

「…あのさ」

「ん、どうした？」

メニューに目を通していると、こなたに話し掛けられたので視線を上げる。聴こえた声は先ほどまでとは違い、とても小さな声だった

「もし、京一君を好きだって言う人がいたら…どうする？」

「…ああ？」

「いや、勿論仮にいたらの話だよ？そんな人いるかどうかも分からないし」

予想外…というよりは変な質問をされた。何を思っってこんな事を言出したのかは分からないが、答えないと気まずくなるだろうな

「そうだな…もしそんな事が起きたら、多分断るだろうな」

「何か理由とかあるの？」

「いやさ、付き合えば大なり小なり、何らかの形で相手を束縛することになるだろ？そういう風に相手を自分の人生に巻き込むのって好きじゃないんだ。それに誰かを特別扱いしたくないしさ」

まだコップに少しだけ残っていた水を飲み干して、珍しく使った頭と喉を冷やす。こなたは見たところ、俺の言葉を頭の中で整理しているようだったが…とりあえず、食事はもう少し後になりそうだな

それぞれの立場

> あおい view <

「そういえば、まだあおいには言ってなかったよな」

「ん、何？またコスプレ用の服でも買ってきたの？」

携帯をいじっていると、運転中の父さんに話しかけられる。いきなりだったため、今思い出したのか、それともタイミングを考えての事なのだろう。そんな事を考えつつ適当に不正解であろう予想を口にする

「実は昨日、次期頭首の件で分家の方に話をしてきたんだ。その際、俺はお前が相応しいと考えているという旨を伝えてきた」

「次期、頭首：自分が？」

「まだ候補としての扱いになるが、これからはその事も頭に入れておくといい。必要な事は俺達が教えていくつもりだ…だが」

予想は当然のように外れたが、まさかこの話を今されるとは思ってもいなかった。父さんは淡々と話を続けていたが、途中で言葉に詰まったようだった。母さんが声を掛けようとしていたが、父さんはそれを手で制した

「だが、それは頭首としての判断だ。お前が嫌だと言うなら…無理を押し付けられると感じたなら、継がなくてもいい。これが俺の、父親としての考えだ」

「父さん…わかったよ、少し考える時間を貰っちゃ駄目かな。自分もちゃんと考えて決めたいんだ」

「そうか…返事は気長に待ってるからな。焦らずに自分なりの答えを探すといいさ。あと服だが、帰ってから渡すよ」

「あゝ結局買ってたんだね…」

いつもの調子に戻った父さんに少し安心した。バックミラーから父さんの顔を覗いてみると嬉しそうに、けどどこか恥ずかしそうに笑っていた

> やまとview <

「暇ね…」

「いやいや、充実してるじゃん！これじゃ何から買っていいのかわかんない、これならこなた先輩とおおい先輩呼んどけばよかつたかな」

私は今、こうと一緒に秋葉原に来ている。サークル活動の前後に寄ったりするので慣れた方だが、相変わらず何がそこまでテンションを上げるのか分からない。そもそも私も来る必要性はあったのだろうか

「さっきからこの手のお店何軒目？どこも同じに見えるんだけど…」

「分かってないな〜特典とか、品揃えとかが違うんだよ。そうだ、やまともこういうのに興味持ってみる気ない？」

「…ないわね。私をそっち方向に染めようとしなくて欲しいんだけど」

こうは会話に織り交せて、さり気なく私を引きずり込もうとする。それを軽くあしらっても、いつも通りと言わんばかりに笑いかけてくる。こんな時ばかりは凄いなと思わされる

「じゃあ機嫌を損ねたお詫びに、好きな所巡…おお！ひよりくん！」

「あ、こうちゃん先輩！お久しぶりっス！」

「ええ、と…田村さんだったかしら？」

「あ、覚えてた？前にコミケで会ってるよね。顔合わせ程度だったけど」

こうが見かけたのは田村さんという…まあ簡単に言ってしまうと一緒のような趣味を持つ友人だ。コミケ…そっいえば夏にもやってたっけ

「改めて、田村ひよりと言います。よろしく願いますっス」

「永森やまとよ、こちらこそよろしく。ところで、まさか今年もあるの？」

「勿論っスよ！今回の分は作業終わったので、次を只今鋭意製作中…なんすけど、妄想が枯れ果てちゃいまして」

はは、と小さく笑いながら頭の後ろを掻いている。提供者なりの苦労というものがあるのだろう。私も乗り気ではないが一応そちら側

なのだが

「何て声掛けたらいいか分からないけど、頑張ってね。こう、かがみ先輩から勉強会の誘いのメールが来ていたから、私はそっちに行くわ。こうはどうする？」

「私にも来てるね。なら私も行こうかな、可愛い後輩に刺激をあげるためにも」

田村さんの会話に返事をしつつ、震えた携帯を取り出して、送られてきたメールを確認する。こうに意見を求めると、田村さんも連れて向かおうとのことだが…怪しい

>かがみview<

「つかさ、そろそろ起きなよ。ほら」

「んう、ふああ…おはよ〜お姉ちゃん。今何時？」

「はいおはよう。もうお昼よ」

かれこれ朝方から定期的に起こしに来ていたのだが、お昼になってようやく起きた。勉強をするから早めに起こして欲しい、と言って昨日誰よりも早く寝たのは今伸びをしているつかさの方だ

「おお君がいたらすぐに起こしてくれ…っていやいや」

「お姉ちゃん何か言った？」

「ううん、何でもない。それより早く降りなさいよ？もうお昼ご飯

の準備始めちゃってるから」

つかさに伝えることを伝えて廊下を歩く。いつもあお君に色々頼ってるから、少しは自重しないとね。とりあえずつかさは起きたし、勉強はお昼食べてからかしら

「まだ京一君とこなたからは来てないみたいね…」

つかさを起こす少し前にメールを送っておいたところ、2人を除いた皆からはメールが届いた。あお君は用事があつたらしく、途中参加になるそうだ。みゆき達は来れるということなので、お昼過ぎ頃に家に来てもらうことにした（日下部は峰岸が連れて来るようだ）。こつさん達も来れるらしいが、友人を1人連れてくるとのことだ

「こつさんの友人も気になるけど、やっぱりあお君の用事よね。女の子絡みじゃないとは思うけど…」

階段の途中で独り言を言っていると、つかさの部屋のドアが閉まる音がした。起こした手前遅れるのは気まずいので、私も携帯を閉じて残りの階段を降りていく

「かがみ、つかさは起こしてくれた？」

「うん、そろそろ降りてくるはずよ」

「じゃあちよつと手伝ってくれない？つかさは起きたばかりだし、あおい君のためにも腕磨かないといけないでしょ？」

「そついう事なら、手伝おうかな…でもちゃんと指示してね？」

ああ君が来たら用事の事、それとなく聞いてみようかな

>京一view<

「私はコレのセットを一つ下さい。京一君はどうするの?」

「ん…じゃあ俺はこっちのを下さい」

「かしこまりました。少々お待ち下さいませ」

丁寧な口調とは裏腹に、慌ただしく去っていく店員。流石に昼間のこの時間は客も多く、見渡せる範囲だけでも8割弱の席は既に客で埋まっている

「で、さっきの話に戻るけど…つまり君は誰とも付き合っ気はないってこと?」

「まあ、簡単に言つとそういうことだ。お前には悪いと思うけどな」

「何のことかな?」

「言つとくが、俺はああいほど鈍いつもりはないからな。お前の言いたいことは大体分かるさ」

水を取りに立ち上がるついでに一言言つてやる。ああいならこの状況で何て声を掛けてやるんだろうか

「まあ君の予想通りかな、私は君が好きだよ?」

「やけにあっさりしてるな。もう少し遠まわしにくるかと思ったん

だが」

「ここまで言われて、今更そんな事しても仕方ないじゃん。それにどうせ付き合ってくれないんでしょ？君」

「まあ確かにそうだが…」

帰ってくるなりいつもの顔で告白紛いの事をされる。現状では付き合う事に対して、俺が首を縦に振るとは考えていないようだ

「ねえ、今日は食べたらもう帰らない？気分的に無理矢理連れ回すってのはなんか違うかなって…」

「らしくねえ顔してんじゃねえよ。俺がいつ嫌だって言った？確かに面倒くせえし、金も掛かる。けどそれよりも俺は楽しいんだ。だから俺はまだ帰らない、連れ回されるのだって大歓迎だ」

こなたが顔を少し俯かせ、話を切り出す。そんな話に被せるようにして、俺が溜め息混じりに喋り始める。こなたは初めこそキョトンとした顔をしていたが、徐々に目を潤ませていった

「俺なんかを好きになってくれたお礼だ。今日はお前の気が済むまで一緒にいてやるし、お前が望む俺でいる。だから楽しく行こうぜ？」

両親以外の誰かに愛されるなんて、思ってもいなかった。だからせめて礼をさせて欲しい。大切な想いを俺に抱いてくれた、こいつに

「ほんとさ、京一君で馬鹿だよ。そんな風に優しくされたら、余計諦めつかなくなるじゃん…」

「諦めるかどうかはお前が自分で決めるもんだ。諦めたくないなら諦めなきゃいい」

「簡単に言ってくれるね。でもそうだね、しばらくは好きなままにいるよ。いつか振り向いてくれるかもしれないし」

「フオー…になったのかは分からないが、言葉を掛けてやると意志をようだ。不敵に笑みを浮かべるこいつを見ると、やっぱり笑ってる方が似合うなと感じてしまう」

「さて、メニューが来るまで待機か。お、かがみからメール来てるな。ええと…勉強会？どうするよ」

「ん〜じゃあ1日付き合うのはまた今度にして、今日は勉強会行くよ。あ、返事は京一君が送ってね？私、携帯家に置いてきたし」

「置いてきたって…お前は何のために携帯を持ってんだ」

「失礼な。今日はたまたま忘れてだけで、最近はやんと持つようにしてるんだよ」

「お待ちせしました。ご注文の品は以上でお揃いでしょうか？ごゆっくりどうぞ」

言い合いをしていると、店員が注文していたものを持ってくる。今はテーブル越したが、いつかは隣に来てしまうのだろうか、こいつは

> あおい view <

「やっと着いた…」

自宅に帰り着いてから慌ただしく準備をして、かがみの家に向かい、着き次第優先してインターホンを押し込んだ。出てくれたみきさんに話をすると、中に入ったみきさんと入れ替わるようにかがみが出て来た

「…遅い！」

見るからにご立腹の様子だ。自分としては全速力で向かって来たのだが、それでも機嫌を損ねるには十分時間が経ってしまったようだ。どうやって直せば…

「ええと…何と言いますか、自分としては急いだつもりだったんです。たしかに遅れてしまった身として、言い訳がましいでしょうが」

「もう3時よ!? 分かっているの? 正直、来てくれないかと思ったわ。用事だつて詳しく教えてくれなかったし。もしかしたら、本当は女の子と遊んでるんじゃないかと思つたら、そんな事しないつて信じてても考えるの止まらなくなって…私、恐かつたんだからあ…」

身振り手振りを交えつつ説明するが、かがみの意見ももつともだ。しかし勢いのある声は徐々に弱々しくなり、終いには自分の胸元に顔をうずめて涙声になっていた

「大丈夫ですよ、自分は何処へも行きませんから。ちゃんと側にいますから」

「……取り乱しちゃつてごめんね。ほら、皆まだ中で待ってるから行きましょ?」

出来る限り優しく包み込んで、語りかけるようにして話す。しばらくするとかがみは顔を上げ、目尻に残っていた涙を指で拭い笑いかけてくる。正直申し訳ない気持ちでいっぱいになったが、今謝るのは止めておこうと思う

「すみません皆さん、だいぶ遅れました…おや、初めてお目にかかる方がいらっしゃっているようですね」

「私の友達なんです。ほらひよりん、この人があおい先輩だよ」

「この人が…あ、初めまして、田村ひよりっていいいます。今日はこうちゃん先輩に誘われて来させてもらいました。よろしくお願います」

こうさんの言葉に自分の姿を確認するように足下から見ていく。目が合うと自己紹介の後、深々と頭を下げられた。こちらと同じように頭を下げたが、本人の態度や雰囲気から悪い人ではない事は感じ取れる

「こちらこそよろしくお願しますね、田村さん。こうさんの言い方ですと、自分の事はある程度聞いているようですね」

「はい！非常に参考になる方だと伺いました。実際にお会いしてみたら想像通り、いやむしろ想像を越えていますよ」

「お褒めいただきありがとうございます。ところで気になったのですが、参考というのはどのような事に対してでしょうか？」

「実は創作活動をしてるんですが、どうも行き詰まっちゃいまして。

偶然会ったこうちゃん先輩にその話をしたんです」

「それで先輩に白羽の矢が立ったわけですよ。かがみ先輩と付き合ってるし、色々とちょうどいいんじゃないかと」

田村さんの言葉を少し疑問に感じて聞いてみると、どうやら自分をその創作物の資料にしたいようだ。断る理由も特に無く、わざわざ自分を頼りにして来てくれた事もあると答えてはすぐに出た

「なるほど、わかりました。力になれるかは分かりませんが、協力させていただきます。ですが今は勉強会の最中ですので、後程でも構いませんか？」

「いえいえ。作業中のお姿だけでもネタにはなりますから、お構いなく」

「そうですか？それではしばらく勉強の方に集中しますので、何かありましたら声を掛けて下さい」

勉強の準備を進めながら田村さんに話し掛けるが、かがみが横から視線を投げかけてきた。待たせるわけにもいかないので、話を切り上げて勉強を始める。幸いにも機嫌を損ねる前に取り掛かる事が出来た

> ひより view <

(それにしても神藤さんって、見れば見るほど...)

女の人みたいだ。こうちゃん先輩から聞いたとおり、パツと見だけで男の人かどうか見分けるのは、かなり難しい部類の人だと思う

（でもだからこそ彼女さんとのツーショットは素晴らしいんスよね
〜！）

お二人の姿に頭の中でアレンジを加え、軽く絵にまとめる。描いていく間に妄想が溢れて、徐々に物語の形を作っていく。妄想が枯れてたのが嘘みたいだ

「よし、これで今日の分は終わりだな」

「私の方も出来ました〜」

「そうですか、お役に立てたようで良かったです。もし差し支えなければ、出来映えの程をお見せいただけませんか？」

萩原さんの後に続く形で、ここで出来る作業を終えた。しかし神藤さんの一言には反応に困る。こんな純粹そうな人にこんなものを見せるわけにはいかないなあ

「いやあ、それは…まだ完全じゃないんですよ。またここから詰めていきたいので、出来上がってからでいいですかね？」

「わかりました。では楽しみにしていますので、よろしければ出来上がりましたら教えて下さいね？」

屈託のない笑顔で語り掛けてくるその顔を見てみると、罪悪感が込み上げる。嗚呼、全年齢版も作らないといけないなあ…

そっだ、海へ行こう。(前書き)

大きく更新が遅れました、すみません。次回からはもっと早く更新出来るよう頑張っていきます

それでは本編をどうぞ

そつだ、海へ行こう。

「それで、私の貸してあげたラノベは読んでみた？」

「とりあえず1冊だけ読み終わりました。最後の展開からして、まだ続きがありそうですが」

「その言い方だとあれかしら？まあ気になってるから買つつもりけどね、たしか来月には新刊出るわよ。っていうか今日はそつちから掛けて来る日じゃないわよね？私からだったと思うんだけど」

あの後しばらくしてお開きになった勉強会から戻り、今は寝る前の電話をしている。本来は1日置きに交代で掛けるようにしているのだが、今日は電話を掛けてくる前にこちらから掛けてみた

「仰る通り、今日のはかがみが電話を掛ける日です。ですが、どうしても今日中に伝えたい事がありました」

「なに？まさか遅れて来た時の事？」

「そうです…すみません、かがみ。あんな思いをさせてしまって」

「やっぱりその事よね。用事があっただけで、何もしてないんですよ？私が勝手に疑っちゃっただけだし、別に気にしなくていいわよ」

「それでも、自分が不甲斐ないばかりに泣かせてしまいました」

かがみは悪くない。あの涙を流させたのは自分だから。自分がかがみを不安にさせてしまったから

「もう済んだ事でしょ？それに不甲斐なくなんかないって事、私はちゃんと知ってるわよ」

「ですが…」

「じゃあ泣かせたんだから、次はその分楽しませてよ。それで今回の事は水に流しましょ？」

自分としてはまだ納得出来ないが、これ以上謝ったとしてもかがみを困らせるだけだろう。かがみの言う通り、次回を挽回の機会にしたい

「…分かりました。では何か考えておきますので、数日ほどお待ち下さい」

「うん、そうしようかな。ちょっとは元気になったみたいで良かったわ、それじゃまた明日ね。おやすみ」

「あ、ありがとうございます。それではおやすみなさい」

電話を切ってベッドに倒れ込む。電話の内容を思い出せば情けなくなってくる

「気遣ってくれてた…凄いな、かがみは」

あんな思いをした後ならそんな余裕もないはずなのに、こんな自分を許して、心配してくれていた

「参ったな、自分が思っていたよりもだいぶ大人みたいだ」

いつもは見えない一面は、こういう時に見えるものなのかもしれない。それでも二度目はあって欲しくないし、あるべきではないと自分分は思う

「それを実現させるためにも、まずは今かがみを楽しませるために、何が出来るかを考えないと」

自分に言い聞かせるように呟く。出来るだけ早く、出来る限りありふれた形で。皆と一緒にでも問題なく、且つ確実に2人きりになれる楽しい事が…

>かがみview<

電話を終わってから開けたままの携帯を眺め続ける。暗くなった画面には、目に涙を滲ませた自分が映っていた

「…なんで泣いちゃうかな」

ああ君にとっては私だけじゃなくて、皆が当然のように特別な存在なんだ。誰かじゃなくて、誰にだって優しいから可能性も…

「…私、妬いてるのかな」

涙を指で拭いながらそんな事を考えていると、溜め息と一緒に言葉に出る。ああ君と一緒にいる知らない誰かは、おそらくは想像の中だけの人だろう

「でも…そんなの嫌だよ」

それでも自分の居る場所が塗り潰されるみたいで、ああ君が私から離れていくみたいで怖い。そんな感情を抱かされてしまう」

「悔しいけど、私もまだまだ子供ね」

落ち着くまで時間を置いて考えてみる。ああ君に心配掛けて、自分の事で一杯一杯になってる。電話を切るときの言葉だって今思えば只の強がりだったのかもしれない

「電話であんな事言ったのはいいけど、何してくれるんだろう」

二人が一緒にいられる時間。ああ君が私の為にそれを作ってくれるのなら、今日の分を差し引いても、私は十分に満足だ。心からそう思える

翌日

>あおいview<

「さて、まずは皆にメールで…」

朝のうちに皆にメールを送っておく。皆を誰かの家に集める事も考えたのだが、用件を伝えるだけならばこちらの方が明らかに早い

「これでよし。後はこっちで準備を進めておくかな」

しばらくすれば誰かから返信か電話が来るだろう。それまでに出来ることをしておけば…

「早っ!」

部屋を出て廊下を歩き始めた途端に携帯が震える。返信が来たようだ。ここまで早いなんて、携帯を使っている最中だったのだろうか。「こなたさんからだ…ああ、なるほど」

本文を見る限り、こなたさんは今回の自分の目的を察しているようだ。そのため協力してくれるらしく、親戚の婦警さんに同伴を頼んでくれたらしい

「お兄ちゃん何かあったの？」

「いや、何でもないよ。それより自分は何日かの間、友達と出掛ける事にしたんだ。だから父さんと母さんをよろしくね？勿論無理しない程度にだけど」

部屋から顔だけ覗かせた茜の頭を優しく撫でてやる。安心させる意味もあるが、少しの間離れるので無理をしないようお願いを込めて

「そうなの？分かった！お兄ちゃんも気を付けてね」

「いや、今すぐに行くわけじゃないんだけどね。父さんと母さんに許可ももらわないといけないし」

「ふうん、そうなんだ…あ、お父さん。お兄ちゃんが呼んでるよ」

「ん、どうした？朝っぱらから用なんて」

話を理解した茜が、向こうの廊下を通りかかった父さん呼び止めた。こちらにやって来た父さんに話をすると、比較的真面目に聞い

てくれた

「なるほど。今の時期空いてる所か…」

「あるかな？出来れば皆と泊まりに使いたいんだけど」

「同伴者はいないのか？」

父さんは左手で携帯を操作しつつ、自分の目を見ながら話を聞いていた。不意にしてきた質問も、親としては気になる所なのだろう

「それはこなたさんが親戚の人に頼んだらしいよ。あとは自分の方から先生にも頼むつもりだから」

「そうか、ならいいんだがな。場所の確保は任せておけ」

「ちょっと待って。頼ってばかりで悪いけどさ、あと一つ頼みたい事があるんだ。いいかな？」

戻ろうとする父さん呼び止めて別の頼みを聞いてもらう。一応ではあるが、保険を掛けておいた方がいいだろう

「なるほど…分かった、その時動ける人に聞いてみるよ。それとだな、まだ子供なんだから、遠慮無く頼ってくれていいんだからな？それが子供の特権ってやつだ」

そう言うと右手をひらひらと振りながら来た道に戻って行く。おそらく今から電話を掛けるのだろう。左手にある携帯が開かれたまま耳に当てられていた

>かがみview<

「それで、どこまで行くの？」

「とりあえず海の近くですね。現時点ではそこから海に行ったり、近くを散策する予定です」

あお君に電話で色々聞いてみる。内容は主に行き先についてで、そこはやっぱり気になってしまった。それにしても意外にあっさり教えてくれるわね

「そうなんだ。ところでさ、メールに書いてあった準備する物の所に水着があっただけど…」

「その事ですか、すみません。こちらで用意する事も出来るのですが、好みもあるでしょうし、各々持参した方がよろしいかと思いまして」

申し訳なさそうにあお君が話す。しかし用意されたとしても、サイズが合うという保証はない。もし合ったとしたらあお君が色々大変な目に遭うだろうな…

「そうなの？あ、いや私が聞きたいのはそういう事じゃなくて…あお君はどんな水着が好きなのかなって」

「自分ですか？自分は紺の旧スク水が好みですけど。出来れば横縞ニーソ装着が好ましいですね」

「……」

予想外だった。まさかあお君がそんな水着が好きだなんて…いやむ

しろコスプレ？それを当日私に持って来いと？…中学の時は取ってないし…というか買うにしてもサイズあるのか？

「あ、いえ、勿論冗談ですよ？話を戻しますと、自分としては今まで着ていた物でも構いませんので」

「あ、ああ冗談ね、そうなんだ。えっと、着てたやつって去年のって事？もうちょっと希望があってもいいんじゃない？」

冗談を言ったつもりが真に受けられたからなのか、電話越しに少し慌てているのが分かる。去年の水着は取ってあるけど、出来れば新しいのを見せてあげたい（別に着られなくなった訳じゃないけど）

「希望ですか…そうですね。わがままかもしれませんが、かがみが自分のために水着を着ていただけたら、自分は満足ですよ」

「じゃあ用意しておくから、日程決めたら連絡してよ？」

わかりました、といつも通りの穏やかな声を聴いた後、簡単なやり取りをして電話越しの会話を終える。全く、女心が分かってないんだから

「ねえ、今の電話の相手ってもしかしてあおちゃん？」

「まあね、それがどうかした？もしかしてあお君に何か用事あった？」

「うん。お姉ちゃんが電話してたから、今度のお出掛けの事、もうちょっと聞こうかなって思ってたんだけど」

部屋のドアを遠慮がちに開けながらつかさが話す。つかさもあお君に詳細を聞いたかつたらしい。とりあえず私が聞いた限りの事をつかさに教えてやると、それで満足出来たみたいだった

「ありがとうお姉ちゃん。それで水着が必要なんだよね、どうするの?」

「新しく買おうとは思ってるんだけどね〜でもどんなのにするかまだ決めてないし、肝心のあお君もあれじゃあね」

「じゃあ皆で一緒に買いに行こうよ、私も新しいの見てみたいし」
につこり笑うと準備をするために部屋へと戻って行く。さっきの言葉はつかさなりに気を遣ってくれたんだろうか。つかさが出て行った扉に向かって、ありがとうを呟いてみた

後日

> あおい view <

インターホンの押された音が玄関を通り自分の部屋まで届く。おそらく皆のうち誰かが着いたのだろう。纏めてあった荷物を持ち、家族に挨拶して家を出る

「おや皆さんもうお揃いだったんですね」

「おはようございますあおいさん。今日も良い天気になりそうですね」

「おはよ〜あおちゃん、海楽しみだね〜」

「日焼け対策もバッチリだから、あとであおい君にも貸してあげるよ」

皆それぞれに荷物を持って自分に挨拶してくる。一通り挨拶し終え、話をしていると車が二台左に寄せて止まる。運転席から出て来たのは先生と眼鏡を掛けた女性だった

「あ、黒井先生おはようございます」

「おっおはよう。皆揃っとるようやな」

「紹介しとくね、私の親戚のゆい姉さん。今日は引率兼運転手なのだよ」

こなたさんが女性を紹介する。この人がメールに書いていた親戚の人のようだ

「お二人共、よろしくお願いします」

「任せたまへ〜ってそれはいいけどさ、ちょっと人数多くない？」

「ほんまやな。うちの車は軽自動車やさかい、運転するうちら除いても6人が限界やで？」

そつえばそうだ。この場にいるのは運転手の2名を除いても12名（内訳は自分と京一と綾、かがみ達4名、こうさん達後輩2名、みさおさん達2名、そして田村さん）。流石に入らないし…仕方がない

「では、なんとかしてみましようか」

「何か打開策でもあるんですか？」

「ええ、こんな時の為に事前に手を打っておきました」

やまとさんからの質問に応えながら携帯を操作する。少しして一台の車が先生達の後ろに付くかたちで停車した。その中から見知った人が降りてくる

「まさか本当に呼び出されるとは思いませんでしたよ……」

「先輩、この人知り合いですか？」

「ええ。親戚の槻城さんです。念の為待機してもらいました」
自分の紹介に合わせて、槻城さんも皆に挨拶をする。それが終わると皆の荷物の詰め込み作業に移った

「それではそろそろ行きましようか。目的地はこの辺りにありますので、こう向かうのが分かりやすいでしょう」

「ん〜まあこれなら何とか行けそうかな」

「ほなうちは最後列走らせてもらっわ。先導役頼んだで」

槻城さんが取り出した地図を中心にドライバー同士で軽い話し合いが行われる。あと自分達が発前にやることは、どの車に誰が乗るかを決めることくらいかな

海へ

「ええと…成美さんの車にかがみとつかさと篠崎。黒井先生の車にこなたとみゆきと峰岸。槻城さんの車に俺、日下部、こごう、やまと、田村、あおい…でいいのか？」

「合ってるよ、でもかがみは別車両か…決まった以上仕方無いけど、ちよっと寂しいかな」

「ま、まあそう言ってくれるなら私もあお君と一緒に良かったかな。けど結果は結果だし、しょうがないんじゃない？」

こなたさんの提案によって即興のあみだくじ（紙は峰岸さんのルーズリーフから拝借）で誰がどの車に乗るかを決めた。因みに成美さんは下の名前で呼ぶのを躊躇っていたら、こなたさんが名字を教えしてくれた

「分かった分かった、なら俺と変わればいいだろ。ったく、一緒にいいなら最初にそう言えよな」

「ありがとう京一、あつちに着いたら何かお礼するよ。あとは…そういうえば綾、まだ皆に自己紹介してないよね。今のうちにしておいたら？」

「そうだったか？まあやっておくか。俺の名前は篠崎綾。クラスは2年D組でバスケット部所属だ、よろしくな」

自分が綾にそう言うと、皆を見回しながら手短に自己紹介を終わらせる。それに続けるように皆も自らを紹介していく。D組という事

はかがみと同じクラスなのか…

「私の車が先頭になったから、乗る人は早くね〜」

「話すのもその辺にして車に乗りや、そろそろ行くで？」

「はいはい。あ、そだ。京一君達ジェットコースターは大丈夫？」

車に乗るなり、こなたさんが窓から上半身を投げ出しながら質問してくる。自分もそうだが、2人は意味が理解できていない感じの顔をしている

「俺は問題無いが…いきなりどうした？」

「俺も大丈夫だけど、何？遊園地にも行くのか？」

綾の問いにこなたさんは「そんな事はないんだけどね」と応え、親指を立てて車の中に消えていった。何なんだろうか…まあそろそろ乗らないと行けないので、後で聞いてみよう

>京一view<

「今日はわざわざありがとございます」

「いやいや、最近海なんて行ってなかったし、たまには息抜きも必要だからさ〜」

「成美さんは婦警だって聞きましたけど、何課なんですか？」

「交通安全課だよ〜交通ルールは任せたまへ〜」

バックミラー越しに笑顔で返答される。そんな和やかな雰囲気を壊すように、五月蠅い音を立てながら、隣を車が走っていった

「あ、追い越し…」

「今のはFDかな？黄色って辺りがいい趣味してるな」

「あの野郎…」

「おいおい交通安全課…」

追い越された事に腹が立ったのか、警官としての血が騒いだのかは分からないが、さっきの車を追いかけ始めた。はは、元の道がもう見えねえや…

>こなたview<

「先程京一さんと篠崎さんに何か仰られていたようですが、何かおありだったんですか？」

「いや、ゆい姉さんハンドル握ると暴走するからさ、とりあえず大丈夫か聞いてみたんだよ」

「へ、そうなんか、警官やのにな。あれ…おかしいな、向こうとはぐれてもった」

その後は違う道に入ったり、一通を逆走したりと散々で、結局元の道を見失ってしまった。迂闊だった、まさかこちらもハズレとは…
あおい君達のは当たりなのかな？

> ゆい view <

さっきの車を捉えた。元の道からだいぶ逸れたけど、きつと何とかなるだろう

「ちょ！危ないですって！」

出来るだけ相手と同じラインを通って、立ち上がり重視でガードレール際に持つていく。ストレートで離される事は想定内なので、ブレーキングとコーナリングで徐々に詰める事になるだろう。一見すると地味だが、コーナーの多いこの峠ではその効果が顕著に現れるはずだ

「ガードレールにぶつかると思った、マジ怖え……」

「すげえな…スポーツカーに食いついてってる…」

後部座席から聞こえたように相手はFD、所謂スポーツカーだ。しかしこちらだって伊達でこの車に乗っているわけではない。性能やパワーこそ負けているが、車重的にはこちらが圧倒的に有利。4人合わせて200kgだとしても1tを切る。対するFDはエアロやウイングからして有り得ないだろうが、無改造なら1200kg強見た限り炭素繊維系のパーツを使っていない所を見ても、軽量化をしていたとして1tを切る事はまず無いだろう。こちらで優勢なのはその点と、こちらしか知らないラインの存在。あまり使いたくはないけど…しょうがない、あれやるか

「仕掛けるポイントは…この先の五連続ヘアピンカーブ！」

少し長めのストレート、その先は右へのヘアピン。FDは早々とブレーキランプを光らせる。こちらはアクセルを踏み込んだまま空いたイン側を突く。減速したFDが左前から後ろへと流れていく

「え、減速してなくね？死ぬの？マジで？」

側溝に右タイヤを突っ込み、進入速度を維持したままコーナーのインベタを走る。俗に言う『溝落とし』である

「何だよこのイ○シャルD的な走りは…」

>あおいview<

「すみません、わざわざ付き合っていたいただいて」

「もういいですよ。この件は先に睦月さんに言われてましたし、この大所帯にはこの車とドライバーが必要でしょうしね」

他愛の無い話をしながら、時折表示されているナビを見つつ道を進んで行く。先生達が見当たらないが、先に別のルートで向かったのだろうか

「先輩この飴もらっても良いですかね？」

「え？ええ、でもちゃんと残して…っってもう殆ど入ってないし…着いてから食べようと思ってたのに」

「苦労しているようですね、貴方も」

たしか二十個ほど入っていた飴は、数個を残して最後列に消えていった。それに落ち込む自分に優希がにこやかに話しかけてくる。同情するような声色からして、普段から苦勞しているのだろう

「いえ、これはこれで楽しいですよ？皆さんといると、元気を頂けますし」

「そうなんですか、良い友人に恵まれましたね…おやもうこんな所ですか。そろそろ見えてくる頃ですよ」

「ありがとうございます。自分も優希さんや、皆と出会う事が出来て幸せです」

嬉しいですね、と優希さんが笑いながら自分の言葉に伝えてくれる。隣のかみや最後列のこうさん達も恥ずかしそうに返事をしてくれた

夕方

>京一view<

なんとか目的地に着いた…のはいいんだが車から降りられたのは成美さんと俺だけ。つかさは気絶、篠崎は自力で降りるほど体力が残っていないようだ

「おいこなた、お前こうなるの分かってただろ…」

「だから最初に聞いたじゃん、大丈夫？つてさ。つかさには悪いと思っけど」

「…まあいい、お前の事は後回しだ。取り敢えずつかさ降ろすから

手伝え」

一つ溜め息を吐きつかさを抱えて立ち上がると、こなたから睨まれた。篠崎は手を貸そうとしたら少し休むと言ったので、成美さんに頼んで借りてきた鍵を持たせてやった

「なんでつかさをお姫様抱っこしてるのかな？」

「あ？仕方無いだろ、こんな状態じゃ背負えねえし。それにお前に抱えさせるわけにもいかないしな、無理っばいし」

「無理なんかじゃないもん！大丈夫だからさ、つかさは私が運ぶよ。ほら」

正直、女にさせていい事なのか悩みどころだが、とつとと離せと言わんばかりに手を差し出したので、それにつかさをそっと乗せてやる。まあ辛そうになったら代わるとするか…

> あおい view <

「おや、京一達も着いたみたいですね」

「本当…ってなんでつかさが運ばれてるのよ」

「よお。先に言っておくが、俺のせいじゃないからな」

近付きながら、こちらが話しかける前に口を開く。運転が荒かった事、目的地に繋がる道に戻るのに時間が掛かった事等を、テンションを下げながら話してくれた

「まあこつちも似たようなものだったよ？京一君達ほどじゃないけど」

「あたりはあおい達か…まあ、自分で変わったんだから文句は言わないがな。それより早く休みたいんだが」

「そうですね、ではそろそろ入りましようか」

優希さんを先頭にして建物に入る。洋館の様だった外観通り、中も洋式で造られていた。白を基調にした明るい内装は夏の暑さを少しだけ忘れさせてくれた

「よお槻城、久しぶりじゃねえか！」

「ご無沙汰してます柚木さん。以前集会を酔い潰れて欠席してましたので、まともに会話するのは半年振りですね」

「そうか？細けえ事ばつか気にすんじゃねえよ。ん？そつちのは…見た目からして睦月んとこの息子か？」

優希さんが挨拶しているあたり、この洋館の管理者か誰かなのだろう。それにしても珍しいな

「まさか初対面で自分の事を男だと解つてくれる人がいらっしやっただとは…」

「目は確かだからな…つとんな事はいい。柚木鉄心だ、ここの管理ていしんをしている。つっても今日は使つて言うから掃除しに来たただけだな。んじゃ俺らは帰るから寛いでつてくれ、これ鍵な」

「ご苦労様でした、鍵は帰り際にお宅に渡しに行きますので。ではお気をつけて」

優希さんの声を背に柚木さんとそれに続くように数名がこちらに会釈をした後洋館から去って行く。恐らく先程の『俺ら』という台詞の中に含まれていた人達だろう

「さて、まずは部屋へ荷物を運びましょうか。寝室は人数分在りませんので、相部屋でお願いします」

「わかりました。荷物は自分が運びますので、皆さんはお先に向かって下さい」

「こなた、お前の分は俺が運ぶから、つかさを頼むぞ」

優希さんの後ろに皆が、その後に自分と京一が並ぶようにして廊下を進む。しばらく進むと前の動きが止まったので、恐らく着いたのだろう

「ここから…あちら、この8部屋が寝室になります。各自の組み合わせは任せますので、話し合って使用する部屋を決めておいて下さいね」

「分かりました。では私はつかささんと同じ部屋にしますね。泉さん、お願い出来ますか？」

「分かったよ…とりあえずベッドの方に寝かせてあるからね」

ありがとうございます、という言葉と何事も無く済んだのを確認して、廊下で談議が始まる。勿論部屋割りについてだ

「つかさがみゆきさんの部屋に行ったから私は京一君と一緒にの部屋
ね」

「ああ？何でそうなるんだよ…俺は篠崎と同じ部屋にするから他当
たれ」

「え、俺お前とかよ、お前と組んだら女子と相部屋出来ねえじゃん
かよ」

「…少なくとも私はそういう事を考えている人と同じ部屋はお断り
です」

京一から名指しされて愚痴を零す綾。その台詞を聞いていたやまと
さんが呆れ気味に言い放つと、流石に堪えたのか黙り込んでしまった

「おお君は誰と相部屋するか決めた？」

「いえ、まだですが…どうです？もしまだお決まりでないようなら、
自分の部屋に来ませんか？」

「ま、まあどうしてもって言うんなら行ってあげようかな…なんて」

綾達の様子を見ると、かがみが髪の毛を指で弄りながら話しか
けてくる。紅く染めた頬を若干逸らしているのは気恥ずかしいから
なのだろう…これは可愛いな

「そうですか…では他の人を当たってみますね」

「へ？いや、だから私は…」

「いえ、女性を無理にお誘いするという行為は出来る限り行いたくありませんので。まだ決めていない人に聞いてみますね」

敢えて誘いを断り皆の方に向かおうとすると、服の裾を掴まれて引き留められた。振り向くと目尻に涙を溜めながらこちらを睨む彼女がいた

「つべこべ言わないで、一緒の部屋に来なさいよね……バカ」

「すみません、少し意地悪を試してみたくなったものでして。部屋については勿論最初からそのつもりでしたので、ご安心を」

「……!!」

本心を晒してくれたお礼に、こちらも本音を少し洩らしてみる。すると予想はしていたが、やはり叩かれてしまった。まあ力を込めないからこれも照れ隠しなんだろうけどね

>綾view<

車の鍵を渡され、ドアを開けて体調の回復を待つ俺。帰りもこの車なら、マジで死ぬかもしれない…

「よし、動くか…」

取り敢えず立つてみると、意外にしつかりと身体を支えてくれた。鍵と窓閉めて建物に向かうと、既に神藤達の姿は無かった

「あの、すみませ〜ん」

少し待ってみるが返事はない…ここにはいないのか？でも外じゃ会わなかったしな

「おや、あなたはあおいさんの友人の…もう大丈夫なのですか？体調が優れなかったと聴きましたが」

「え？ああ、はい。あの、神藤達どこいったか知ってたりしますかね？」

「皆さんなら、今し方荷物を部屋に置きに行きましたよ？私は色々準備する事があるのでこちらに戻ってきましたかね」

話し方から雰囲気まで、まるで神藤を今のまま大人にしてみました、みたいな人と話してみると感じる…まあさすがに女っぽくは無いが

「篠原さん？もう大丈夫なんですか？」

「お、高良か。ああもう平気そうだ、心配してくれてありがとな。それより今部屋があるみたいな事を聞いたんだが、案内頼めるか？」

「はい、ちょうど私も自分の部屋に戻る予定でしたのでお引き受けしましょう。こちらです」

槻城さんにお辞儀するとにこやかに手を振り返してくれた。たまにはこんな日も悪くはないかな、高良の後を追いなからそんな事を思った…車はイヤだが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0630i/>

らき すた～あおいの日々～

2011年10月20日04時14分発行